

蠶業全書

満蒙全書

第七巻

第七巻

都市

凡例

一、本稿は大正九年末の舊稿に係り、以後十年末に於て多少の訂正を爲せしも、出版期確定せざる爲め存分の訂正を爲さず、統計の如き殆んど大正七年を以て終つてゐるは筆者の惡德とせらるるも是非なし。

二、本稿は第六卷の末尾をけがす筈のものなりしが、頁數の都合上七卷となり、しかもその頁數が第六卷より連續したるものとなりしは筆者のとがにも非ず、又出版者のとがにも非ざるべし。何れかかる間違は世上多々あることならん。

都市

目次

第四章　洮昌道管内……一九一

第二編　吉林省管下……二一五

第二章　濱江道管內

第四編　熱河特別行政區域內……三一五

目次終

都市

第一編　奉天省管下

第一章　遼瀋道管內

第一　奉天省城（瀋陽、盛京）

大連驛を去る二四八哩二分、安東を去る一七〇哩八分、而長春には一八九哩四分て達する南滿鐵道の中心地て且つ政事上東三省の中心地てある。

此邊一帶の平野は渤海時代の瀋州て、城東の福陵（東陵）に渤海大氏祚榮の居城を築いた東牟山の舊蹟てある、瀋水（渾河）の名は此時から始まる、瀋陽の名は元朝に始り、明は此地に瀋陽中衞を置いた、清の太祖帝業を創むるに及ひ天命年中都を遼陽より此地に移して盛京と稱し、順治初年都を北京に移すに及ひ將軍を置いて留守に任じ留都（陪都）とし、順治十四年奉天府を設くるに及ひ奉天と稱するに至つたのてある、康熙元年には按班章京鎭守を將軍に改め、同三

年承德縣に改められ三省の首邑となつた、現在の瀋陽縣は民國三年の改正てある。

市街は南方渾河に臨み、地勢平坦西方の如きは一望千里の沃野てある、そして奉天城と城外の二區に大別され城外は更に鐵道附屬地と自開商埠地とに分たれる、奉天城は周圍五、〇〇〇米の內城と此外邊に一萬六千米の土壁を以て圍まれた部分て內城は四平街、鐘樓南大街、鐘樓北大街とか井字形に交叉し邊城と內城の間は大小東關、大小西關、大小南關、大小北關の各大街と數多の胡同とより成つてゐる、最も殷盛なる街區は內城の各大街と西邊門の大街て北關、南關等之に次く、鐵道開通以前は北關か最も繁盛てあつたか鐵道か西關外に設置されてからややその勢に變化を來したのてある。

城內大街の道路は漸次修築を加へられて舊體を改め整然たるものとなつたか、各胡同は依然たる泥濘路てある、そして各關の大街も城內の大街の如く整然たるものてはない。

奉天城は天聰五年の築造に係り洪武二十一年重修したものてある、原とは四門てあつたか明の時八門とした、前清の宮殿は城內の中央にあり、崇德二年の建築て康熙十一年の重復に係るものてある、光緒末年に東三省總督徐世昌か更に之に修飾を加へて大いに面目を一新した。

自開商埠地は鐵道附屬地に聯接した地區て十間房一帶を云ひ、大小西關も此の內に含まれる

道路は南滿鐵路驛と西關とを通する巾一五間の大道かある外十間房に數個の小路かあるに過きす、他は原野のままである、近時盛に道路の建設か行はれてゐるから遠からす附屬地同樣の大市街か現出するてあらう。

次に鐵道附屬地に付いてはすへて滿鐵の經營に係るもので總面積一八〇萬坪、內市街宅地として貸付たものか約七萬四千坪である、初め露治時代にあつては鐵道線路は政略上から現在の奉天驛を通過せす遠く西方を通過する計畫てあつた爲、奉天驛には何等の施設を爲さす、唯停車場(舊)から附屬地の北端を貫き奉天城門に至る一線か稍市街の體裁を爲してゐるはかりて他は渺茫たる荒野てあつた、滿鐵は當地將來の發展を期して約七〇萬坪の地積に對する大規模の市區計畫を立て矩形式を採用し之に斜線道路を作り交通の便を圖つた、また道路は幅三間乃至二〇間のもの延長一萬六千間に及ひ、驛前より起れる瀋陽大街は大西關に續いてゐる、而八間以上の道路は車道、步道に區別し大通りの側溝は煉瓦造りとし、其他は木造又は掘放し溝とし又別に驛前を南北に通する鐵道大街に沿ふて假設的木造大排水路を作り、之を幹線とし附近の道路側溝の雨水を合して渾河方面に排水し、且つ汚水排除の爲地下下水道を築造し、幹線は卵形煉瓦造を用ゐ其他は土管又はモルタル管を埋設したか渾河洪水に際し逆流の爲下水の停滯す

るを慮り徑二〇尺深二〇尺の汚水溜を作り「タービンポンプ」を据付け電氣力を以て揚水し、附屬地南方に灌漑田を設けて之に流送することにした、下水管延長一三、四〇〇餘間、排水溝延長一、七〇〇餘間である。

人口と政治　奉天城の人口は其確數を得るに困難てあるか支那警察署の調査その他を綜合して見るに戸數約三萬、人口約十八萬と見て大差はない、この中には勿論自開商埠地内の支那人を含んてゐるのてある、そして附屬地以外即ち城内及商埠地内の日本人は約五、〇〇〇人に達せんとし、附屬地は約二萬てある、即ち奉天市の人口は約二〇萬と見て差しつかひない。(關東廳及外務省て統計表を出してゐるか出入か頻繁てあるから月によってその數字に甚たしい懸隔のあることかあるからむしろ概數を示した方か確てある)。

奉天の行政は附屬地と其他とに分たれ、附屬地は滿鐵か日本政府の命令により土木、教育衛生等に關する必要なる施設を爲すへく之に必要なる行政權を行ひ公費を徴收し諮問委員會を置いて若干の委員を指名してある、しかし警察權は全然關東廳のもので奉天警務署之か當事者となつてゐて全く支那官憲の干渉を許さない、奉天城及商埠地は奉天省長の直屬の下に省會警察廳は警察行政を商埠局か商埠地民治行政を分担し、日本人に對しては總領事館の警監の下に警察

署及民留民會かあり民留民會か若干の經費を徵收しその他の外國人は各領事館て之を取締つてゐる。

官衙　東三省巡閲使署、督軍公署、省長公署、陸軍第二十七師司令處、巡閲使署衛隊旅司令處、交渉署、財政廳、教育廳、實業廳、奉天稽核分所、高等審判廳、高等檢察廳、地方審判廳地方檢察廳、全省警務署、省會警察廳、東三省淸鄕總局、瀋陽縣署、官地淸丈兼屯墾局、商埠局、省議會、東三省郵務管理局、電政監督署、造幣分廠、菸酒事務局、印花稅分處、鹽務稽核分所、盛京副都統署、軍械廠、東三省陸軍側量局(以上支那側、在附屬地外)(日本側)滿鐵公所(城內)日本總領事館、英國領事館、米國領事館、露國領事館、佛國領事館、日本人民留民會(以上商埠地)奉天警務署、郵便局、地方事務所、守備隊(以上附屬地)

教育その他　瀋陽高等師範、國文專門學校、工業學校、商業學校、第一師範、女子師範　第一中學、公立圖書館、警察傳習所、奉天農事試驗場附屬農業學堂、兩等小學堂一〇、その他小學堂十二、女子小學堂五(以上支那)南滿醫學堂、中學校、中學堂、實科高等女學校、實業補習學校、尋常高等小學校一、尋常小學校一、公立尋常小學校、滿鐵簡易圖書館(以上日本)盛京時報社、內外通信社、滿洲通信社、奉天新聞社、奉天每日新聞社、大陸日日新聞社、新滿洲社、

東三省公報社、健報社。

衛生と慈善事業（日本側）日本赤十字社奉天病院、滿鐵奉天醫院、私立醫院五、遼陽衛戍病院奉天分院等あり、藝妓、酌婦等の健康診斷は毎週一回之を行つてゐる、滿鐵醫院は、建坪二、三〇二、五六八一、坪に及び南滿醫學堂の附屬病院として南滿第一の病院てある。

衞生警察事務は警務署に於て主管するものてあるか滿鐵所屬の醫員は關東廳より醫務の囑託を受けて之に從事してゐる、そして汚物掃除、清潔維持は滿鐵會社之を行ひ種痘、飲料水檢査其他防疫事務は關東廳と共力之に當つてゐる。

支那側に於ては衞生醫院と同善施治所の外英人經營の盛京施醫院及私立の病院とあり、商埠地にあつては居留民衞生組合かあつて總領事館管督の下に一般公衆衞生を取扱つてゐる、道路の撒水は支那も日本も共に之を施行してゐる。

支那側の慈善團體としては奉天濟良所あつて娼妓救濟の事を行ひ、同善堂は貧民救濟の爲に施米、職業紹介を爲し且つ習藝所、小學堂等をも設けてある、該堂は數多の土地家屋を有し之を貸付けて以て經費に當ててゐるといふ。

日本側には日本赤十字社を除く外特別に慈善團體と稱するものかない。

水道、電氣その他設備　附屬地水道は滿鐵の經營て附屬地の南方公園豫定地の中央に徑三〇尺、深さ三〇尺の井戸を掘鑿し電氣ポンプを以て市の中央に建設した地上七〇尺容量十萬英ガロンの鐵製タンクに送水し大正四年二月から給水規則を施行して一般市民に給水してゐる、大正七年度末に於て導水管か一町八間、送水管か一町三〇間、配水管か四里三一町五〇間に達してゐる、そして一般市民の需要戸數は七六一、水量か一二九、六四六立方米てある、但し鐵道用及滿鐵社宅用はこの外てある、商埠地及城內に於ては水道の設置かないか當市附近は到るところ良好(アルカリ鹽分を含む)の飮料水を地下十數尺にして得ることか出來るので左したる不便は感しない、井數約一千しかし城內の如きは汚水の排水か行屆かぬ爲溜水の爲に惡臭を放つものかあるので城外から購入使用するものかある、電氣は附屬地と商埠地は滿鐵、城內は官設電燈局に於て經營してゐる、滿鐵經營のものは二百キロワット發電機二臺て發電能力四百キロワット、電線路の延長六一三、七四九呎に達す、今各年度の電氣及料金を示せは。

年次	電量			料金		
	電燈用	動力用	計	電燈用	動力用	計
大正四年	九四六、八二八キロワット	一六四、八九一キロワット	一、一一一、七一九キロワット	七八、三一三円	八、九二〇円	八七、二三三円

大正五年	一,〇〇〇,七二五	一九七,八六九	一,一九八,五[illegible]	九〇〇,[illegible]	三[illegible]	二〇〇,一二七
大正六年	八九二,三六〇	二三九,八四六	一,一三二,[illegible]	一二一,[illegible]	一一,七二[illegible]	一三三,七[illegible]
大正七年	九五六,三六〇	四六九,六七〇	一,四二六,〇三〇	一五二,七二六	一七,一二四	一六八,八五二

奉天省電燈局は資本銀三〇萬兩を以て交流三相三百キロワット發電機一臺を運轉し、技師は米人である、點燈用電壓は百十ボルト、點燈數一二、〇〇〇個、尚モートル其他用として電力をも供給してゐる。

邦人墓地は支那側と協議の結果大西邊門外の官有地五千坪の地を劃して之れに充て火葬場は滿鐵にて經營してゐる。

そして支那の墓地は城外に八箇所ある。

電話其他通機關　電話も日本郵便局經營のものと支那側官設電話總局にて取扱ふものとの二種ある、日本郵便局取扱のものは大正七年度末に於て八二七人の加入者あり、機數は九九三戸である、外に自働電話を五箇所に設置した、長距離電話は遼陽、鐵嶺その他沿線の重要地に通し南は大連旅順にも通ずる、支那電話總局は長距離の架設がなく、加入者も亦少い、而郵便事務は支那側に於て電報局城内（邊門內）に五箇所の分局があつて之を取扱ひ日本側は奉天郵便局

の外四分局か附屬地と商埠地とにある、しかし電報は奉天郵便局の外取扱はない。

市内交通　奉天驛と小西門とを聯絡する(中日商辦瀋陽馬車鐵路股份有限公司)奉天馬車鐵道會社の軌道か市内交通の最大なものてある、同會社は日支合辦組織て資本金十九萬元六割を支那人より四割を日本人から出資してゐる、客車約五〇臺、馬三頭を以て一臺を引くものてあるそして城壁一週線も豫定計畫のうちにあるか今は小西門まて出來てゐる、貨物運送は少しもやらない、その他人力車約二、五〇〇臺、乘合馬車約六〇臺、轎車一千臺等て貨物運搬の荷車は約七千臺に達してゐる、人力車は城内の衚衕と雖も自由に通過することか出來る。

公園、公會堂其他娛樂機關

(一)奉天公園(小西邊門外、約七萬坪)(二)滿鐵公園(一萬四千餘坪)

(附屬地及商埠地にあるもの)公會堂、奉天劇場、第一奉天館(活動寫眞)彌生座(活動寫眞)以上日本、中華茶園。

(城内にあるもの)會豐茶園、慶羊茶園、天仙茶園、德福茶園、天勝春茶園、鳴盛茶園。

遊廓は附屬地の北端に定め檢番は十間房にある、兩地を合し料理屋三九軒、飲食店五六軒、藝妓約八〇人、酌婦約一二〇人。

支那側のものは大西關に平康里かあるか北大關其他にも多數の散娼かある、その外十間房、大西關には朝鮮人娼妓かゐる。

市場　（支那側）銀市一、粮市一、菜市三（肉市もこの中にある）魚市（生魚市一、鹽魚市一）柴火市六、牛馬市一、鷄市一、猪市一、瓜市一以上は毎日開かれ銀市、粮市の城內にある外はすへて邊門の內外に於て開かれる。

日本側のものは附屬地にあり、滿洲市場株式會社の經營である、敷地二、〇〇〇坪出店數三六、大正七年度賣上金高一一八、〇三一圓に達してゐる。

奉天と鐵道

一　南滿本線は附屬地の西を走つてその中央に停車場を設け各種の大道は之を基點として築造されてある。

二　安奉線は南滿本線の奉天停車場を基點として安東に通してゐる。

三　京奉鐵路は小西邊門外に瀋陽驛を設けて京奉線の終點とし、且つ附屬地の西北に近く皇姑屯驛あり、主として貨物の取扱を爲し旅客列車はすへて滿鐵奉天驛に於て直接聯絡をして瀋陽驛に至るものである、瀋陽驛ては貨物は取扱はない、滿鐵奉天驛から京奉線の各重要驛に至

る距離を見れは先つ溝幇子へ一〇七哩、營口へ一六三・六哩、山海關へ二六〇・七哩、天津四三六・四哩北京へ五二三・一哩である。

南滿奉天驛旅客運輸狀況

年次	乘車人員				降車人員				總計
	本線	安奉線	京奉線聯絡	合計	本線	安奉線	京奉線聯絡	合計	
大正四年	四二一、〇三三	五〇、二七九	二六、二八三	四八七、五八四	四六四、九五五	五三、五〇七	一九、六三四	五三八、〇九八	一、〇二五、六八二
大正五年	五一三、二九九	五六、六一〇	一七、一五四	五八七、〇六三	五一六、二二三	五八、〇一三	九、七八〇	六三三、四一六	一、二二〇、四七九
大正六年	六七〇、六六六	七八、四四〇	四、六六四	七五三、七七〇	六六〇、八四四	七七、三四七	四六、九八七	七八五、一七八	一、五三八、九四八
大正七年	八三〇、八九七	一一七、四一一	四、四九一	九五二、七九九	八二二、八三六	一〇七、六五一	二七、八三七	九五八、三二四	一、九一一、一二三

その增加の急激なること實に驚くへきものかある、次に貨物運輸に就いては

年次	手小荷物						
	發送			到著			各線合計
	本線	安奉線	合計	本線	安奉線	合計	
大正四年	一三二、五二二	一一、五〇八	一四四、〇三〇	三一三、八二六	一二一、八四八	四三五、六七四	三、一四四、〇一九
大正五年	一一六、九五三	二一、五二八	一三八、四八一	三二九、〇九〇	一〇八、一六五	四三七、二五五	三、九八九、〇〇八
大正六年	一二三、六六六	二〇、二三九	一四三、九〇五	四六六、二九二	一六五、七七七	六三二、〇六九	七、〇九一、五三三
大正七年	二六八、二七七	二五、五九一	二九三、八六八	四八二、六一八	一五四、九一六	六三七、五三四	一三、一四七、五七四

以上の中發送貨物の重要なる者は大豆、豆粕、砂糖、麥粉、建築用材料及粟等の雜穀て到著貨物は高粱の約七萬噸を大宗として麥粉、砂糖、木材、煙草その他日用品てある。

次に京奉線の運輸狀況に付いては統計表を欠くを以てその確數を知ることは出來ないか近來北京、奉天の政事的關係次第に濃厚を加ふると、直隸及山東移民の滿洲に入るもの多きを以て旅客數は意外の增加あることを想像し得へく、又營口開發の爲に交通部は奉天、營口間の貨物運賃を減し且つ種々の便宜を與へてゐるので支那雜貨の運搬と大豆の輸送とは相當の多額に上つてゐる（京奉線は支那國有鐵道中最も成績の良好なる鐵道て每年三、四百萬元の實收を見てゐる）

奉天と陸路及水運貿易

奉天に於ける外國貿易は大連、營口、天津、安東、哈爾賓等を仲介として行はれるけれとも大連、營口を除けは貿易額は極めて僅少てある、その中營口との取引は京奉線に依るものの外滿鐵本線と水路とに依るものかある、しかし奉天より最も近接碼頭にして尙五〇支里を距てゝゐる、しかもその碼頭（埃金舗）に於ては夏季增水のときてなければ五〇石の小牛船か遡行することか出來ない、故に奉天を去る約九〇支里なる長灘に於て貨物の提卸を爲すことか多い、奉

天にはこの爲に船店か五戸ある、皆穀物問屋て所有船四〇隻乃至五〇隻、何れも五〇石積の牛船てある、鐵道開通以後は非常なる淋れ方を呈してゐる。

陸路は鐵路に次ぐ內國商業の重要運搬路て東部は興京、通化から臨江、長白の各縣にまて及ひ北部は山城子(四七〇支里)開原、鐵嶺(一三〇支里)に通し、西部は新民屯(一二〇支里)より彰武縣に達し南部は卽ち遼陽(一二〇支里)十里河に及んてゐる、而その商業期節は冬季結氷のときて東部地方(俗に東山と云ふ)からは藥材、蔴、藍、北部からは大豆、雜穀か運入され雜貨か販出されて行く、陸路を使用する商人はすへて支那人て各自組合を有し商務總會之を統一し城內外に一六箇の分會を設けてある、此組合を行と稱し約八〇に達すると云ふ。

商業機關　(支那側)商務總會の下に約八〇の行あり、各行規を有してゐたものたか商務總會に統一されてからは藥行、糕點行、靴行、油行、糧行、店行を除く外は皆商務總會の規定に據つてゐる、又行規を有する組合ても現存の行規は皆競爭を避くる爲の罰則はかりて主なる規約は商務總會の規則によつてゐる。

商務總會は商務一切の事件を處理する外禁煙、消防、衞生等自治に關する件をも兼ねて行つてゐる。

日本側　奉天商業會議あつてその組織、業務と日本のものと同樣である、そして質屋、料理店、飲食店、理髮業、旅館下宿屋、藥業、支那料理、奉天驛構内馬車、湯屋等の諸組合があるその中馬車組合と附屬地支那料理店同業組合とは組合人はすへて支那人であるか、日本の法規に據るものである。

工業　（支那）(イ)製油業者三九戸（豆油一箇年約八百萬斤豆粕約二〇〇萬枚、内豆油輸出約三〇〇萬斤、豆粕約二〇〇萬枚）(ロ)醸造業十六戸（一箇年約四〇〇萬斤その半はを輸出す）(ハ)醤油業四三戸（一箇年四〇萬斤）(ニ)製粉業一四〇戸(ホ)窯業十戸（一箇年約二、五〇〇萬個）(ヘ)製革業約三〇戸(ト)紙製造業一二戸(チ)染物業三五戸

外人　英米トラスト製煙所、石鹼製造所一、鐵工場二、製米所二、瓦製造工場一、造酒工場三、乳酸工場一、膠皮工場一、製糖會社一

金　融

日本側　朝鮮銀行支店、正金銀行支店、正隆銀行支店、安東銀行支店、滿洲商業銀行支店、奉天銀行等を機關とし

（但し左表は正金、朝鮮、正隆三行合算のもの）

年次	預金貸付					
	受入	拂出	現在	貸付	戻入	現在
大正四年	三、六五九、二二三	二、九〇一、五二八	七五七、六八四	一五、二〇八、〇二八	一四、二〇五、九九六	一、〇〇二、〇三二
大正五年	四六、一三七、〇四九	四三、一三七、〇六三	二、九九九、九八六	一九、二五七、四四三	一七、四〇五、二七七	一、八五二、一六六
大正六年	一二七、七五三、一三四	一二五、一三二、九三五	二、六二〇、一九九	七九、五八七、一七九	七三、一一二、〇六七	六、四七五、一一二
大正七年	二二五、〇四七、九二六	二二四、〇〇五、五九二	一、〇四二、三三四	一二六、九九九、八七九	一〇八、八八五、四五三	一八、一一四、四二六

奉天には金貸業者二戸あり、大正七年度の貸出約五百萬圓てある。

次に質屋の貸付金を見れはすへて日本人のみて營業戸數二五、大正七年度の貸出金額二一一三、八四七圓て一六五、〇六八圓の受戻になつてゐる。

尚郵便局取扱の金融況は

年次	爲替		郵便貯金			郵便振替貯金	
	振出	拂渡	預入	拂渡	年末現在	拂込	拂渡
大正四年	五三九、九七四	三三三、六八九	三三四、二四〇	一六七、四一一	一四八、六三二	五二四、〇七九	一、一五〇、八三二
大正五年	八〇四、四二一	三三六、〇六三	二六六、六九二	二一九、三〇四	一八四、五八八	七三三、二六七	一、二九二、六三四
大正六年	一、一一五、五〇二	六〇〇、八九一	三一六、五一四	二六四、三五六	二三三、九八六	七八八、六五六	八六七、四三六
大正七年	一、三八二、一一八	一、二〇一、一四四	四一七、五四七	三五六、六六一	二八〇、一七〇	一、一一六、五五三	五一五、一七二

（支那側）東三省官銀號、奉天興業總銀行、奉天商業銀行、中國銀行支店、黑龍江省官銀號支店、交通銀行支店、殖邊銀行支店等の外票莊一〇戶、錢舖三〇餘戶、當舖の大なるもの二戶ある、しかし之等金融機關にて取扱へる金融高に就てはその數字を得ることか困難てある、而東三省の首府たる關係上地租其他の公金私金の北京及管下各地方との間に送收せらるるものかあり或は又票莊による山西、山東、關內地方との送金關係をも見なけれはならぬ。

聞くところに依れは奉天に於ける爲替は多く賣爲替て正金銀行は上海、支那銀行は北京を各仕向地の第一位としてゐる。

通貨は奉票、日本金票、支那各硬貨等てある。

第二　蘇家屯

奉天の南九哩七分撫順支線の分岐店て且つ安奉線の分岐點てある。

未た市街としての體裁は出來てゐないか兵營、郵便局、奉天警務署支署等かあり、交通の要路として將來に重視されてゐる。

第三　鐵嶺

奉天の北四四哩四分、南滿線の一驛て龍首山の西麓遼河の東岸に近く位置してゐる、市街は

柴河の南に連り、鐵嶺城を中心としてその內外に亙つてゐる、そのうち西門外は鐵道附屬地て日本市街を形成してゐる、附屬地總面積一八七萬坪、市街宅地として貸付けたるもの二萬餘坪土地は一般に沼澤地てあるから滿鐵會社は附屬地の北方境界に沿ふて木造大排水路を築造し且つ幅三間乃至一二間の道路延長二、七〇〇間を作つた。

鐵嶺城は渤海時代の富州て遼代には銀州と云ひ銀州富國軍の置かれたところてある。

現在の城壁は明の洪武二六年の築造に係り清代にしはしは修築を加へられたるもので周圍二四町餘四方に各一門を有してゐたか近來西門及北門附近を取毀ちその甎瓦を以て道路及排水の工事を行つてゐる、そして市街は東門外にも長く延ひてゐる（支那市街人口約三五、〇〇〇 日本市街人口約一二、〇〇〇）水道は滿鐵經營て明治四十四年末から一般給水を開始し、大正七年度に於ける給水戶數七三二、栓數四〇〇、給水量二五六、四三三立方米に及んてゐる（但し鐵道用及社宅用を含む）そして配水管延長は四、四〇〇餘間てある、電燈は鐵嶺電燈株式會社て經營し資本金十一萬圓全額拂込濟て發電機一二五キロワット二臺を持つてゐる。

電燈會社は鐵嶺電燈局と呼ぶ

その他滿鐵の設置したものては六千坪の公園を始め墓地、火葬場等もあり以上市街經營の爲に滿鐵て消費した金額は大正七年末まて四四五、八八一圓に達してゐる。

官衙と學校　鐵嶺縣署、税捐局、遼河水上警察局、地方審判廳、地方檢察廳、鐵嶺交涉局、陸軍第二十七師第一〇八團本部（以上支那街）日本人居留民會、日本守備隊兵營、日本領事館、郵便局、滿鐵地方事務所（以上附屬地及居留地）

師範學堂、中學堂、高等小學堂其他小學堂五、日本人尋常高等小學校

交通と經濟　遼河上流の平原は鐵嶺附近に於て著しく蹙り、南北の交通は皆此咽喉を通過しなければならぬ、而も西には遼河の水運があり、民船の往來が到つて繁生してゐる、鐵道の開通は水陸兩路共に大打擊を與へ滿洲の大市場たる地位は大連、營口、開原その他に蠶食されたかまた幾分昔日の面影を見ることが出來る　その商範圍と認むへきものは柴河、范河、清河等の各河谷から海龍縣、法庫縣遠くは吉林地方までも密接の關係を持續してゐる、今各地關係市場への距離を示せは北山城子へ三六〇支里、海龍城へ四七〇支里、掏鹿へ二〇〇支里、法庫門へ九〇支里、開原へ八〇支里等である、之等の地方から運來する貨物は大てい穀物て布疋、雜貨類を積んて歸つて行く、穀物は大豆の六〇萬石を擧頭とし高粱四萬石、小豆、小麥等てある、今南滿線鐵嶺驛に於ける運輸狀況を見れは。

年次	乗客		貨物		手小荷物發送
	乗車人員	降車人員	發送	到著	
大正四年	一五三、一〇一人	一四五、二八九人	六二、九五四噸	一三八、八九一噸	一七三、六三三斤
大正五年	一六五、九九一	一四九、一八九	一二三、三三五	一三三、六九三	二一八、九三七
大正六年	一九三、二九四	一九一、四八三	一三七、二七四	一四四、六三六	六二、九九三
大正七年	二二三、三一七	二〇九、四四九	一〇四、二八三	一七三、〇六五	一、三二九、六一三

右の內發送貨物の大宗は大豆の三萬噸て次きは豆粕の二萬噸、高粱、麥粉の各一萬四千噸、粟、麥等の六、七千噸て到著貨物は小麥の二萬二千噸を第一さし高粱、麥、綿布糸、鹽、砂糖木林等てある。

鐵嶺の河運は古來有名なる交通路てある、鐵道の開通によりその價値を半減されたか今尙輸出貨物は鐵道七、河運三の割合を以つて運出されてゐる、遼河の碼頭は螞蜂溝さ云ひ市を西に去る五支里、此間の道路はよく修築され且つ手押輕便鐵道さへ布設されてある、船舶の出入期間は三月より十一月まてて永平、天津大北河各班の船隻か一箇年約四、五千隻出入してゐる、しかし螞蜂溝に籍を有するものは僅に六〇隻に過きない。

營口までの水路八六〇支里五晝夜を以て達することか出來る。

鐵路に於ける船店は六戸あり、穀類の賣買を兼營し且つ鐵嶺、螞蜂溝間の陸運を取扱つてゐる、そして船積貨物は大豆、豆粕、豆油、高粱等で就中大豆は二〇萬石内外を算してゐる。

工業　燒鍋二戸（年産額約八五萬斤）油房十九戸（年産豆粕七五萬枚、豆油約四〇〇萬斤）磨坊約八〇戸（年産額三五〇萬斤）此の外滿洲製粉株式會社の工場あり、資本金一〇〇萬圓一日の最大製粉力一晝夜麥粉一、六〇〇袋で一箇年の産額は平均約二五萬袋に達してゐる、習藝所は元來の浮浪民收容を廢して株式組織とし資本三萬五千元織布、染色、打綿、印刷、裁縫、木工の六科を置いてある。

金融　朝鮮銀行、東三省官銀號、奉天興業總銀行、奉天商業銀行、黑龍江省官銀行、中國銀行、交通銀行、殖邊銀行等の各支店及日華銀行、鐵嶺商業銀行がある、日華銀行は資本金百萬圓、全額拂込で鐵嶺商業銀行は資本金百萬圓拂込二五萬圓である、その外錢莊二、三戸滙莊一五、六戸當舖六戸あるか滙莊を除けはあまり重要な機關ではない、滙莊は爲替業を營み、穀物問屋及雜貨店と聯絡を取り營口との取引關係甚た密接である、通貨は奉票日本貨幣その他支那硬貨である。

日本人の質屋は附屬地に六戸あり、大正七年度の貸付金額六、五九八圓であまり、重要視さる

べきものではないか郵便局扱のものは一覽に値すると思ふから左に統計を掲けて見る。

年次	爲替		郵便貯金			郵便振替貯金	
	振出	拂渡	預入	拂渡	年度末現在	拂込	拂渡
大正四年	三四、〇〇二	六一、七九九	三二、一七七	一二、九三四	九五、三五八	三三六、〇一四	八五、六六七
大正五年	三一五、八五五	八五、一四七	一三八、六七九	一〇九、三六八	一三、〇八五	二三五、七三三	一九〇、一八五
大正六年	三三九、八二六	一五五、五八八	一六八、三四八	一二七、九九二	一四四、九〇八	三三五、五九〇	一八八、一三三
大正七年	三五三、二六八	一三七、六六九	一六五、八一九	二三八、七五八	一七四、四三〇	四〇七、九二六	三一一、八三六

次に參考の爲鐵嶺朝鮮銀行支店の貸付及預金を掲ける。

年次	預金			貸付		
	受入	拂出	現在	貸付	戻入	現在
大正四年	一七、三三六、八四〇	一六、七五七、六三九	四七六、二二二	一一、三一九、八〇四	九、四三三、五〇三	一、八一七、三〇二
大正五年	三六、四六六、八三四	三六、七五五、一八八	七二一、〇四九	三一、八八〇、九九七	六八、〇六八、六二六	三〇、三三二、三九一
大正六年	四一、九七六、八二四	四一、三六五、〇六九	四〇七、八四五	三〇、三二五、二三八	三八、七七八、四四六	一、二四七、一〇三
大正七年	一三四、〇八〇、一〇八	一三三、九九五、九六三	五七八四、一四五	七四、三三一、九一三	六二、三四八、八九三	二三、九六五、〇一九

第四　開原城

鐵嶺の北二一哩南滿本線に沿へる都市で驛の東北一八支里南に淸水河を控へ龍岡に跨り周圍

一二支里の城壁を繞らし、城内中央の十字街を繁盛なる商區とし就中東大街、南大街か最も殷盛てある、十字街の交叉點には鐘樓を設け城の西南隅には崇壽禪寺かあり、俗に石塔寺と云ひ門前には大塔か聳へてゐる。

當地は渤海時代よりすてに有名なる都市て元代には開元路に屬し、明の太祖之を開原路と改めて三萬衛を置き遼海衛を移駐せしめた、明代には遼東都護使に屬して安樂、自在二州の首都となり、清朝に入つて始めて開原縣を設け以て今日に及んてゐる、現在の城基は乾隆二六年の重修に係り道光三年更に修建せられたものてある。

戸數三五、〇〇〇、人口二一萬餘、縣署、警察所、税捐局、師範傳習所、兩等小學堂二、女學堂一、小學堂二の外警備馬隊統領か駐在してゐる。

交通と經濟　當市にとつて最も重要なる交通路は開原驛に通する一八支里の大道と西南四五支里なる遼河の碼頭英守屯とに至るものてある、その他西豐（一四〇支里）西安（一三〇支里）及東平（三二〇）に至るものと山城子に至る二八〇支里の道路とかある、その中東平街道は平坦て車馬の往復か多い。

開原城に於ける貨物集散區域は僅に管内及昌圖府の一部に過きない、殊に鐵道開通以後は集

散額か甚たしく減少した、之等貨物は主として開原驛から輸出せらるるか又直ちに英守屯碼頭に販出されるものもある、輸入貨物も亦同様てあるか輸出貨物に比し比較的其分布區域か廣大てある、開原城に於ける集散額は大豆約六萬石高粱三萬石位のものてあるといふ。

金融機關としては當舗二戸あるのみてその外内號と稱する一種の金貸業者かある。

第五　開原驛（鐵開原）

開原城を去る一八支里元來は小孫家店と稱する一村落て附屬地面積一八四萬坪、市街宅地として貸付たるもの一八萬坪てある、市街は矩形式を採り二條の大街か東西に貫通してゐる、道路は道幅三間乃至十間延長一四、〇〇〇間に上り全市悉く支那馬車の通行を許してある、又排水設備として市街の南北を通して三條の木造下水開渠を造り道路測溝の雨水を合流せしめ附屬地外の凹所に導き之を排除してゐる、此延長一、八〇〇間てある、水道は大正六年一月より給水を開始し大正七年度末に於ける配水管延長一里二六町二五間に及ひ需要戸數三三九、水量一三六、八九八立方米に達してゐる、其他火葬場、墓地、公園、市場等の設備も悉く滿鐵會社に於て施設した、此の市街經營の爲に消費した金額は大正七年度末までに五四一、五〇七圓に達してゐる、唯電氣のみは滿洲電氣株式會社に於て經營してゐる、同會社は大正三年十月の設立

て資本金一五萬圓拂込四五、〇〇〇圓である。

當地の發達は異常なる數を示し鐵道開通當時の寂寞に比すれは人口のみに就いても驚くへきものか今左にその統計を示そふ。

年度	戸數			人口		
	日本人	支那人	計	日本人	支那人	計
明治四〇年	六四	二六	九〇	二二五	一四一	三六六
大正四年	二四七	九八九	一、二三六	九八九	七、八六八	八、八五七
大正五年	三九一	一、〇九九	一、四九〇	一、一四二	八、四六六	九、六〇八
大正六年	三四〇	一、一三六	一、四七八	一、一五六	八、九九七	一〇、一五三
大正七年	三九一	一、二一〇	一、五〇一	一、二九八	一〇、七三九	一二、〇三七

交通と經濟　當驛は滿洲特產物の大宗たる大豆の產地、海龍城及掏鹿方面に至る衝路に當り佇て開原城の有してゐた經濟的地位の全部と、鐵嶺のそれの大部分を占有して北部奉天省に對する獨占的市場たるの實力次第に加はりつゝある。

開原驛輸送狀態

年次	乗客		貨物		手小荷物發送
	乗車人員	降車人員	發送	到著	
大正四年	一六八、七三三人	一七四、六八五人	三一一、八二七噸	九三、六四三噸	一五四、二八七斤
大正五年	一九一、九九二	一五九、一八九	一一三、三二五	一三三、六九三	二一八、九三七
大正六年	二二六、九四七	二二四、二四六	三三八、三三九	一四、九六九	二九〇、六三七
大正七年	二六一、二三八	二六八、四九五	三三三、四七七	一九、三七八	四一九、三三〇

右の内發送貨物の大宗は大豆で恰んと一八萬噸に達し、鐵嶺のそれに比し約六倍である、その他高粱の五萬六千噸、豆粕の二萬二千噸等を大なるものとしてその他の穀類の發送さるる者頗る多い、穀物以外では塗料、繭、豆油等かあるか多くはない、そして到著貨物は鐵嶺に比しむしろ少きの感かあるか鹽の二萬噸を大宗として綿絲、雜貨、建築材料等である、滿鐵會社は特に大豆輸送の爲開原と營口間の運轉をやつてゐる。

當市には大正五年開原取引所設立せられた、その取引高は(小洋錢建)

	現物賣買高	先物賣買高		錢鈔先物取引高
		數量	價格	
大正五年	四、〇八六、九五七元	四〇、五四二車	六六、五三三、一七一元	

大正六年	六、九九一、〇九三元	五六、三二四車	九八、九一〇、四三一元	
大正七年	一一、〇八一、二四一	五〇、二二一	一〇二、五四三、九二三	一九三、四五五、一四五

大豆の集散は從て油房業の勃興を見、現在一〇戸、一日の製造能力一六、〇〇〇枚に達し大正七年度に於て豆粕八三〇、〇〇〇枚豆油四、一五〇、〇〇〇斤の生産高てある。(大正六年度豆粕五〇三、八五〇枚豆油二、五一九、二五〇斤)

金融—朝鮮、正金、正隆、日華各銀行支店の外開原銀行かあり、資本金百萬圓拂込二五萬圓を以て營業してゐる、支那側ては、東三省官銀號、奉天商業銀行、黑龍江省官銀號、中國銀行、交通銀行等の各支店かある、その他質屋營業をするものか日本人二六戸支那人二戸あり大正七年の貸出金額か二八三、三七四圓に達してゐる。

次に郵便局取扱にかかるものは大正七年に於て爲替振出二一六、三二四圓、拂渡四八、八六八圓を示してゐる。

第六　西豐縣城(掏鹿)

開原の東方一二五支里、南に六馬架山一帶の山脈を控へ西は、龍脊山脈の一角猴兒山考虎山を負ひ、東は掏鹿河を距てて陀龍山を望んでゐる、由來當地は清朝の御獵區として圍場と竝ひ

稱せられたる地て光緒二十二年始めて開放せられた當時は、開原から吉林に通ずる路上にある「く」字形の小驛てあつたか同二十八年の設縣と共に土塊を以つて市街の區劃を爲し、以て今日に及んてゐる、戸數約二、四〇〇人口約一萬五千、内日本人約七〇人ある。

官衙と學校―、縣署警察署、混成第五旅本部、稅捐局、師範傳習所、兩等小學堂、日本領事館分館、尚、當市には日本赤十字社救療所か置いてある。

交通と經濟―、重なる道路は開原(一二五支里)、北山城子(二〇〇支里)、大疙瘩(九〇支里)大肚川(一九〇支里)に通ずるもの等て就中開原に至るものは、道路平坦貨物の輸出入路として往來最も盛てある。

掬鹿の商範圍と稱すへきは西豐縣下全部てあるか當縣下は北部奉天省第一の沃土てあるから穀物の産出も頗る多く從て民家の購買力も大なるものかある、集散貨物は大豆の一千萬石高粱の四萬石、小麥の一萬石を大宗として煙草、藍靛等も多額に上る之等の大部分は開原に販出され、布疋、雜貨類を返荷として運んて來る、布疋雜貨は、營口積出のものか多い、重なる商店は、燒鍋二戸、油房二二戸、當舖一戸、棧店三〇餘戸、布疋、雜貨店大小百餘戸て、其盛なる有樣は、朝陽、北山城子と共に、鐵道以東の三大市場と稱せらるゝ所以となる、又城外の東

西大街には毎日糧市か開かれ、四周村落の穀物か集り、牛馬市、柴市等も開かれる、唯一の金融機關たる、豐濟當は、株式組織てある。

第七　西安縣城（大疙瘩）

掏鹿の東九〇支里、東遼河上流の右岸に位置し、東方に龍首山を負ひ、光緒二八年始めて開放された地てある、城は、光緒三〇年の建設に係り、方三町の小規模のものてあるか城内の規矩は整然たるものてある、南街及東街を商區とし東關と南關にも、小店舖か連つてゐる、戸數一、五〇〇人口一萬〇〇、內日本人か約四〇人住んてゐる、その大部分は、質屋と、賣藥商て日本赤十字社の救濟所か設置されてある。官衙は知縣署、警察所、稅捐局の外兩等小學堂、小學堂、師範學堂、警務學堂、日本警察官吏出張所等かある、尙、電信及電話も近來開通した。

交通と經濟―、當地よりは四方の重要地に交通路か開けてあるか貨物運搬の通路としては掏鹿を通過して開原に至る一路てある、その他に至るものは、四平街へ一七〇支里、大肚川へ九〇支里、伊通州へ二〇〇支里、公主嶺へ二二〇支里、郭家店へ一八〇支里等て輸出貨物は大豆を以て大宗とし高粱、煙草、豆粕、藍靛等かあるか何れも少額てある、大豆は年輸出約一五萬石て大部分開原に運送され、煙草の約一五萬斤は奉天に向けられる、輸入物は、布疋雜貨て綿

布、四〇梱、綿絲六〇〇俵麥粉六千袋、砂糖七千包、石油二萬箱、等である。

商店の大なるものは、燒鍋三戶、油房一二戶、糧棧一九、大小雜貨二〇〇餘戶、て特に金融機關はないか商家相互の貸借か順調に行はれてゐる。

第八　東豐縣城（大肚川）

海龍城の西六〇支里、大疙瘩の東南九〇支里、西東北の三面に山を負ひ東南僅に展開したる原野を控へ大肚川その西南を繞つてゐる、市街は城外に連り城廓は土牆を築ゐてゐるか城內は官衙と五六の旅店あるのみて空地か多い、商區は南門外の東西街て南北街も之に次いて盛てある、戶數、一、二〇〇、人口、五、〇〇〇餘を算し、日本人も六七人居る。

縣署、警察所、統捐局、巡防隊、巡警遊擊馬隊、省立第五師範兩等小學堂、女學堂基督教會甲主教會等かある。

交通と經濟――、開原へ、三二〇支里、鐵嶺へ三九〇支里、掏鹿へ一八〇支里て、開原行きの道路か頻繁てある、しかし當地の商範圍は極めて狹少てあるか尙大豆の五萬石、高粱の二、三石は集散しその大部分は開原に送らるそして輸入雜貨は、開原及鐵嶺よりし、石油を第一、として白麵、雜貨等かある、市中の商家は約二百四、五〇あり、燒鍋六戶、油房一七戶あるそ

して金融機關は、奉天興業銀行支店と官當とで帖子を發行してゐる。

第九　遼陽

奉天の南四〇哩、南滿本線に沿ふる都市で、滿洲第一の古都で、漢代すでに遼陽縣の設置を見、南北朝の際は、一時朝鮮の領土に入り宏大なる高麗城の建造があつたと云ひ（今の城の東北に其遺跡あり）唐代に入つて遼州と改稱されて再び支那の範圍に入り遂いて安東都護府が當地に移駐されてから、遼東の首都となり、遼代の東京も此地である、清朝が奉天に遷都しない前は、東京と稱してゐたがその後一時奉天府の管下に屬し、康熙三年再び獨立して遼陽州を置かれて今日に及んで居る、今の遼陽縣は民國二年の改稱である。

市街を之を城内と附屬地とに分ち、城内は、東西六支里、南北四支里の城壁に圍まれ、六門を開いて通路としてゐる、城内の中央に十字街があり、之を中心として東西南北の四大街に大別され、東西兩大街には大小の商賈軒を聯ね、最も殷賑を極め南北兩大街が之に次いで盛である、而て城内の東南隅には住家點在するのみで菜園その他の空地が少くない。

附屬地は、西門外と停車場との間で、總面積約一八〇萬坪、内市街宅地として貸付たものが三萬二千餘坪である、滿鐵會社は明治四〇年より市街經營に著手し道幅四間乃至一二間延長約

三千間の道路を築造し、且つ太子河に至る排水路を設け、下水溝には、土留木柵を設くるか又は土管及モルタル管を埋設して簡易下水道とし彼是聯絡して城濠又は其下流に排出せしむることにした、その延長九千餘間てある、附屬地ては尙、滿鐵か水道を經營し、鐵管二二、〇〇〇餘を設備し、消火栓共同栓等四〇箇所を設けて大正元年から給水を開始した、大正七年度の給水戶數六八四戶、栓數六五〇、給水量、三四五、一三六立方米てある、公園の設備はまた完全してないか敷地二〇、〇〇〇坪、園內には白塔かある、その外、墓地、火葬場等も備はり、尙遼陽電燈公司は資本一二萬圓、全額拂込を以て城の內外に營業し發電機百キロワット二臺を設備してある。

城內戶數約五千、人口三萬五千、附屬地及領事館管下にある、日本人六千餘人、合計、四萬一千餘の人口を有つてゐる。

官衙と學校―、縣署、警察所、交涉員署、稅捐徵收局、地方審判廳、地方檢察廳硝礦分局、電報局、郵政局、官立醫院、師範學堂、初等小學堂三、女學堂二、其他學堂三、（以上支那側）、日本領事館、駐屯軍司令部、憲兵隊、衞戍病院、工兵隊、遼陽警務署、郵便局、滿鐵地方事務所尋常高等小學校、公學堂、滿鐵簡易圖書館、滿鐵醫院、（以上日本側て領事館のみは城內にあ

る）基督教會、天主教會、日本佛教布教所二、日本基督教會堂一、交通—、市内交通としては多數の人力車の外停車場と城内とを聯絡する、輕便鐵道かあり、その延長五哩、貨客共に運搬してゐる、外部との交通は、本溪湖に至る一二〇支里、營口に至る二四〇支里、遼中に至る一〇〇支里、海城に至る一二〇支里、連山關に至る一八〇支里等で就中、營口に至るものは馬車の往來か頻繁で次は遼陽、蓋平、本溪湖等で其他は極めて閑散である、水路は城東一〇支里なる、黄家林子を碼頭とし、夏季水量多き季節には小形戎克は、更に一五支里を遡つて甕房に至ることかある、之より上流には刳舟か本溪湖に遡つて石炭、薪柴を積んで下航することかあるけれともその運搬力は甚た微弱である、下流は、田庄臺まて五七五支里、營口まて六五五支里あり、此間を往來するもの六百隻以上ある、鐵道は、その統計によつて遼陽の經濟狀況の大體を察知することか出來る、卽ち、

年次	乘客 乘車人員	乘客 降車人員	貨物 發送	貨物 到著	手小荷物發送
大正四年	一六〇、四三〇	一六四、六四四	五三、八八四	三三六、六八〇	一七四、五九六
大正五年	一七四、六〇三	一七三、一七八	七六、七四七	二〇四、〇一九	一九三、四九〇

大正六年	二八三、三二九	二八七、一九二	九五、〇八五	一三五、五〇	二六六、六三九
大正七年	三七六、六九四	三七七、九〇三	八二、七一七	一四八、三三九	九二五、〇九二
大正八年	—	—	—	—	—

發送貨物のうち大宗たるは、粟の一萬五千噸て、豆粕一萬噸大豆高粱の約一萬噸之に次いてゐる其他、木材支那酒等の發送も相當あるか大體に於て當驛は貨物の發送驛てはない輸出貨物は鐵道に依るものの外、運賃の低い理由から水運に依る者か少くないことを記憶せねはならぬ、輸入貨物は麥紛、鹽、砂糖、綿糸布、等て、輸出貨物同樣、大連及營口から販入され、太子河上流方面に分布する、支那酒の如きは、陸路蓋平に至るものか多いと云ふ、工業は、燒鍋十一戶（年產額約三〇〇萬斤）油房二六戶（製造商豆粕約五〇萬枚豆油約三五〇萬斤）紙局六戶磚房日支計十數戶と習藝所とかあり、囚人を使用してゐる。

金融―、朝鮮銀行支店、と商工銀行とかあり、支那側ては奉天興業銀行、交通銀行、東三省官銀號等の各支店及、當舖三戶、滙莊四戶等て、日本人の小口貸出として、金貸業者五戶、質屋六戶ある、前者は、大正七年度の貸出金、一萬六千圓、後者は、二萬七千圓てある。日本郵便局取扱にかかるものは、大正七年度に於て、爲替振出約三萬四千圓、拂渡し一萬五千圓、貯

金豫入一萬五千圓、拂出一萬二千圓、等てある。

第十　煙臺驛及炭坑市街

當驛は、往時猥煙臺のあつたところて遼陽の北一三哩、炭坑鐵道の分岐點てある外云ふへきことはない、戶數六六、人口約四〇〇、日本守備軍兵營及郵便局かある。

炭坑は驛の東方約一〇哩、磨臍山の麓に、小市街を形城してあるか、その戶數僅に八〇に充たす、人口五〇〇てある、その他の炭坑從事員は、處々に散住してゐる、水道及電燈の設備は炭坑用の餘分を以て充分に供給されてゐる。

第十一　鞍山站

縣城遼陽を去る、南六〇支里、鞍山河の右岸、鞍山麓にある、當地は往昔、奉天營口街道の要衝に當り、且つ地形上遼陽の關門として明時代から城廓か築かれ往來も亦頻繁てあつたか、再度の兵燹に一寒村と化してしまつた、今日は滿鐵か鞍山製鐵所を置いて市街經營に著手し、線路の西支那人街とし右側を日本町と定め大正七年から貸下けを行ひ同時に道路の築造をやつたかまた、市街として見るへきものかない。

市街は恰んと立山驛にまて聯續せん形を取つてゐるから今之等すへてを合して人口を見れは

恰んと五、〇〇〇人に達せんとしてゐる、尋等高等小學校、醫院出張所、警務署支署等かある。

鐵道の運輸、狀況を見れは（鞍山立山合計）。

年次	乘客		貨物		小手荷物發送
	乘車人員	降車人員	發送	到著	
大正四年	五三、四八五	五一、七九七	二八、二五三	一九、七八三	一四、六五〇
大正五年	六五、二一六	六五、四二〇	三一、〇〇六	二一、六六六	二三、七六八
大正六年	二二一、〇五九	二一九、五六六	三一、八七七	二八、五三三	四九、八二九
大正七年	三九三、四二三	三九七、四〇九	三三、三〇七	三七、三七七	三九、八三三
大正八年	—	—	—	—	—

以上貨物の中、到著物は恰んと製鐵所及延築用てあるか發送貨物中に、大豆その他の穀物は西二〇支里なる騰鰲堡地方から買出されるので騰鰲と當驛とは相當の商關係を持續してゐる。

第十二　海城

遼陽の南二七哩七分、滿鐵本線に沿ねる舊都て、遼代すてに海州と云ひ渤海の波は當地附近に波打つてゐたといふことてある、所謂海城は驛の東方約一〇町の處にあり、城郭は略々正方形て東西南北の四門と小西門とを有し、天然の丘陵を廓内に入れ海城河の流れを利用して塹と

してゐる、此丘を曆石山と云ひ、今附近一帶を公園として開放してゐる、市街は城内に集り、中央の十字街を繁盛なる區とし、大街は警察に於て掃除に力めてゐるが其他の巷路は不潔である。

海城驛は、東淸線時代に大いに重視され、當驛を基點として石門子、折木城、大孤山を經て鴨綠江岸に至る支線を敷かんとしすでに四〇哩の築堤をやつた、その跡が今もある、今は、唯政治及軍事上の重要地として、存在してるだけて附屬地内に僅か六〇〇人口を數ふるのみである。城内の人口は、戶數一、八〇〇、人口略々一萬に達するといふことである。

官衙としては、附屬地内に日本砲兵聯隊、守備隊、衞戍病院尋常高等小學校郵便局滿鐵地方事務所出張所城内に、縣署警察所郵政局、電報局、稅捐局、小學堂四ある。

交通と經濟―、營口に至る一一〇支里、折木城を經て岫巖に至る一八〇支里、騰鰲堡に至る五五支里、牛莊城へ四〇支里等を主たる道路とするが何れも交通は閑散てある、元來當市は、往昔、遼河河口の現狀の未た形成されなかつた以前臨江の要地として隆盛の地位にあつたが現今の如く、遠く海岸を離れ遼河平原の東隅に位するに至つては往時の價値を悉く失つてしまつたも同樣てある、その失はれた地位は、海城から牛莊城へ、牛莊城から營口へ移轉してしまつ

た、此地方の特産なる柞蠶の如きも、營口の發達と鐵道の布設との爲に取引市場は悉く蓋平に移り海城内の大取引は全く跡を絶つに至つたのである、右海城驛の運輸狀況を見れは、

年次	乘客		貨物		小手荷物發送
	乘車人員	降車人員	發送	到著	
大正四年	八一、九三三	七九、七七四	三一、九七二	四六、一〇五	二一、七四三
大正五年	九三、三一〇	九二、三九二	三〇、六〇九	四五、四九一	九八、三二七
大正六年	一二八、八六六	一二九、七〇九	三六、五八八	三七、〇七三	四六、二九五
大正七年	一四四、五〇二	一三九、二五五	四三、九一三	四四、五一六	一四一、六五八
大正八年	—	—	—	—	—

發送貨物ては粟の約一萬五千噸を大宗として大豆、繭等の少量かあり、到著貨物ては麥粉鹽其他雜貨てある、その商範圍は鐵道以東の縣内のみて、偶々岫巖及蓋平と取引關係を有するのみてある、そして金融事務は、十數家の兩替屋て取扱ひ營口との間に小額の爲替取組をやつてゐる、日本側は郵便局のみてある。

第十三 騰鰲堡(騰堡)

南滿本線鞍山站驛を去る西二〇支里、營口遼陽間の街道上に位置し、戶數約八〇〇、人口約

五、〇〇〇に達する、小邑で南街を商區として街衢稍々整つてゐる、巡警分局と商會及郷會の自治團がある、稅捐分局、兩等小學堂などが主なる建物である。

交通と經濟―、當地の商業範圍は四周四、五〇支里內外の需要供給に過ぎないが小北河より營口との商干係が密接なものがあつて穀類、雜貨の輸出入少くはない、但し當地の商期は冬季て、入市する馬車每日、二〇〇臺以上に及び營口に向つて通過するものを加れは一日四、五百臺に上ることがあると云ふ、しかし夏季は騰堡を經つして直接太子河碼頭に出るものが多い、當地の牛馬市には相當の家畜が集つて來る。

第十四　牛莊城(牛莊)

海城の西四〇支里、遼河の左岸に位し、人口約二萬、海城縣分駐牛莊縣佐があり巡警局、兩等小學堂、小學堂、廟宇七、福音堂、天主堂等がある。

由來牛莊城は、大金天明二年の修築に係ると云ひ今は恰んど破壞されてしまつた、しかし乾隆年間までは、遼河口の繁盛な貿易場として知られてゐたのが咸豐同治の頃から營口にその繁榮を奪はれてしまつた、市街は城の內外に分れ、城は東西に二門あり、周圍約一五支里、城外の東北關、城內の東西街とが賑かである。

今附近部落から集散する貨物を見れは、穀類の外胡麻棉花等かあり大部分は營口に輸出する
そして輸入雜貨は悉く營口から販入され、當地を通過して海城遼陽等に行くものも少くない、
當地の商店は油坊六の外大部分雜貨店てある。
當地から各干係市場への距離を示せは先つ營口へ八〇支里海城四〇支里、遼陽へ一四〇支里
等てある。

第十五　蓋平附蓋平驛

大連を去る北一三一哩八分、東北一帶には山脈連亙し、西南は開けて一大平野となり、蓋平
河か城北を流れてゐる、蓋平城の驛の東南七支里にあり城廓は東西に短く南北に長く、東西南
の三門かある、東西約五町南北約八町、南東北の三大街か最も殷賑の區てある、之れに次くは
老爺廟街てある、鐵道附屬地は、驛前に展開し一條の大街の東西に通ずるを幹線として多數小
街か交叉してゐる驛前に公園かある。

蓋平城は、古への蓋州城て、高勾麗時代には蓋平城と云ふた、唐の太宗、東征の時、將軍李
世勣の攻陷した天險てある、當年の激戰場てあつたさいふ靑石關、撒謊糧等の地名か尙存して
ゐる、遼代には奉國軍に陞せられ、元は蓋州路さ改め、明の洪武九年蓋平街となり、遼東都指

揮使に隷し、清朝康熙二年始めて今の蓋平縣を設けられたのである。
蓋平城内外の戸數約三千人口約一萬五千、附屬地戸數二二〇、人口一、三〇〇
全部を通して日本人約二〇〇に充たない。

官衙と學校―、縣署、警察所、郵政局、省立第三師範、高等小學堂一、初等小學堂四、女子初等學堂、女子師範學堂（城内）、郵便局、守備隊、公學堂、滿鐵地方事務所出張所、（附屬地）。

交通と經濟―、大車の交通するのは營口、遼陽、海城、岫巖、復州等て、就中營口街道最も頻繁を極め、穀物、柞蠶絲、雜貨を運搬してゐる、各地への距離を見れは、岫巖へ二一〇支里、萬福庄へ一〇〇支里、熊岳城へ五五支里、大石橋へ六〇支里、營口へ七〇支里、湯池へ六〇支里等てある、そして水運の利用し得る地點は城西二〇支里なる西河口のみてあるか、河口淤塞により船舶の入港甚た少く僅に山東沿岸地方と雜穀の運送を見るのみてある。

蓋平に於ける最大交通機關は勿論南滿本線て、その運輸狀況は、

年次	乘客		貨物		手小荷物發送
	乘車人員	降車人員	發送	到著	
大正四年	三七、八〇七人	三五、九四八人	二四、八六一噸	二一、八三五噸	六一、四〇四斤

大正五年	七四、〇二〇	七四、九五六	二六、九九六	二〇、八〇二	二六五、〇四七
大正六年	九一、五一七	九一、九八五	四四、二七〇	二三、三二四	四五一、五三三
大正七年	一〇四、八五三	一〇五、一一三	四〇、四五九	三三、四四七	二、一七〇、九九八
大正八年	—	—	—	—	—

當地の有名なる物產は、絹紬、柞蠶絲及絲屑て蓋平河の流域に沿ふた一帶から產し、鐵道により運搬せらるる者、年約六五〇噸、馬車によつて營口に至るものも少くない、大連及營口から輸出する絲は全部蓋平から發送したものてある。鹽も亦營蓋鹽と、稱せられて營口、蓋平兩縣下より多量に產し每年の鐵道運輸高二萬八千噸に達し、發送貨物の主位に居る、その他粟、野菜等あるか多量てはない、輸入貨物ては、麥粉、酒煙草その他雜貨て酒は、遼陽海城方面からその他は營口からするものか多い、その分布範圍は割合に狹少てある。

金融機關としては、中國交通、各支店、東三省官銀號分行、錢舖一、當舖大小五、その他錢舖を兼業とするものか四、五戶ある、特に日本人のそれとしては郵便局たけてある。

第十六　熊岳城

蓋平の南一九、五哩南滿本線に沿へる一驛て、蓋平縣內てある、東方一帶は摩天嶺の支脈に

よつて遮られ、西方は全く開けて遥かに渤海に接してゐる、城は熊岳河の右岸に位し周圍二五町、東北に各二門ある、城内は十字街主要街衢を成してゐる。

當地は遼代すでに熊岳縣を置かれ爾來蓋平と共に、渤海方面の重鎭てあつたか今は、一市場として知らるると同時に、温泉場、梨園、黄旗山、望海山、望小山等の遊覽地かあるので著名てある、附屬地は市街七、四六〇餘坪道路は幅六間乃至十間延長三千餘間に達、内千五百餘間は停車場から温泉場に至るものて此の間に人力輕便鐵道を設けてある、水道墓地火葬場等も設けられた城内戸數九〇〇、人口約三千、附屬地、戸數約三〇〇、人口約一、四〇〇、左住日本人は主として農業及園藝に從事するものてある、郵便局、守備隊尋常高等小學校公學堂、滿鐵地方事務所出張所等かあり、城内には税捐分局及漁業局かある。

交通と經濟―、鐵道の外蓋平に至る六五支里、復縣に至る一三〇支里の陸路かあるか交通か閑散てある、驛と縣城間は約一五町、滿鐵築造の大道かある。

年次	乘客		貨物		
	乘車人員	降車人員	發送	到著	
大正四年	三、三六八	三、五六七	四、二三三	六、六四八	[illegible]九、二〇四

大正五年	四八、四一八	四七、〇一一	四、四九七	九、七八三	四〇九、六六五
大正六年	三四、七三六	三三、八五五	七、八七四	一二、三四六	七四一、二〇〇
大正七年	六七、二九六	六九、三三三	九、八二三	一二、四二三	一、九四三、三七六
大正八年	—	—	—	—	—

特産物として有名なのは、黄花魚その他の魚類で、大漁のときは一箇年二〇〇萬斤以上に達し、汽車で運はれる五、六百噸以上に上つてゐる、果物も亦二千噸以上を發送し柞蠶は約七百噸蓋平に行くものが多い、穀類は發送よりも到著するもの多く、麥粉は到著貨物中の大宗で一、二〇〇噸位である、當市の商範圍は城附邊の村落のみで他は瓦房店蓋平の商範圍に屬してゐる四、五の當舖が金融事務を取つてるはかりてある。

第十七　營口

營口は東經百三十度十四分、北緯四十四度四十分、遼河の下流、南岸に位し、東西二里、南北二十一町の狹長な市街で、市街は新舊の二つに分れ前者は主に日本人、後者は支那人市街である、元と當地は全く海面下にあつたが、其陸地に形成したのは前淸道光の初年であつた、然るに遼河の流砂は年々河口を埋め河身を淺くして遼東灣内に前進し、西歷一八三〇年頃には半

莊城、田庄臺、商勢漸次營口に後るに至つた、越ゑて西暦一八五八年天津條約の結果牛莊城の開港を見、英國領事の達眼は其下流五十支里に在る營口に駐在して、自ら之を牛莊と稱し條約上の通商地とした、現今營口か外人間に牛莊として知らる所以てある。

其後山海關道臺の移廳、海關の開設に、次くに日清、日露の兩役有つて日本との經濟關係次第に密接を加へ、南滿鐵道及關内外鐵道の布設と共に遂に現今の繁榮を召致したのである、而新市街は全く日露戰後の發展にて一九七七一〇坪の面積を有するに至つた。

行政も亦從つて二に區別せられ、新市街は日本領事管轄の下に牛莊居留民團役所ありて教育衞生、土木、消防等の事務を執行し、之か執行機關として行政委員會あり。

而居留民會議員は日本帝國臣民を以て組織する自治機關てある、其行政區域は營青埠子より大潮溝に亙る間てあつて大正八年度に於ける經常歲出入合計金七一六〇〇圓、基本財產として基本金一〇七五四四圓の外建物及土地の管理權を有つてをる。

而之か警備として關東廳警察及領事館警察を兼ねた營口警務署及遼陽憲兵隊營口分遣所かある、支那側行政機關としては瀋遼道尹公署ありて行政事務の全般を看、其の下に營口警察廳、營口縣知事ありて分掌す、前者は司法、警察行政、衞生を司り後者は納稅、教育、及各種の自

治機關を管理す、以上の外警備として、第二十七師管下の海防練軍管あり、營口縣警察公署は營口埠外三區の警察事務を司るものである。

又營口商務總會も便宜上家屋税及商業税の取り立てを代行する。

東營口の各種官衙を擧ぐれば左の如し。

日本側　日本領事館、營口警務署、牛莊郵便局、遼陽憲兵隊、營口分遣所、關東廳觀測所營口支所、牛莊居留民團役所、營口實業會。

外國側　露國總領事館、丁抹名譽領事館、英國領事館、瑞典名譽領事館、和蘭名譽領事館諾威名譽領事館。

支那側　遼瀋道尹公署、營口縣公署、營口警察廳、營口縣警察公署、海防練軍營、營口地方審判廳、東三省鹽運公署、鹽務稽核所、牛莊税關、山海關監督公署税捐徵收局、奉天全省漁業商船保護總局、吉黑採運局、遼河上游工程局、習藝所、會館、商務總會、教育及宗教。

イ　日本人居留民團立營口尋常高等小學校、明治三十九年五月の創設に係り敷地二二三四坪あり。

	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年
經費豫算額	八、五一八	八、八五七	九、五八七	一一、八九四	一四、四三〇
兒童數	一八六	二三三	二五一	二九三	三〇二

ロ　營口實業學堂—大正二年七月の創設であつて始めは營口商務總會と在留日本人南滿洲鐵道會社の合辦の形式であつたが大正七年五月から南滿洲鐵道會社の直接經營に移つた、日本領事館及道尹を名譽監督に推擧することは從前の通りである。

本堂は支那人に對し中等商業敎育を施すを目的とし修業年限三箇年の本科の外各一箇年の豫科及研究科を置く。

ハ　基督中學校、本校外人基督敎會の經營であつて奉天の文會書院の補助の下に支那人の子弟を敎育するのを目的とし、程度は中學と同樣であつて附屬女學校をも併置す。

以上の外支那人の機關としては

乙種商業學堂、乙種魚業學堂、高等學堂、第一、第二、第三、第四の四箇縣立國民學校、第一、第二の二女學堂(以上官立)淸眞寺初等學校(回々敎徒)公立高等學校附設初等學校あり、後

二者は半官立てあるか內容は前者と異る所かない、共に縣勸學所の經營てある、此の外書房てある私立學校は約二十箇所あり。

次に日本側社等の主なるものを擧くれは。

1營口神社、2稻荷神社、3忠魂碑、4本願寺、5淨土宗、6眞言宗、7曹洞宗布敎所、歐米人のものは基督敎會か一つ有るはかりてある

而支那人の社寺

イ、天后宮、海神娘々廟、老爺廟、火神廟、老爺閣、胡仙堂、雙廟子、禮拜寺の三義廟等あり、宗敎としては儒敎佛敎、通敎、回々敎、敎督敎等區々分たるるのは支那の他地方と異らない。

新聞雜誌

滿洲新報(日本)、營口實業會月報(每月一回)、營商日報(漢文)

營口衞生

日本人側　領事館監督の下に居留民團役所に於て施行し、避病院、火葬場、墓地を設置して一般衞生事務を行ふて居る、經費はすへて居留民團て支出する。

營口滿鐵病院は其最大なる機關であつて建物總坪數八五八坪、六名の醫員か居り一般に向つて診斷を行ふ、患者數及收支の狀況を見れは左の如し。

	患者數	收入	支出
大正四年	三八、九九二	三二、四七八	四二、〇九二
大年五年	四二、九一八	三六、六一五	四八、〇五二
大正六年	四四、四八七	四一、八八五	五一、六四二
大正七年	四五、七五七	四九、六五一	六八、六五四
大正八年	―	―	―

此外日本人經營の私立病院として古川醫院、酒井醫院等あり。

支那人側　巡警總局內に衞生科の設けかあつて衞生一切を辨理するも、一般支那人は衞生思想に乏しく且つ施療機關も舊式の漢法醫かあるはかりて唯檢疫事務に關して領事團と稅關との間に交涉成立して大正八年度から日本人醫師を聘することに決つた。

又營口警察廳にては公衆衞生の事務を擔當し避病院、嗎啡逵視所、防醫院等を設けつ且衞生隊を組織して撒水、汚物、掃除其他の衞生事務を執行するけれとも其の不完全なるは云ふまて

もない。

以上の外普濟醫院と云ふ英人主管の病院かあつて一般の診療を行つて居る。

上下水道　當地は元來水質不良、井水は鹹味を帶ひ、支那人の如きは雨水を集めて之を使用して來たから明治四十二年日本人經營の下に營口水道株式會社か設立せられ日支人共其の供給を受ける事になつた、水源地はヽ流田庄臺に於て遼河の水を引き入れ、新市街にある配水塔まて鐵管を以て送水す、鐵管の延長五邦里に及んて居る、水は濾過沈澱して供給する、而下水道は新市街に於ては道路の兩側に排水溝を設け之より主要箇所に暗渠を設けて其一端を遼河に開放する、其の設備は完全して居ないか舊市街に比して遙に優つて居る、舊市街に於ても主要道路のみは排水溝を設け所々に下水暗渠あつて遼河に流下せしめて居るものもあるか大部分の道路は何等の設備かない。

消防　消防隊は日本人居留民團に一、支那營口警察廳に一あり而前者に蒸氣ポンプを備へて居る。

娯樂機關

一　劇　場　(1)營口座　日本人居留民團の經營に係る。

(2) 支那劇場

(イ)裕仙茶園(ロ)小紅樓茶園(ハ)小平康里茶園(ニ)大平康里茶園(ホ)水源茶園

二　倶樂部　(1)日本人營口倶樂部
(2)滿鐵倶樂部
(3)牛莊倶樂部(撞球場)　} 日本人
(4)Newchang, S, C. Ceodowrch　歐米人

三　料理店　日本一一軒　支那　多數

四　旅館　日本二軒　支那二四軒　歐米一軒

市內交通

人力車　一三一一臺　馬車　一二臺　外に自家用のもの一八臺

轎車　七八輛　自轉車　一三六輛

自働車　一輛

輕便鐵道　營口水道會社か電車敷設權を獲得して居る左券として敷設するところてあつて營口驛を基ゑとして車は配水塔に至り南は東亞煙草會社工場に通し、西は南本街綏定門外を經て

日本牛莊郵便局に至る軌道延長三哩、使用臺數一五〇、一臺三噸内外の貨物を運搬す。

荷馬車　三八二臺

艀舟及舢板　艀舟は一五五隻あり、港内及田庄臺間を通航す、舢板は六九五隻、冬期は橇夫に變す。

電氣事業

電氣事業も亦營口水道會社の經營であつて火力を以て發電力とし一晝夜の發電量三、七六〇キロワットて其供給區域は新舊兩市街から牛家屯、河北驛にまて及んて居る、電力供給及點燈は其營業科目てある。

	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年
電力供給料	八〇六、一九二	九〇〇、五四〇	九六一、四二〇	一、一八二、九〇〇

牛莊港

牛莊港は遼河河口を遡る約十四哩の地點にあり、港域は二區に分れ一を汽船及西洋型帆船の碇泊區域とし一を民船戎克の碇泊區域とする、汽船碇泊區域は延長約一七〇〇呎、河幅約二五〇〇呎てあるか海關の許可を得るときは港外にも碇泊し貨物の積卸を爲す事か出來る、汽船は

東稅關か管掌する而戎克碇泊區域は汽船碇泊區域の下流から河北驛に至る間てあつて西稅關之を管掌し何れも夜間は出入を禁する。

港內の水深は頗る深く干潮時に於て平均四〇尺あり、最深所は七五呎もある、但し地質は土砂の堆積層てあるから護岸工事に犧牲を拂ふことは尠くない。

又潮水干滿の差も甚たしく冬季十一月下旬から翌年三月下旬まては結氷して出入不能となる

棧橋は全部浮標箱を用ゐ、其數三十餘箇ある。滿鐵埠頭、京奉線鐵路棧橋、河北驛鐵路棧橋、等其主なるものてある、唯河口に門洲かあつて入港に不便てある事は遺憾てある。

倉庫も亦各船舶代理業者每に設置され構內坪數合計三三一〇四坪あり。

同營口に於ける外國及支那開港場間入出港船舶を見れは。

年次	入港 汽船 隻數	入港 汽船 噸數	入港 帆船 隻數	入港 帆船 噸數	入港 合計 隻數	入港 合計 噸數	出港 汽船 隻數	出港 汽船 噸數	出港 帆船 隻數	出港 帆船 噸數	出港 合計 隻數	出港 合計 噸數
大正四年	四八六	五八四、四五七	一	五〇二	四八七	五八四、九五九	四八七	五八四、九〇四	一	五〇二	四八八	五八五、四〇六
大正五年	二四一	三六一、一三〇	—	—	二四一	三六一、一三〇	二四〇	三六〇、九〇四	—	—	二四〇	三六〇、九〇四
大正六年	二五八	二四五、〇九六	一	一一八	二五九	二四五、二一四	二五八	二四五、〇九六	一	一一八	二五九	二四五、二一四
大正七年	二六八	二二三、八七八	一	一一八	二六九	二二三、九九六	二六九	二二三、八七〇	一	一一八	二七〇	二二三、九八八

支那未開港間を往復する航船亦尠くない(遼河)

年次	入港 隻數	入港 噸數	出港 隻數	出港 噸數	合計 隻數	合計 噸數
大正四年	一四三	九〇,五〇三	一四三	九〇,五〇三	二八六	一八一,〇〇六
大正五年	一三三	五二,二三〇	一三三	五二,四四六	二六六	一〇四,六七六
大正六年	一三〇	四二,六八五	一三〇	四二,六八五	二六〇	八五,三七〇
大正七年	一二一	四〇,二六五	一二一	四〇,五六三	二四二	八〇,八二八

航船は漸次減少の狀態であつて明治四二年度に於ては隻數三五六、噸數二四六、八一〇に及んだ。

以上の當地稅關の取扱に係る貿易額は。

年次	總額(海關兩)	輸入 日本	輸入 外國	輸入 支那	輸入 合計	輸出 日本	輸出 外國	輸出 支那	輸出 合計
大正四年	五一,六七七,一〇五	三〇,八五四,六八三	三,六五二,〇一三	四九〇,〇九八	三七,三三四,〇一四	四四四,六八四	一,六六六,〇六二	一四,二七〇,九一三	二四,四七六,〇九一
大正五年	四〇,六〇三,六七九	二三,六一五,九一〇	一,三〇五,八〇三	[illegible]	[illegible]	一〇八,五五八	[illegible]	九,一七八,三二四	一七,五五五,四九六
大正六年	四〇,三五八,六三六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八〇,一八六,七二一	一五,二八四,四七三
大正七年	四四,六六六,八三五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	五,二九一,〇九六	[illegible]

船舶の關係、運賃及貨物の關係上當地の税關の手を經ないで輸出入せられるのもあり、安東、大連、天津の聯絡の如き之れである、如上の數字に合計に於て多少の差違のあるのは之れに依るからである。

牛莊海關關税收入金額次の如し。

年次	輸入税	輸出税	沿岸貿易税	噸數	通過税	合計
	海關兩	HK.TL.	HK.TL.	HK.TL.	HK.TL.	HK.TL.
大正四年	二三七、一六三	四四一、〇八〇	六六、五九四	二四、七四五	二四、六六四	七八四、三二五
大正五年	二三三、九五六	三五四、三一七	六三、〇一八	一〇、七三〇	三二、六四五	六八四、五九六
大正六年	一六六、三四五	三四四、三五六	五三、九四四	四、三六八	一〇、三九九	五〇八、三三二
大正七年	一六八、六〇七	三六八、七一八	六六、八三五	一二、七五六	一九、四〇三	五〇五、六八九

當港に於ける輸入品中最大なるものは綿絲布及綿花であつて就中支那本土最も多く、日本、香港之に次ぎ大正六年度の總額百二十萬海關兩に達した、砂糖の十二萬六千兩、紙類の二十五萬兩も大宗品であつて、茶及珈琲も亦多く百六十萬兩を突破し、石油は七十六萬兩に達して居る。

而輸出品は其最大なるものは大豆及豆粕の五百十七萬兩であつて、農産種子の二百三十萬兩、

搾油類の百七十六萬兩、藥材の九十萬兩、石炭及コークスの二十萬兩等は之に次く大宗品てある。

附　營口と遼河

營口の繁榮は一に遼河の水運に依つて其基礎を決する、之は上流に田庄臺、海城、遼陽、奉天新民府、法庫門、鐵嶺、開原、昌圖、三江口、鄭家屯等の滿洲著名の市場を有するからてある。

唯水量の增減甚たしく其上に毎年一樣てないのみならす各期三箇月以上の結氷期間か有つて舟運の不便を來す憂かある、若し遼河の改修か出來上つた曉には營口の繁榮は期して待ち得るてあらう。

大正七年度開河中十月までの上下航貨物

下航物産高	同上營口桝換算	上航貨物
七一八、〇〇〇石	七三二、六一〇石	二〇〇、〇〇〇斤

營口と鐵道

南滿鐵道營口支線は新市街を基點として東方一三・九哩なる大石橋に通し南滿本線に接續し

てゐる、滿鐵會社は延長三、六一七尺の埠頭を築造し五、五八八坪の倉庫を設けて運輸の便に備へてゐる。

京奉鐵道營口支線は私溝帮子から分岐して五六・六哩にして營口市街の對岸河北に通し同じく埠頭及倉庫の設備がある。

滿鐵營口驛運輸狀況

年次	乘客		貨物		手小荷物發送
	乘車人員	降車人員	發送	到着	
大正四年	一八五、八七八	一六三、九六八	一六三、一四五噸	五八、三〇〇噸	一〇五、四六〇斤
大正五年	二〇三、四五〇	一八三、八八六	一六五、八八九	二五五、八八一	一三八、五七六
大正六年	二三四、八〇六	二二一、五五七	二三八、八八八	二五五、八〇七	一六七、六七七
大正七年	二六八、六九八	二五四、二四八	二六〇、〇四九	二三六、八一九	四〇九、四一九

京奉線河北驛運輸狀況

種別		大正四年	大正五年	大正六年	大正七年
貨物	發送	三〇、〇四五英噸	一三、三六八	一三、五三九	一五、五六三
	到着	一四〇、六五六	七五、一八〇	三一、四〇五	七〇、六〇七

滿鐵線に於て發送貨物の主なるものは鹽の六七萬噸臺を突破するを筆頭とし煉瓦の二〇〇萬噸、綿織物の一六萬噸、其他砂糖、石油、大豆、豆粕等何れも十萬噸内外て穀類も亦尠くはない。

到著貨物は滿鐵會社の石炭（一二〇萬噸以上）を除けは大豆最も多く殆んと五〇萬噸に達せんとし石材の三〇萬噸か次に位してゐる、金屬類、木材、高粱、綿織物、雜穀、麥粉、支那酒、藥材等も亦尠くない。

京奉線に於ても、大宗品と目すへきものは大概營口驛のものと同樣て唯日本よりする諸精製品を缺くのみてある。

陸路

以上の如く鐵道及水運の便か備はつて多くの貨客は之に依つて交通するも、冬季結氷の間、陸路の運送も忘れてはならない、併しその範圍は僅に二〇〇支里乃至三〇〇支里て、從前の如く奥地との往復はない、唯運賃の低廉な爲に之を利用するものかあり、大正七年度に於ける發送貨物は四、五萬噸に及んてゐると云ふ、之等運送用大車を宿泊せしむる大車店か二〇戸あり、海城及蓋平に至るものの外は冬季たけ營業してゐる。

通　信

郵便局は日本郵便局及支那郵政局があり、何れも普通郵便の事務を取扱ひ支那郵便局は市内に三分局を設けてある、電報も日支兩國の者が取扱ひ支那の者は三省郵政管理局の所管で一等電報局の甲級に屬してゐる、而電話は營口水道會社の經營に係り加入者の最近十箇年平均增加數四一名大正八年末の加入者數五七七八である、此電話は又南滿會社の經營する長距離電話に接續してゐる。

金　融

（金融機關）（一）中國銀行分行（二）交通銀行分行（三）銀爐（資本一〇萬兩のもの二家五萬兩のもの四家、五〇萬兩の株式組織のもの一家）以上支那側（四）横濱正金牛莊支店（五）正隆銀行支店（六）朝鮮銀行支店（七）振興銀行（資本百萬圓）（八）營口銀行（資本三〇萬圓）以上日本側（八）道勝銀行

右の外兩替及爲替業を本業とし小口の貸出を行ふ錢舖及錢莊四〇軒あり、何れも六千乃至二萬兩の小資本である、又日支の質屋三六軒あつて小資金の融通を試みてゐる、今參考の爲正金朝鮮、正隆三行の取扱へる預金貸付金を見れは。

年度	預金			貸出		
	受入	拂出	現在	貸付	戻入	現在
大正四年	二四、四七一、〇八六	二三、二三七、七八八	一、二四三、二九八	九四、五九九、六四四	八八、二一二、四二三	六、四八〇、二二二
大正五年	三〇、九〇七、三三二	二八、五五七、九四五	二、三一九、二八六	一九四、一八六、七〇六	一七〇、九九七、〇一二	三〇、三二二、六四二
大正六年	四七、二四三、四三三	四七、〇〇七、三五〇	二、三三四、八七〇	三八七、三三二、四四四	三五四、三五八、七〇〇	三三、〇三三、四四四
大正七年	一〇三、五五六、八〇九	九九、五七二、〇三二	三、九八四、七七七	五三七、一五三、一三三	五〇〇、一七四、三三〇	三六、九七〇、五九二

商工業

（商業機關） 支那側（一）商務總會（二）輔善林（天津會館）（三）粤東會館（四）福建會館、（五）三江會館（江蘇、浙江、安徽） 外人側（一）洋總會、Chamber of Commerce 營口實業會（日本）

（商業仲介機關） （一）經記（河傅經記、油豆經記、粮石經記、山貨經記）（二）大屋子二〇戸（三）雜貨大屋子二六戸（四）洋貨大屋子一八戸（五）牛皮大屋子。

（市場） （一）馬車豆市場（冬季結氷して河俥豆の南下しないとき、特産物は馬車運により運ばれ來市して開く市場てある）（二）河俥豆市場（三）錢鈔取引市場。

右は取引所の如きもので此外普通の市場と看做すへきものは青物市場、魚市場、果物市場及安平市場かあつて食料品を販賣し又新市街には營口市場かあつて日本人の食料品を販賣してゐ

る。

（工場）（一）油房（大油房一一、小油房九、うち日本人二）（二）機業（工場に二〇戸あるか、すへて家內工業の域を脫しない）（三）煉瓦工場（日本人一、支那人四）（四）染房（大なるもの二四、小なる者一二）（五）鐵工場（大なるもの一三、小なる者三、四〇、日用食器か主製品である）（六）燒寸工場（關東火柴有限公司資本五萬圓）右の外日本人經營のものを擧くれは。

（一）營口硝子株式會社（資本二萬圓）（二）粗製加里工場（三益公司資本三萬圓）（三）營口タルク工場（資本三〇萬圓）（四）釀造工場三（五）カタン糸工場（興信洋行）

第十八　大石橋

營口を距る東方一三・九哩、大連を距る北一五〇・四哩の地點にある、營口線の分岐點である、市街は附屬地及支那街の二つに分れ附屬地市街は一萬四千坪、線路の東に連り三間乃至一〇間の道路を延長二、二〇〇餘を通し、三條の排水路延長四千間を掘り、且つ驛前に約千五百坪の公園を設け附近盤龍山公園二萬二千坪も出來た、尙墓地、火葬場、公會堂等の設備もある、滿鐵會社か之等築造の爲に費した金高は大正七年までに九萬圓を越ねてゐる、先つ宛然たる田園都市である。

支那街は附屬地の南方に連り約六、七町に亙る南北の一條街て金州奉天間街道一小宿場てあつたのた。

附屬地戶數約七八〇、人口三、〇〇〇に達し此外支那人街にも約一、〇〇〇ある。

當地は交通の要點てある外特記すへきこともなく、生產する物資も自己消費に充つるに過きない、從て他に移出するの餘猶なとはない、需要狀況も日用必需品たる食料其他綿絲布類て營口及大連から販入される。

唯石材は有名なもので年約三萬噸販出し、所謂營蓋鹽の發送も四千噸に達してゐる。

左に驛に於ける運輸狀況を見やう。

年次	乗客		貨物		手小荷物發送
	乗車人員	降車人員	發送	到着	
大正四年	七四、〇〇四	七五、〇四四	五一、六五五	六三、〇三五	二四、〇八〇
大正五年	八四、八三八	八五、七四四	六八、五五七	五八、二九一	三一、九六三
大正六年	一二八、八六八	一二九、七九九	三六、五八八	三七、〇七三	四八、二九五
大正七年	一二九、六四八	一二九、一三八	七九、〇七四	八九、六六六	六六、八四一

第十九　田庄臺

營口の北三五支里、京奉線營口支線に沿へる一驛で遼河の右岸にある人口約六、〇〇〇の都邑である、嘗つて當地は現在の營口の位置を有して商勢甚た振つてゐたものである、巡警分局、漁業銷售場、捐税分局、鹽捐局、船捐局、河防局等の外小學堂五箇ある、當地の主要交通路は河道で一箇年中當地を通過する船舶大小三千艘以上に上り、冬は馬車を以て通行する、當地より各地に至る距離を示せは牛莊城へ九〇支里、海城へ一二〇支里、新民へ三二〇支里、溝帮子へ二〇支里等である、汽車は水路程經濟界には重要でない、集散する穀物は蜀黍、米、豆等であるか多くはない、煙草か約六萬斤吉林地方から販入される、輸入品はすへて營口からて布疋、石油、雜貨等である、尚當市は營蓋鹽の産地で又漁業か仲々に盛である。

第二十　盤山縣城(雙臺子)

營口支線に沿へる一驛で分岐店溝帮子から七〇支里に位してゐる、始めは廣寧縣に屬してゐたか光緒三二年盤山廳を置き、更に民國二年縣治に改められた。

當地の市街を形成したのは全く鐵道開通以後で城壁もなく、人口約一千を數ふるに過きない縣署、警察所の外小堂一、廟宇二つあり、住民の飲料水は鹽分を含み不良である、當地附邊は所謂鹹地て農作か不良であるから集散物質は少量である。

輸入雜貨はすへて汽車便て營口から運はれるか當地て消費されるものたけてある、鹽、魚類、麥類を附邊から求めてゐる。

第二十一 臺安縣城（八角臺）

遼中縣城の西南八〇支里、遼河の平原中に位し民國二年始めて遼中縣より分離して設置せられた縣城てある、戸數約三〇〇人口約二、〇〇〇縣署、警察所、小學堂あるのみてある。

當地は穀物の地方的小集散地て遼河岸を去る近距離の地にあり、交通は殆んと營口との水運による。

第二十二 遼中縣城（阿司牛象）

遼河の東岸を去る七支里牛莊城の北二〇〇支里に位置する、城池かあり東西南の三門を有し戸數約四〇〇、人口約三千餘人大豆、蜀黍、粟等の穀物か集つて小市場てある、縣署、警察所、兩等小學堂、師範練習所、天主敎堂等かある。

當地の取引はすへて營口との間に行はれ、冬季は車輛により牛莊を經由し夏季は河運によつて直接に交通する、又奉天との間にも木材煙草等の運入かある。

各地への距離を示せは遼陽へ一四〇支里、奉天へ一四〇支里、新民へ一三〇支里等てある。

第二十三　新民（新民屯）

奉天の西三五哩京奉鐵道新民府驛の南端に接續し、附邊は廣茫たる遼河の流砂である、當市は明治三十八年の日清通商條約により開放された都市の一て、その始めは一村落に過きなかつたか次第に市鎭を形成し、乾隆初年巨流河の巡檢を移駐せしめてから新民屯と稱せられ、嘉慶十三年獨立し民國二年縣治に改められた、市街には城廓はなく戸數九千、人口約五萬二千、內日本人か約一二〇八人居る、電信及電話の開通あるか電話は各官衙と陸軍のみの使用となつてゐる、

官衙と學校　新民縣署、警察所、日本總領館分館、陸軍第二七師步兵第五四旅本部、稅捐征收局、師範學堂、高等小學堂一、小學堂四、日本人民留民會、日本赤十字社救療所、日本郵便局。

交通と經濟　陸路は東南大民屯に至る四〇支里、西北彰武縣に至る一一〇支里、東北法庫門に至る一六〇支里、東奉天に至る一二〇支里等て何れも坦々たる大道てある、就中奉天及法庫門街道は交通か繁しい、大車の往來するは奉天、彰武、法庫門、大民屯、馬廠等て大民屯、馬廠（二一五支里）間か盛てある、そして積載貨物は穀物、疋布、雜貨、豆粕、豆油等てある、又京

奉鐵道による運輸は甚た旺盛を極め仕向先は殆んど營口てある、しかし鐵道により販入されるものは甚た少量て大てい夏季民船によるものか多い、當地から營口までは一二七哩、一箇年の輸出高約大豆五萬石、高粱二萬石、其他雜穀七、八萬石、豆粕二萬斤、豆油五〇萬斤てある、河運は即ち遼河て當地の繁榮と最も大なる關係を有するものてある、碼頭は大小數箇所に上るけれとも常に民船の輻輳するは大民屯に近き馬廠碼頭てある、馬廠から營口までは水路八四〇支里夏季水量の大なるときは兎房(一二支里)にて積卸することもある、又東方一五支里、五道河支流の遼河に注く處に門家灣碼頭かある、馬廠に出入する船舶數は二〇〇隻内外てあるか、鐵道開通以前は三千隻に上つたと云ふ、そして船店は新民屯に二戸あり、取扱貨物は大豆、豆粕、陶磁器、雜貨等てある。

新民屯の商業範圍は管内及營口てある、管内は輸入品の分布範圍て營口は輸入品の仕入地たると同時に輸出品の仕向地てある、奉天とは接壤の域にあるか商業的關係は極めて薄く寧ろ北邊の彰武、法庫、鎭安方面と密接な關係を有つてゐる。

商賈の大なるものは燒鍋(二家一箇年の産出額約六〇萬斤)油坊(二八家一箇年産出額豆粕約一七萬斤、豆油約三五萬斤)糧店(油房の兼業)雜貨布疋店大なるもの約一五戸等て尙銀市、柴

市、菜市等は毎日開かれ、糧市は秋季から春季にかけて開市される、集散貨物は大部分穀類で半はは鄭家屯方面から販入され、殆んと營口に輸出せらる、年額四〇萬石以上に上り（水路四割鐵道六割）豆油五百萬斤（内百萬斤は水路による）豆粕百萬斤（殆んと鐵道）等か輸出品の大宗となる、輸入品の大宗は綿絲綿布で雜貨之に次き内蒙古方面に再輸出せらるるものか多い、その外綿花は遼西一帶から集り木材は河運により上流より、そして閙毛に、内蒙古、彰武、哈拉套街等から來る、その量約九萬斤に達すると云ふ。

金融　東三省官銀號、奉天商業銀行、中國銀行、交通銀行等の各支店の外錢館二戶、當舖四戶あり、又大なる商賈は悉く帖子を發行してゐる。

第二十四　大民屯

新民屯の東南四〇支里、馬廠の對岸一半拉臺を距る約二〇支里、新民縣の管内で元小村落に過きなかつたか漸次發達して目下新民屯附邊に於ける最も富有なる都邑となつた。市街は一條の街衢で稅捐局、學堂二、廟宇三六、天主敎堂、耶蘇敎堂各二箇所ある、戶數約三千人口約二萬を數ふ。

當市には每月三日糧市か開かれ、大豆、蜀黍等一箇年集散額約一〇萬石に達する、之等穀物

は遼河開氷の際に於ては馬廠から水路營口に積出され結氷中は新民府を經由するものが多い、輸入は冬季直接馬車により營口と取引され新民府、奉天から來るものは少量の土貨に過ぎない當市には又油坊二〇戸があつて一個年の製造高豆粕一〇萬枚、豆油五〇萬斤と稱してゐる。

當地からの交通路は馬廠へ二〇支里、新民府へ四〇支里、奉天へ九〇支里、牛莊へ三〇〇支里、遼陽へ一四〇支里等である。

第二十五　巨流河城

新民屯を距る東二〇支里、城は清初の建築で周圍二〇町の長方形で三門ある。

當地は則ち所謂遼東、遼西の分岐點で曾つては唐の太宗が高麗を征するに當り二〇〇餘支里の泥濘に布と土を以て作橋したといふ土地である。

奉天街道の要衝で東は四支里にして遼河の渡船場に出て西は約六支里で巨流河驛に達し、北方法庫門街道にある公主屯には三五支里である、今人口約一千巡警分局、馬隊及稅捐分局があり遼河の渡場に於て通行稅を徴してゐる。

第二十六　彰武縣城(横道子)

新民屯の西北一一〇支里坦々たる平野中に位置し、以前は養息木牧場の舊地で小部落に過ぎ

なかつたか光緒二九年設縣以後土城を築いて市街を經營したのである、城は方形で四門を設け街路幅四、五間あり、十字街附邊及南街に商賈か集つてゐる、戸數約四〇〇八口約二、八〇〇、城內の四隅には空地の箇所か多い、縣署警察所、税捐局、駐屯兵營、兩等小學堂、女子小學堂廟宇四、回々寺院一、基督教會一等ある。

交通と經濟　交通路としては新民屯に至る一一〇支里、哈拉套街へ九〇支里、彰武臺門へ四〇支里、新立屯へ一二〇支里、小庫倫へ一八〇支里、賓圖王府へ百支里等てその中新民屯街道か交通盛てある。

集散穀物は高粱を主とし年約四萬石、當地て消費された殘部は新民屯に運はれる。

輸入品もすへて新民屯からて仕入期は春秋の二季を盛とし年額約一〇萬元てあると云ふ。

當市には又牛馬市かあり毎月三回開かれるかその出市數は多くない。

金融は特別な機關なく大商賈か帖子を發行してゐるのみてある。

第二十七　哈拉套街

彰武縣城の西北九〇支里四圍は一帶に平原て東西北の三面に小丘を繞らし市街を夾んで東西二流の小河か南流してゐる、市街の延長約六町一條の大街を商區として四、五の小街か入り交

つてゐる、戶數四〇〇人口約二、五〇〇彰武縣々佐か駐在し、稅捐局、陸軍第二十八師の一連、兩等小學堂、廟宇二、回々寺一、天主敎堂一、基督敎會一、等てある。

交通と經濟　當市は奉天、新民及錦州、義州方面から小庫倫に至る要路に當り縣下第一の市場てある、集散貨物は穀物及畜產て穀物は四周蒙古村落から來集し、年約二萬五千石、當地消費の餘分を新民屯に販出し輸入品は新民屯及新立屯から仕入れる、そして工業製產品たる燒酒約一五萬斤、麥粉約一二萬斤は大半蒙古人に供給される、尙當地には當舖三戶あり帖子を發行してゐる、銅錢一八〇箇か一吊文に交換されてゐる。

今各地への距離を示せは新民屯へ一八〇支里、新立屯へ一二〇支里、小庫倫へ九〇支里等てある。

第二十八　黑山縣城（小黑山）

新民屯の西南一五〇支里錦州から奉天に通する驛路の一都邑てあつたか、光緒二六年縣を設けられたもので市街には城壁かなく人口約六千、縣署、警察所、第二十八師第五十五旅第一一〇團の外小學堂二、天主堂、耶蘇堂等かある。

當地に集散する穀物は附近村落のもののみて多くはなく、輸入品も當地及附近村落に供給す

る雜貨類である、毎月二日定期市場か開かれて小取引か行はれる。

各地への距離を示せは新立屯へ九〇支里、北鎭縣城へ六〇支里、京奉線の一驛なる大虎山には一八支里にして達する。

第二十九　新立屯

黒山の北九〇支里邊墻の一門て蒙古に通ずる一要路てある、從て蒙古貿易は盛大て街衢は小さいか商業は殷賑てある、戸數約一千人口約四、五〇〇、陸軍第二十八師歩兵第五十五旅本部の外税捐局、鴉片官賣局、郵便局、小學堂二、廟宇、回々寺、耶蘇教堂各一ある、當地から內蒙古各地に至る道路は哈爾套街へ一二〇支里、小庫倫へ二〇〇支里、新邱へ七〇支里て集散貨物は穀物、綿花輸入は營口からてある。

市場は毎月三日間開市され蒙古人は畜類を販入して穀類及雜貨を買つて行く、當舖二戸か金融を取扱つてゐる。

第三十　白土廠門

新立屯の西七〇支里丘陵に圍まれた山溝中にある邊門の一て戸數僅に二〇〇餘に過きないか税捐分局、巡警分局、駐在兵等あり、陰暦八月の交には蒙古人の來集して交易に從ふ者か少く

ない普通は毎月三日間市を開く。

輸入貨物は北鎭縣城から販入され、金融等の事項に就いても北鎭縣城とは甚だ密接の關係かある、北鎭へは陸路五〇支里、內蒙古新邱には僅に九〇支里て達することか出來る。

第三十一　北鎭縣城(廣寧)

新民府の西南二四〇支里京奉線溝帮子驛を去る北五〇支里の地にある。

城郭は方形て東北角を缺き、周圍二〇支里、明代の築造て今は敗壞した箇所か多い、城門は東北南に各一門南に大小二門あり小南門を除く外は皆城樓かある。

街路は略ほ十字形て東西南の三街は幅各十間餘ある、東北角には二基の大塔かあり雙塔と稱してゐる、唐代の建築てあるといふ、城の西北角は小丘を形成し娘々廟かあり東方及西方近くにも小丘かあり各宏莊の寺院と共に風景を添ねてゐる。

商店は南北二街に集中し棧房粮房の如きは西門外にあり、城の東南部には菜園か多い、戶數約三千五百八口約二萬に達す、尙城西五支里には隨代の建立に係るといふ有名な北鎭廟かある。

市民は飮料水として井水を用ゐ、城內にある井戶か二五〇を數ふ。

官衙及學校は縣署、警察所、稅捐局、陸軍第二十八師砲兵第二十八團本部兩等小學堂一、初等小學堂二、廟守二〇、天主敎堂一、耶蘇敎堂一あり、兩敎會堂共に五、六百の信徒を有し回敎徒は城の南外に三千も居るといふ。

交通と經濟　當市からの主なる交通路は溝幇子驛へ五〇支里、田庄臺へ一八〇支里、義州へ九〇支里、白土廠邊門へ五〇支里、靑堆子驛へ三五支里、小黑山へ六〇支里等て交通頻繁なのは溝幇子、田庄臺への道路てある。

當地に來集する穀物は大豆、高粱其他雜穀約八萬石て綿花、梨等も亦有名てある、穀物は約五、六萬石の輸出かあり、中大豆の約三萬石は質優良を以て聞ね冬季車運により田庄臺に送られ、翌年開河に至り民船にて營口に積み出すと云ふ。

綿花は年輸出額約五〇萬斤梨約一五〇萬斤、共に奉天以北に送られる。

しかし廣寧には鐵道の連結かなく且つ邊外地方との貿易市場たるには距離遠きに過きる爲に商業範圍はあまり廣くない、唯此の附邊は良好な農耕地てあるので一般の消費力か比較的大てあるから小賣業か稍々盛てある。

輸入貨物の仕入先は大部分營口て綿絲布其他雜貨を販入し、煙草、木材其他は吉林地方から

皮類は小庫倫から石炭は新邱からそれぞれ移入される。

金融機關としては當舖及錢舖八戸あり、通用吊は五吊五を以て一元としてゐる、又帖子ら制錢額面てはなく小銀貨額面てある、尙市内二箇所に毎朝家畜市か開かれ燒鍋一戸、油戸八戸あるけれとも單に地方の需要に應するのみてある。

第三十二　溝幇子

京奉線の一驛て營口支線の分岐點にある、北鎭縣警察分署かあり、人口は三千に垂んとしてゐる、然し當市は單なる交通の要點て經濟的價値はあまり大なるものてはない、唯北鎭、新立屯方面から營口に行く穀物か年約八萬石はかり集つて來る、輸入貨物は北鎭及蒙古内部に向ふ少量のもので他はすへて貨車のまゝ通過してしまふ。

第三十三　義縣城（義州）

錦州の北九〇支里西及北は各六、七十支里を距てゝ山を負ひ東及南は丘陵に圍まれた盆地の中央に位置し、大凌河は西より來り西北二門を過きて東流してゐる、城郭は周圍一二支里、四の城門を備へ西南隅には大塔あり、高さ十三丈東街の路北には大佛寺あり、高さ七丈共に遼代の建設に係ると云ふ、東西南北四街の道幅は約二十間に及ひ其附邊は毎期穀物及皮類の取引市

場となる、就中繁華なのか東街てある、戸數約三千八口約一萬に達し縣署、警察所、稅捐局、兩等小學堂一、官立實習工場及橋梁公所等かある。

交通と經濟　義州地方は山來殷富を以て知られ義州城の如きも繁榮なる市場の一に算へられ其商業範圍は遠く邊外數百里に及んてゐたか錦州から朝陽に至る道路か開通したのと一方邊外蒙古地方の開拓か進渉して來たので各地に地方的小市場か開かれ、仕入商は直接營口から仕入るゝを便とするに至つたので義州の商範圍は漸次邊外各市場に吸收されてしまつた、近來穀物の當地に來集する年額は六七萬石に過きす、毛皮の來集も亦二萬元を超ねない、しかも直接當地に販入されるものは少く多くは當地商人か出張して買付けるもので其買付範圍も小庫倫地方に限られる、又牛馬は此地を經由せすして小庫倫哈爾套街等から直接滿洲各地に送らるゝ樣になつた。

輸出は來集穀物の約三分の二て高粱その半を占め山海關、山東地方に仕向られ輸入雜貨は石山站驛經由營口より滿洲工產物たる煙草、麻、藍靛は吉林から曹達は小庫倫から鹽は錦州からそれぞれ販入される。

金融は錦州との關係か密接て當舖五戸あり帖子を發行してゐる。

今當地からの交通路を示せは先つ石山站驛に至る九〇支里を始め、錦州に至る九〇支里、清河邊門に至る五〇支里、朝陽鎭に至る一四〇支里、劉龍臺に至る六〇支里等てある。

第三十四　清河邊門

義縣城を去る東北五〇支里、大凌河の東支流右岸にあつて市街は清河の左右兩岸に沿ふてゐる、商家はすへて清河の東方街衢中にあり、邊門は北街にある巡警及警備兵の外税捐局、天主敎堂、耶蘇敎堂等かある。

當地の物産は梨、蜀黍、綠豆の類て陰暦八九月の交蒙古人か來りて之を賣り、雜貨を求めて歸る、その雜貨は錦州及義州より來り蒙古よりは叉曹達、羊皮、胡麻等か販入される、當地から新邱まては一一〇支里て達することか出來る。

第三十五　錦縣城(錦州)

奉天の西南一四五哩京奉線に沿ねる一驛て市街の周圍には小丘起伏し、山は東北二〇支里に指金山ある外皆遙に隔つてゐる、そして小凌河は城の西壁から南門外に沿ふて南に流れて行く城は唐代の建造てあると云ひ周圍約一〇支里南北に長く東西に短く西門から北門に至る間か突出してゐる城形船に似てゐる、故に當城は船行城と名付けられる、城に四門あり之を通する東

西南北の大街があり、此の大街が城外に延びて四關となりその中西關は小淩河により河東及河西に分れてゐる、雜閙區は城内の四街と二條胡同、城外では東關に次いで西關である、由來錦州は明の廣寧右衛の地で清朝に入ても關外の重地として遼西の政治的中心地であつた。

官衙と學校　縣署警察所（四關に派出所を置く）陸軍第二十八師司令處（歩兵一旅、騎兵一團）地方審檢廳、省立第二中學、師範傳習所、警務傳習所、高等小學堂二、商業半日學堂、私立女學堂、基督學堂、其他私塾五〇尚ほ廟宇は城の內外を通し二五箇所、基教堂、天主教堂各一箇所ある。

交通と經濟　錦州は由來政治的に發達せる市區であるが南六〇支里に天橋廠の民船港を有し北は義州（九〇支里）朝陽（一八〇支里）及邊外一帶に交通の便を有し且つ京奉線により天津、奉天、營口等の大市場に通ずるので遼西に於ける最大市場たるの位置は確實である、現時穀物の集散額五〇萬石により毛皮類の邊外地方から來る者も五〇萬元を下らない、其主なるものは蜀黍、粟、大豆で約二萬石は天橋廠から輸出せられ他は多く鐵道により營口地方に向つて行く、毛皮類は遠く多倫、宣化府から來る者があり、天津、營口等へ輸出される者年約三〇萬元に及ふと云ふ、輸入は營口よりする者その六割を占め他は天橋廠及秦皇島經由上海及芝罘等を仕入

先としてゐる、之等輸入雜貨にして內蒙古地方へ再輸出せらるる者多く、叉煙草及麻は吉林から木材は海路天橋廠を經て安東から運はれる。

工業として燒鍋二戸油坊六戸あり、豆粕約二〇萬枚を輸出すと云ふ、尙當地は筆の產地として知られ市中に其製造者二〇餘名、漁業公司經營の魚市と燃料市、穀物市等がある。

金融機關は東三省官銀號、中國、交通各行の支店及票莊三戸、大小百餘戸の錢舖があり、當舖も一二戸ある、票莊錢舖當舖等は帖子を發行しその發行高大凡五〇萬吊內外であるといふ。

當地使用の銀錠、錦寶はその一千兩が天津公砝平の一、〇一一兩上海曹平の一、〇六二兩に當り一兩は八吊四百五十文である。

第三十六　天橋廠

錦州から南一九哩なる高橋驛の東南一五支里の海岸にある小邑で、北は筆架山島、南に葫蘆島を以て圍れた錦州澳の西北鯉魚山と稱する小丘の西麓に位置し、人口約一、五〇〇縣佐が駐在してゐる、錦州へは陸路六〇支里、連山灣は南三〇支里にある。

海口は西海口子と稱し、沿岸は遠淺で芝罘、直隸を往來する船は沖合二支里に寧波船は五、六支里の沖に碇泊する、且つ灣內は廣きに過ぎ防風の障屛を缺き十一月から三月まで結氷する

當港も四〇年以前までは遼西の大貿易港として民船の入港するもの七〇〇隻以上に上つたか現今は一年の入港隻數三〇〇に過きない、それも渤海沿岸を航行する四百石積のもので寧波船は極く僅少である、輸出穀物は年約四萬石、輸入貨物は約四〇萬兩に達し、內錦州に送られる者か三分の一その殘りは大てい邊外地方に出て行く。

第三十七　高橋

錦州の南一九支里、京奉線の一驛て、東西に長い小市街である、人口約二千人步兵五十六旅第一一二團か駐在してゐる、當地集散物資は蜀黍、粟、大豆等て主に北方から販入され年約四萬石、內四分の一は海路により芝罘に三分の二は汽車て直隸省に殘りは當地て消費される、輸入は大部分西海口から販入され金融機關として當舖二戶ある。

第三十八　錦西縣城（江家屯）

錦州の西一〇〇支里女兒河に沿ひ楊樹林に圍まれた小市街て東四町餘、東西南北の四門あるか特別に城壁を有つてはゐない、戶數約七〇〇人口約三、〇〇〇縣署、警察所、稅捐局、小學堂三、廟宇四等あり、南方三支里なる鳳凰山には兵隊か駐在してゐる、そして稅局は淸河門の分局てある。

當地の物資は棉花及穀類て何れも附近村落から來集し當地て消費される外は錦州及連山灣に輸出してゐる、輸入品は錦州から來るもの多く又邊外地方から當地を通過して行く者に皮類その他あり毎月三日間市場か開かれる。

工業としては燒鍋あるのみて當舖錢舖三戶あり、大なる商賈三〇餘家と共に帖子を發行してゐる、一吊は三百文てある。

今當地からの交通路を示せは錦州へ一〇〇支里、連山へ六五支里、寧遠州へ八〇支里等てある。

第三十九　連　山

錦西縣に屬する京奉線の一驛て錦州の西南一〇〇支里てある、當地はもと明の時代に關か設けられ朝鮮か入貢する際の往來に當つてゐた、戶數約三〇〇人口約二千、巡警分局、耶蘇教堂等かある。

當地は東三〇支里なる葫蘆島港に至る鐵道の分岐點て(葫蘆島港は交通の部參照)小市街てはあるか比較的商況か盛てある、集散貨物は主として雜穀て附近村落から來て鐵道六分船運四分の割合て直隸及山東方面に運はれる、その額約四萬石に達するといふ。

雜貨ゝ亦鐵路及水路によつて販入され、その比は輸出と略同しく葉煙草は吉林から木材は安東から來る、當地の換算率は大洋一弗か一三吊五百文である。

第四十　興城縣城（寧遠州）

寧遠は一に柳城とも稱し錦州の西南四四哩二二、京奉線の一驛てある。

城郭は正方形て周圍約一四支里、四門を備へ最も繁盛なのか南街と西街て胡同内は住宅と官衙はかりてある、城外はすへて農家のみて市街なく寧遠河其周圍を流れてゐる、戶數二千人口一萬七千餘に達してゐる。

寧遠州の發達は由來政治に歸因してゐる、其地勢は北に首山、窟窿門の關門かあり東は直ちに海に濱し形勢頗る要害て邊防上山海關の前衛として古來著名の地てあつた、今は城內に興城縣署かあり民治及警察を司り、陸軍第二十八師の兵若干あつて鐵道警備に任してゐる、學校は兩等小學堂、初等小學堂各一あり又敎會堂も二箇所あり、一は支那人、一は英人か經營してゐる。

當地の飮料水は井戶及泉水て城の內外に一二〇の井戶かあり甚た優良てある、又城の東南支里許に湯泉寺あり寺內溫泉湧出し、淸澄、無臭て鹽分も含んてはゐない、皮膚病に效驗かある

と云ふてゐる、此外にも二、三箇所温泉の湧出するところかある。

經濟　寧遠はその經濟價値かあまり豐富ではない、東には僅に釣魚臺の海口かあるけれども錦州及山海關の如き大市場との距離か近いので其範圍は甚た狹少てある、從て當地に集散する穀物も大抵四〇支里以内のものはかりて平年六萬石内外來集し豐年には八、九萬石に上ることかある、其内譯は大體に於て蜀黍の約二萬五千石、大豆の一萬五千石、粟の一萬三千石其他雜穀約一萬石と爲すことか出來る、之等穀物は大半鐵道により關內地方に輸出せられ他は陸運及舟便を藉りて各地に販運される、又城の西北一四支里に梨の產地かあり毎年一七萬斤內外を滿洲各地に輸出してゐる、輸入は煙草、麻、棉花、木材、石材等を滿洲から雜貨は南支からするものか多い、その大部分は鐵道により他は舟便による、石油の輸入せらるるもの亦年八千箱に達するといふ、當地は美孚油公司の支店かある、尙當地には毎日馬市か開かれる。

金融機關として錢舖七、當舖二あり船店、雜穀舖の大なる者と共に帖子を發行してゐる。

工業としては油房四戶、燒鍋二戶を擧け得るも產出額は大てはない。

今當地からの交通路を見れは新臺子門へ七〇支里、錦西へ一〇〇支里等て又釣魚臺を海港とする水運は十二月より三月までの結氷期を除き七、八〇石積の民船か出入する。

第四十一　新臺子門

寧遠の北七〇支里興城縣下の一邊門て、塔子溝河か市街の南方を流れてゐる、戸數約三〇〇人口約二、五〇〇警察分署及巡防隊、稅捐局及小學堂等かある。

集散貨物は邊外から來る雜穀を主とし牛羊馬等も家畜もある、そして雜貨の邊外に出て行くのも少くない。

當地ては中後所及江家屯發行の帖子流通し當地の當舖（一戶）も帖子を發行してゐる、又毎月九日間市か開かれる、錦州へ一四〇支里、中後所へ一二〇支里。

第四十二　綏中縣城（中後所）

奉天省最西の縣城て山海關の東一三三支里、京奉線の一驛てある。

此地は元と中後所と云ひ明の宣德年間千戶所を置いたことかあり、清も佐領駐防を設置した縣は光緒三一年の新設に係る者てある、城は周圍五支里許、東西南の三門を有し北門を缺いてゐる、之れは唐末の建設に係ると云ひ今は殆んと破壞されてゐる、城內には殆んと商家なく賑盛な市街は城南なる南何子と稱する一條の街路のみてある、戶數凡そ二〇〇〇人口約一萬、縣署、警察所、稅捐局の外兩等學堂、警務學堂、女子小學堂、初等學堂六、回敎寺一、天主敎堂一、

耶蘇教堂一、廟宇數多あり、城内には興盛、普樂の兩茶園がある。

經濟　集散穀物は蜀黍、粟等があるがその數量は僅少である、從て輸出は振はないが尙雜穀梨、豆粕、豆油等を秦皇島に持つて行く、輸入は比較的多く天津、秦皇島から來る雜貨及石油は鹽と共に建昌(二六〇支里)地方に再輸出せられる。

尙當縣管内には陸稻、梨、木材等を産する、牛馬市も毎月偶數の日を期して開かれ一箇年の收稅高三千元内外であるといふ。

金融機關としては當舗三戸あるのみで、小錢の算法を用ゐ一六箇を百文とし一六〇文を一吊としてゐる。

第四十三　前衞

縣城の西四〇支里京奉線に沿ひ周圍五支里の土城を繞らした市街で人口約二、〇〇〇内商戸二〇餘戸あり附近物質の小集散場である、毎月二の日に市が開かれ梨、木炭、高粱が輸出品中に數へられる、尙驛の西北五〇支里には將軍石山あり明代の古蹟である。

第四十四　中前衞

山海關の東方約四〇支里京奉線に沿ひ周圍三支里餘の古城があり、人口約一、二〇〇、商戸も

五、六戸あるに過ぎず商況不振稍大なる村落たるに過ぎない、中前衛は明の宣徳年間に置かれたので淸代には駐防に改められ、關外の首站として稍著はれてゐたが、土地が狹少で市場たるの資格がない。

第二章　東邊道

第一　安東、付大東溝

北緯四〇度五十二秒、東徑一二四度四十秒、奉天の東南一七〇餘哩、鴨綠江口を遡る一六哩元寶、鎮江の諸嶺を西方に控へ、東鴨綠江に臨むもの之れ安東の位置である、土地低凹平地狹く、市街は東北から西南に展開し北にあるのか舊市街て南北約二〇町、東西凡そ一七町後半面は山坡に入り前面大江に沿ひ、東北端は大沙河を界として西南日本市街と連互してゐる、日本市街は總面積三、二五二、四八九坪、內一、五〇五、九五一坪は鐵道用地、一〇五、七五六坪は道路、二〇一、二七三坪は宅地殘部か農工用地てある、人口（新市街二萬人、舊市街三萬七千人）五萬七千人、戶數（新市街四、六〇〇、舊市街七、二〇〇）一二、四〇〇戶。

安東は元と邊外と稱せられ縣治を置かれたのは前淸同治年間てある、其開發に最大の動力となつたのは日淸、日露の兩役て、ことに日露戰後の我居留地設置は大いに支那側の刺擊となり山東の移民と共に遂に安東港開放を聲明せしむるに至つたのてある（明治三十九年末）。

安東の行政區域は之を日支の二つに大別することか出來る、日本側は居留民取締規則に準し

て七名の行政委員と三名の豫備行政委員を任命し、行政委員會役所を設置し全區を更に十五區に分けて市民の選擧にかゝる三十名の商務委員と共に領事管督の下に安東の行政に當つてゐる、（明治四十年行政委員會役所は安東居留民團と改稱された）、そして其地區は新市街及北は小沙河から南は六道溝に至り東鴨綠江岸から西は山頂分水線に至る一帶てある。

又鐵道附屬地は滿鐵會社の管理するところて市街宅地六六、〇〇〇餘坪ある而居留民團は戶別稅、營業稅釀造稅、雜稅等を以て財政に充て滿鐵はその附屬から戶數割を徵してゐる。舊市街は商務總會と、安東警察廳か其行政を分掌してゐる、警備としては、日本側に於て守備隊、憲兵隊警察署（支那側）、に於ては巡防隊警察廳、憲兵分遣所、水上警察廳鐵路巡警局等かある。（消防は、民國、滿鐵及支那側の三組ある）。

官衙＝支那東邊道尹公署、安東縣署、警察廳、鴨渾兩江水上警察局、安奉鐵路巡警總局、安東關監督署、安東海關、沙河稅捐徵收局、地方審判廳、地方檢察廳、郵便局電報局、漁業漁業保護局、南路巡防步兵第五營、憲兵分遣所、商務總會、緝製驗局、木業保護事務所＝日本日本領事館、領事館警察署、郵便局、居留民團、商業會議所、憲兵分隊、守備隊、官有財產管理會、日本赤十字社安東支部。

教育と宗教＝[日本]安東尋常高等小學校、附設、實業補習學校、附屬實科女學校（以上滿鐵）、安東縣普通學校、幼稚園二、中日懇親學堂（日支合辦）、[支那]道立中學校附設師範傳習所、商業學校（商務總會）、縣立國民學校、公立國民學堂、私立小學堂、縣立女子學堂[外人]、基教文化學堂附設文化女學校。

社寺＝[日本]神社四、東本願寺、西本願寺、臨濟、淨土、日蓮、高野山、金光、天理、基督各教の布教所[支那]廟宇八、基督、天主、兩教會。

慈善救濟＝[日本]日本赤十字社安東支部を主とし基督教婦人會、佛教婦人會等も之を行ひ行路病者には民團て取扱つてゐる、[支那]中國紅十字會安東分會、平民工藝廠濟良所（特種婦女の保護救濟）、積善堂、（天后宮の所管で商務總會之を監理し、商民中犯罪其他の過怠により金品を以て謝罪代償するときは之を積善堂の費用に充て、慈善事業の基金としてゐる）。

衛生＝[日本]安東醫院（滿鐵）、私立醫院三、私立齒科醫院一、安東醫院は地方公費を以て傳染病患者を取扱つてゐる、補助機關として衛生組合かあり町内を八區に分け、春秋二季の清潔法及防疫事務に當り汚物掃除は請負事業となつてゐる、尚火葬場共同墓地は滿鐵、築造て屠獸場は居留民團と商務總會との共同經營になつてゐる、[支那]、安東醫院（商務總會）私立醫院三、の

外警察廳衛生科、清潔會等か道路掃除撒水、汚物掃除を擔當してゐる　共同墓地は商務總會か經營て義塚と云ふてゐる。

水道＝滿鐵の經營て明治四十二年に起工し始めは鐵道附屬地外六溝河中に水源井二個を掘鑿し、電氣ポンプを以て鎮江山上の配水池に揚水し鐵道の給水に供へたものてあつたか大正二年四月水道給水規則を執行してからは廣く居留地內にも給水し又支那街にも之を供給することゝした、現配水池は有效水深一四尺容積三三萬英瓲とし人口約三萬人に給水し得る設備かある、配水管の總延長は一六、六〇〇餘間てある。

年次	社内 栓數	社内 給水量	社外 使用戶數	社外 栓數	社外 給水量	道路撒水其他給水量	給水量合計
大正四年	一五二	一〇二、八五二	七八二	六八	一一五、九三二	三一六	二一九、一〇〇
大正五年	一四一	四〇、二七九	二四四	一七七	一〇九、九五八	—	一五〇、二三七
大正六年	二一七	一四五、四三一	一、〇〇三	一、〇五〇	二一〇、三七五	六五二	三五六、四五八
大正七年	三〇五	一〇九、一九九	一、一六〇	一、二六八	二七八、七一一	四七〇	三八八、三八〇

電氣　滿鐵經營安東電燈會社から買收した、百キロワット三相交流發電機一臺、外瓦斯機關直結發電機二臺あつて、全發電氣能力三〇〇キロワット電線の延長九三四、三五二呎。

年次	電燈需用口數	電燈總個數	發電量 電燈料	發電量 動力料	發電量 計	料金 電燈	料金 動力	料金 其他	料金 計	石炭消費高
大正四年	三,〇三五	一〇,五九三	キロウツト 八四八,八五四	キロウツト 二七九,一九〇	キロウツト 一,一二八,〇四四	円 七九,二五三	円 二九,二七六	円 一五,二二六	円 一二三,七五五	円 一,六九四
大正五年	一,一九九	六,四〇〇	三五九,三四〇	—	三五九,三四〇	五三,〇二五	—	五〇四	五三,五二九	一,六五三
大正六年	三,七二三	一七,〇三三	—	—	一,七一〇,二九〇	一一五,三六五	二九,六六九	一五,七七〇	一六〇,八〇四	三,九九四
大正七年	四,八二二	二一,六二七	七八五,七三一	五四九,八〇二	一,三三五,五三三	一五三,五六一	二七,六五七	—	一八一,二一八	—

公園、公會堂及其他誤樂機關（一、）（イ）元寶山公園（民團）、（ロ）鎮江山公園（滿鐵）、（ハ）停車場前遊園地（滿鐵）、（ニ）安東神社神苑、（ホ）公會堂倶樂部二（滿鐵と市民）、戲場京橋座、南地座、麗華花園、中華茶園、永大茶園、大正六年度末に於ける、各種料理店及藝酌婦數は、

旅館	下宿屋	料理店	飲食店	貸席	計	藝妓雛妓	酌婦	
七	六	八	二九	二一	七一	一三二	八〇	以上日本人
—	二六	—	一五	七	四八	一	一九	以上朝鮮人
七五	—	三五	一六二	一七四	四四六	三二	二四一	以上支那人

舊市街に於けるものも少くはない卽ち五柳巷、艶芳里、新美巷等の公娼は約三〇〇に達し、私娼の散在するものも亦多い、新市街にも亦遊廓地か限定してある。

市場―魚菜市場（民團）、菜市（支那）、魚市場、糧市。

安東と河港、

安東の水路は鴨綠江による內河航路と大連及仁川に向ふ海洋航路との二つに分れる。

內河航路は極めて難路て水深も亦一定しない、且つ難碕急流等かある爲に汽船の航行は出來ないから高瀨舟又は支那船を用ゐてゐる、現在は朝鮮總督府の命令航路たる鴨綠江運輸株式會社の經營する航路かあつて上流帽兒山まて行くものゝ外多數の民船か營業してゐる艚船公議會は之等支那船の管監機關て船店は船問屋てある。

海路は鴨綠江を下航して沿岸諸港に至るもので大阪商船、日本郵船、阿波共同汽船の諸會社及社外船か出入し大連汽船會社は大連安東間の定期航路を開き、安東大孤山間には小蒸汽船の往復するものかある、之等船舶に對する港灣は三道浪頭から小沙河口まてと定められた、三道浪頭は安東の下流約三邦里にある安東の副港て平時は一千噸內外の汽船を容れるか淺瀨及難碕かある爲に吃水深い船は江門外白又は多獅島に投錨する、そし安東との間には艀舟又は戎克小蒸汽を以て聯結してゐる。

年別＼種別	入港船舶 外國貿易 隻數	入港船舶 外國貿易 噸數	入港船舶 沿岸貿易 隻數	入港船舶 沿岸貿易 噸數	出港船舶 外國貿易 隻數	出港船舶 外國貿易 噸數	出港船舶 沿岸貿易 隻數	出港船舶 沿岸貿易 噸數	旅客 入港	旅客 出港
大正四年	一九一	四一、〇三三	五八四	二三〇、七四五	一九一	四一、〇三三	五八四	二三〇、七四五	四五、〇一三	二四、五三八
大正五年	一六三	二六、四三三	六一七	一八九、〇四〇	二三七	二九、五三六	五四三	一六五、九四七	四九、六八五	二九、七二七
大正六年	一〇七	一二、〇六九	六二一	一三六、八三二	一八二	一〇、四三四	六一七	一三七、五一七	五六、四六九	二一、九六三
大正七年	一九一	九、七五八	五四三	一四六、一〇六	二一一	七、五三三	五二三	一四八、五五二	六二、八五一	三一、四九〇
大正八年	三五七	八一、二三五	五五〇	一九〇、一八五	三三〇	七四、〇〇一	五八七	一九七、四一九	六二、一五三	三〇、八四八

右の内旅客は殆んど支那人ばかりである、そして、之等船舶による貿易額は、

	汽船貿易	戎克貿易	合計 輸移入額	合計 輸移出及再輸移出額	合計 計
大正四年	一七、一一一、三三三	一一、九一八、七八四	一六、五〇三、七五八	一二、五二六、三五九	二九、〇三〇、一一七
大正五年	一九、一五六、六八四	一四、七八六、二三〇	二二、〇一九、二三〇	一一、九二三、六八三	三三、九四二、九一四
大正六年	四三、六八七、六八三	―	三〇、五二五、一一九	一三、一六二、五六四	四三、六八七、六八三
大正七年	四一、六三四、八四一	―	二五、二七一、一三一	一六、三六三、七一〇	四一、六三四、八四一
大正八年	六三、三八八、〇八二	―	三六、九四三、九一八	二六、四四四、一六四	六三、三八八、〇八二

而副港たる大東溝ては外國貿易船は殆んどなく沿岸貿易船の入出港を見るのである今旅客及

貿易額を見れば

年次	旅客 入港	旅客 出港	貿易額 輸移入額	貿易額 輸移出及再輸移出額	貿易額 計
大正四年	七四九	六六八	三六、九九六	四一、二九四	七八、[illegible]
大正五年	八六六	四七	[illegible]	二、九八	[illegible]
大正六年	一、〇八七	一、三四一	七七、三五	五五、五三三	八一、二四八
大正七年	六六九	―	一五、三九九	六一、二六六	七六、六六五
大正八年	一、三六九	二五	三九、九八六	三九、二二四	[illegible]

以上輸移出品中の主要物產は木材、大豆、豆粕、穀物、柞蠶等で就中木材は年額二千萬圓に達せんとし大小豆は二五〇萬圓、豆粕は六〇〇萬圓、豆油は九五萬圓、柞蠶糸三二〇萬圓、山蠶は一九〇萬圓に達してゐる、輸入品は綿糸布の二、四〇〇萬圓を主とし毛織物の一七〇萬圓、綿花八〇〇萬圓、穀類米穀の二三〇萬圓、金物五〇萬圓、水產物六〇萬圓等である。

安東と鐵道及陸路貿易

安東は安奉線を以て南滿本線及京奉線に接續し更に鴨綠江鐵橋よりして朝鮮鐵道に連絡してゐる、停車場は新市街の南方にあつて延長一五二五間の護岸、五箇所の荷揚場所、倉庫及野積

保管場を設備して海港貿易との聯絡を取り更に曳船蒸汽船一艘を配置してゐる。

又支那街の東北端なる沙河鎭を安東の副驛として支那商人の貨物輸送及乘降に便してゐる、其他の陸路は鳳凰城街道、九連城街道、大孤山街道、及鐵橋により新義州に至るものとかあるそして新義州との間には人力車營業を爲すものかある。

安東驛及沙河鎭驛乘客貨物及運賃比較表

年度	乘客 乘車人員	乘客 降車人員	貨物 發送	貨物 到着	手小荷物發送	收入 乘車賃	收入 貨車賃	收入 座席料	收入 手小荷物郵便物賃	收入 其他	收入 合計
			噸	噸	斤	円	円	円	円	円	円
大正四年	二六〇、三三	二三三、八二	二四八、九二七	一五〇、三五九七	一六、八六四、四八六	一五九、九一九	四一五、三七一	三、三二七	二六、三九五	一三、七〇二	七一五、七一四
大正五年	一六一、五四六	一四八、三二二	四三六、七四八	六四一、八六三	六、九五二、三五九	一五八、六八〇	七四一、六八九	九七六	七九、〇三二	六一、一〇五	一、二三五、六四六
大正六年	三三三、五三八	二一五、二五七	五〇八、七〇〇	八四四、九四九	九、二三一、三三七	三五七、一五二	九八二、一五八	六、三四九	一五一、三五八	二三八、〇八八	一、八二三、九八七
大正七年	三五三、九九二	三〇八、七四六	六一八、八〇六	九八六、一九八	一七、五七八、五九八	六一三、三六四	一、二五〇、一四四	六、九四九	一五三、四一四	一一七、八七八	二、四〇七、一二四

商業機關―日本商業會議所、商品陳列館、同業組合十九。支那商務總會。

工業―安東に於ける工業の最大なるものは製材業て鴨綠江製材無限公司(資本金五〇萬圓)を筆頭とし動力使用の製材所一六、手挽工場十數個所ある、木材商も亦從て多く四六の會社及商店かあり、一組合を組織して輸出入を取扱つてゐる。

此の外精米所、窯業等も工業中に數ヘ得るが柞蠶製糸業の盛大たるには及はない、その工場は支那二六、日本三あつて支那製糸家は商人としての業務をも營み、日本人のものは單に取扱商人として五商店ある、油房業も亦次第に隆盛に趣き現在すでに一五家あつて製造年三一四萬枚に達してゐる。

通信—當地に於ける通信機關としては關東都督府、通信管理局の所管に屬する、郵便局及東三省郵務管理局の所管なる郵務局がある、この外中國電報局、電話局があつて市內電話（二五〇）の外長距離電話として三道浪頭、馬市臺、鳳凰城大孤山等にも通話することが出來る樣になつてゐる、滿鐵、朝鮮總督府等の長距離電話は日本郵便局て取扱つてゐる。

金融—日本側、日本側朝鮮銀行支店、安東銀行、滿洲商業銀行の三行があり、安東及滿洲商業の二行は共に本店を安東に置き前者は資本金五〇萬圓、拂込一七五、〇〇〇圓、後者は資本金一四〇萬圓拂込額三二五、〇〇〇圓である、今之等三行の取扱にかゝる金融狀況を見れは、

年度	預金			貸付		
	受入	拂出	現在	貸付	戻入	現在
大正四年	八、五九二、七七五	八、二三九、三三三	三六四、三五三	二、八〇三、二七八	二、〇七八、三六八	七二三、六九〇

大正五年	一四,二一五,〇七四	一三,一五九,七一九	一,〇五五,三五五	一三,八八八,五四四	一三,五二八,二九六	一,三六〇,二四八
大正六年	二八,四四七,八三三	二七,三五四,九八〇	一,〇九二,八五二	三九,〇七九,〇七八	三六,〇三三,七〇九	三,〇五六,三六九
大正七年	一九七,八二五,四四四	一九〇,三〇五,六九一	七,五一九,七五三	一二八,二一八,七〇八	一〇七,四九九,二〇三	一〇,七一九,五〇六

質屋の貸附金を見れば、

年別		營業戸數	前年より越 口數	前年より越 金額	本年貸出 口數	本年貸出 金額	本年受戻 口數	本年受戻 金額	本年流 口數	本年流 金額	本年末現在 口數	本年末現在 金額	本年中の利得金
大正四年	日	一	—	—	二四	九七	二四	九七	—	—	—	—	二六
	支	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正五年	日	二	—	—	三五六	五三二	三三〇	三一九	二四	一七〇	三	四三	八七
	支	二	—	—	一,〇九六	一,二九〇	六五九	七七一	—	—	四三七	五一九	三八
大正六年	日	二	三	四三	三七〇	五七八	三三〇	五二六	四五	六六	一七	二八	一〇〇
	支	二	四三七	五一九	二,八八六	三,九五四	二,八〇二	三,六九二	一一四	一四二	四〇七	六三九	六三三
大正七年	日	二	一七	二八	二九三	四六五	二八八	四五〇	一三	二〇	九	二三	—
	支	二	四〇七	六三九	三,一三〇	六,〇九六	二,〇六四	四,七一七	一三九	二三五	一,三三四	一,七八三	—

而郵便局取扱の金融狀況は、

年次	郵便爲替 振替	郵便爲替 拂渡	郵便貯金 預入	郵便貯金 拂戻	郵便貯金 年末現在	郵便振替貯金 拂込	郵便振替貯金 拂渡
大正四年	六七三,三八二	二三三,〇九〇	八三,〇三八	六九,七〇七	七八,二四一	二三四,七二四	一三六,四五二

大正五年	一、〇八九、七七七	三五七、九一六	八一、九九九	七四、四九六	八三、七四六	五二二、六八〇	一、二九六、六〇八
大正六年	一、七五二、三九九	三九七、三五一	一二三、一九五	九四、〇三二	九七、三九九	七九八、九一三	三、二五〇、四三一
大正七年	三、四四三、五六三	七七七、五三一	一〇三、〇四八	一三六、三八七	一三四、六〇〇	一、三〇五、六八八	三、六八一、三一七

支那側中國銀行支店、東三省官銀號分號、安東儲蓄公會、（資本銀一五〇萬元）、票荘、錢荘、押當、銀爐。

第二　鳳城（鳳凰城）

安東驛の西三七哩八に位置する、安奉線の一驛て古來より東邊の要地として重視せられてゐた、そして鳳凰城なる名は實に明朝に始まると云はれてゐる、しかし一獨立行政區劃となつたのは前清の光緒三年てある、縣城は、驛の北三支里にあり、附近は廣濶なる盆地て、南に鳳凰山か突兀として聳ゐてゐる、山頂の一城跡は其昔唐の太宗の兵を駐めたところてあるといふ、城壁は周圍、三四支里て主なる、官衙商賈は皆城外にあり、南街か繁盛區となつてゐる。戸數約一七〇〇人口八八〇〇あり、日本人は約二〇〇名を越してゐる。

官衙と學校―東邊鎮守使署、縣署、縣警察署、税捐局、電報局、巡防營、省立第二師範學校、兩等小學堂、初等小學堂、女學堂、基督教小學堂の外日本側の鐵道守備隊、警察官吏派出所、

郵便局等かある。

經濟―當地は安東、奉天間の要路に當り且つ、大孤山方面への交通路備り光緒初年までは商業か仲々盛てあつたか、安東の盛大となるに及んで次第に衰弱し、現今は商業不振の有樣てある、今安奉線驛に於ける、乗客貨物及收入狀態を見れは、

年次	乗客		貨物		手小荷物發送	收入				
	乗車人員	降車人員	發送	到着		乗車賃	貨車賃	手小荷物郵便物賃	其他	計
大正四年	四七、九二六	四八、〇五四	二七、五九九	一〇、三九一	四四、四六九	三六、五一八	五八、二九八	六〇〇	二、七〇七	九八、一二三
大正五年	五三、二九七	五三、六八七	一八、七二七	八、九六八	四三、四六六	三九、九二三	三三、五三一	七七三	三、一二四	七七、三五一
大正六年	六五、一八四	六七、〇六二	二四、三七五	八、五八二	五一、五二五	五二、一九一	三五、九一一	一、一三三	五、四八〇	九四、六八四
大正七年	一八一、三二五	八三、八八五	三三、六八六	九、五六〇	一三一、五一一	六五、七二三	四五、七五三	一、六四九	二、七五二	一一八、八七五

以上貨物の中輸出品の主たるものは大豆の五千噸を大宗として包米、繭、木材の各一、五〇〇噸、小豆、薪炭等て、輸入品は麥粉(一、三〇〇噸)鹽(九百噸)石油綿織物等てその仕向、仕入先は、安東か大部分てある從來は、懷仁、通化、寬甸等もその商業範圍てあつたか今は漸く六〇支里四方に達しないといふ、工業も、燒鍋、油房等各二、三戸あるに過きない。

金融機關としては益興銀號(資本小洋一〇萬元)て銀票を發行してゐる外當舖一戸ある。

第三　龍王廟

鳳凰城の西南一四〇支里、大洋河口を遡る六〇支里にある都邑て鳳城縣の管下てある、當地の建設は一〇〇餘年前てあると云ひ、大洋河も以前は、一六〇石位の民船を上航させたか今は、滿潮時に辛して百石位までの船を入るゝに過きない、普通出入する船は四、五〇石の撥船て猶上流の沙里寨まて二、三〇石の撥船か上航する、之等民船は、主として芝罘と往返し、貿易年額四〇萬元位のものてある、市街は南北二支里、東西一支里程て人口約九〇〇〇に達してゐる。

第四　本溪縣城（本溪湖）

安奉線に沿ひる、大驛て、有名なる炭礦の所在地てある、奉天驛には五七哩にて達し、安東を距つる西一二三哩七に位して火連賽河と本溪湖河とか太子河に入る會點に市街か連續してゐる、由來當地は賽馬集地方から奉天、遼陽に赴くものゝ經過する路上にある小部落に過きなかつたか光緒三十二年縣衙門の設立後漸次市街を形成し、安奉線の改築工事と、本溪湖煤鐵公司の設立と共に俄に殷賑を來したのた、市街は四面山を繞らし、東端に本溪湖驛を控へて、東西に延長してゐる、鐵道附屬地面積は一七萬坪に達し、內宅地貸付一二、〇〇〇餘坪、道路は巾三間乃至十間延長一、〇〇〇餘間に及んてゐる。

火連賽河か市中を流れ、右岸には煤鐵公司の外多く紅窰業者て河西街と云ひ、商業區は左岸にあつて河東街と云ふ、人口は支那人約五千人日本人四千人、合計一二、〇〇〇に垂んとし、しかも尙增加の傾向かあるけれとも谷地て土地か狹隘てあるから市區の劃張には甚た困難を感してゐるといふ、

水道は火葬場、墓地と共に滿鐵の經營て大正七年度に於て需要戶數六二八に達し水量は三一九五、九一立方米を示してゐる、そして電燈は煤鐵公司か經營してゐる。

官衙と學校―、本溪縣署、鐵路巡警分局、營簡易師範學堂、兩等小學堂(以上支那)、警務支署、郵便局、滿鐵地方事務所小學校、日語學堂。

交通と經濟―、交通の主たるものは安奉線て他はすへて之に附隨した形てあるか唯市の西南端なる龍王廟は太子河に沿ゐる埠頭て、下流は遼陽、上流は堿廠まて小舟を通してゐる、しかし、吃水深い民船は增水時てなけれは、遼陽から上航しては來ない、此小船か堿廠に至るには早さも十日を要し、遼陽に下航するは順流に從ひは一日て達することか出來るといふ、しかし逆風なとに會ふときは、遡航は仲々困難て、目的地到達の豫定日を定むることか出來ない、本溪湖からの下航貨物は、穀物、薪炭、石炭等て上流から來るのは主に穀類てある、それから安

本驛から、太子河、牛心臺を通ずる九哩三、及炭坑に通ずる支線五哩餘の輕便鐵道がある、この鐵路を溪城鐵路公司と稱し、當地と城廠間一八〇支里を聯結せんとするもので日支合辦である、現在は殆んど石炭の運搬に使用せられ乘客も勞働者ばかりである、陸路の主たるものは、城廠に至る一八〇支里、賽馬集に至る二四〇支里、遼陽に至る一二〇支里、平頂山に至る二五〇支里等で城廠賽馬集に至るものが比較的交通が頻繁である。

次に主要交通路たる、安奉線本溪湖驛に就ては、その經濟狀況と共に書き並へることが當地の商業的價値をも物語るものであるから、左に統計表を掲げて見る。

年次	乘客		降客		手小荷物發送	收入				
						乘車賃	貨車賃	手小荷物郵便物賃	其他	合計
大正四年	六四、〇〇四	六二、五八三	二四八、三三七	九六、四八七	八三、〇九六	四四、六三一	六六五、五九三	一、三六八	三七、五〇二	七四八、九九一
大正五年	七一、三八〇	六九、七九七	二四九、三三一	一四一、九九九	八七、二七四	五一、一六七	七二九、〇四五	一、四六九	四四、八三五	八二六、五一五
大正六年	九七、九七三	九四、九一五	三三九、一九四	一三四、九二八	七九、八三三	七四、四七三	七一一、六一九	二、三八六	四五、五五六	八三五、九五五
大正七年	一三六、八七三	一三五、六九六	三八六、一二八	一三三、八四八	二九三	九八、〇三二	七七六、三一七	四、〇九四	五九、一七三	九三七、六〇四

右の内發送貨物の大宗は、鐵、石炭で、鐵は五萬噸を越え、石炭も三萬噸を越してある、次はやはり大豆で六千噸、木材薪炭の各四千噸豆粕の二千噸等を數ふることが出來、到著貨物は

木材、煉瓦、セメント等の建築用貨物を主とし、麥、鹽、砂糖、等約二一、〇〇〇噸に達してゐる。

以上の貨物は、奉天七分、遼陽三分の割合で、遼陽へは水陸兩運に依つて運はれてゐる、又當地の特產として土器かあり、城廠からは葉煙草等か一萬餘斤移入される。

工業としては、油房、磨坊の外窯業を營む支那人か六戶ある。

東三省官銀號、及安東銀行支店か主たる金融機關を爲し、日本人の質屋か一五軒あつて少額の金融に當つてゐる、その大正七年度貸出金額か一一〇、五四七圓を示してゐる。

今日本郵便局取扱の、金融狀況を見れは次の如くてある。

年度	爲替 振出	爲替 拂渡	郵便貯金 預入	郵便貯金 拂戻	郵便貯金 年末現在	振替貯金 拂込	振替貯金 拂渡
大正四年	二九、三二一円	六九、七三九	四八、三〇四円	四一、三〇三円	三六、二六八円	一八七、六〇三円	一六六、四〇〇円
大正五年	三三、七八〇	三二、一六六	六五、七七九	四三、五〇四	四九、五二五	三三五、八六九	二五〇、六二五
大正六年	二九、二三八	九六、七四四	九八、三二五	七三、九〇〇	六二、八七一	三二四、九〇五	四二、四六八
大正七年	三六四、五三〇	一一八、四一九	一三二、九一七	八五、七三三	八四、六九〇	三〇〇、六九九	七六、三二五

第五　賽馬集

本溪縣に屬し、安奉線の一驛草河口を北に去る九〇支里、舖石河か八道河に會流する地點に

ある、山間蕭索の一小市街である。街衢は東西數町の唯一街、北部に古城跡が見える、戸數約一二〇、人口約一、三〇〇餘。

巡警局(縣佐駐在す)鑛務稅局、小學堂がある。

當地から靉陽邊門に至る大道は一二〇支里で寛甸にまで達してゐる、この外草河口を經て遼陽に至る、三〇〇支里、鳳凰城へは東南一八〇支里である、しかし一帶に山地であるから交通は不便である。

當地の主要物產は山繭で一箇年約一〇萬餘箇に達し、すべて安東縣に販出され、穀類は數ふるに足らない、輸入品は、安東から馬車運によるものと、草河口まで汽車で來て、運ばれるものがある、又本溪湖から陸路馬車運によるものは麥粉及石油である。

由來當地は、製鐵及炭山あるを以て知られてゐたが今は製鐵業は全く衰微し、炭鑛のみは東北一〇支里なる平頂山があつて出炭額年六〇〇萬斤に及ぶと云ふ、薪炭も亦四方の山林から採取される。

第六　城廠

本溪縣下で本溪湖の東一四〇支里、太子河の右岸に位置し、賽馬集には南九〇支里で達する

ことか出來る、市街は北方に山を脊ひ西端太子河に瀕し、東南に平野を控へ東西二支里、南北半支里、前街後街に分れてゐる、戸數約四五〇、人口約一、八〇〇。巡警分局、稅捐局、高等小學堂旗人學堂等かある。

當地は陸路（懷仁に至る二三〇支里の道路か最も良好てある）の外太子河の水運を有つてゐる、而輸出貨物は燒酒を主とし、大豆、人參獸皮等かあるか少額てある、そして輸入は安東、遼陽、を主としてゐる、その年額約一五萬元てあるといふ、遼陽との間は主に水運か媒介となつてゐる、又流筏も當地及下流から遼陽に至るものか少くない、それは概ね松角材てある。

當地の商業範圍は制合に廣く、東は六〇支里なる四平街（懷仁縣下）東北は九〇支里の平頂山北は五〇支里の葦子峪に及ひ之等の地方から集散する煙草、麻、蘑菇、藥材等は、太子河によりて下流に運はれ、冬季の四箇月は安東を主なる取引先としてゐる。

第七　撫順、附撫順縣城

當市はもと千金寨と稱し、日露戰役當時までは戸數僅に五、六戸の小部落に過きなかつたか炭坑の採屈と共に爾來長足の發達を來したのてある、南滿線、撫順支線は、此地を以て終點驛とし、分岐點なる蘇家屯驛から三九哩九分て達することか出來る、市街は、南に千金寨の高地

を負ひ、北に運河を繞らし、西南は古城子の村落と連絡してゐる、之を新、舊の二區に分ち舊市街は、附屬地てはないか炭坑の開採と共に來往するもの多く、自然に形成したもので、道幅のせまい、支那式の街衢てある、そして新市街とは、鐵道附屬地の事て舊市街とは濠を界として東に連つてゐる、その市街計畫面積は、宅地一三三、九六二坪、道路八二、四七八坪、溝渠六六〇二坪、公園一六、九二八坪、堤防五八九坪、て、道幅は二〇間から三間に至るまて、悉く雨水溝を設け、人道は煉瓦を敷き、車道は「マカダム式」を採用し、その延長一、〇五八七間てある、下水は、新舊市街共に之を計畫し、外濠を掘つて、之に放流せしめてゐる、元來當地は炭坑地てあるので、市街の如きも、殆んど住宅地はかりて、電氣、瓦斯、水道等、皆、炭坑の經營に成つてゐる、先つ田園都市の體裁を備ひて甚た閑雅、清潔てある、そして商區は舊市街て、あるか、唯日用雜貨を賣るに過きない、現在新市街は約四分の三をうつめてはゐるか西方一帶はまた市街を形成してゐない、以上の外、各炭坑附邊に、多數の住宅か建設されてゐるから、人口統計は炭坑用地全部のものてある。

年次	戸數			人口		
	日本人	支那人	合計	日本人	支那人	合計

大正四年	一、八五五	四六五	二、三三二	六、九一〇	一五、六一七	三三、三三七
大正五年	二、一八三	五一五	二、六九八	八、二〇三	一六、九三一	二五、一三四
大正六年	二、四五三	五三一	二、九八二	八、九九三	一八、二一三	二七、二〇五
大正七年	三、九二〇	七五〇	三、六七〇	一〇、九八〇	二四、四三七	三五、三九七

官衙と學校—、縣公署、郵政局、電報局(以上支那)、警務署支署、郵便局、兵營、小學校公學堂、簡易圖書館、實業補習學校、實科女學校　幼兒運動場(日本)。

交通と經濟—、市内には電氣鐵道かある、之れは、炭坑用てはあるが、普通乗客も運搬する、

今撫順支線の終驛に於ける運輸成績表を擧ぐれは。

年度	乗客 乗車人員	乗客 降車人員	貨物 發送	貨物 到著	手小荷物發送	收入 乗車賃	收入 貨車賃	收入 座席料	收入 手小荷物郵便物賃	收入 其他	收入 合計
大正四年	九一、八〇三	八八、三六八	三、一三九、三一七	二二〇、四八三	七六、五八六	八一、三六五	三、六一九、七七六	—	一、九一九	六九、三五三	三、七七二、四〇九
大正五年	一一〇、四六五	一〇三、九九五	三、二二八、四五六	二〇九、三三九	八三、〇四四	一〇三、三一七	三、六六四、八六六	—	三、〇〇八	六五、五八七	三、八三五、七七八
大正六年	一四九、四四八	一五六、一四一	三、四四七、四四六	二〇七、四七四	一七、四八八	一四四、三六五	三、九三〇、〇八九	—	三、七〇七	四一、八六六	四、一一七、九二九
大正七年	二〇九、九五六	二三八、五五八	三、六九九、三三七	二七二、一七三	八、三八三	二一六、九三四	六、〇四一、五四〇	—	五三三	九八、〇五三	六、六三五、七四七

以上發送貨物中、中ははは石炭なること勿論てあるか、その他ては大豆の三七、〇〇〇噸を大宗として豆粕、高粱等も加つてゐる、之等は縣内から集つて來るものて、汽車便の外、馬車て

奉天に運ふものもあるといふ、輸入品は、諸種建築材料を主とし、米麥、麥粉等の食料品及雜貨て、皆當市て消費されるものはかりてある、輸入雜貨て奉天から馬車運によるものは今は甚た少くなつた。

附撫順城、は撫順市街と渾河を距てゝ五支里のところにある、南方を除く三面は山に包まれ城は原と鐵陽關と云ひ唐代高麗征討のとき建造したのたといふ、城の背後にある古塔は當時の遺物てある、そして城内の大街と南門外とは商家かあつて稍々繁盛てある。

戶數四〇〇、人口約二、〇〇〇、現在は知事か新市街の側に移轉して行つたので益々さひれて來たか、小學堂二、女學堂、一簡易師範學堂、八旗學堂等かある。

第八　寬甸縣城

安東縣の東北二〇〇支里。鴨綠江右岸なる長甸河口を去る北九五支里に位置し北、西に山を背ひ、南東に廣濶なる平野を控ねてる、城は明代の舊城てあるといひ、開墾を許されたのは前清の同治年間、縣治を布かれたのは光緒初年てある、今城樓は甚しく廢頹し、城内の南北に通する一街を除けは商賈は殆んとない、戶數約四二〇、人口約二二、〇〇。

官公衙、縣署、警察署、稅捐局、師範傳習所、小學堂、廟宇三。

經濟―、當地の物產は、各種農產物及山繭てあるか、その集散する範圍か非常に狹いので出廻高も多くはない、幸ふしてその地の需要を充たすに過ぎないといふ、輸入貨物はすへて安東より鴨綠江の便船により長甸河口を經てやつて來る、從てその交通も、殆んどこの一路と直接安東に至るものとの二路に限られたるかの感かある。

質屋二戶か當市の金融機關である。

第九　長甸河口

當地は鴨綠江に臨める、寬甸縣地方貿易の呑吐港て、對岸に朝鮮の昌城を控ねてゐる、人口約二、〇〇〇、西北十支里はかりに往時の土城跡かある、長甸城といふのか之れである、當地と安東との間には、民船の航行かあつて、大豆、玉蜀黍、山繭、豆油等を積み、布類雜貨を運んて來る、その額は一箇年約八、九〇萬吊に過ぎないと云ふ。

又當地には監鹽釐分局、官膏專賣局等かあつて鹽稅の收納と鴉片の密賣とを取締つてゐる。

第十　恒仁縣城(懷仁)

渾江の左岸、約六、七里に亘る平地にあり、舊名を六道河と名付ける、安東からは陸路四四〇支里てある、當地の開放は光緖二年に始まるけれども、それ以前から山東人かひそかに採木の

爲に往來してゐたものだ、城池は八角形で、商家は皆東門外にある、戸數約九〇〇、人口約五千人、在住朝鮮人の數も少くはない。

交通と經濟―陸路は安東、通化(一九〇支里)、輯安(一六〇支里)に通ずる大道があるが就中、頻繁なのは、冬季安東に至る道路である、叉水路は、渾河によつて鴨綠江に通じてゐるので、直接安東との取引がある、しかし、渾河河口から約一〇〇支里にある、沙尖子の方が出入船がはるかに多い、沙尖子は年約二〇〇隻の民船が入るが恒仁には僅か二〇隻位に過ぎない、從つて、管内の輸出物は大てい沙尖子に集つてしまひ、恒仁はあつからない、恒仁から砂尖子までは、水路一〇〇支里ある、當地の輸出品は、煙草燒酒、元蘑、大豆、等で、その年額は約三萬兩であるといふ、(沙尖子輸出約八、九萬兩)、そして輸入品は殆んど安東品で、年約七萬兩(沙尖子輸入約十萬兩)、である、輸出品は大部分安東に運はれるのであるが藍、藥材類の少量は、興京奉天等にも販出されてゐる、尙興京には西二八〇支里で達することが出來る。

第十一　輯安縣城(通溝)

安東の上流約六〇〇支里鴨綠江岸にある都邑で東西北に山を繞らし對岸に朝鮮の機山鎭を控へてゐる、當地は往時、高麗の舊都である、今の城はその遺跡である、城の東方には東聖王及奴

太王の墳墓と碑とかあり、北方の古城は、東聖王の遺跡であるといふ、市街は東西に長方形を爲し、人口は僅に五〇〇に充たない、縣署の置かれたのは前清光緒二十七年である。

交通と經濟—、管內は山地であるから陸路交通は困難である、主なる道路は東北帽兒山に至るもの西南外岔溝門に至るもの及通化に至るものとあるか何れも山道である、しかし水路は、安東まて下航僅に三日て達することか出來る、遡航は二十日以上を要するといふ、物產は、大豆、蜀黍等を主たる農產物とし煙草麻等も少くない、木材も、管內から集つては來るか、渾江上流の樣な工合には多くない、農產物も、輸出としては極少量て、唯人參(約二萬餘斤)か奉天を經て營口に行くのと、煙草の販出かあるのみてある、輸入物は安東縣から外岔溝を經て販入されるのか大部分てある。

第十二　外岔溝門(岔溝門)

通溝の下流一〇〇支里、にあり、西北に山を脊ひ、南に鴨綠江を控ひ、對岸は朝鮮の楚山城てある、戶數約二五〇、人口約一、二〇〇、輯安縣の通商口てあるのみならす、通化、懷仁等に通する要路てある、故に夏季の如きは筏や民船か輻輳し、豆粕、穀類等を積載して下航し雜貨麥粉砂糖、鹽等を運んて來る、又朝鮮との貿易も行はれ、彼地からは獸皮、鹿茸を輸入し雜貨

胡麻等を輸出してゐる、巡警局、稅捐局、中江稅局等の官衙かあり、中江稅局は朝鮮の輸入品に課稅してゐる。

第十三　興京縣城（新賓堡）

奉天の東三〇〇支里、渾河の上流蘇子河岸にある戶數約二、〇〇〇人口二萬（內日本人十餘人）の都邑である、市街は蘇子河によりて二分され、商賈はすへて河南にある、そして市街の南方及西北は山獄である、當地は淸祖發祥の地として名高く、肇祖より太祖に至るまで此處に城居してゐたか今は微々たる小城邑に過きない、併し淸朝は歷代之を重視し、曾つては副都統を常駐せしめてゐた、縣署の外警察署、稅捐局、小學堂四、電報局を數ふ得るに過きないのか今の狀態である。

交通と經濟―、當地と交通上最も密接なる關係を有するのは奉天である、しかし此間には山岳重疊して大車の通過を許さないか、冬季は河道を通過することか出來る、又通化に通するものも道路は良好てはない、この間か二二〇支里、その外撫順、安東等に至るものかあるか、あまり重要視さるへきものてはない。

當地の最大興業は木材業である、當地か奧地の市場としてやゝ認められるのは、主として

の爲てある、採材地は、皆當地から一五〇支里位の距離にある哈密河の流域て木材は白松かその大部分を占めてゐる、木材商は當地に十數家あつて、大むね筏とし奉天に販出される、その年額約一五萬布、穀物の集散は、大豆の七萬石を最大として高粱、包米等年額約一二、三萬位て山茶、煙草、蘑菇等も集つて來る、之等は奉天に運はれのか大部分てあるか、千金寨、安東にも出て行くものかある、輸入品は、綿絲布、マッチ、砂糖、石油、その他雜貨て、奉天を主とし、少量を安東から販入する、その額は年約一四、五萬兩のものてあるといふ。

第十四　永陵街

興京の西四〇支里、渾河に沿ゐる、興京縣下の一都市て、東方八支里に、清朝始祖の墓地あるを以て有名てある、此の墓地を興京老城と名付ける、市街は、西方に山を控ひ南に渾河を有つてゐる、戸數五〇〇、人口三、〇〇〇、副都統衙門、協領衙門、縣署、總管衙門、關防衙門、中學校、初等高等小學堂、女學校、基督敎會、日曜學校等かある。

交通と經濟―、當地は奉天通化間の大道に當り又南方恒仁に至る分岐點てある、又當地から撫順に至る道路は通行の馬車か甚た多い、此里數一八〇支里、奉天に至るものはすへて、此の道路による、輸出入經路も亦從て、奉天を主とし、輸出品は材木五〇萬布、葉煙草四萬斤麻干

梱等で輸入は石油食鹽その他雜貨である、唯燒酒五萬斤は、興京及懷仁から販入される。

第十五　通化縣城（頭道溝）

懷仁の北一八〇支里、渾江に沿ふる市街で正方形の城壁があるが周圍僅に十二三町に過ぎない、商舗は主に東門外及南門外にあり就中東門外は繁盛である、戶數約四千、人口約三萬と稱してゐる、（内日本人十餘名あり）、（日露戰役當時、花田中佐の義軍の根據地であつた）。

官衙と學校―、縣署、警察所、巡防隊、稅捐局、水上警察署、硝鑛局、電報局、郵便局、高等小學堂、女學堂、廟宇七、耶蘇敎堂、天主敎堂。

交通と經濟―、大車の交通する主たる地點は、興京奉天方面及、安東縣方面である但し安東縣方面は冬季結氷中に限られ恒にまでは河道により（一八〇支里）、懷仁沙尖子間は陸路により沙尖子からは再び河道を進むのである、夏季通化から水路渾江を下れは八五〇支里で鴨綠江に達するが出水期でなければ船を通することが出來ない、尙陸路興京までは二二〇支里である、之等の交通路によつて輸出される貨物は、葉煙草、豆餅、綿麻、豆油、蘑菇等で年約二〇萬元に達してゐるが當地附近は山岳多く地味も亦良好ではないから穀物の輸出は殆んどない、奉天に行く大豆の如きも年僅に一萬石位のものであるといふ、豆粕は大ていい安東に販出される、併

し、木材の販出は多額に上り、鴨綠江採材公司の分局もあつて年約三千筏に達するといふ、(從來安東に集散せる木材の三分の二は、當地方の產出にかゝるといふ)、輸入品は綿布、雜貨て、安東六分、奉天四分の割合てある、そして當地の當業範圍と認むへきものは、本縣下の外渾河上流地方卽ち臨江縣全地域に跨つてゐる、(帽兒山まて三〇〇支里)、それは、採木苦力に供給する貨物か多い爲てあるといふ、從て輸入價格か比較的多額に上つてゐる、商家の數大小二〇〇餘家、燒鍋二、油房二〇、燃料は多く石炭を用ゐてゐる。

第十六　臨江縣城(帽兒山)

北に帽兒山を背ひ南に大江を控ねる一小市街て、對岸は朝鮮の中江鎭てある、光緖末年始めて縣署を置かれ、戶數六〇、人口五〇〇に充たない、縣署、警察所、巡防隊、電報局、郵便局等かあり縣署はもとの高麗城跡てあるといふ。

經濟と交通――、鴨綠江の水利ある外、長白府に至る山道、通化に通する大路等かある、又八道江を經て吉林省の濛江に通するものかあるか夏季は交通不可能てある、そして輸入雜貨は通化商人により安東より販入され、大江は增水時てなければ、直接安東には通しない、朝鮮からは、米、粟、等を輸入してゐる、輸出品は、皮類、木材、藥品、等てあるかその數量は勿論多

くはない。

第十七　長白縣城(長白府)

鴨綠江の上流に臨み、長白山を負ひ、地はすこふる形勝であるが戸數僅に、一〇〇、その半は朝鮮人である、縣署、警察署、税捐局巡防隊があり、輸入品はすへて帽兒山から來るが極めて少額である、のみならず附邊は山岳重疊の有樣たから車輛の交通は全くない、但し帽兒山との間の電線は出來てゐる、物質も甚た少く住民の食料にも不足する狀態である。

第十八　安圖縣城(娘々庫)

長白山の北、花松江の上流にあり、縣署は置かれたかまた市街の體裁を備へてゐない、郵便局がある。

第十九　撫松縣城

帽兒山の北方二一〇支里、長白山の裏面に當り、縣署の外郵便局がある。

第二十　柳河縣城(柳樹河子)

通河の北二二〇支里、曾っては通化縣の管下であつたのたが光緒末年獨立して當地に縣署を設けられた、戶數約二〇〇、人口約一、〇〇〇。

當地は、松花江の上流地方に屬し、木材、藥草を産出し鐵嶺又は奉天に輸出してゐるか多額ではない、そして大豆、蜀黍、小麥等は、山城子に運はれて行く、その額も僅に、一萬石てあるといふ、輸入品は、それよりも、少く、概ね山城子から運はれるに過ぎない。

今當地から各地に至る距離を示して置かう。

山城子は七〇支里、海龍へ一一〇支里、新兵堡へ二八〇支里、鐵嶺へ五〇〇支里。

第二十一　海龍縣城

開原の東三八〇支里、北面に小岳を負ひ、南面は廣濶なる平野を控ひ、輝發江の上流たる御河は南を流れてゐる、當地は由來盛京五府の一として重要視せられたか、光緒元年までは、清國皇室の御獵區として、伏莽の域に屬してゐた、そして市街としての發達は全く光緒二十六年の總管衙門の設置に始つてゐる、城は約三町四方の小なるものてあるか城内の街路は溝渠を通し柳樹を植ゑて外觀甚た整つてゐる、商業區は全く城外に限られ、東門外（東關）南門外（南關）は繁盛の區となつてゐる、東門外は長さ約七、八町、東大街と稱する一條街てある戸數、一八〇〇、人口七、五〇〇、（日本人二五人住す）、縣署、警察署、日本領事館分館税捐局の外、中學校、小學堂、兩等小學堂、女學校、道敎學校等かある。

交通と經濟：、最も頻繁なる交通路は、山城子に至る一一〇支里と朝陽鎮に至る三五支里とで山城子からは開原に大道が通してゐる、その外、東豐縣に至る六〇支里も、相當に交通があり主に旅客の開原と當地間を往復するものである。

當市の商業範圍は比較的小さく、直接商關係を有するは四周三、四〇支里に過ぎない、その他はすべて朝陽鎮北山城子の商業範圍に屬してゐる、そして輸出貨物は、大豆の三萬石を大宗とし、豆粕、蘇子、苞子等で主に開原に販出され、鐵嶺に行くものは僅少である、その他、葉煙草、藍靛等も開原に出て行く、そして輸入品は、殆んど營口よりし開原驛を經て販入される故に、開原と當地とは商業上密接の關係を有してゐる、又西安東豐方面からは石炭、木材が入つて來るが少額である、蓋し當市は商範圍が狹少であるから、商情は一般に振はない糧棧の如きも規模が小で寧ろ第二流以下にある、稍大なる商店は、油房と雜貨店で油房は一三戸、一箇年の製油高二五萬斤、豆粕五六萬枚に達し開原及その他の地方に供給してゐる。

又當市の南關には牛馬市東關には糧市、及柴市が開かれる、そして金融機關として當舖二戸あつて重なる商家一二戸と共に帖子を發行してゐる、その流通高附邊村落とも三萬元に達し極めて順調に流通してゐるといふ、通貨は主として帖子である。

第二十二　朝陽鎮

海龍の東北三五支里、光緒二年の開市に係り、奉天省の東北隅に位し、北は、東虎嶺一帶の山を以て吉林省に隣し、西南は、柳河を挾んで海龍一帶の大平原に臨む北山城子と併稱せられる海龍縣下の二大鎮の一である。市街は城壁の設けなく、道路に沿ふて東西に長く、東北は一面に娘々山の山脈を負ひ、南方はるかに輝發河が流れてゐる。家屋宏莊にして商業は甚だ盛大である、戸數約二、〇〇〇人口約一三、〇〇〇(日本人二〇人)巡警分局、税捐局、初等小學堂の外、英人牧師の設立に係る普通中學堂及女學堂と醫院とがある。

交通と經濟　東方一六〇支里にして官街に通じ、通化には南方二〇〇支里、北方七〇支里には磨盤山がある、しかし、海龍城街道の頻繁なるに如かないのは勿論である。當地の商範圍は、四周五、六〇支里内であるが東部寬街地方から濛江一帶の地方に亙つて産出する山貨の集散が少くない、卽ち木材、人參、鹿角、蘑菇、木耳、煙草、麻、藥材等である。しかし輸出貨物としての主なるものは、勿論農産物で、大豆の一〇萬石を大宗とし、山貨、雜穀、豆粕等之に次で輸出先は開原と鐵嶺とである、その他木材及石炭を吉林方面に雜貨を官街黑石頭に輸出してゐる。輸入品は、依然開原鐵嶺を主とし奉天から直接雜貨が運ばれる。

又當地には毎日、糧市、牛馬市が開かれ、油房と磨房とが工業として數ふることが出來る、金融機關は當舖一戸と二〇餘家の帖子發行商家あるのみで金融は平調である。

第二十三　北山城子（山城子）

海龍縣下の一大市鎭で海龍城の南一一〇支里にある。市街は、光緒六年の開設に係り、長さ三〇町位の一條街で北に丘陵を負ひ南は樺樹河に沿ふてゐる戸數約三、〇〇〇、人口約二萬八千に達してゐる、日本人は約四〇餘人住在し當舖又は賣藥を業としてゐる、巡警分局、稅捐局、巡防隊初等小學堂の外鐵嶺日本領事館出張所がある、唯此地、水質頗る惡しく鐵分を帶びてゐるので飲料水は遠く數支里の外から運搬して其の用に供する不便がある。

交通と經濟、當地を中心とする主なる道路六條ある、一は直ちに開原に至る二八〇支里、二は、掏鹿に至る二〇〇支里（商家臺經由）、三は、大荒溝に至る一六〇支里、四は、北方大肚川に至る八〇支里、五は海龍城朝陽鎭方面に通するもの六は、南方柳河に至る七〇支里之れである、就中、開原、鐵嶺、柳河、大肚川、海龍城に通する道路は此地との關係が最も深く、冬季貨物集散期に於ける車馬の往復頗る頻繁である、以上交通の要路に當る當地の商範圍は、柳河、海龍東豐、西安、西豐の各管下に及び輸出入は、開原と鐵嶺が仕向入先となつてゐる。

當地に於ける、集散貨物の主なるものは穀類て、布疋、雜貨の輸入散布せらるゝ外山貨中麻、葉煙草、藍靛等較や多額に集散せられる、そして輸出は、大豆の一二萬石を大宗とし高粱、豆粕(五萬枚)豆油(一二萬斤)小麥(一五、〇〇〇石)、等て輸入は、麥粉(七、〇〇〇袋)マッチ(五〇〇箱)砂糖(七〇〇袋)石油(二、〇〇〇箱)、布疋等てその銷售區域は割合に廣大て柳河、海龍、輝南から東豐、西安の一帶にまて及んてゐる。

又鄭家屯、法庫門等とも、直接の取引か行はれてゐる。

當地に於ける製造業としては油房を數ふることか出來る總計戶數大小共三四家豆粕二五萬斤、豆油八五萬斤か年產の概額てある。

金融機關としては、東三省官銀號分號と、奉天興業銀行とあり一戶の當舖と九戶の帖子發行商家とかある、通貨は、奉票か主となつてゐて帖子は今は流通してゐないそうた。

第二十四　輝南縣城(謝安店)

朝陽鎭の東南四五支里、輝發河の南にある、小邑である宣統元年の創設に係るものたからまた市街の體裁を備へてはゐない、縣署及警察署かある。(日本人五人あり)

第二十五　岫巖縣城

鳳凰城の西一八〇支里、大洋河に臨んてゐる市街て城壁は乾隆初年の建築てあるといふ規模は極めて狭少て城内は官衙と少數の小賈あるのみて、市街は城外にある、その長さ南北五町、東西二丁餘て商區は南北兩街てあるか店頭の顧客を見ることか稀てある、戸數約一、五〇〇、人口約九、〇〇〇餘人てある、縣署稅捐局の外、兩等小學堂、初等小學堂、師範傳習所、習藝所等かある。

交通と經濟―、岫巖からは、大孤山、大石橋、海城及鳳凰城に至る四條の道路かある、大孤山街道は一四〇支里、大石橋街道は營口に通するもので二〇〇支里、海城へは一八〇支里て大東は、大孤山、莊河、海城營口等に來往し秋冬の兩期には、安東、大孤山に來往するものか多い當地の取引は大孤山を主とし其他の各地とも商關係を有してはゐるか貨物分布の區域は四周六、七〇支里の間に限られてゐる、來集貨物は、大豆高粱その他雜穀を主とし、その他にも柞蠶、豆粕、等かあるか、柞蠶は當地に入らすして大部分繭のまゝ大孤山又は安東に運はれ生絲は、蓋平に穀類豆粕、等は七分は大孤山に出て行く　しかしその輸出額は僅少てある、又輸入品は營口、海城及安東大孤山より販入され、線麻、蘇菇、葉煙草は鳳凰城から來る
金融は二戸の當舖にて取扱ひ尙錢票を發行する商店か三〇餘家ある。

第二十六　莊河縣城

東莊河に沿ひ建設せられた市街て大孤山一四〇支里莊河河口を遡る三支里に位置してゐる、此地は、二〇〇餘年前の設置に係るものたか獨立したのは、光緒三二年てある、戸數四〇〇人口約三、五〇〇餘人、市街商舗は河岸にあり官衙は小丘の上にある、規模はあまり大てはないか周圍には城壁かある、縣署、警察所、東路歩第三營左哨、漁業總局、中學校、兩等小學堂、初等女學堂、圖書館、基督敎會、城廟巡行文庫等かある。

交通と經濟―、莊河の交通の第一は水運てある、元と船舶は東莊河を進航して市街に沿ゐる河岸に於て積卸をしたか後土砂の流下に會つて、十數年以前から三支里の下流なる裝塢を碇繫地とした、唯十一月下旬から三月上旬までの結氷期間は大拉腰口といふ莊河を去る十八支里なる不凍港に碇繫してゐる、當港には戎克の外、小汽船も通つて來るか、それは主に乘客及山繭運搬に用ゐられてゐる、貨物運搬の戎克は南方海上約三〇支里なる石城島を根據地としてゐるその隻數約五〇〇隻乘組人約一、五〇〇人あるといふ、陸上交通は、岫巖に至る一八〇支里、大孤山に至る一四〇支里を主なる道路とするか何れも交通か頻繁てなく、貔子窩に至る一八〇支里の如きは、往來か頻る閑散てある、莊河に於ける、集散貨物は、附近產出の穀類と山繭とて、

山東地方に輸出して其返り荷として綿布、麥粉、雜貨等を仕入れて來る、遼陽、營口、方面との取引商品は燒酒(輸入)鹽、鹽魚(輸出)の類に止り餘り重要ではない、莊河に於ける一箇年の輸出入總價格は約八千萬元であるといふ。

第二十七　青堆子

大孤山の西七〇支里、沙河河口を遡る二〇支里の左岸に位置してゐる、莊河縣下の商港である市街は丘陵に亙つて作られ不規則であるが商景仲々に活氣がある、戸數約四〇〇、人口約三、五〇〇を有し稅捐局、巡警局、高等小學堂、女學堂等がある。

交通と經濟―、當地に於ける船舶碇繋地は、普通三四尺、滿潮時には一丈の水深を有し、二〇〇石積の戎克は何時にても航行することを得、滿潮時には芝罘行四百石積のものも其往來に困難を感じない、唯、河幅が狹少であるので干潮時には、二隻を同時に上下せしむることが出來ない不便がある、一箇年の入港船舶は百隻以上に達し、又秋季には山繭運送の爲に青堆子を去る十五支里なる石塊まで汽船の來航することがある、每年四箇月間は結氷する、

陸上の交通は主に蚰巖(一四〇支里)と大孤山で燒酒、大豆、山繭を輸入し鹽魚と鹽とを運搬して行くが少量である、大豆、食鹽五萬石山繭四千籠等を輸出する、仕向先は芝罘を主とし輸

入品も亦同樣である、輸入貨物は石油、麥粉、砂糖雜貨である。

金融に就いては特別の機關がなく、商舖二五戸が帖子を發行し、發行商は三萬元位のもので通貨は殆んどこれである。

第二十八　大孤山

安東の西一八五支里、黄河に瀕し、大洋河の三角洲に建設せられた莊河縣下の商港で、後には大孤山、小孤山の二峯を負ふてゐる、戸數約二、五〇〇、人口約二萬、市街は概して宏壯である、大孤山縣佐公署、巡防隊、右路巡防第三營中哨巡警局、兩等小學堂等がある。

交通と經濟―、水運は太洋河の流砂によつて、數年前までは山東通ひの民船も直ちに市街の南端まで進航し得たものが現在は荷役船の外入港することが出來ない始末である、唯二百石積内外のもののに限り時に大潮を利用して漸く進むことが出來るがそれ以上のものは沖合四〇支里の遠きに碇泊して海上にて貨物の積卸をしなければならぬ、明治四〇年當地の商務會は經費十一萬餘吊を投じて長さ五支里の突堤を市街の東南端から船著場に至る干潟の上に築造して輕便鐵道を敷設（延長四支里半復線）、乘客及貨物の往復運搬に使用してゐる、戎克の航行する地方は山東を第一とし穀物雜貨を運搬し、上海通ひの大戎克は布類豆油、豆粕を運送してゐるそ

の他近海を航して穀物、薪炭等を輸送するものがある。

大東溝安東縣の發達以前は、大孤山は木材市場として有名であつたのみならず、此地方に於ける唯一の貨物呑吐港であつたが今日では、陸上方面に於ても、大孤山と商關係を有する地方く甚だ縮少し岫巖を除く外は、馬車の往來寥々たるものである、唯安東との陸路は商人の往來がやゝ盛である。

輸出總額年約五〇萬兩、輸入總額年約八〇萬兩に達するといふことである

當地に於ける汽船貿易は甚だ微々たるものであるが安東との間には石油發動機船が一艘定期航行をしてゐる。

金融機關として中國銀行支店があり、大なる商舖はすべて帖子を發行してゐる。

尙線香製造工場があつて年に四五、〇〇〇封(一封は一把、一把は五一根)を産出してゐる。

第二十九　復縣城(復州)

南滿本線の一驛瓦房店の西北六〇支里、市街は約十町四方の城壁があり、四條の大街が城門に向つて通してある、城外の東南隅に古塔があり(永豐塔)唐代の建築に係ると謂ふ、城壁は乾隆三一年の建設である、戸數二、〇〇〇、人口約一一、〇〇〇、縣署、警察所、東路巡防歩第一營前

哨、稅捐局、漁業鎖售場分局、地方審判廳、同檢察廳、圖書館、師範學堂、中學堂、高等小學堂、女子高等小學堂、初等普濟學堂、清眞國民初等學堂、城裡高等小學堂、初等小學堂五、福音堂等かある。

交通と經濟―、復州は地勢か一方に偏在し、且つ見るに足るへき產物もないので交通も亦盛ではない、以前は、此地の埠頭たる娘々廟(五〇支里)との間に貨物の往來か頻繁てあつたか鐵道開通以來は瓦房店との往來か稍盛になつて來た、貿易關係は大連と營口て石油の如きは殆んと營口から販入される、その他の綿絲布雜貨は、大連と營口と折半する形てある、しかし、その供給地は附近村落に限られるのてその年額は多くはない、輸出貨物は、穀物と豆油、豆粕、山繭て、瓦房店驛と娘々廟との兩地へ運はれ、大連と營口へ出て行く、この額も少いことは中すまでもない、得利寺(七〇支里)普蘭店(九〇支里)松樹(一二〇支里)等への道路もあるか重要なものではない。

金融機關は當鋪一戶あるのみであるか商人は大てい帖子を發行してゐる。

第三十　娘々宮

復州の西南五〇支里、復州半島と長興島との間に狹まれる一小島內にあり、干潮時には、馬

車を驅つて海峽を渡ることが出來る、そして西方の長興島との間は距離數町水深くして戎克の碇泊場に適してゐる、現在は鐵道未開通時代の如き繁榮は見られず、戸數も僅に三〇餘に過ぎない、巡警局、稅捐分局、巡防營等がある

當地にあつて運漕に從事する戎克船は約百餘隻あり芝罘に至るものは、百石乃至二〇〇石積のものが多く、天津に至るものは五百石乃至八百石のものが航行してゐる、之等船舶は雜貨を運び來り穀類を運搬して行くのだが、又附近に鹽と石炭とが産するので之を載積する爲に寄港するのも少くない、但し當港は陰曆十一月頃結氷し四箇月解けない、支那當局は近年盛に娘々廟貿易を奬勵し、特に免稅を行つて當港の發啓に腐心してゐる。

第三十一　瓦房店

大連驛を去る六七哩、復縣下の一驛である、東西に山を負ひ瓦房店河に面した新市街で滿鐵會社經營の附屬地市街と、之に連なれる支那街とある、附屬地の面積は、七四萬坪で貸付宅地二萬八千餘坪、明治四十一年に經營に著手し、線路の東西に亙つて市區を計畫し、東部を住宅町とし西部を商業街と定めた、道路は道幅六間乃至一二間、總延長二、二〇〇間に達してゐる、人口殆んど六、〇〇〇に上り、支那街も五〇〇を算する人口を有してゐる、滿鐵會社は又鐵道給

水の傍ら一般に水道給水を始め排水設備を爲し驛前五、〇〇〇坪の地を公園に作りその他墓地、火葬場、葬祭場等をも設備した、會社か此市街經營の爲に費した額は大正七年度までに二二三六〇八九圓に達してゐる、電燈は、瓦房店電燈株式會社にて經營してゐる(資本金五萬圓、二分の一拂込)、(發電機七五キロワット一臺)。

官衙と學校――、警務支署郵便局、守備隊、尋常高等小學校、公學堂、滿鐵地方事務所、醫院(以上日本)、巡警分局、稅捐分局、郵政局鹽務局(以上支那)。

交通と經濟――、當地は、附邊に炸子窰炭坑を控へ且つ復州城との交通の衝に當る結果、南滿驛に於ける、乘客及貨物か次第に多きを加へて來た、卽ち、

年次	乘客		貨物		手小荷物	收入					
	乘車人員	降車人員	發送	到著	物發送	乘車賃	貨車賃	座席料	手小荷物郵便物賃	其他	合計
大正四年	四五、四六八	四五、六七二	一九、八四四	五四、二四九	五二、七五〇	三九、四八五	六六、四三三	三三	一、一一八	七、五三二	一二四、五七九
大正五年	六三、三三八	六三、一七二	二三、八三四	四七、六五五	五五、三〇六	四九、四九三	八三、四五九	一四	一、二八七	八、七八九	一四三、〇四二
大正六年	六七、〇六四	六四、三八七	三三、八二七	六四、八三三	四九、八七九	六三、三〇八	五五、八六五	四〇	一、五二九	七、七六三	一三八、五〇五
大正七年	七六、五五四	七四、三五八	二四、四五一	七八、六六七	五五、六九四	七四、一六三	四二、五四八	一四	一、九七三	九、七六一	一三八、四九九

以上の中發送貨物の大宗は、豆粕の九、六〇〇噸で包米(三、四〇〇)石炭及コークス(三、〇〇〇

〇)豆油、(一、〇〇〇)野菜、果物(七六〇噸)等之に次き、到著貨物は大豆の三千噸を大宗とし
て麥粉、支那酒、木材等之に次いてゐる。

當地は又油房業か比較的盛て、大なるもの三戸ありその年生産高か豆油一百萬斤豆粕二二萬枚に達してゐる。

金融機關としては、東華銀行支店遼東銀行支店かあり質屋日本人三、支那人一四戸あり大正七年度の貸出金か二七、〇〇〇圓に達してゐる。

日本郵便局取扱にかゝる金融状況を參考の爲に掲くれは。

年次	郵便爲替		郵便貯金			郵便振替貯金	
	振出	拂渡	預入	拂戻	年末現在	拂込	拂渡
大正四年	八三、六八八	六五、九九三	六四、八四六	五三、三六八	四五、六六八	一四九、一〇四	二九、〇五四
大正五年	八七、六七六	一〇〇、八七二	六六、九六八	五七、三四四	五一、九五一	一四八、〇七三	四七、〇六三
大正六年	八七、九二三	六四、一五五	八七、一三九	六三、二七八	五五、八七六	一六六、二九七	三七、六五五
大正七年	一二六、七一五	七三、八六三	八八、四四三	五七、三一九	七〇、七九三	二二九、三四〇	五三、七六三

第三章　關東州管內（奉天省東邊道金縣）

第一　大連市

北緯三八度五五分四一秒、東經一二一度三五分五五秒、關東州大連灣の南岸に位し、北は海上六哩を隔てゝ柳樹屯と相對し、東九哩にして北三山、南山の兩島か灣口にあつて黃海との咽喉を扼し、東北は太沽山半島遠く海中に突出して大連灣を抱いてゐる、市街の面積約一方里半東西二邦里、南北二十七町、脊後に南山々脈を負ふて大洋の潮風をさへきつてゐる。

沿　革

大連灣の良港たることは英艦の測量により夙に知られてゐたか一八五九年（咸豐九年）英佛聯合軍か太沽を攻擊したとき先つ大連を占領して根據地とし支那政府も亦對岸柳樹屯に多少の邊防を施したことかある、其後一八八八年（光緖一四年）露人の足跡か始めて大連に印さるゝまでは何人も顧るものかなかつたのである、當時大連一帶を青泥窪と稱へ、東青泥窪、西青泥窪及黑咀子の三部落から成り、東青泥窪は農家僅に一七戸、現大連市の東南部を占め東公園附邊の楊柳樹、常盤公園の松樹林に其名殘りを留め、西青泥窪は西青泥窪河を挾める農林て西公園に

其面影を殘し、黒咀子は今の共同波止場に沿ふた漁戸十餘の小部落であつた。

然るに一八九九年三月露國は「パウロウ」條約により關東州の租借權及南滿鐵道の敷設權を得たので翌月直ちに踏査に著手し「ヴクトリヤベリ」を卜して商港建設に著手し、先つ第一期工事として一八九九年から一九〇二年に至る四年間に一千噸の汽船二五隻を繫泊させ得る埠頭及其附屬設備を完成し、同時に東西青泥窪外五四箇の部落五萬四千餘畝を買收して新市街を創設し之を「ダルニー」と命名した、又馬蘭河溪谷に起伏せる丘陵以東約百平方餘支里の地をも市の管轄區域に編入した。

之か統治官としては最初ダルニー市警察署長かあつたか一九〇二年五月の勅令により特別市制とし市長サワロフの下に市參事會　港務局、警察署、消防隊の諸機關を置くことになつた、そして市の管轄區は之を市街區、老虎灘區及沙河口區の三とし市街區は更にヨーロッパ市街、支那市街、行政市街に分けた、現在の西公園以東かヨーロッパ市街て以西は卽ち支那市街、行政區は今の露西亞町てある、ヨーロッパ市街は尙之を現在の山縣通及ひ西通りを界として商業區、市民區に分ち縉紳邸宅區は之を現在の土佐町及朝日町以東の軍用地區に定めた、道路は放射線形マヤダム式に構造し車道の兩側に石造の側溝を設け下水管によりて流去せしめることに

した、今之か建築費を見れは築港費一千八〇萬留、建市費二二〇萬留、合計一、三〇〇萬の豫算てあつたか事實は遙に之を超加して約三千萬留を消費したといふことてある。

行政

明治三七年五月二六日南山の占領を聞いて大連在住の露人は鐵道、發電所、電信、電話の大部分を破壞して旅順に逃入したので奧第三軍司令官は直ちに員を派してその整理に努め、七月少將伊知地幸助を臨時整理委員長に任命した、時に大連は殆んと無政府の狀態て唯僅に公議會あり、その下に稽查局かあつて警察事務を司つてゐた、稽查局は元と露國警察の補助機關てあつたか三六年に公議會に屬したものてある、日本軍政委員は之等機關を助けて秩序の回復を計り先つ稽查局を憲兵長の直屬に歸せしめ公議會を監督して軍政を布き、明治三八年二月に至つてダルニーを大連と改稱し、同年六月關東州民政署大連支署を置いて民政長官の支配の下に露國の設計を踏襲して市街の構成に努め、九月からは邦人の自由渡航を開始した。

明治三八年十月關東總督府官制出て翌年關東都督と改められ大連民政署の管轄に歸した、爾來官制に數次の改正を經、遂に現時の官制を見るに至つたのてある、而明治四〇年二月には衞生組合規則を發布し汚物の掃除及ひ清潔方法、消毒方法其他傳染病豫防救治に關する方法を施

行し衛生組合を設けてその機關とし民政署長の指定した區域内の居住者は當然の組合員とし、經費は組合自身之を負擔することゝした、民政署長は都督府事務官を以て之に充て都督の指揮監督を受けて法律命令を施行し部内の行政事務を處理するものである、今その權限を示せは左の如くである。

第二十六條　民政署長は部内の行政事務に付き其職權又は特別の委任により管内一般又は其一部に民政署令を發し、之に五〇圓以内の罰金若は科料又は拘留の罰則を付することを得。

第二十七條　民政署長は管内の靜謐を維持する爲兵力を要するときは之を都督に具狀すへし但し非常急變の場合に際しては直ちにその附近の守備隊長に出兵を要求することを得。

第二十八條　民政署長は所部の官吏を監督し判任官の進退を都督に具狀す。

第二十九條　民政署長は署中處理の細則を設くることを得。

第三十條　民政署長事故あるときは上席の官吏其職權を代理す。

　民政署長は部下の官吏をして其事務の一部を臨時代理せしむることを得。

民政署の分課は總務課、警務課の二とあり、總務課は

(一)地方事務に關する事項(二)殖產に關する事項(三)法務に關する事項(四)租稅其他諸收入に關する

事項(五)會計に關する事項(六)統計報告に關する事項及水道電氣瓦斯に關する事項(七)他の主管に屬せざる事項

等を司り庶務、會計、用度、稅務、官有財產、法務、水道等の諸係之を分掌し警務課は。(一)警察に關する事項(二)衛生に關する事項

を握掌し高等警察、警務、保安、司法、衛生、執行、地方に置いてある。

又民政署長は都督の任可を經て警務課をして總務課に屬する事務の一部を分掌せしむること を得るものとした、尙巡查の補助として支那巡捕の採用を規定し巡捕長を置いて日本巡查の監督を補助させてゐる。

但し大連民政署の管轄は大連市のみてはなく沙河口、欒家屯、小平島、革鎭堡、南關嶺、大房身、柳樹屯の諸地方をも含んてゐる。

一方市民側に於ては衛生組合の組織を發端として自治思想は次第に發達し、尋いて町內會なるもの起り一轉して聯合町內會を生し會長を推擧して市民を代表せしむるに至つたが、遂に大正四年九月八日府令第二六號を以て大連及旅順市規則の發表を見、十月一日から實施せられた卽ち。

第一條　大連及旅順に市を設置し教育衞生及ひ其他に關し特に指定したる事務を掌らしむ。
第二條　市內に住所を有するものは市の費用を分任するの義務を有す。
第三條　市は必要なる規定を設くることを得。
第四條　市に市會を置く。
第五條　市會議員の定數は大連三〇名旅順一六名とす。
第六條　市會議員は當分のうち民政署長其半數を撰任し、他の半數は選任せられたる議員之を撰擧し民政署長の任可を受くへし。
第七條　市會議員は名擧職とし其任期を二年とす、但し補缺に係るものは其前任者の殘任期間在任す。
第八條　市會は市に關する事件を議決す、其概目左の如し。
一　規程を設け又は改廢すること。
二　歲出入豫算を定むること。
三　決算報告を認定すること。
四　財產及ひ營造物の管理方法を定むること。

五　市費其他使用料手數料の賦課徴收に關すること。

六　歳出入豫算を以て定むるものを除く外新に義務の負擔を爲し又は權利の放棄を爲すこと。

第九條　市會の權限に屬する事件の一部は其議決により市長をして之を專決處分せしめ若は議員の互撰を以て常任委員を設け之を委任することを得。

第十條　市會は市長を以て其議長となす、市長事故あるときは其代理者議長の職權を行ふ。

第十一條　市會の召集及開閉は市長之を掌る、市會は議員定數の半數以上出席するに非れは開議を開くことを得す。

第十二條　市に市長を置く。

市長の任期は四年とす。

市長は市會の推撰せる候補者三名中に就き關東都督之を撰任す。

市長は市を代表し市の事務を擔任す。

第十三條　市會の議決其權限を越え法令若は議事規則に違反し、其他公益を害し又は市の收支に關し不適當なりと認むるときは市長は民政署長の指揮により理由を示して之を再議に附し

仍改めさるときは其議決を取消すことを得。市會か成立せさるとき會議を開くこと能はさるとき議決すへき事件を議決せさるとき又は前項の場合に於て市會の議決を取消したるとき、市長は民政署長の指揮により其議決すへき事件を處理すへし。

第十四條　市に助役及書記若干名を置き市長之を任免す、但し助役の任免に就ては民政署長の任可を受くへし。

助役は市長を補助し市長事故あるときは之を代理す。

第十五條　市は處務便宜の爲、區を劃し區委員を置くことを得。

第十六條　市費其他の徵收及支拂に關しては別段の規定を設くるものゝ外關東州地方費の例による、市費其他の徵收金に關する事項に就いては五圓以下の科料を科する規定を設くることを得。

前項により特に費用の支出を要するものあるときは總て市の負擔とす。

第十八條　左に掲くる事件は民政署長の許可を受くへし。

一　規程を設け又は改廢すること。

二　數人には市内の一部に對し特に市費の負擔を爲さしめ若は不均一の賦課を爲すこと

三　財産及營造物の管理方法に關すること。

四　歲出入豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し、又は權利の放棄を爲すこと。

民政署長の許可を要する事件に就いては民政署長は更正して許可を與ふることを得。

第十九條　民政署長は市の歲出入豫算を不適當と認むるときは追加又は更正を命ずることを得。

第二十條　市會議員其職務を怠り又は體面を汚損するの行爲ありと認むるときは民政署長は之を解任することを得。

第二十一條　民政署長は市吏員に對し懲戒を行ふことを得、其懲戒處分は譴責二十五圓以下の過怠金及解職とす、但し市長に對する懲戒は關東都督之を行ふ。

そして衞生組合規則は大連、旅順には施行しないことゝし該組合の事務及權利義務は各當該市に於て之を承繼せしむることゝした、且つ市の區域を定め寺兒溝、小崗子、伏見臺を其中に含めた。

又大連及旅順に於て掌理すへき事務の範圍は當分のうち別段の規定なき限り左の如く定め

た。

一　公衆衛生に關すること。

二　小學校及公學堂の普通事務に關すること。

三　教育に關すること。

市の財政は一、作業より生する收入二、學校授業料三、賦課金等を主たる財源とし、賦課金は一戸を構ふる自然人及法人に課し資力に應し等級を付するものである。

市內警察か民政署警務課に於て掌理されることは前記した、警察官吏派出所は市內に一九個所、水上派出所一個所、小崗子に三個所を設置し北大山通派出所に於ては戎克埠頭の水上警察をも管掌し、水上警察派出所は埠頭一圓の陸上警察をも取扱つてゐる。

消防機關としては民政署所屬の大連消防組、滿鐵消防隊、沙河口消防隊、埠頭消防隊、小崗子公議會消防隊等あり、大連消防隊、滿鐵消防隊及沙河口消防隊は各蒸氣ポンプを備へてある。

市街概況

大連市の土地はポーツマス條約により殆んと日本の官有地となり、唯一部は滿鐵會社に對す

る政府の出資として同社に引渡し又其一部は非常の場合に備ふる爲軍用地區として存置し此餘の土地は官衙及公共用建物敷地或は將來缺くへからさる市諸般の施設の爲要すへき工地を豫想して之を保留し他は店舗地區、住宅地區及支那人地區に區劃し一般に貸付けてゐる、今大連市街地の土地を細別すれは、

一 既成地區	六七八、四〇八坪	一 般貸付地	五〇二、六四二坪
官公共用地	一七五、七八四坪		
二 未成地區	六四、三一五坪	三 公園地	三七一、一三二
四 軍用地區	一八六、五八六	五 滿鐵用地	六九八、〇四六
六 道路敷	四四六、七四八	七 私有地	二二、六六七
計			二、四七五、三三七
未成工場地區	三七七、五〇〇	未成市街地	三二九、六四二
總計			三、一六四、四七九

市街は市の中央に大廣場を設け十箇の大街を劃出し、蜘蛛巢線形の中小街を重出してゐる、

又東西南北の要衝に圓形の廣場を設け、各廣場は幹線路によつて聯結されてゐる、之等道路の築造は明治四〇年より四五年まで一、四〇一、五〇〇圓の豫算を以て始められ、車道七八尺八寸歩道三四尺全幅員一一二尺八寸のものを特別一等道路とし、車道五〇尺歩道三四尺、全幅員八四尺のものを一等道路と定め、車道は厚さ一尺乃至六寸のマカダム式舗礫道、歩道はコンクリート方塊を敷詰め、車歩道の境排水溝に沿ひアカシヤ、白楊等の並木を植ゑてある、その中露西亞町は滿鐵の附屬地てあつたので、すへて滿鐵にて之か築造を行ひ、マカダム式車道に石造の側溝を設け側溝の雨水は直ちに下水管に流下するの設備を爲し、路面にはコールタールを撒布した、又明治四三年には貨物停車場から北大山通海岸を經て西崗子支那街に通する支那馬車専用道路を築造し、更に途中から分岐して市場裏通り道路を新設した、その延長五、五四〇間、工費九三、六〇〇餘圓てある、尙民政署は寺兒溝工業區より薩摩町及東廣場から電氣作業所に通する道路を支那馬車の命令道路とした、此の道路は監部通りを經て美濃町から市場裏の道路に連續し西崗子に至るものてある。その後も人口の增加と商業の發展とに追されて逐年道路の改築及新造を見、大正七年度末に於ては次の如き數字を見出すことか出來る。

幅四間以下　九里三五町二一間

幅六間以下	三里一一町四二間
幅八間以下	一里二四町二五間
幅十間以下	四里一一町四六間
幅十一間以上	八里〇三町三三間
合計	二七里一四町四七間
坪數	四四六、七四八坪

以上の外市外道路として小崗子から臭水屯を經て金州に至るもの、伏見臺から沙河口を經て旅順に至るもの及ひ南老虎灘に至る二道卽ち一は西公園町から直通するもの、二は朝日町から山間を迂回する等かある。

大連市戸口統計

年度	戸數			人口				
	日本人	支那人	計	日本人	支那人	男	女	計
大正四年	八、七八一	六、二四〇	一五、〇二一	三四、六〇二	四二、四六六	五五、〇九五	二一、九七三	七七、〇六八
大正五年	九、〇九七	六、七八三	一五、八八〇	三六、四一五	四六、五七〇	五九、一一九	二三、八六六	八二、九八五

大正六年	九,五七五	七,六九七	一七,二七二	二八,五三六	五,七六三	六四,一九一	三六,一九九	九一,三九一
大正七年	九,九〇〇	七,八九〇	一七,七九〇	四一,七四二	五三,四〇一	六九,〇九〇	二八,〇五三	九七,一四三

明治三九年末の統計に於ては實に人口二萬に滿たなかつたのである。

市內交通機關表（電車は電氣事業の部）

年次	人力車			自働車			乘用馬車			荷車		
	自家用	營業用	計	自家用	營業用	計	自家用	營業用	計	牛馬用	手挽車	計
大正四年	一四	八三三	八四七	—	—	—	一六	一九六	二一二	一,五八八	八二一	二,四〇九
大正五年	七七	八三六	九一三	—	—	—	二九	一八八	二一七	一,五五九	一,〇〇四	二,五六三
大正六年	八三	九〇四	九八七	—	—	—	一五	二五〇	二六五	一,五七三	一,五四八	三,一二一
大正七年	一四八	九一〇	一,〇五八	四五	二八	七三	三二	一九九	二三一	一,七〇二	一,八三七	三,五三九

官公署

大連市役所、大連民政署、海務局、通信管理局、關東廳土木課出張所、陸軍運輸部大連支部陸軍關東倉庫大連支庫、陸軍經理部出張所、憲兵分隊、英國領事館、米國領事館、大連海關。

教育

尋常小學校五校、高等小學校一校、高等女學校一校、實科高等女學校一校、中學校一校、商業學校一校、工業學校一校、幼稚園二、公學堂一。

滿鐵圖書館、埠頭圖書館、簡易圖書館四。

滿洲日日新聞、遼東新聞、泰東日報(漢字)、經濟日報、大連新聞、月刊雜誌十三。

宗　教

大連神社、西本願寺別院、大谷派本願寺別院、曹洞宗常安寺、淨土宗明照寺、日蓮宗大連教會、高野山大師教會、琴平宮、日本基督教會、大連基督教會、聖公會、救世軍大連少隊、福音堂(外人)以上の外金光教、大社教、御岳教、黑住教、天理教、宮地岳教、稻荷教及神理教等の各神教あり支那人には天后宮一を擧け得るのみである。信徒數神道四、三〇〇餘人、佛教約三萬人、キリスト教約一千人。

衞　生

病院　滿鐵大連醫院、大連婦人醫院、大連療病院、慈惠病院、宏濟堂附屬病院、其他私立醫院二五、齒科醫院一〇、眼科醫院一。

大連に於ては明治四〇年三月衞生組合規則に基き大連衞生組合を組織し市街(西崗子を含ま

す）を三三區とし區毎に衛生委員を選擧し、組合の費用は建坪割とし家屋の構造及所在地區によつて之を九級に區分した、現在に於ては衛生組合の事業は大連市役所に於て執行してゐる、そのうち衛生警察は民政署の管理に屬し、大正六年三月清潔法の發布があつてから毎年春秋の二季に之を勵行し廁の位置構造等に關しても各々規定する所があり尚清潔維持上特に必要と認めた事項は適宜之を指示命令することゝした。理髮營業者取締規則及賣肉取締規則は共に明治三九年關東州民政署令を以て發布され、特に賣肉は當該官の檢査を受け其檢印がなければ販賣するを得すと定めた、その外生河豚の食料に供するを禁し、違反者は拘留又は科料に處せられる。

塵芥は民政署長指定の下に各戸又は數戸共同して塵芥箱を設備せしめ、義務者は自ら燒却爐を設けて燒却させることにしたが、當地の塵芥には煉瓦の如き不燐燒物が多量に含んであるので先年の如きも市衛生組合が老虎灘街道に燒却爐を建設して之が燒却を試みたが失敗に終つた、故に現在に於ては市衛生局で西濱町滿鐵埋立地に棄て、又は點火して自然燒却に任せてゐる。

屎尿も市衛生局で小崗子北方なる小崗子糞池に運搬潴溜し、附近農業者に直接販賣してゐる

しかし支那人は肥料使用に慣れず從て其需要も多量ではないのみならず遠きは三十里堡又は旅順管內の農民の如きは惡疫流行の際に他管內の糞尿運搬を嚴禁することがあるから時として其處分法に大なる困難を來すことがある、此の故に大正九年度に於てはI・S・式糞便化學處理法に依ることゝし目下その設計中である、更に此I・S・式處理法を各戶の厠にほどこす計畫てあると云ふ。

大正四年以來の傳染病死亡者統計

年次	コレラ		赤痢		腸チブス		パラチブス		痘瘡		發疹チブス		猩紅熱		ヂフテリヤ		流腦	
	日	支	日	支	日	支	日	支	日	支	日	支	日	支	日	支	日	支
大正四年	—	—	二〇	二	二四	一	一	—	—	—	三	六	三〇	三	三	一	—	—
大正五年	—	—	一四	四	一八	—	一	—	二	二五	二	一六	一四	二	五	—	—	—
大正六年	—	—	三三	六	五五	二	—	—	九	三〇	—	—	三	二	三	一	—	—
大正七年	—	—	四〇	五	三三	—	二	—	四	—	—	—	三	—	四	—	二	—
大正八年	八二	八四	五三	二〇	八七	九	三	—	四	—	—	—	三	—	五	—	八	—

尙藝娼酌婦等特種營業婦女の健康診斷は每週一回大連婦人病院て行ひ、療病院は各種傳染病患者を收容してゐる。

其他衛生設備としては

一　檢疫所　大正三年の竣工て敷地三萬二千餘坪、建坪二、一〇〇餘坪、寺兒溝海岸にある。

二　苦力及人力車夫收容所　寺兒溝及小崗子の二箇所あり、何れも個人經營てある。

三　屠獸場

四　共同墓地及火葬場

上水及下水

大連の一般市民に供給してゐる水道はその源か三つある、一は露時代の馬蘭河水源て、四箇の在來の井戶に加るにその下流に當り河流を橫斷する地中堰堤を築造することゝし、明治三十九年改築に著手し總事業費九九三、七三八、二五八圓を費して四二年に完成したものである、そして配水管擴張工事には一八、〇七二、〇四五圓を要したと云ふ、此馬蘭河は延長約六里流域六平方里餘て其地下流水は最大渇水時期に於て一日二二萬立方尺（六、一〇〇噸）を下らないか地上流水を有するは降雨後數日乃至十數日に過きない。

二は綫家屯水源て大正六年七月の竣成に係り總經費約二〇萬圓、大連市の西方三邦里なる小平島綫家屯に位置してゐる、集水面積〇、八六五平方邦里て一日の豫定給水量六百噸、粗石積

取水井三箇を築造し流域の地下水を集め第一、第二の兩井より内徑一尺のモルタル管を以て第三井に通し又上流約八六〇間なる李家屯谿谷に堰堤を築き其中央に内徑四尺の取水井を設け地表及地下水を導き十吋鐵管を以て前記第三井に導入するものである、而第三井の東側にポンプを設置し約四千間十吋送水鐵管を通過して沙河口の南方に設けたコンクリートタンク（許容水量三百噸）に送水しそれから自然流下により沙河口沈澄池に流入するものである、尚將來李家屯に於ける大築堤を築造するときは一日三、五〇〇噸内外の給水を得るは容易であると云ふ。

第三なる大魚溝水源は元來陸軍の所管で大連市の對岸大孤山の西方約二邦里なる大魚溝にある明治三十七八年戰役の際水船に供給する目的を以て日本陸軍に於て相當の設備をしたことがあつたが其後大連水道の完備に從ひ全く荒廢に歸してゐた、それを大正五年の水道涸渇に際し臨時補給の目的を以て改築工事をなし專ら船舶に給水してゐる、其一日の給水能力約一五〇噸、工費一萬二百餘圓、取井一、取水池一、口徑五寸の土管を以て貯水池に連結してゐる。

大正七年度末に於ける大連市の導水管延長三里一二町三六間、送水管一里二町四一間、配水管二二里一七間、合計二六里一五町三四間に及んでゐる。

	水栓數	需用戶數	大正八年 水量	大正八年 料金	大正七年 水量	大正七年 料金	大正六年 水量	大正六年 料金	大正五年 水量	大正五年 料金	大正四年 水量	大正四年 料金
家事用	四、八三五	九、四〇〇	—	—	二、一九八、五一八	二一九、四一七	二、〇〇三、一一七	九四、四六〇	九三六、七三五	八八、〇四一	九一八、八五五	八五、八八一
途上給水用	三三	八、五〇四	—	—	二〇〇、五四二	一三、〇三五	—	—	—	—	—	—
湯屋用	二四	三三	—	—	一二三、一四八	六、七二九	五五、八三三	三、三三〇	五五、八七八	三、三四一	五八、二四九	三、三二九
汽罐水槽用	一二	—	—	—	三八一、五三六	五四、一九六	三二九、八九八	三二、四四三	一四九、三九八	三二、四三〇	一四二、六八七	三二、三五二
噴水撒水用	一三	—	—	—	四、四〇七	一、二〇一	四、〇六八	一、一〇〇	七、七九五	一、六〇八	九、八八〇	一、四〇一
船舶用	三三	—	—	—	一四五、九三三	二九、〇一八	八七、四三六	一七、四八五	八〇、一六七	一六、三三七	九八、八九九	一九、九一五
其他	三三	—	—	—	二三六、三七七	五九、九一六	一五五、四四五	三、四一五	二三、五八八	五、一〇五	七、〇二六	一、四九六
計	五、二〇五	一七、九三七	—	—	三、〇四八、三九一	三三九、五二三	二、七五五、八四六	一五二、一五三	一、二五一、三六九	二三六、五五一	一、二三一、八四六	二三二、三二八
專用消火栓	九八	—	—	—	—	六六	—	—	—	—	一二	三
公設消火栓	四〇一	—	—	—	—	—	一、七九七	—	九九七	—	一、四一六	—
合計	五、五六四	一七、九三七	—	—	三、〇四八、三九一	三三九、五一八	二、七七七、六四三	一五二、一五三	一、二五二、三六六	二三六、五五二	一、二三三、〇七三	二三二、三三二

尙大連には多數の井戶使用者かある、その飮料に適するもの三二一、不適のもの三二〇計三五一、使用者數五、四八二八を示してゐる。

下　水

市内公設下水は總工費九四萬圓を投し、大正三年竣工を告け其種別及延長は暗渠二一、二一一一間

五二、開渠三四四間四五、管埋設五六、七六四間七六、計五九、三二〇間七二に達し、私設下水は二、三八八箇所此延長三二五、七一五間餘ある。

而下水道の設備かない市街地ては各戸に下水溜又は流し元から下水溜に至る下水溝の設備を命し、その下水溜には又次の如き標準を設けた。

一 下水溜は不滲透質の材料を以て構造し其厚さは三寸以上とし、適當の覆蓋を設くること。

二 下水溝は鐵管、内外に釉藥を施した陶管、其他不滲透質材料(厚一寸以上)を以て構造すること。

三 土地の狀況により前二項に據り難きときはペンキ又はコールタールを二回以上塗布したる厚一寸以上の板を以て之に代ふることを得。

四 下水溜の容積は少くとも三日間の使用により生する汚水を受容するに足るものとす。

市場

一 信濃町市場 官設、明治三八年八月開設、敷地五、四七五坪。

賣場 一、〇三六 倉庫 二六四 出店數 九三

	大正七年	大正六年	大正五年	大正四年
賣上金高	一、二七三、四二〇	八七三、三七五	五五五、二三〇	四六五、五三〇

二　山縣通市場　私設大正三年一月開設、敷地三、八七六

賣場　五六九　出店數　一四

	大正七年	大正六年	大正五年	大正四年
賣上金高	二八、七五六	二〇、一九九	六、八七三	三、六八九

三　小崗子市場　官設、明治四十二年開設、敷地一、九二九坪。

賣場　一五四坪　倉庫　四六坪　出店數　二五

	大正七年	大正六年	大正五年	大正四年
賣上金高	一六〇、八七四	一二五、六三五	八七、〇一六	七五、三九〇

四　滿洲水產株式會社羅市場、三十九年五月開設、敷地一、〇〇〇坪。

賣場　二一四坪　倉庫　六六坪　出店數　一

	大正七年	大正六年	大正五年	大正四年
賣上金高	九五五、〇八八	六九七、三二七	五一三、三〇六	四三七、〇三二

特に魚市場に對しては明治三十九年民政署令を以て規則を定め、その設立には關東廳の許可を要することゝし、開設後は取引狀況及收支計算の報を爲さしめ尙建築場の構造及市場の業務

會計は官廳の監査を要することゝした。

電氣事業 付、市內交通

大連の電氣事業は滿鐵會社の經營に係り、市及民政署は何等之にあつかる事はない、明治四十三年始めて電燈及電力供給の營業を開始した際には政府から不完全な電氣設備を引繼たのみであつたが、爾來或は營業課に或は運輸部に轉屬し大正三年電氣作業所なる名の下に獨立營業することゝなつた、電力、電燈並に電氣鐵道はその營業科目である。

一 大連發電所 發電設備は千キロワット三相交流發電機三臺、千五百三相交流發電機一臺及七五キロワット直流發電機二臺及千五百キロワ ット發電機四臺、發電能力四、五〇〇キロワットを算する。大正六年更に三百五十キロヴォルトアンペア遞昇變壓器三基を据ゑて、同時に沙河口に變電所を設置し之と同容量の受電設備を完成した。

二 大連電燈營業所 大連市內に電燈及電力給供の營業を開始したのは明治四十年十月沙河口、星ヶ浦には明治四十四年一月、老虎灘には八月、電燈供給を開始した、大正七年度末に於ける供給電燈數一〇五、七四四を算してゐる。

三 電氣鐵道 市內線は延長一四哩餘に達し、主として復線を用ゐ均一制の乘車賃往復金十

賃（交通税共）を徴してゐる、市外線は單線に九哩餘に及ひ沙河口線、星ヶ浦線、老虎灘線等かある、乘車賃は市内線と同樣てある。

年度	平均營業哩	使用客車 電力量	使用客車 走行哩	乘車人員	乘車賃	一日平均 使用し得べき客車	一日平均 乘車人員	一日平均 乘車賃
	哩	キロワット	哩	人	円	車		円
大正四年	二七・五	三,九四五,三八八	一,六五九,九三二	五,二一〇,三六八	三二一,五三一・三六	二七・五	一四,二九五	八七九・五
大正五年	二七・四	三,〇二三,八二五	一,六五六,五九一	六,二六九,八四一	三五七,二三六・四九	四六・八	一七,一二一	七〇四・七六
大正六年	一七・六	三,五九一,九二二	一,八二五,四〇二	八,七九七,六四四	三七〇,九九〇・一九	四五・九	二四,一〇四	一,〇二九・二五
大正七年	一八・二	三,四八八,五五九	一,八六三,四四九	一二,〇六八,八三三	五一六,七二〇・九六	五一・〇	三三,〇四九	一,四一五・六七

發電所成績

年度	發電所内消費高	供給電量 電燈電力	供給電量 電氣鐵道	供給電量 計	合計	發電費
	キロワット	キロワット	キロワット	キロワット	キロワット	円
大正四年	八三,七八〇	六,八〇〇,九一四	二,六九五,四八四	九,四九六,四一八	一〇,二九三,一九八	一二六,三〇一・七
大正五年	九九,一二二	七,四八八,二五五	三,三一七,六五九	一〇,八七五,九一二	一一,八〇四,九四三	一二五,九七一・九
大正六年	一〇三,四四一	一〇,三七五,九八五	三,三八三,七八七	一三,七五八,七七〇	一四,七九一,五九〇	一四八,八九四・五五
大正七年	一二四,七三〇	一二,七一二,七〇三	三,二四九,九八七	一五,九六二,六七〇	一七,〇九九,九七〇	二四〇,五五五・八七

電氣作業所收入概觀

年度	電燈料	電力料	其他	合計
大正四年	円 二六四、六四一・九〇	一七六、七四一・八六	六四、八一二・七八	円 五〇六、一九六・五四
大正五年	四〇九、三一九・五〇	九〇、三二〇・七六	六一、三三二・二七	五六〇、九七二・五三
大正六年	四九八、三二一・二五	一二四、九三五・五二	九〇、〇〇九・六七	七一三、二六六・四四
大正七年	六三二、三一六・八七	一六六、一二八・三〇	九七、二九七・七八	八九五、七四二・九五

瓦斯事業

滿鐵瓦斯作業所の經營で瓦斯發生爐五基、製造能力一晝夜五〇萬立方呎、水性瓦斯發生機製造能力一晝夜一〇萬立方呎、瓦斯溜五〇萬立方呎の設備を有し、尙製造能力三〇萬立方呎のものを增設した。

大正七年度末に於ける瓦斯管の延長を見れは外管三八二、一三四呎、供給管二九三、九〇四呎屋內管一、一一六、五五三呎に達してゐる、その營業狀況は。

年次	需要口數				使用量				料金
	家事用	街燈用	工業用	計	家事用	街燈用	工業用	計	
大正四年	八、八二八	三	一三	八、八七四	六九、一九五、六〇〇	三、七三八、二〇〇	一七、四三三、七〇〇	九〇、五八五、五〇〇	一七三、八三〇

大正五年	九、〇〇〇	三六	三三	九、一一九	一四、九三八、五二〇	一七、七七七、二〇〇	三、四三三、四〇〇	九九、九七九、二〇〇	一九一、九七七
大正六年	八、八〇二	二八	四三	八、八七三	八三、七一六、四〇〇	三九、六六〇、二〇〇	三六、六〇三、五〇〇	一二三、九一一、〇〇〇	二七八、三一三
大正七年	九、九六八	二七	四六	一〇、〇五一	九八、六〇四、三二〇	四一〇、〇一〇、〇〇〇	四、六六六、五〇〇	一四四、二六八、八二〇	三一三、〇六八

（註）大正五年以前のものは工業用は單に動力のみを擧げ、その他の燈用はすべて家事用のものに入れたものである

通信

大連の通信は通信管理局及大連郵便局で取扱つてゐる、その管理の下に通信業務を行ふものか通常及小包郵便を取扱ふものか十箇所、電信を取扱ふもの十一箇所、電話交換を取扱ふもの一箇所、電話通話を取扱ふ者十箇所、其他自働電話二十八箇所、郵便切手類賣捌所五十五箇所、郵便函七十六箇所、郵便私書函六十三を算してゐる。

而て大正七年度末に於ける電話加入者二、六二八人機數三、〇二二に達し尚大連郵便局では電話交換、市外通話、長距離通話及電話呼出等一切の電話事務を取扱つてゐる。

公園、劇場、寄席其他娛樂機關

（公園）（一）西公園―露時代すでに開拓を企てやゝ公園の體裁を備へてゐたかその後年々施設を加へ大いに其面目を改めた、園内五〇餘萬坪、設備に完全しないところか多いか樹木多く中に所謂青泥窪の小溪を入れた自然的公園である、後方山に近く大連動場二箇所ある外大弓場

乘馬練習所、旗亭等かある。

(二) 北公園　滿鐵の經營て露治時代の創設に係り、裡に氷滑場、テニスコート、大弓場、器械體操場、小動物園、花園等の設備かある。

(三) 電氣遊園　西方伏見臺の高地に位置し面積二五、〇四五坪、滿鐵の經營てある、溫室、花園、演藝館、射的場、動物園、喫茶店、支那料理、簡易圖書館、ボーリングアレー、メリーゴーラウンド、ローラースケーチング等の遊戲場かある。植樹一萬六千餘、施設費一七九、一〇〇餘圓を費してゐる。

(四) 常盤公園　舊東青泥窪時代の老松かあり、四圍には酒樓、旗亭か相連つてゐる。

(五) 大廣場　市街の中央に位する廣場て完全したる遊歩場てある。

(六) 敷島廣場及日本橋苗圃

(七) 星ケ浦　大連の南西二邦里餘、外洋に面した海岸にあり、滿鐵會社の經營に係り、遊園地としての施設仲々にとゝのへ、海水浴場、溫泉、旗亭等も設備してある。

(八) 老虎灘　大連の東南外洋に面した小灣て、戸數約九〇〇に達する漁村てあるか風光仲々棄て難い、水產試驗場、警察署かあり、別莊地として又夏季の海水浴場として知られてゐる、

旗亭の數も少くない。

（戲場）　歌舞伎座、大連劇場、日の出座（以上日本）、永善茶園、同樂舞臺（以上支那）等の外常設活動寫眞館五箇所寄席一箇所ある。

尙私設玉突場一七軒ある。

（其他娛樂機關）　明治三十八年の當時は賣春婦の數在留者の半はを占むる奇觀を呈し、都市の風俗及衞生に惡弊を殘す憂があつたから同年十月先つ藝妓、酌婦及雇女取締規則を發布して風俗を正し、翌年料理店、飮食店、宿屋、下宿屋、貸席、待合茶屋、引手茶屋營業取締令を發して衞生に注意し更に娼妓取締規則を發して遊廓地を大連の西南隅なる山間に移轉させ、且つ小崗子にも遊廓地域を設けて支那人、朝鮮人及日本人の貸座敷營業を許可することゝした。營業者に於ても明治四十三年大連三業組合は市内營業者により逢坂町組合及小崗子、沙河口料理店飮食店組合も日本人の營業者により成立した。

今大正七年末に於ける數字を見れは次の如くてある。

料理店一〇二、飮食店二九一、貸席二五、貸座敷九八、藝妓檢番四、藝妓置屋六二、藝妓七〇九、娼妓一二二、酌婦八六四。

大連と海港

大連灣は南東に向つて港口を開き、其處に大小三山島を控へて自然の防波堤とし、中に東西約四浬、南北約五浬の廣袤を包んでゐる、灣內には延長一二、九二一尺の防波堤があり、約一百萬坪の海面を抱擁してゐる、第一、第二、第三の三埠頭はその中にあつて、繋船岸壁の延長實に一三、三三〇尺、一千噸乃至三千噸級の船舶一三隻、四千噸乃至六千噸級の者六隻、一萬噸級の船舶一三隻、二萬噸級のもの一隻を同時に繋留することが出來るから年額約四百萬噸の吞吐能力を有つてゐるのである、其外沿岸航行の戎克船の爲に延長二、三〇〇尺の大山埠頭があり、三百石乃至五百石の戎克船約百隻を繋留せしむることが出來る。

石油積揚の爲には又寺兒溝に一、一〇〇尺の石油棧橋があり、濱町埠頭も小蒸汽及戎克の繋留場として四百尺の延長を有つてゐる。

而港內の結氷期間は概して六〇日であるか碎氷船の設けがあるから港內に繋留を閉鎖する憂はない。

大連港輸出入品總價格累年比較表

年次	輸出			輸入	輸出入合計
	滿洲産	其他産	合計		
大正四年	七〇、〇三一、八六五円	六、八〇三、九九五円	七六、八三四、八六〇円	五一、五八二、〇三四円	一二八、二二六、八五〇円
大正五年	六六、四一九、四五三	七、七九九、九二九	七四、二一九、三八二	六七、四八九、〇七七	一四一、六九八、四五九
大正六年	九三、四七六、七六八	六、四九九、八八七	九九、九四八、六五五	九九、六三三、四三三	一九九、五九九、〇八八
大正七年	一一四、四一五、七八五	八、三一四、一四八	一二二、六一九、九三三	一二三、七五三、五一七	二四五、七七三、四五六
明治四十一年	—	—	三四、七三六、八九六	三二、三五三、六四七	六六、〇八三、五四四

本表は海關兩て表はすへきものたか參考の爲海關兩を一圓三十五錢に換算したものてある、

今此輸出額を仕向地別に作表すれは次の如くてある。

年次	日本向		朝鮮向		支那向		香港及印度南洋向		其他諸國向		合計	
	滿洲産	其他産	滿洲産	其他産	滿洲産	其他産	滿洲産	其他産	滿洲産	其他産	滿洲産	其他産
大正四年	二八、〇七二、二三六兩	一、五〇七、八六五兩	二九一、五五九兩	三二七、三〇七兩	二七、二二〇、四〇二兩	一、八〇七、八六二兩	二、九〇四、五九九兩	六九、七八六兩	一六、八三二、八六五兩	一八八、〇七〇兩	五一、八七五、四六九兩	四、八九二、一〇八兩
大正五年	三六、五四四、三八三	一、三三〇、八二三	三三三、八一七	三三、八四	一六、三六四、九九九	一、八四〇、三一七	一、六三五、五九八	一三三、二六四	八、一〇三、七九一	一、五〇八、三〇〇	四九、一九九、五四五	[illegible]
大正六年	五三、三二八、六〇九	一、三三〇、一三七	三三八、七四四	四〇、六九六	二三、五七八	一、三三三、八五六	一、七三八、六八八	一七、四七三	三三、三三二、四〇	一五一、三四八	六九、二四三、〇五一	四、七九三、五九
大正七年	四八、九一〇、九九四	一、四一五、九一	四七、四五	三六九、五三三	二八、九九三、五九	三、三三五、四七三	三、三三三、五〇九	一八、八二三	一九、九三六、〇八六	八八八、五五五	八四、七五〇、四三六	七、七〇四

輸入品價格積出地別

年次＼積出地	日本	朝鮮	支那	香港及印度南洋	其他諸國	合計
大正四年	兩 一八、〇七一、八〇二	兩 一、二六三、二四一	兩 一四、九六六、八〇三	兩 七九八、三二〇	兩 四、三九七、七三九	兩 三九、六九二、〇九二
大正五年	二六、六九九、五三三	一、四四一、五〇〇	一七、三九一、二一〇	一〇、八〇三、二六四	三、一七七、五一三	四九、九九一、九〇九
大正六年	四三、八三九、一九七	一、五八九、一八六	二一、八三五、五〇一	一、九九四、〇三〇	四、七六四、四七四	七三、七九四、三七八
大正七年	五一、四一六、七五六	一、七三三、四七六	二三、〇七〇、〇五五	二、九九九、五七九	五、四七五、二六五	八三、五三一、一三二

以上の中輸出品の大宗は大豆、麥粉、蜀黍、麥、鹽、砂糖、珈琲、繭、生糸及絹糸、麻袋、金屬建築材料、石炭、皮革、豆油、油脂、藥品、石材、豆粕等て就中麥粉を除く他の穀類は恰んと滿洲產て日本、支那、香港地方に仕向けられ、其額實に二千萬兩臺をはるかに突破してゐる、繭、生絲及絹絲も亦悉く滿洲產て年額二四〇萬圓以上に及ひ大部分支那に仕向けられ、豆油、豆粕も亦同樣て日本支那及諸外國に輸出せられ年額四千萬兩以上に達してゐる。

輸入品は朝鮮及支那よりする米の二百萬兩以上に及ふものを始めとし、大豆は米國から又麥粉は支那から主として輸入せられ、中ても麥粉は百萬兩臺を突破してゐる、砂糖類は多く日本及南洋方面よりし年額四百萬兩、茶及コーヒーは日本及支那を主とし約二百萬兩、酒類及煙草も主要積出地は日本及支那て四百萬兩をはるかに超加してゐる、又綿絲は主として日本から積

出され、支那等から來るものと合して年額百八〇萬兩に達し、金巾、粗布、大尺布、綾木綿其他の綿織物も亦輸入の大宗品で毛織物、麻其他織物と合して年額一千八百萬兩に達してゐる。履物の輸入も亦仲々にあなどり難く日本及西洋諸國よりするもの二百萬兩臺を突破してゐる車輛及機械類は主として滿鐵の使用品で年額六百萬兩、金屬建築材料の輸入額年一千萬兩を示すは大連及其他沿線都市の發展を語るものである、之等は日本及西洋諸國を其積出港としてゐる。

右の如き海港貿易に使用さるゝ汽船の入出港を見れは。

年次	入港			出港		
	隻數	總噸數	揚荷噸數	隻數	總噸數	積込噸數
大正四年	二、〇三六	三、三九〇、六三一	五四九、〇三六	二、〇三八	三、三〇三、三九八	一、七三三、〇七七
大正五年	一、九九	三、〇一五、二四〇	六〇三、一八〇	一、八九五	二、九九四、五四八	一、七七四、九七七
大正六年	一、九三六	三、〇四五、六八四	八三六、九六四	一、九三三	三、〇一五、八三六	二、一〇八、一三三
大正七年	二、四三二	三、三七五、二〇五	九三八、〇九九	二、四〇四	三、三五二、一七三	二、四四四、〇〇四

又支那及朝鮮沿岸貿易には帆船の利用されるものか少くない、帆船は支那船最も多く次は日本船である、今其統計を擧けれは。

年次	入港 隻數	入港 總噸數	入港 積込噸數	出港 隻數	出港 總噸數	出港 積込噸數
大正四年	三、〇三五	四三、八一七	一七、八九二	三、〇三〇	四五、七八四	八五、〇一二
大正五年	三、七八九	五三、六六八	三二、九三六	三、六八三	五〇、七三九	九九、七一八
大正六年	六、六五七	八一、六四三	五一、七八二	六、七三〇	八三、四三六	一六九、八八一
大正七年	七、二六七	八四、四五八	五六、八四五	七、〇三一	八三、九九四	二〇六、八三一

大連海關關稅收入金額

年次	輸入稅	輸出稅	沿岸貿易稅	噸稅	通過稅	合計
大正四年	五一〇、九〇三	一、一九一、七六四	三〇、一三八	一、三八二	四、八四九	一、七四〇、〇三五
大正五年	七九五、五五二	一、一七〇、七九五	三六、一七三	三二一	九、二〇三	二、〇三一、八四五
大正六年	一、三四三、三六二	一、六七六、九四五	五一、九四九	二五三	一六、〇〇九	三、〇八八、五一八
大正七年	一、四五三、〇七四	二、〇五一、四一〇	三八、二七六	七八五	一七、五七〇	三、五八三、一九六

參考の爲滿鐵埠頭事務所の收支を擧ぐれは

年次	收入 船舶收入	收入 埠頭收入	收入 雜收入	收入 合計	支出
大正四年	一三五、一五一円	一、九九一、三九	八七、一七三	[illegible]	一、四七八、六九

大正五年	二二〇、三〇四	一、八六五、一八八	三七、五〇九	三〇一、四〇〇	二、六九八、三三五
大正六年	一三五、二四九	二、三五五、三五〇	二四、六九二	六八三、四九一	二、四四八、〇一五
大正七年	[illegible]九八	二、四二三、五五九	一六、九九三	一、九四一、一三八	二、八九七、五六八

大連と鐵道

大連は南滿鐵道の基點で汽車は直ちに船舶と聯絡することが出來る、故に大連驛乘客貨物及運賃は長春を除いて他に比肩するものがない。

年度	乘客 乘車人員	乘客 降車人員	貨物 發送	貨物 到着	小手荷物發送	收入
大正四年	三〇三、九九三	一九九、九九七	三九、〇〇三	二、三〇三、三〇九	五〇、七五五	三、三二五、九九九
大正五年	二七五、八四五	二五六、八四七	二六一、九九二	三、六一七、八四三	六、三六〇、七五七	三、〇〇三、一五五
大正六年	三八二、四四六	三三二、九九九	三七八、六六二	二、九七八、一四六	八、七〇七、五五三	三、九一三、七八五
大正七年	四六二、七七九	四一三、三二〇	五一四、八七四	三、三〇一、八六九	三、三二五、三六八	六、四七一、八六五

以上は海路聯絡の分も合算したものである。

そして大連著重要貨物は百萬噸臺を突破する石炭を筆頭に、大豆の百萬噸內外、豆粕の八萬噸其他鹽、石灰、セメント類、石材、豆油、木材等すべて一萬噸乃至五六萬噸に達してゐる、

滿鐵社用品も亦見逃すへからさる數字を示し最少量にしてすてに五萬噸以上、多いときは十六萬噸を突破するを見る。

又大連から發送する貨物ては社用品最も多く時に一〇萬噸臺を突破し麥、麥粉、砂糖、石炭石油、金物類等多く煙草、綿布、紙、木材等も少くない。

會社

經濟界の進展に伴ひ一般個人經營から會社組織の形式を採ることゝなつたのは自然の勢てある、今大連に本支店を有する諸會社を擧くれは。

(一)貿易業者本店二〇、支店一八、(二)倉庫業本店一 (三)運輸業本店三三、支店六 (四)保險業者支店六(五)雜商業本店四七、支店一五、(六)信託業者本店六八、支店三(地方部勸業課調)

等てある。而大連重要物産取引所は大正二年九月から開始された、その業務成績を見れは次の如くてある。

	現物取引	先物取引	合計
大正四年	三四、九四二、五四四円	五、七一五、九〇四円	四〇、六五八、四四八円
大正五年	三七、八三四、七五〇	二一、四二一、六九四	五九、二五六、四四四
大正六年	四三、八五八、四六二	二九、四一四、九五六	七三、二七三、四一八

大正七年　四七、四三五、七五〇　三六、三五四、五八二　八三、七九〇、三三二

右の如く糧豆取引逐年盛況に向ひ南滿洲は勿論日本內地、南支那及南洋等樞要の地に於ける大豆、豆粕、豆油及高粱の市場は當取引所の公定相場を標準として賣買取引される樣になつた。

商業機關　(一)大連商業會議所(二)公議會(支那人)二箇所(三)滿洲重要物產同業組合(四)其他の小同業組合三七。

工　業

(一)油坊五八戶(年生產高豆粕約八〇萬噸、豆油約九萬噸)(二)鐵工場二八戶(三)印刷工場四戶(四)煉瓦工場二六戶(五)造船所一(六)其他工場三八戶(關東廳七年度統計)。

關東廳て特に保護獎勵の意味を以て稅金の格別低減を行つてゐる(收入の千分の二)のは、豆粕及豆油、セメント、高粱酒、醬油、石鹼、硝子、塗料、人造肥料、粉條子脂肪酸及グリセリン、礦物精鍊、硬化油、ビール、硫酸バクウム、各製造業て前途有望であるか一時經營困難てある爲に特に、補助金を下附して又は資金を貸付けてゐたものに、從來、硝子、柳行李、骨膠製紙、粉條子、陶器、石鹼、ソーライト、高粱酒、曹達、氷糖等の諸工業かあつた。

倚滿鐵會社は中央試驗所を置き、諸般の研究及分析試驗に應ずる外、窯業釀造、等の工場を營んでゐる。

金融機關

朝鮮、正金、敎育貯金、旅順、の各支店、正隆、大連、龍口、東華、大連商業、遼東、滿洲庶民等の各本店、(以上日本側)、中國、交通、香上等の各外國銀行支店がある、大連に於ける各銀行の營業成績(關東廳統計)。

年次	預金			貸付		
	受入	拂出	現在	貸付	戻入	現在
大正四年	三六七、九八九、五五一	三五五、五四八、六六三	一〇、四四〇、八八八	一五、五五三	一四、七九三、三六六	二一、七七九、一五九
大正五年	四九九、三六五、三五九	四四五、七一四、八五九	一三、六四〇、三六八	六六五、七八七、五三三	六六一、五五五、四四七	二四、九三三、三〇五
大正六年	九五三、一〇四、八〇三	九四四、五三三、三二九	八、五八二、五八四	四八七、七九九、九〇〇	四五三、九九三、一一三	三四、七八七、七八七
大正七年	一、〇三五、八四六、一三六	一、〇三八、二二八、八〇七	五六、〇三七、三八九	一、一〇〇、一〇一、九九六	一、〇五〇、六二七、四〇五	九三、四六四、五九一

貸金業者の貸付金

年次		營業戸數	前年より越 口數	前年より越 金額	貸出 口數	貸出 金額	戻入 口數	戻入 金額	年末現在 口數	年末現在 金額	利得金
大正四年	日	一六八	三九〇	三七九、九三六	三三〇	四〇〇、〇四七	一四四	三八四、六三三	三五六	一九五、三四一	
	支	一〇	八	六八、六六〇	一二	三七、五三四	六	八、〇〇〇	一三	九八、一九〇	
大正五年	日	一九三	一三六	一九五、三四一	一五四	四八四、一九一	一五五	四八〇、七九〇	四五五	一九八、七四二	
	支	一一	一三	九八、一九〇	一三	四一、三三〇	一七	六三、九〇〇	一九	七五、六三〇	
大正六年	日	一九八	四五五	一九八、七四二	三七一	六七七、八六七	一七五	六三五、〇三七	五五一	三五一、五八三	
	支	一四	一九	七五、六三〇	三九	五三、七三九	七	八一、六八〇	三三	四六、六六九	
大正七年	日	二八三	五五一	三五一、五八三	六九	六五一、八七七	一、〇八四	六六〇、八〇四	八	三三八、二〇一	
	支	一〇三	三三	四六、六六九	一二五	一七一、五八〇	五〇	六四、三三四	九三	一四九、〇〇〇	

質屋の貸付金

年次	國籍	營業戸數	前年より越 口數	前年より越 金額	貸出 口數	貸出 金額	受戻 口數	受戻 金額	流し 口數	流し 金額	年末現在 口數	年末現在 金額	利得金
大正四年	日	五三	一六、八七四	七七、〇三六	六五、一二三	二七九、九九七	四八、二五七	二二三、九三六	一三、七五五	四五、六九六	二三、一六三	九八、四〇一	三八、〇〇七
	支	三六	七三、〇五七	五四、七八五	二四三、九一〇	一四八、五三三	一五〇、七三八	三九、一五三	六四、三五五	五六、八九四	一〇〇、八七四	七三、五九〇	四、八九八
大正五年	日	五一	二三、一六三	九八、四〇一	六九、三六〇	一九九、〇三八	五九、七四一	二五八、六三三	一二、八七一	四五、四八九	一九、九一一	九三、三五八	三八、〇六九
	支	六四	一〇〇、八七四	七三、五九〇	二六五、一八四	二三二、一六八	一六三、三六〇	一四八、八三四	七七、一一四	七三、七三七	二三五、六九四	八二、六三七	五三、八八八
大正六年	日	五一	一九、九一一	九三、三五八	七四、三三六	四三二、七四三	五五、〇〇五	二三五、八六九	一四、五三六	六六、三三七	二四、六三六	二二三、九七三	八四、六六八
	支	六三	二三五、六九四	八二、六三七	二四〇、四〇九	二九九、七三三	二〇一、八〇七	一七六、七八七	九九、五三九	八七、三四八	二六四、六五三	一一八、二三四	六三、七五九
大正七年	日	五三	二四、六三六	二二三、九七三	七三、一七六	四三五、四七八	六三、四一〇	三四一、九三三	九、四四七	四五、四六三	二五、九九五	二六三、〇八七	
	支	八二	二六四、六五三	一一八、二三四	三七〇、一七〇	四一九、五六五	二七一、六八〇	二六四、四〇〇	八五、九三三	六八、四三三	一八一、〇三一	二〇四、九五七	

郵便局取扱に係る金融狀態（沙河口合算）

年次	郵便爲替		郵便貯金			郵便振替貯金	
	振出	拂渡	豫入	拂戻	年度末現在	拂込	拂渡
大正四年	二、〇五一、六八一	二、一六四、六五九	八四五、二三二	七六七、七五三	六五七、〇一七	二、三四九、一六一	三、九六二、六四九
大正五年	二、三五九、九六四	一、五一九、七六九	一、四一五、八三一	一、三六八、一三二	八〇八、〇四六	三、九六五、九七〇	七、七一五、一八四
大正六年	三、三二三、六五〇	一、八四八、四四五	一、四三一、一四八	一、一六八、八三四	九九四、四六六	三、四一六、〇二三	九、一五三、〇五九
大正七年	四、六八〇、八七五	三、三七二、六七八	二、〇六二、三三六	一、六〇八、二二一	一、三六九、七九八	三、五九六、七六七	一〇、七九四、八九四

附沙河口

沙河口は大連西方約三哩沙河口會の一部て沙河口會長は道路、教育、觀察、其他諸般の公共事業を施行し且つ政令の傳達及租税の徴收等を握掌してゐる、そして會村に要する費用はすへて住民の負擔とし、其收支豫算は民政署長の任可を經て施行するものてある、警察事務は民政署派出所（二箇所）を置いて之に當らしめてゐる。

又沙河口民會なる自治團體かあり、全區を五區に分ち各區より日本人三名を撰擧し、各區を通して二名の支那人を撰出してゐる。

沙河口の發展は明治四二年滿鐵會社か北沙河口に大工場を設けたるに始り爾來引續いての工

場企模の擴大は沙河口の發展と比例し、人口も從て增加して來た、大正七年度末に於ては日本人六、四二三人、支那人一一、四五九人、合計一七、八八二人を示してゐる。

沙河口は電車を以て大連に通し且つ市街も小崗子と恰ほ連續してゐるから、むしろ之を大連市の一部と看做すか妥當てある、將來は勿論大連市の中に含まれる運命を有するものてある、たから興業その他すへての事業に於て大連市の一部てあるのみならす元來か工場に伴ふ市街地て工場を中心とする一の田園都市の形にある、此の市街はすへて滿鐵の經營に係り面積二六〇、七〇〇坪、工場從事員の住宅七五〇戶道路、溝渠、排水、給水等の設備もある、其他病院一、郵便局一、幼稚園、簡易圖書館、浴場三、俱樂部一、貸付店舖一二、柔劍道場一、神社一大師教會一、教會堂一等も皆滿鐵會社に於て附設したものてある、但し小學校普通學堂は民政署て管理してゐる。

沙河口滿鐵工場の外大日本鹽業會社か鹽田を設け、支那人の營業者と合算し一千石以上の產額を示してゐる。

大連機械製作所、滿洲ベンチン工業會社、製鐵會社、醬油釀造會社、建物會社及その他の工場かあつて寺兒溝の油坊區と共に大連市の工場地域を形成してゐる。

第二　旅順市

遼東半島の最南端にあり、四方は連亙起伏せる山岳に圍繞せられ、西老虎尾半島と東黃金山とにより一條の港口を扼してゐる、その港口幅員僅に二七〇餘米、港內は之を東西兩港に分ち西港は東西二哩南北一哩自由港である、東港は卽ち軍港として使用せられ、水深があるが面積かない。

市街は白玉山によつて新舊の二となり、新市街は南西港に臨み背後に連丘を負ふて海岸を走り舊市街との間に東龍河が流れてゐる、東西約一邦里南北約二〇町。舊市街は其東に連り敎場溝に沿ふて群集し小丘がその背面に起伏してゐる、地域狹猛であるが旅順の商業地區は此處である。

沿　革

當地の歷史は極めて古く、すでに唐代に於て靺鞨征討使の上陸せし遺跡がある、元明の頃に至つては對岸山東との往來漸く頻繁となり、淸朝の如きは戰艦十隻を備へて守備に任せしめたといふ、現今の水師營はその遺跡である、其後一八五七年(咸豐七年)には英佛聯合軍太沽攻擊の際の根據地となり、更に光緒六年(一八八〇年)李鴻章の建議により支那政府は當地に砲臺を

築き北洋艦隊の本據と定め水陸二萬の兵を駐屯せしめてから商民の移住日を追ふて多きを致し遂に一市街を形成するに至つた、しかるに光緒二〇年日本軍の爲に占領せられたか後露國の有となり、純然たる軍港埠頭として鋭意設備を加へられた、その費用附屬工事を除き實に二百三十七萬餘圓を數へるといふ、光緒三一年に至つて我國の占領に歸したことは申すまでもない。

行　政

旅順市及旅順民政署に於て行政の各部を擔任すること大連の場合と同樣である（大連市參照）而警察署は市内に九箇所の派出所を設置し東洋橋派出所か水上警察を兼管してゐる。

市區道路及道路交通

新市街は露人か官衙及官吏の住宅區域として新に建設したもので後我國か之を繼承し、依然住宅區として使用されてゐる、而舊市街は大體に於て支那街と日本街とに分れ、支那街は北方山にせまれる一廓を指すものである、支那人は之を上溝といふ、今大正七年度末に於ける旅順市の道路を示せは（日本里）

幅四間以下　七里〇六町四六間
幅六間以下　四里一五町二四間

幅八間以下　一里一五町四八間
幅十間以下　二里一二町〇八間
幅十一間以上　一里二九町二四間
合　計　一七里〇七町三〇間
總坪數　二〇〇、〇二八坪

又旅順は川を挾んて建設されてあるので橋梁の數も相當多い、即ちその數字は四〇箇所を示し延長は三町二九間てある。

道路交通機關としては人力車、自動車、乘用馬車、荷車等を數へ。

年度	人力車			自動車			乘合馬車			荷車		
	自家用	營業用	計	自家用	營業用	計	自家用	營業用	計	牛馬用	手挽車	計
大正四年	一一	四八	五九	—	—	—	六	一〇三	一〇九	一九一〇	二一五	二一二五
大正五年	一二	六九	八一	—	—	—	一六	一〇四	一二〇	一九七三	二六一	二二三四
大正六年	四	八九	九三	—	—	—	二五	八四	一〇九	一九二一	二八六	二二〇七
大正七年	九	一一五	一二四	一	一	二	一五	六四	七九	一九三八	一〇三	二〇四一

尙市街道路は支那二輪馬車の通行を禁し、四輪馬車と雖も二頭以上を以て輓くを得ないこと

に定めた、之等規則は乘合馬車取締令と共に民政署令として公布されてある。

市街道路にはすべて側溝を附し下水は之等側溝の雨水及汚水を集めて海に吐き出す。

旅順戸口統計

年度	戸數			人口		
	日本人	支那人	計	日本人	支那人	計
大正四年	二、一一三	一、五〇六	三、六一九	八、四七八	六、二二〇	一四、六九八
大正五年	二、二〇一	一、六四〇	三、八四一	八、八二三	七、〇八二	一五、九〇五
大正六年	二、一〇二	一、六五六	三、七五八	八、八四五	七、一七八	一六、〇二三
大正七年	二、一〇九	一、六六三	三、七七二	八、七〇七	七、四二五	一六、一三二

官衙

關東廳、同民政部、關東軍司令部、旅順鎭守府、旅順要塞司令部、高等法院、地方法院、郵便局、監獄署、海軍工務部、同工作部、旅順防備隊、關東憲兵隊本部、陸軍倉庫、陸軍兵器支廠、衞戍監獄、海務局支局、旅順民政署、衞戍病院、憲兵分隊、赤十字社滿洲總委員部、東洋協會支部、重砲兵大隊、南滿洲敎育會、市役所、關東州水產組合支部、土木課出張所、

敎育

工科學堂、中學校、高等女學校、尋常高等小學校二、實業補習學校、幼稚園、東洋協會旅順語學校、師範學堂、附屬公學堂、公學堂。

宗　敎

本願寺、淨土宗、新高野山、神理敎會、出雲大社、金光敎、耶蘇敎、日本基督敎等の各出張所及布敎所かあり、其他支那廟宇六箇所にあり、道敎及回々敎等の布敎所もある。

衛　生

病院　婦人病院、旅順療病院、關東廳醫院等の官立外私立病院二と齒科醫院か二箇所ある。

市の衛生事務は市役所に於て之か取扱を爲すことは大連の場合と同樣てある（大連市參照）塵芥は之を市外に搬出して石油を加へて可燐燒物のみを燒却してゐる、屎尿は市役所に於て每年競賣入札に附して支那人農家に請負はしめてゐる、その請負高は每年相場により差かあるか大體一萬四五千圓てある。

當地は南滿洲中氣候好適の地てあるので傳染病患者は非常に少い。

藝娼妓の建康診斷及各種傳染病患者取扱も大連の場合と同樣てある。

水　道

水道は民政署にて之を經營し、水源は之を龍眼、寺溝、大孤山の三箇所に求めてゐる、旅順の水道はすでに光緒五年李鴻章か北洋艦隊の根據と定めたとき龍引泉なる北方一里二十四町の地を水源地とし、鐵管を以て旅順に至つたと云ふかその後露國の大擴張工事あり、尚日本の設置をも加へて現時の水源地を構成した、此の水道工事の爲に日本の費した額は殆んと一三萬圓に達してゐる、大正七年度末に於ける送水管延長四邦里十町一〇間、配水管延長一一邦里二町一六間に及んでゐる。

水道營業統計

種別	大正八年 水栓數	大正八年 需要戸數	大正八年 水量	大正七年 水量	大正六年 水量	大正五年 水量	大正四年 水量
				立方米	立方米	立方米	立方米
給水量 家事用	一、四三六	二、二二四	—	三一七、四四五	三一九、八三四	三三五、四五五	三一六、八七三
給水量 湯屋用	五	五	—	一〇、四八三	九、九六七	九、五八三	七、八六五
給水量 汽罐水槽用	一三	一三	—	三四、一六九	六八、〇六三	七二、五八七	三九、〇一六
給水量 噴水撒水用	六	六	—	一、一二三	三九二	四七〇	四〇八
給水量 船舶用	四	四	—	八、三三八	一三、六一九	一八、七五六	一六、四九九
給水量 其他	三二	三二	—	一、三三二	一、九六四	八七三	三三
給水量 計	一、四九六	二、二八四	—	三七二、八九〇	四一三、八三九	四三七、七二四	三八〇、六九四

專用消火栓用	六六	六六	—	—	—	—	—
公設消水栓用	七九	七九	—	—	—	—	—
計	一、六三二	二、二四九	—	三七二、九三〇	四一三、八三九	四三七、七二四	三一〇、七七四

電氣

電氣も亦民政署の經營に係り、二百五〇キロワット二臺を運轉して電燈及動力用に供給してゐる。

年度	電燈數	電燈口數	動力需用口數	電量 電燈用	電量 動力用	電量 計
大正四年	一〇、二六三	二、〇六九	—	九二〇、九五九	八四、六〇一	一、〇〇五、五六〇
大正五年	一一、六五〇	二、四五〇	—	九七〇、六九三	一三九、八七〇	一、一一〇、五六三
大正六年	一四、四九八	二、五五三	—	—	—	一、二四五、八〇三
大正七年	一五、〇三五	二、六九七	三三	キロワット 六九四、六八六	キロワット 四五四、四二八	キロワット 一、一四九、一一四

通信

旅順郵便局かすへての通信を取扱ひ、市內に三箇所出張所か置いてある、又電話は大正七年度末に於て加入者三八七人、機數四二六を示し、市內に七箇所に自動電話か設置してある。

公園劇場其他誤樂機關

當地は南滿洲まれに見る山紫水明の地て新市街の如きはそのまゝ公園の看かある、公園としては後樂園（面積一〇、一六五坪）新公園（白玉山）及黃金臺下の海水浴場を數へ得るか、新式公園としての設備は何等加へられてゐない、しかし四方を繞る丘陵は悉く往時の戰跡て且つ地は遼東半島の尖端にあるので自然の公園か出來上つてゐる。

其他小演劇場二あり、二六軒の料理店、四三軒の飮食店と共に市民の誤樂機關となつてゐる尙大正七年度末の統計によれは藝妓五九八、娼妓五五八（支、鮮人）酌婦（日本人）一〇六八を示し貸座敷は一六軒ある、遊廓地は特別に限定してはないかすへて支那町に散在してゐる。

市場

	敷地	賣場坪數	出店數	賣上金高 大正八年	大正七年	大正六年	大正五年	大正四年
新市街市場	三五〇坪	一四五坪	九	—	三、四五三円	七、三四四円	二、八六九	二、六五三
魚業市場	六〇八	二九八	二四	—	八三、二〇〇	一〇三、九九五	三七、五五四	二八、一六五
滿洲水產會社旅順支店市場	七五	三三	一	—	九三、六六四	七七、三六七	六九、一七三	二〇、六六三

旅順と海港及鐵道

旅順はその西港を海港として開放してあることは前述した、滿鐵は此處に石炭貯炭場及棧橋を築造して船舶の繋留に備へた、其費用一五七、一五五、八〇圓を算する。

年度	入港 汽船	入港 帆船	入港 計	出港 汽船	出港 帆船	出港 計	輸出高	輸入高
大正四年	二五一隻 二六二、六六一噸	六三〇隻 四、六八一噸	八八一隻 二六七、三四二噸	二五一隻 二六一、八三五噸	六二一隻 四、九〇四噸	八七二隻 二六六、七三九噸	一、二二二、一五六圓	一〇三、九九二圓
大正五年	二三三 二二一、三〇二	八四八 七、九二九	一、〇八一 二二九、二三一	二一四 二〇九、八九九	九〇五 七、一七六	一、一一九 二一七、〇七五	五一九、五三二	一〇八、六七一
大正六年	一七〇 一四〇、五六六	一、三八二 一一、一八五	一、五五二 一五一、七五一	一六三 一四〇、三五四	一、三四四 一一、四五三	一、五〇七 一五一、八〇七	三六九、八四〇	九〇、六二五
大正七年	一八七 一四六、〇九五	一、二七三 一一、八九二	一、四六〇 一五七、九八七	一八四 一四四、六八三	一、二八二 一〇、八二九	一、四六六 一五五、五一二	五七七、四八七	六八、〇五四

以上輸出品中の大宗品は製鹽で輸出額の大部分を占め殆んと輸出の八〇パーセントに達してゐる、殘りは石炭で豆粕、鑛物等は少量である、輸入品は穀物その他の食料品大部分を占め木材も可成に入つて來る。

次に鐵道の運輸成績を見れは。

年次	乗客 乗車人員	乗客 降車人員	貨物 發送	貨物 到著	手小荷物發送	收入
大正四年	五五、七五〇	五四、四〇四	六、六二九噸	一五九、八二四噸	一、五八六、四七〇斤	八七、五〇四円
大正五年	六五、二七六	六四、二五六	七、〇八七	一四五、二〇四	二、一五三、〇九〇	一〇一、八七三
大正六年	七九、九七一	七九、九七〇	一三、〇九五	九七、三九七	三、三六九、九九五	一三七、九〇七
大正七年	九八、九二九	九七、八四七	二〇、〇四六	八六、四六九	二、一六五、一二八	二三三、八八四

發著貨物共に著しいものはなく市民の日用品を主としてゐる。

商工業

旅順は商業地てはない従て大會社はなく、主として日用雜貨及食料品の小賣業者てある、併し工業的には幾何か餘脈ある如く鐵工場、煉瓦工場、食料品工場その他工場を合して一五を數ふることか出來る（關東廳統計）それも資本金五萬圓を越すものはない。

金融

朝鮮、正隆の各支店と旅順銀行本店とかあり、大宗の金融を取扱つてゐる。

年度	貸付金 貸付	貸付金 戻入	貸付金 現在	預金 受入	預金 拂出	預金 現在

大正四年	七七七、六四二	七〇六、七三四	七一、九〇八	四、八二三、三八九	三、七二三、八七五	一、〇八八、五一四
大正五年	七八二、〇〇六	七一八、四七五	六三、五三一	七、七一〇、四一八	六、一〇一、〇七一	一、三〇九、三四七
大正六年	九八五、六〇三	八八三、六八五	一〇三、〇一七	八、五四六、四九八	六、九九四、七三六	一、五三一、七三五
大正七年	二、一三三、六八一	一、八二五、一〇三	二九六、五七八	一八、六八二、二六四	一六、八五九、七六五	二、〇九一、四九九

次に金貸業者は日本人一名、支那人四名あり、大正七年度貸出金額合計僅に三、二六〇圓てある、又質屋日本人合計一六戸あり、大正七年度の貸出金額六七、七四六圓である。

尚郵便局取扱に係る金融狀況は

年度	爲替		郵便貯金			郵便振替貯金	
	振出	拂渡	預入	拂渡	年末現在	拂込	拂渡
大正四年	五〇七、九四一	一五八、八二三	二三五、六八七	一六五、五二四	二六七、七八一	六三八、四五六	三二七、九七五
大正五年	五七七、四六〇	二四三、〇四二	二五一、二六九	二三二、一八四	二九六、四六三	七三八、五四三	一〇三、七九一
大正六年	六三三、六八四	三三六、四五六	二八五、六四五	二一〇、九八七	三四〇、六九八	八五二、三五六	一一六、九三一
大正七年	八二四、八二五	三一九、六八四	三九〇、六七〇	二五六、九七九	四三三、三一五	一、四九〇、一六六	一八二、八五四

第三　金州

南大連を去る二一哩九分金州地峽の咽喉に位し古から關東州内の重鎭として知られてゐた、

その金州なる名稱が始まつたのは金代の貞裕四年で清朝に入つては寧海城と稱してゐた、城壁は乾隆三八年の改築に係り約三年の長年月を費して竣成したものであるといふ、尚清朝の道光年間になつてから再び金州城と稱せられ副都統の駐在地となつた、その後露治時代には撫民府が置かれ、今は金州民政署が置かれてある(今は金州副都統を盛京副都統が兼ねてゐる)。

市街は城壁に圍まれ西に金州灣を控へ東に大和尙山を背ひ一小河が城北を流れて金州灣に注いでゐる、城内は十字形の大街を主とし商家はすべて此處に建てられてある、尙城内は政事上四區に分れ道路はすべて砂礫を以て固め大街は約四間、小街も亦三間の幅員を有つてゐる城内から驛に至る道路は約三間の幅で二五町の延長である、そして驛附近にも人家が群集なしてゐるが大部分農家で市街を形成してはゐない。

大正七年度末に於て金州市街の戶數一、七一〇戶人口八、八二九を示し驛附近に於て戶數八五七、人口五八五七を示してゐる。

官衙及學校その他

金州民政署、尋常高等小學校、實業補習學校、南京書院、普通學堂、廟宇二〇、基督教說敎所三、道教寺院四、私立金州醫院。

交通と經濟

金州は南滿鐵道と金州灣の海陸兩交通路を有する、先づ金州灣に於ける船舶出入狀況を見れば(帆船のみである)

年度	入港		出港		輸出高	輸入高
	隻數	噸數	隻數	噸數		
大正四年	三六七	一、二六〇	三七一	一、二五六	兩 三、六六八	兩 二二、一九九
大正五年	三一二	一、一二八	三一七	一、〇九三	三、八八九	二四、九三二
大正六年	四四七	一、四四七	四五九	一、四六四	八六、七三二	九〇、〇九八
大正七年	三九三	一、一四三	三九三	一、一九七	八八、六八三	九七、五三五

輸出貨物の主なるものは魚介類で輸出高の多少は漁獲の多少に依て決する有樣で輸出の約四分の三以上はそれである、その他には高粱その他の穀物と少量の燐料とあるのみである。輸入品では麥粉、諸器具類がその大部分を占めてゐる。

之等は芝罘その他の渤海諸港との取引で鐵道によるよりも費用及手數に於て大いに省略される勝味がある、然し金州に取つて鐵道も經濟上重要なものゝ一つである、即ち。

年度	乘客		貨物		手小荷物發送	鐵道收入
	乘車人員	降車人員	發送	到著		
大正四年	四三、四三三	四三、一四七	四、一三三噸	一〇、四九〇噸	一〇三、七八四斤	三〇、九七八円
大正五年	五〇、九九六	五三、〇七二	四、〇二八	一〇、三九一	一三〇、七八八	三一、四七三
大正六年	六七、七六八	六九、六五六	七、四九三	一六、七七一	一三三、四四四	四四、一六五
大正七年	八四、〇二九	八五、三八二	一三、六四六	一八、一四九	二九八、一七四	七九、五三一

發送貨物では野菜、果物及包米でその額は共に僅少である、そして到著貨物は麥粉その他の食料品を第一とし日用雜貨が之に次ぐ。

之れに依て見るも金州の經濟は城內及附近村落の一市場たるに止る。

金融機關としては遼東銀行が大正七年度から支店を設けて事務を開始した。

年度	貸付金			預金		
	貸付	戻入	現在	受入	拂出	現在
大正七年	一、三三二、六八二	九九四、八五六	三三七、八〇六	一、八六六、九七二	一、七四一、八八八	九七、〇八四

その他四軒の支那人質屋がある。

年次	前年より越	本年貸出	本年受戻	本年流	本年末現在
大正四年	六,六五九円	一六,九六六	一〇,九二五	二,四三六	一〇,二六四
大正五年	一〇,二六四	一三,九六五	一三,七五三	三,〇一七	六,四〇六
大正六年	六,四六〇	二〇,三三七	一六,九八六	二,九一六	六,八九五
大正七年	六,九七九	二一,三四五	一八,六四〇	三,二一三	六,四七一

次に郵便局取扱の金融狀況を見れば。

年度	爲替		郵便貯金			郵便振替貯金	
	振出	拂渡	豫入	拂渡	年度末現在	拂込	拂渡
大正四年	二七,〇三五	一一,二八一	一五,三三六	一六,六八〇	一八,一三五	三九五,〇四九	一一五,八五九
大正五年	二〇,三六四	一三,四一四	一六,九八二	一五,四七六	二〇,八六六	四六〇,九五一	一三七,〇五六
大正六年	三三,一〇一	一六,九八三	一九,四三三	一四,六三三	二五,六四八	五八一,七四〇	一六四,二二四
大正七年	三四,一三七	三〇,一三五	二七,四七七	一五,六〇〇	三三,五七三	八三四,七三六	一九八,二五六

第四　普蘭店

大連を去る東北四九哩、關東州の境界に位置し、東には大和尙山の支脈たる小岳を背ひ、西は渤海のアダムス灣に臨んでゐる、當地が市街を形成したのは全く滿鐵の經營によるもので往

普普蘭店と稱したのは今の舊普蘭店で明代倭寇臺を築た處が今猶城跡がある、今は金州支署普蘭店出張所があつて政治に任してゐる。

年次	戸數			人口		
	日本人	支那人	計	日本人	支那人	計
大正四年	八八	五一〇	五九八	二八〇	三,四四五	三,七二五
大正五年	九七	五四〇	六三七	二一五	三,九〇五	四,一二〇
大正六年	八九	五七五	六六四	二四八	四,二二六	四,四七四
大正七年	一〇〇	六一三	七一三	三六七	四,四〇五	四,七七二

官衙及學校

金州支署出張所、支那稅關派出所、鐵道守備隊、尋常高等小學校、公學堂、普通學堂。

尙當地には官民合同の俱樂部及小公園がある。

交通と經濟

南滿鐵道の外、東貔子窩に至る自働車があり(貔子窩の項參照)アダムス灣内には帆船の入港するものがある。又復州との交通も當地の經濟關係を重大なる者がある、今鐵道運輸に就て見れは。

年次	乗客		貨物		手小荷物
	乗車人員	降車人員	發送	到著	物發送
大正四年	三一、五七七	三三、一三一	一八、五七三噸	一八、三一七噸	六六、〇三六斤
大正五年	四一、五二四	四五、七三三	三一、五一三	一六、九〇九	七九、四八〇
大正六年	五五、六一九	五五、〇三八	七六、三七八	二一、八八七	九七、四五八
大正七年	七一、五六〇	七〇、四七四	四七、七〇七	二六、八七三	一〇五、〇八〇

今發著貨物に就て見れは鹽最も多く時に或は二萬噸に達せんとすることかある。次は豆粕の六、五〇〇噸て他は大豆、包米等の穀物てある、到著貨物は比較的少く油坊用大豆及麥粉を大宗として他は當地及附近村落に供給する日用品のみてある。

當地の工業としては製鹽業を數ふへく大日本鹽業會社の分局かあり、年額約二〇萬圓に達してゐる、油坊も亦比較的盛て現在工場三戸あり豆粕一〇萬枚豆油約一八萬斤を製出する。

金融　遼東銀行支店の外支那人質屋か四戸ある、その大正七年度貸出金額四、七三六圓、受戻金額三、七九四てある。

今日本郵便局の金融取扱状況を見れは。

年度	郵便爲替 振出	郵便爲替 拂渡	郵便貯金 預入	郵便貯金 拂戻	郵便貯金 年度末現在	郵便振替貯金 拂込	郵便振替貯金 拂渡
大正四年	19,318	16,363	18,808	15,052	17,660	28,910	74,0[illegible]
大正五年	39,851	31,175	18,148	15,229	21,233	285,383	100,6[illegible]
大正六年	35,980	15,948	20,913	17,810	24,549	333,916	86,4[illegible]
大正七年	45,483	27,130	26,640	19,268	30,902	367,503	126,1[illegible]

第五　貔子窩

普蘭店の正東八〇支里、黄海に瀕し前面に長山列島を控へ、市街は海岸に沿ふて東西に通する一條の大街を中心として大小商家皆之に集り、北部は丘陵て住宅及商家の後庭となり、頂上に天后宮かある、街路の兩側は溝渠を設けて下水に便にし各所に共同便所か設けてある。

人口統計

年次	戸數 日本人	戸數 支那人	戸數 合計	人口 日本人	人口 支那人	人口 計
大正四年	66	1,270	1,336	233	7,992	8,225
大正五年	64	1,274	1,338	221	7,885	8,106

大正六年		六六	一,二〇一	一,三六六	二三九	八,二九一		八,五三〇
大正七年		七〇	一,二八七	一,三五七	二四五	八,〇七二		八,三一六

當地には大連民政署金州支署貔子窩出張所あり、市街は之を老爺廟街と云ひ行政上一區域(會)を爲してゐる。

當地は黃海沿岸に於ける大孤山に次ぐ舊港て順治年間より船舶盛に出入し、商業旺盛を極めてゐたか營口の開港と共に年一年と退步して今日の狀態になつてしまつた。

學校　尋常高等小學校、公學堂、普通學堂。

交通と經濟　陸路普蘭店に至る八〇支里の間には貔普自働車運輸株式會社かあつて(資本金四〇、〇〇〇圓、拂込二〇、〇〇〇圓)旅客及貨物の運送を取扱ひ、又普蘭店街から中途て別れ直ちに金州に至る道路もある。

年度	入港 隻數 汽船	入港 隻數 帆船	入港 隻數 計	入港 總噸數 汽船	入港 總噸數 帆船	入港 總噸數 計	出港 隻數 汽船	出港 隻數 帆船	出港 隻數 計	出港 總噸數 汽船	出港 總噸數 帆船	出港 總噸數 計	輸出高	輸入高
大正四年	七三	一,八八二	一,九五五	二三,四〇一	三,四一七	二六,八一八	七三	一,七〇三	一,七七六	一四,四〇〇	一一,五〇三	二五,九〇三	二三五,九九二兩	二四四,九五九兩
大正五年	七二	一,六八七	一,七五八	一四,二〇〇	九,四一六	二三,六一六	七二	一,五四一	一,六一三	一四,二〇〇	一〇,二五八	二四,四五八	六四七,九二〇	二六五,七九二

大正六年	五九	一、六三三	一、九七二	二、七七三	九、五四〇	三三、三五三	五九	一、四三二	一、四九〇	一、七七二	九、〇〇〇	二、七七八	七八、七七七	[illegible]
大正七年	七〇	一、三六三	一、四三三	三、九四六	一、二七三	三一、二二七	七〇	一、二八三	一、三五三	三、九四六	六三四	三〇、二七〇	八三、七四九	二二三、五六六

又貔子窩灣は東西六哩南北六哩の廣袤を有し滿潮時の深さ四五尺干潮時に於ては二〇尺、東南に向つて灣口を開いてゐる、戎克貿易は毎年四、五、六の三箇月殊に五月を以て最盛の期となし概ね上海、芝罘方面から穀物雜貨の輸入多く當地よりするものは大豆、豆粕、鹽、柞蠶等てあるその戎克數多きときは四、五百隻以上の在港するものを見ることかあるといふ、しかし當港は冬季約八〇日間結氷する。

貔子窩は關東州北部の商業地て且つ食鹽の生産地として著はれてゐるか（大日本鹽業株式會社貔子窩分局）その供給區域は北方一二〇支里、東方約八〇支里を出てす從て其輸入品は附近村落の需要に應するに止まるの狀態てある、現在は當地と大連間に汽船（二一〇〇噸）の定期航路かあり一箇月四回往復してゐるか解艀の距離か遠く乘船か不便てある、而船店は之を專業とするものかなく多く油房其他雜貨店の兼業て其數一一を數ふることか出來る。

工業に就いては油坊十三戸と燒鍋七戸とあり、油坊は年製産高豆粕四五萬枚以上、豆油二四

〇萬斤に達してゐる、尙商業組合として鹽業、勞働、料理店、畜産等の諸組合がある、そのうち勞働、畜産の兩組合は支那人のみで組織してゐる。

金融は貔子窩銀行があつて資本金一〇萬圓拂込金五萬圓を以て營業してゐる、今その營業狀態を見れば（大正六年開業）

年次	預金			貸付金		
	受入	拂出	現在	貸付	戾入	現在
大正七年	九五〇、二七四	九二〇、二九九	二九、九七五	四六九、五〇二	三八五、一二七	八四、三七五

そして質屋營業振りは日本人一戸支那人四戸あり大正七年度貸出金二一三、一九八圓を示してゐる、尙郵便取扱の金融狀態を見やう。

年次	爲替		郵便貯金			振替貯金	
	振出	拂渡	預入	拂戾	現在	拂込	拂渡
大正四年	一二七、一七八	八九、九八三	一三、〇六九	九、三七〇	一三、五三六	二四三、七〇〇	七八、七〇四
大正五年	二三、一七三	一〇一、〇〇九	一六、五七三	一一、九七三	一三、九九八	四五〇、〇〇九	一〇一、九五〇
大正六年	三六、二四三	一〇四、八二三	一二、八二一	一五、四一二	一三、三三〇	五七一、九五九	一五二、三三〇
大正七年	六〇、四九五	二三四、九四一	二三、七四九	一三、五〇三	二〇、八九二	九四〇、一八八	二三九、六五一

第六 柳樹屯

大連市の對岸海上約六浬許距てた大連灣内に面した小邑てある、戶數約四〇〇、人口約二、〇〇〇餘、大連民政署の管下て警察署、憲兵分隊、小學校等かある外聯隊及旅團司令部の所在地さして知られてゐる、史傳によれはすてに唐朝時分から高麗人の小漁村か當地に形成されてあつたさいひ、清代に入つて光緒中葉、李鴻章か山東の威海衞さ相俟つて渤海の咽喉を扼する目的を以て此處に砲臺及棧橋を築き、兼ねて水雷營さ銘字軍を駐して以來驟かに一小市街を現出したのてある、今に尚之等の跡かあり棧橋の如きは現在も之を使用してゐる。

大連さの交通の爲に每日四回汽艇の往復するものかある。

第四章　洮昌道管内

第一　遼源縣城（鄭家屯）

四平街の西方五三哩、四鄭鐵道の終點に當り、達爾罕親王の領地に屬し、四圍茫漠たる平原に位置してゐる、市街は、東方に勃克圖山を控へて、東北より西南に横はる、不規律なる街衢より成り、長さ約八支里、南北四支里、城壁がない、商業區は前街後街に分たれ、大小商家七〇〇餘戸道路は比較的寛濶であるが排水溝の設けがない、戸數一、二四〇戸、人口六四、三九一人である、中日本人約三〇〇當地の開放せられたのは光緒二年で、同二十七年遼源州の設置を見、宣統二年には達爾罕親王、當地遼河碼頭を開放して民船の遡航を許し、且つ東方一九五支里なる四平街には東淸鐵道の通過するあつて、俄然其繁榮を加へて來たが更に六國六年十二月四鄭鐵路の開通してからは、水陸の交通を擁さることとなり遂に今日の盛況を見るに至つたのである。

官衙と學校　洮昌道尹公署、遼源縣公署警察署、遼源交涉員署、稅捐征收局、地方審判廳、地方檢察廳、混成第二旅本部、協理蒙古巡邊局、廟宇四、回　寺院一、天主敎堂一、耶蘇敎會

一、官立兩等小學堂、初等小學堂、女子初等小學堂、日本領事館分館、日本守備隊、滿鐵公所

交通　四鄭鐵路を以て四平街及南滿各驛に連絡し又遼河の水路により鐵嶺、新民屯營口に通してゐる、又東蒙に於ける、各地市場へは陸路交通か盛てある卽ち。

白音他拉へ二四〇支里、法庫門へ二四〇支里、懷德へ二四〇支里、昌圖へ二四〇支里、長嶺子へ二六〇支里、洮南へ五二〇支里、營口へ水路一、五二〇支里、陸路七六〇支里。

經濟　當地は八、九年以前に於てすてに、牛馬市場として名か著れてゐたか遼河の碼頭開放と、鐵路の開通とは著しく、經濟的價値を高め、遂に東蒙貿易の首位を得たのてある、當市に集散される、農產物は、高粱、豆類を主とし、粟、包米、瓜子等、年額四三三、七五〇石（大正八年）一二三、九三〇噸に上り、その出廻り地方は、通遼縣下四割、遼源縣下二割五分、洮南方面二割雙山縣下一割、蒙古未開放地五分の比てある、而之等穀物は、次の如く處分せられる。

	大正三年（鐵道未開通）	大正七年（鐵道開通）	大正八年
總出廻高	一〇九、〇〇〇噸	七五、九九〇噸	一二三、九三〇噸
當地消費	三九、〇〇〇	三〇、四五〇	三二、四三〇
移出	七〇、〇〇〇	四五、五五〇	九一、五〇〇

右の移出徑路を見れは。

	大正三年	大正七年	大正八年
水運	五〇、〇〇〇噸	二三、五〇〇噸	三、三六〇噸
鐵道	—	二一、〇〇〇	八八、二〇〇
四平街へ馬車運	六、〇〇〇	—	—
其他へ馬車運	一四、〇〇〇	—	—

以上農産物の外畜産として、牛約二萬頭、馬約七千頭、羊約一萬頭、羊毛約六萬斤、其他牛皮、羊皮、馬皮等大部分南滿各市場へ鐵道により運搬され（精肉として輸出するもの約二〇餘萬斤）蒲棒、凍魚も移出される、次に輸入品は、依然鐵道によるを第一として水路運之に次く鐵道開通以前と以後とを比較すれは。

	大正三年度	大正八年度
總輸移入高	一七、一〇〇噸	二四、二八四噸
水運	九、六〇〇	一、九七一
四平街より馬車運	四、五〇〇	—
其他より馬車運	三、〇〇〇噸	—噸
鐵道	—	二二、三一二

又燒酒、木材類は伯都訥、懷德方面から來る。

工業として、燒鍋一、油房約二〇家、磨房（兼業者共一五〇餘家）等を數へ、大商店は、主に粮棧及雜貨商である。

金融機關は中國銀行支店、交通銀行支店、朝鮮銀行支店、正隆銀行支店、東三省官銀號分行、殖邊銀行支店、當舖九戶、(兼營)の外、帖子を發行する商戶四〇餘家あり、その發行高八〇萬元内外に上り、附近村落は勿論、白音多拉、開魯、雙山縣一帶にまて流通してゐるといふ、銀一兩か八吊百文、小銀貨一元か六吊六百文、銅貨一仙か五五文に換算される。

第二　雙山縣城(板打窩棚)

鄭家屯の東八〇支里、四周は遼闊な平野てある、縣署は民國二年に置かれたので戶數約三〇〇人口約二、六〇〇あり、分防馬隊かあつて警察署と共に防備に任してゐる、外に兩等小學堂一と郵便局かある、當市に集散する穀物は約一〇萬石て大部分鄭家屯に販出され、輸入も亦鄭家屯からされる、金融機關は當舖一あるのみて、鄭家屯の範圍を脫しない。

鄭家屯へ八〇支里、懷德へ一六〇支里、八面城へ一五〇支里。

第三　懷德縣城(八家子)

長春の西一一〇支里、公主嶺の北九〇支里に位置し、東には伊通河の一小支流か流れてゐる市街は、小丘の上に建てられ、城壁を以て圍繞されてゐる、街衢は東西約六支里の長方形て商業殷盛の區を前街といふ、當市は光緒三年の建設に係り、曾つては盛なる對蒙貿易場てあつた

現在戸數約一、五〇〇、人口約一五、〇〇〇、縣署、縣警察署、監獄署、附罪犯習藝所、税捐局東公益地局（達爾罕旗）の外第二十八師歩兵第五六旅第一一一團の本部がある、寺廟と學校、廟宇四、回々寺院、天主堂、福音堂、初等農業學堂、簡易師範學堂、高等小學堂、兩等小學堂初等小學堂、勸學公所。

經濟　對蒙貿易は鄭家屯の爲に、特産物の集散は、公主嶺、范家屯に、その勢を奪はれ、今は附近村落の農産物（約五萬石）とそれ等に對する、小額の輸入貨物あるのみである。

金融機關として當舗三戸あり、帖子は全く流通してゐない、通貨專ら奉天票で吉林官帖も亦流通してゐる。

尚當市には燒鍋四戸、油坊十餘家、磨房三〇餘家あり、藍靛は本縣の特産物として名がある

交通　長春へ一一〇支里、公主嶺へ九〇支里、鄭家屯へ二四〇支里、范家屯へ七五支里。

第四　公主嶺

懷德縣下、南滿鐵道の大驛で市街は、中央の小溝を境として河南街（支那街）河北街（附屬地に分れてゐる、附屬地の總面積二〇〇萬坪、うち市街宅地として貸付けたものが九三一、〇〇〇餘坪公園敷地一六、〇〇〇餘坪、河北街は更に、鐵道によりて、南北の兩街に分れ、此の間

に陸橋を架設して往來に便してゐる、線路の北は諸官衙及社宅で南は支那街と共に商業區を爲してゐる、その道路は六間乃至十五間で延長五、三〇〇間に達し、路面には砂利を敷き、側溝は木造で北方に支那馬車專用道路を設けてある、又排水溝の設備も完全てその延長か一、六〇〇間に及ひ、下水管は各戸を聯ねて延長六、〇〇〇餘間ある、（總經費六二二、九五五但し造營物を除く）

年次	戸數 日本人	戸數 支那人	戸數 合計	人口 日本人	人口 支那人	人口 合計
大正四年	六二二	七三六	一、三五八	一、八二七	三、三五八	五、一八五
大正五年	六六九	五九三	一、二六二	二、〇三五	三、七〇二	五、七三七
大正六年	六四八	九七五	一、六二三	二、一三〇	六、三六二	八、四九二
大正七年	六九三	九七五	一、六六八	二、一二八	六、四四九	八、五七七

右の外、河南の支那街に於ては戸數約六〇〇、人口約三、五〇〇、ある。

故に公主嶺の總人口は、一二、〇〇〇人に達してゐる。

官衙及學校、警務署、憲兵隊、地方事務所、滿鐵尋常高等小學校、滿鐵病院分院、（以上河北）懷德縣派遣交涉局、鹽稅局、巡警分局、稅捐分局、兩等小學校（以上河南）、外佛敎布敎所四、

公學堂一、滿鐵産業試驗所等がある、(私立病院二)。

水道は鐵道給水の外市内戸口にも供水し、(大正七年度給水量合計二二〇、五〇一立方米)又電燈會社も、滿鐵と出資關係を以て經營されてゐる(資本金五、〇〇〇圓拂込二五、〇〇〇圓)(發電機七五キロワット一臺)。

交通と經濟　陸路は、懷德(九〇支里)伊通州(九〇支里)兩地に通ずる大道を主たる者とし、南滿鐵道公主嶺驛の價値は此二路によつて略ぼ定るのである、今公主嶺驛に於ける成績を見れば次の如くである。

年次	乘客・貨物 乘車人員	乘客・貨物 降車人員	乘客・貨物 發送	乘客・貨物 到著	乘客・貨物 手小荷物發送	收入 車賃	收入 貨	收入 座席料	收入 手小荷物及郵便物賃	收入 其他	收入 合計
大正四年	九五、三三〇	九五、〇四〇	一三八、七〇〇	八九、四九三	一〇三、三九八	九三、〇三二	九〇九、六六八	四七	一、八七八	三六、五三二	[illegible]
大正五年	一〇九、一九九	一〇七、〇九六	一三〇、四〇八	八八、五五一	一三一、三六四	一〇五、七七[illegible]	八五七、八七九	四〇	三、三九一	三八、一二五	一、〇〇三、一〇[illegible]
大正六年	一三八、三六八	一三一、四七六	一四八、九一六	九三、六七五	一九四、四〇八	一三八、五九九	九八七、九六〇	一一六	二、九五三	四四、六二八	一、一六三、二五五
大正七年	一五七、〇八八	一五三、三四七	一五四、一一三	一〇六、七五三	一八二、一〇三	一七〇、三〇[illegible]	八〇一、七八[illegible]	[illegible]	五、七〇九	四一、一四[illegible]	一、〇五九、〇四三

當市は農産物の販出地として長春に次ぎ、就中大豆は其大宗である、而その來市區域は北部朝陽坡、黒林子、小城子、楊家大城子、懷德、小雙城堡、南部二十家子、苇山屯、伊通、雙陽

等て當市て消費されるのは約二割てあるといふ。

金融機關　東三省官銀號、安東銀行支店、正金銀行出張所、當舗支二八、日一一、金貸業者日本八二。

第五　范家屯

懷德縣下、南滿鐵道の一驛て、長春の南一八哩八分に位置してゐる、當地は全く鐵道開通以後の建設て市街は附屬地のみてある、大正七年末の戸數は、二六八、人口二、五六五を示してゐる、尙當市には范家屯銀行（資本金一〇萬圓拂込五萬圓）かあつて金融に當つてゐる、穀物は、雙陽、八家子方面から集るもの相當の多額に上り公主嶺に次く集散地てある、今鐵道による旅客及、貨物の運輸狀況を見れは、次の如くてある。

年次	乘客 乘車人員	乘客 降車人員	貨物 發送	貨物 到著	手小荷物發送	收入 乘車賃	收入 貨車賃	收入 座席料	收入 手小荷物及郵便物賃	收入 其他	收入 合計
大正四年	四〇、一六五	二八、〇九二	六三、五〇七	一三、六六六	四、一〇五	一九、五七六	四七一、一二四	—	一三一	一九、八七三	五一〇、七二二
大正五年	五一、六九九	四九、八〇八	八二、〇〇九	一七、三二九	二六、〇〇五	二五、九八六	五九四、九〇一	—	一一七	二六、八〇七	六四八、〇二一
大正六年	八〇、三三七	八二、三〇三	九二、六六四	一九、二三九	一七、八七三	四三、三三九	六四一、八〇五	三六	三八〇	三九、六六五	七二五、〇二三
大正七年	一〇六、七八一	一〇一、三九九	八三、二三四	一八、〇二三	三七、九〇二	五八、九二一	六一四、〇七九	—	九〇一	二七、二〇四	七〇一、一五五

第六　梨樹縣城（買賣街）

四平街の北三五支里、達爾罕旗領に屬してゐる、市街は土牆を以て圍まれ、井字形である、商區は東西の大街及南北大街で就中東街か殷盛である、當市は前清道光の始めからすでに分防地となつてゐて光緒四年に獨立して奉化縣となつたのた、現在戶數一、七〇〇人口約一萬人。

官衙及學校　縣署、縣警察署、稅捐局、西公益地局（達爾罕旗）郵便局、師範學堂、兩等小學堂、簡易識字學塾、廟宇三、回々寺院一。

經濟　當市は夙に買賣街として商業頗る盛であつたか鐵道開通以後、四平街に壓倒され、昔日の面影は全く見られない、唯四周村落を顧客とする輸出入品の小市場たるに過ぎない、即ち穀物は、大豆、高粱を大宗とし、一〇萬石を越ね約半額を輸出してゐる。

當舖二戶あつて金融機關となり有力商舖五、六戶か帖子を發行してゐる、通貨は奉票で小洋一元か六吊六百文である。

交通　四平街へ三五支里、郭家屯四〇支里、八面城六〇支里、公主嶺一八〇支里。

第七　郭家屯

梨樹縣下、南滿鐵道の一驛で、特產物の集散地として知られてゐる、戶數二四一、人口一、

二〇九（大正七年末）。

當市には日本の獨立守備隊兵營があり曾つては、日露戰役の終期兩軍對陣の際に、露軍總司令官リウキツチ將軍の駐營した所である。

年次	乗客 乗車人員	乗客 降車人員	貨物 發送	貨物 到着	手小荷物發送	收入 乗車賃	收入 貨車賃	收入 手小荷物郵便物賃	收入 其他	收入 合計
大正四年	四〇、二二一	三七、四五六	四三、四五〇	一四、五九八	一〇、五七〇	三五、四四〇	三〇七、四八七	四四九	一三、九五八	三五七、三二四
大正五年	四三、八五三	四一、〇四七	三八、七六四	一三、九〇五	一一、六三七	二九、〇六三	二五九、五七七	三八〇	一三、一五三	三〇二、三六三
大正六年	四九、六五六	四五、五四三	三七、八〇九	一四、三〇八	九、七〇二	三三、六五二	二三〇、一一七	三八三	一二、七七四	二七七、五〇八
大正七年	五三、六八一	四九、三九三	三〇、三〇七	一六、八一三	八、一一三	三七、四四七	三〇七、三六八	六八三	一〇、五一六	三五五、八一四

第八　昌圖縣城附昌圖停車場

四平街の南一一〇支里、南滿鐵道昌圖驛の西二〇支里の所にある、市街は城壁を以て圍まれ城内の街區は不規則である、商舖のあるところを東西街といふ、元來當市は蒙古博王旗領に屬してゐるのたが嘉慶年間、漢民の移住を許してから次第に繁盛になつて光緒二年遂に知府を置かれるまてになつたのてある、現に戶數一、三〇〇人口七、〇〇〇に達してゐる。

官衙と學校　縣署、警察署、博王旗總理府、稅捐局、電信局、簡易師範傳習所、兩等小學

堂、初等小學堂、廟宇二。

交通と經濟　當市と昌圖驛を聯結するものに輕便鐵道かあり、日支同辨の昌圖公司か之を經營してゐる、しかし貨物は大てい馬車て驛に運はれる、各關係市場への距離は、四平街へ一一〇支里、通江口へ七〇支里、法庫門へ一六〇支里、八面城へ一二〇支里、金家屯へ五〇支里ある。

當市は元と縣下特産物の集散地てあつたか今ては鐵路各驛に奪はれて、その範圍か非常に狹められた、近來の來集穀物は大豆高粱を大宗とし豆油及豆粕等も昌圖驛から輸出されてゐる、輸入品は主として營口から仕入れ、葉煙草、蔴は吉林から來る、金融機關としては東三省官銀號分號の外當舗二戸あり、有力商家か帖子を發行してゐる、そして奉票及日本紙幣か通貨てある、小洋一元か八吊四百文。

昌圖停車場　大正七年に於て戸數一四二、人口六七一てあるかその運輸狀況は昌圖縣城の經濟的狀態をも語るものたから左にそれを提けて見る。

年次	乘客 乘車人員	乘客 降車人員	貨物 發送	貨物 到着	手小荷物發送	收入 乘車賃	收入 貨車賃	收入 手小荷物及郵便物賃	收入 其他	收入 合計
大正四年	三〇、七一八	三一、七〇七	四三、五〇七噸	一五、五五六噸	二六、六八八斤	二五、七九九	一三四、三四九	五三一	五、五一〇	一六六、一八九

大正五年	二九,七五二	三二,一五八	四〇,二六〇	一二,九七〇	二〇,八九八	二四,〇五九	九九,一五五	一七九	四,七九一	一八四,五五八
大正六年	三六,九三六	三八,九九三	三三,九七四	三三,七七五	八九一	二四,八三五	一二六,四四二	四四三	八,一五七	一九九,八七五
大正七年	三三,〇四八	四四,二二六	三八,七五九	三二,二四五	三六,〇二〇	三三,八八七	三二一,四二三	七六四	一一,八六〇	三五六,六七二

第九　鷲鷺樹と雙廟子驛

昌圖縣下、雙廟子驛の西一五支里、戸數約三五〇八口約二、五〇〇　　、近時四平街に商業の三分の二を奪れたか尚大豆高粱等の集散かある、特に燒鍋は割合に盛て四戸て年額約五〇萬斤に達するといふ

今雙廟子驛に於ける、運輸狀況をみれは、(雙廟子驛人口九〇〇)。

年次	乗客		貨物		手小荷物發送	收入				
	乗車人員	降車人員	發送	到着		乗車賃	貨車賃	手小荷物及郵便物賃	其他	合計
大正四年	二五,一六一	二四,四〇七	噸 二六,八六五	噸 一一,七三六	斤 五,九九七	一五,五五一	一五八,三〇五	一九六	六,六八九	一七八,三〇三
大正五年	二六,二六三	二四,六七七	二四,一三六	九,一六〇	九,一三四	一七,四四七	一三五,二三八	二三一	七,七五八	一六〇,七六八
大正六年	二九,六四二	二七,八九六	二五,四四一	九,〇五二	五,二一〇	二〇,二九五	一四七,五七九	一八四	八,一九六	一七六,二五五
大正七年	二二,九六一	三二,七七六	一九,七九五	一〇,〇六五	一〇,九七二	三三,六九〇	一三三,二〇八	二七三	六,九四八	一五三,一一九

第十　四平街

奉天の北一〇七、六哩、四鄭線の分岐點て、市街は附屬地のみてある、その面積七萬四千餘坪、道路は幅三間乃至十間、延長六、〇〇〇間に達し排水開渠、道路側溝等の設置よく墓地、火葬場の設備さゝのつてゐる、滿鐵か此市街經營の爲に要せる、總經費は、大正七年末まて三一五、〇八三圓に達してゐる、左に人口統計を提けて見る。

年次	戸數			人口		
	日本人	支那人	計	日本人	支那人	計
大正四年	二三四	六八九	九二三	六二九	五,一〇九	五,七三八
大正五年	三三一	七七九	一,一一〇	九七九	五,一九〇	六,一六九
大正六年	五九四	一,七三二	二,三二六	一,七八六	一一,四〇九	一三,一九五
大正七年	五四〇	一,四〇六	一,九四六	一,七五三	七,四二七	九,一八〇

官衙と學校　守備隊、郵便局、滿鐵地方事務所、小學校、公學堂（以上日本）四鄭鐵路局、郵便分局、鹽務分局（以上支那）。

經濟　南滿鐵路と四鄭鐵路とを控にて而も四方に、穀物の集散場を持つてゐるから、その經濟的價値は非常に大なるものかある、今南滿驛に於ける旅客及貨物の運輸狀態を見れは。

年次	乗客		貨物		手小荷物
	乗車人員	降車人員	發送	到着	發送
大正四年	八一、八〇五人	八三、五〇三人	三二、七五四噸	五一、七三四噸	七、一〇一
大正五年	九四、五二〇	九四、六二〇	三二、七七七	七二、四七八	一二、二五八
大正六年	一三四、一二七	一三七、八六一	三三、七九九	二四、六八五	一五、六八七
大正七年	一五三、一三一	一五四、二七〇	一七八、七六〇	二八、三七七	四三五、三三六

而重要貨物は、大豆、高粱、粟、豆粕等を輸出品とし輸入品は、石材、木材、鹽、野菜類、麥粉、綿糸布、砂糖等を數へ得る。

金融機關　朝鮮銀行支店、四平街銀行（資本金百萬圓拂込三〇二、五〇〇圓）奉天興業總銀行支店、殖邊銀行。

第十一　八面城

昌圖縣下、四鄭線の一驛て、四平街の西五五支里、鄭家屯の東一四〇支里に當る、市街は延長十支里の大街より成り、街路は廣濶てある、戸數約二、〇〇〇人口約一五、〇〇〇官衙と學校八面城分防照磨衙門、巡警局、税捐分局、博王旗地局、兩等小學堂、寺廟一。

經濟と交通　當市は古來より長春、新民府間の大市鎭として、名あり近時、四鄭線の開通と

共に益々その商業的價値を高め、四周農耕地から集る穀物は高粱を筆頭とし、大豆、粟、小麥等年約十五萬石に達し輸入も年額四〇萬元を算するといふ、市内には大小の商家二〇〇餘あり糧店、油房、雜貨商かその大なるものである。

金融機關としては、當舖四戶あるのみであるか有力商家か帖子を發行して之を助けてゐる、通貨は奉票か大部分である。

第十二　通江口(同江口)

昌圖の西南七〇支里、法庫門の東北九〇支里、遼河の左岸に位置し、南北に大街一條を通し商家は仲々宏壯なる建築物はかりてある、戶數約一、〇〇〇人口約五、七〇〇。

官衙と學校　巡警分局、税捐分局、鹽税局、河防警備、藝徒學堂、兩等小學堂、耶蘇敎堂、公學堂。

經濟　當市は曾つて遼河最上流の埠頭として穀物の集散年七八十萬石に上り營口間を通ふ船舶も二、三〇〇隻に達してゐたといふか、後上流埠頭の設けらるるに及ひ頻る沈滯し、現時は、大豆三萬石、雜穀二、三萬石を算するに過きないと曰はれてゐる、輸入品も、營口を主とし少量の雜貨を鐵嶺から販入して來る、此年額約三〇萬元、而市内の主たる商家は船店、糧店、雜貨

商等てその數約四〇家てある。

交通 昌圖へ七〇支里、法庫門へ九〇支里、鐵嶺へ九〇支里、金家屯へ五〇支里、康平へ七〇支里、營口へ水路千餘支里、下航五六日乃至七八日にして達する。

第十三 金家屯

長春より新民屯に至る大道上に位置し市街は一條の街衢から成つてゐる 戶數約七〇〇、人口約五、〇〇〇に達してゐる。

當市は光緒初年から蒙古貿易か盛に行はれ、近時開原に商勢を奪はれたけれとも尚農產物の來集額一二萬石に上つてゐる、之等は輸入品と共に大てい通江口經由の遼河水運による、當市から各關係市場への距離を示せは。

昌圖へ五〇支里、康平へ七〇支里、通江口へ五〇支里、八面城へ一一〇支里、開原へ九〇支里、法庫門へ一三〇支里等てある。

第十四 法庫縣城(法庫門)

鐵嶺の西北九〇支里、西北に鐵壁山及法庫山を負ふて南には遼河の支流砂河を控ねてゐる、東西三支里、南北に通する二條の大街か主街衢を爲してゐる、戶數約三、五〇〇、人口約二四、

○○○。

官衙と學校寺廟　縣署、縣警察署、章京衙門、統捐局、郵便局、電報局、（法庫衛生醫院がある）、師範傳習所、高等小學堂、兩等小學堂、敎會設立師、範女學堂、格蒙小學堂、回々敎設立清眞兩等小學堂、廟宇二、耶蘇敎會堂、回々寺院。

交通と經濟　昔から北滿各市場と奉天とを聯結せる、法庫道（草道）の要衝として知られ蒙古貿易か盛てあつた。今陸路の交通頻繁なものは昌圖に至るものと三面船の遼河埠頭に至る二道てある、三面船は當市の南八〇支里て、奉天、新民屯、鐵嶺の陸路交通も盛てはあるか解氷期に於ける水運の旺盛なるには及はない、三面船から營口まては普通五日間て達することか出來る。

現時、當市の商業範圍と認むへきものは、管内及康平彰武二縣、博王、賓圖二旗の各一部地方に局限されたか、穀物は倘輸出額一二萬石に達し、豆油、麻油、豆粕、曹達、麻餅等も輸出品として相當の額に上つてゐる、輸入品は砂糖、茶、葉煙草等約三〇萬斤に達し綿糸布、陶磁器紙類、石油等を主としてゐる、その販出入徑路は大部分、三面船經由の遼河水運により、鐵嶺奉天との關係はあまり大なるものてはない。倘當市には毎日、菜市、柴市、牛馬市糧市等か

開かれる。

金融機關　當舖一（資本五十萬元）勘定の決濟には、營口の卯期に於て過爐銀を以てする習慣である、通貨は奉票の外支那銀行劵及當市の帖子かある。

第十五　康平縣城（康家屯）

法庫門の北六〇支里、東南北の三面は底い丘陵に圍まれ、西に沼澤を控へてゐる城壁のない小市街である、戸數約三〇〇、人口約二、四〇〇。

官衙寺廟及學校　縣署、縣警察署、税捐局、廟宇三、天主堂、福音堂、回々寺院各一、兩等小學堂、女子小學堂、圖書館。

經濟　甚た蕭條たる小都邑て商況も微々たるものである、從て輸出入共擧くるに足るものかないか、その販出入徑路は法庫門と新民屯てあることを記して置かう、金融も有力商家て帖子を發行してゐる外稱すへきものかない。

當地からの交通路は、法庫門へ六〇支里、新民府へ二〇〇支里、鄭家屯へ一八〇支里、博王府へ一五〇支里、哈爾沁屯へ七〇支里等てある。

第十六　哈拉沁屯

康平の西南六五支里、賓圖王府の東北七〇支里の地點に位置し市街は丘陵の中腹にあり、延長約三支里、商區を東街といふ、戸數約一七〇、人口約二、〇〇〇餘、賓圖王府官吏出張所と康平縣の分派せる税捐局あるのみである。

經濟　當市は、賓圖、博王兩旗の蒙古人區域に對する第一線として對蒙貿易か盛てある、大小の商舗約六〇戸蒙古人を顧客として、小撥子までも派遣してゐる、從て來集貨物は蓄産を主とし穀物之れに次く、輸入品は輸出品と共に法庫門及新民屯を販出入先とし、當市産出の燒酒（約二〇萬斤）麥粉（約八萬斤）豆油若干は大半蒙古人に供給してゐる、金融機關當舗二戸て大商店ては帖子を發行してゐる、當市から新民屯へは一六〇支里、法庫門には九五支里て達する。

第十七　通遼縣城（白音他拉）

鄭家屯の西方二四〇支里、一眸千里の平野中に位置し、東西五支里、南北二支里半、面積一二方地、周圍に七尺はかりの土壁を繞らし、街衢は大街基の井字形なるを中心として小街基か多數入り交つてゐる、東西に貫く中街と稱するのか繁盛なる商區を爲してゐる、當市の開放は民國元年を以て始まり、民國四年の大水害の爲、大損害を受けたか爾來、著々として發展に向

ひ、最初大街基一丈の拂下價格、小洋一五元六角四分のもの現在にては五千元を稱するに至つた。戸數も一、〇〇〇あり人口は實に一二、〇〇〇に達してゐるといふ（中、日本人二五名、日本赤十字施避病院あり）。

官衙と學校　通遼縣署、縣警察所、税捐局、郵政局、電話局、電報局、後路巡防馬隊、蒙荒營　荒務局、男女國民學校。

交通と經濟　當地は西方一八〇支里の開魯と東方二四〇支里の鄭家屯との中間に位し對蒙貿易の大市場として、輸入品の集散を以て生命としてゐる。（莫力廟へ六五支里、達爾罕王府へ一〇〇支里、卓哩克圖王府へ一二〇支里）最近商務會の調査によれば綿絲布、砂糖、石油、燐寸煙草、茶、木材、麥粉等、年額一七〇萬元に達するといふ、しかし近頃は、附近開墾事業の進捗と共に農産物の來集も次第に多額に上り高粱、（一〇〇、〇〇〇石）粟、（二一〇、〇〇〇石）大豆（二〇〇、〇〇〇石）包米（二〇、〇〇〇石）を主として、年額約二二五、〇〇〇石に達し、其の約半額三萬噸を輸出してゐる、此の外、蒙古畜産牛馬、羊、獸毛、獸毛及甘草（年約二萬斤）の集散も多額に上り輸移出年額穀類を合して一八〇萬元であるといふ。

以上貨物の輸出入徑路は、鄭家屯經由を第一とすることは申すまでもない。

金融　機關として當舖六戸ある外、鄭家屯の慶奮銀行（巡閲使經營）支店かあつて貸出しを行つてゐる、東三省銀號及儲蓄會もあるといふ、之等銀行及當舖は有力商家と共に帖子を發行してゐて、現今市中に流通してゐるものか約四〇萬元に達してゐる、その危險なるを見て官廳は之か流通を禁止したかまたその效か現はれない。

第十八　瞻楡縣城（開化鎭）

開通縣城の西一〇〇支里、民國四年南方二五支里なる六家子から移轉したもので戸數約五〇餘、人口三〇〇に過ぎない、蓄産も農産も殆んどなく、唯甘草か年約一萬斤も出るといふので名かある、縣署にも警察署か置いてない程た、四方は茫々たる平原である。

第十九　開通縣城（七井子）

洮南の東南一五〇支里、鄭家屯に至る大道上に位し、附近、城の産出かあるので土地は肥にてゐない、戸數約二〇〇、人口約一、〇〇〇に達してゐる、縣署の外稅捐局、遊擊馬隊、郵便局、初等小學堂等かある、當市は、農産物の來集するものなく唯附近蒙古人の持つて來る蓄産と彼等を顧客とする少量の輸入品あるのみてある、之等輸入品は大てい鄭家屯から來るか一部洮南經由伯都訥から來る、鄭家屯までは三七〇支里て達する。

第二十　洮南

鄭家屯の北方五三〇支里、洮兒河の南岸五支里に位置し、東蒙に於ける政治經濟上の一大中心地てある、その開放は光緒二十八年て現市街は、方五支里の土墻を以て圍まれ街衢は其北半部にあり、南北に通ずる一條の大街を中心として商家か立ち並んてゐる、戸數約二、〇〇〇人口二、五〇〇〇。

官衙及學校　縣署、警察署、第二十九師司令處、騎兵、第五八旅司令處、地方審判廳、地方檢察廳、稅捐局、電報、郵政局、荒務局、廟宇四、天主堂、耶蘇教堂、男子高等小學、女子國民學堂。

交通　當市から各地方に至る交通路を擧くれは次の如くてある。

長春五〇〇支里、安廣へ一七〇支里、農安へ四一〇支里、大賚縣へ一七〇支里、伯都訥へ四二〇支里、鄭家屯へ五二〇支里、東烏珠穆王府へ九〇〇支里、札賚特王府へ三五〇支里、札薩克圖王府へ一八〇支里、圖什業圖王府へ二四〇支里。

經濟　當市の商圈は甚た廣く、哲里木盟の北部一帶に亙り、南は開通、北は嫩江、西北は遠く興安嶺、西は突泉一帶から牧畜盛なる烏珠穆沁に及んてゐるから、農產市場としてはかりてなく畜產市場としても名かある、從來は齊々哈爾方面から雜貨を移入してゐたか、今は反對に、

齊々哈爾方面に雜貨を移出し農產物は反對に移入を見る樣な狀態てある。

當地の穀類出廻り高は高粱を主として約一年二五萬石內外に達しその二割は鄭家屯に販出し畜產は牛（東西札魯特）を筆頭として馬（烏球穆沁）羊等の集散かあり、馬は南滿地方に、牛は、齊々哈爾方面に販出されてゐる。

輸入は全部鄭家屯て、只麻、葉煙草は長春から、吉林材は伯都訥から蒙古材は北山即ち索倫山から來る、以上を通し輸出入總額四五〇萬元に達し內七割は輸入品てある。

金融機關　中國銀行、東三省官銀號の各支店、普通當舖、協濟錢號、通貨は、奉票、吉林官帖、江帖等て當市の帖子は二三大商家發行の若少額を數ふるのみてある。

第二十一　洮安縣城（白城子）

洮南の北方六〇支里、札薩克圖旗領に屬し、昔時、遼の泰州の故跡てあるといふ、平原の中に方二支里の土牆を築き、城の內外に農家一〇〇餘戶商家一〇餘戶あり、縣署、稅捐局の外陸軍二十九師第七營か駐屯してゐる　當地は全く洮南の商範圍に屬し大興公司（資本六萬吊文）か布疋雜貨を商ふてゐるはかりてある、そして奉票の一元は七吊四百文とし銅貨一仙か六〇文てある、當地から樞要地への交通里程を見れは次の如くてある。

洮南へ東道六〇支里、西道七〇支里、格根廟へ一二〇支里（第二十九師第九營駐在す）安廣へ一八〇支里。

第二十二　安廣縣城

洮南の東一七〇支里、平原の中に、七〇餘戸の人家あり、五〇〇はかりの人口を數ふることか出來る、當地は蘇鄂公旗に屬し、農產及畜產の少量か出る外數ふへきものかない、縣署、巡警局、步兵一營本部等駐在してゐる。

第二十三　鎭東縣城（察乾諾爾）

洮南齊々哈爾間の大道上にあり、洮安よりは東北八〇支里蘇鄂公爺府の東一〇〇支里に位置し方二支里の土牆に圍まれ八〇戸はかりの人家と、四〇〇の人口とを有してゐる、城內には縣署の外、步兵一營あるのみて、人家も大半は農民てある。

第二十四　突泉縣城

洮南の西二〇〇支里、圖什業圖王府には南四十支里て達することの出來る位置にある、馬賊の襲來か頻繁なので今ては三〇戸くらひの人家かあるはかりてある。

縣署の外、騎兵第五八旅第一一五團か駐在して、地方の警備に任してゐる。

第二編　吉林省

第一章　吉長道管内

第一　吉　林（船廠）

吉林省の主府で吉長線の終點、開市場である。市街は松花江に臨み東西に延ひ、その長さ十五支里南は丘陵に北は平野である。城壁は江岸を除ける三方面に設けられ、その延長約七支里、主要道路に通して九門を設け城外にも人家か鮮くない。河南街と北大街とか繁盛の區で全人口約一〇萬人と稱してゐる。（中日本人約四五〇人）大道路は概ね兩側を人道として溝放兼用の木板を敷き中央を車道としてゐる。車道は砂利の敷込充分てないので雨天には甚たしい泥濘と化する、そして北大街には車道人道の區別かなく街路一面に木材か敷きつめてある。當地は乾隆十五年寧古塔將軍を移して吉林將軍を稱してから、著しくその名か著はれ光緒三十三年以來民政を布かられることになつたのである。そして明治三十八年に協約により開市場と定められた。

官衙——吉林督軍公署、同省長公署、交渉署、延琿鎮守使署、財政廳、教育廳、實業廳吉黑

権運局吉垣分局、稽核處、高等審判廳、高等檢察廳、吉林地方審判廳、吉林地方檢察廳、第一監獄、省會警察廳、吉林縣公署、吉林陸軍第二混成旅司令部、鹽務局、國稅局、電報局、一等郵局、日本總領事館、露國領事館、諮議局。

學校と寺院——高等、兩等、初等三小學堂、中學堂、師範學堂、實業學堂、女學堂、陸軍學校、巡警學校、法政學校、習藝所、工藝教養所、ローマカトリック教會、ペロテスタン教會、萬國基督教青年會。

交通——當地は吉長鐵路(延長七九、一四哩)により長春と通し松花江の水運により上は朝陽鎮より樺甸地方に、下は伯都訥哈爾賓に通ずることが出來る、そして數隻の汽船が引舟をして吉林から下流を航行してゐるが、貨物の大部分は民船に依つて運ばれてゐる。そして冬季は橇を通する、今陸路による各地への道路距離を見れば、長春へ二四〇支里、烏拉街へ七〇支里、樺甸へ二七〇支里、延吉へ七六〇支里、樺甸へ一九〇支里、伊通へ二五〇支里、その他東部を除く外凡く馬車を通ずることが出來る、(滿蒙旅嚢、北滿資料)。

經濟——輸出貨物に就て之を見れば、著名なる葉煙草を大宗として年額四〇〇萬斤六〇萬元にして營口、長春、奉天に販出し次きは麻て年額一〇〇萬斤に達する、その出廻期は葉煙草と

同様冬季て輸出先も亦同様てある。又當市は明朝から造船所として知られたたけありて著名な木材の集散地てある。吉林、黑龍江及長春方面に供給し、松花江の流を利用して販出してゐる、その數量丸太四〇萬本に達すると云ふ、その他藥材（一〇萬斤以上）烏拉草（吉林特產物て約二〇萬斤）、毛皮類（野獸の毛皮多く約七五、〇〇〇枚）蘑菇（二〇萬斤）藍靛（一〇萬斤以上）穀類（一五萬石）等かある。しかし穀類は多く當地て消費される。（北滿洲、北滿資料）

輸入品は依然布疋類を以て第一とし年額一一五萬疋に達し、砂糖も逐年その額を増し南支那から營口を經由するもの多く、年額五〇萬斤內外てある。その他茶（一〇萬斤江南地方）棉花（約八萬斤）石油（約三萬箱）燐寸（約一〇萬箱）洋臘（約二萬箱）雜貨等を數ふることか出來る、之れはすへて吉長線に依るものてあることは申すまてもない。（北滿資料）

工業——油房は多く穀物商又は雜貨商の兼營て三六戶ある、製產年額豆油約一四三萬斤、豆粕約六〇萬斤、そのうち豆油の六〇萬斤は奉天地方に販出される、又麻油專搾の油房か三戶あり麻油年額約四六萬斤、麻粕六萬餘箇內麻油五、六萬斤は哈爾賓地方に販出する。（北滿資料）

磨坊は市內に三〇餘戶あるか尙哈爾賓から麥粉を輸入してゐる始末てある、その他甎窰十二戶ありその製造陶器は松花江下流に供給してゐる。

電燈――官辦て吉林電燈處と云ふ。

金融機關――永衡官銀行（大正七年十一月末に於ける貸出約一九〇萬元、發行紙幣大洋票一二〇〇、〇〇〇元（準備金四〇萬元）、小洋票八百萬元、官帖三千萬元）、中國銀行分行（大正七年末預金二五萬元、貸出一四〇萬元）、交通銀行分行（大正七年末預金二五萬元、貸出一一萬元）殖邊銀行支店（大正七年末預金三〇萬元、貸出三五萬元）裕華殖業銀行（資本小洋一〇〇萬元、拂込約三〇萬元）朝鮮銀行支店、日支合辦吉林倉庫金融會社（資本二〇〇萬元）、東省實業公司出張所、錢舗三〇餘、當舗二〇餘。

通貨は各種硬貨の外、中國交通吉林官銀號三行の發行に係る大洋票及以上三行と殖邊銀行との發行なる小洋票、官銀號發行の官帖、朝鮮銀行券、日本銀行券、正金銀行券等ある。（調査報告第四卷）

娯樂機關――旅館一一〇、飲食店一二六、喫茶店一七、湯屋一四

第二　樺皮廠

吉林縣に屬し吉林の西七〇餘支里、吉長鐵道樺皮廠驛の南約五支里にある、市街は東西約六町、南北一町て道路は東西に通し西端に約二〇〇坪の廣場かある。吉林権運分局、統捐局、警

察分所、國民學校等かあり人口約、四五〇〇人。

交通と經濟――街から驛までは一定の道路かないか冬期は扒犂交通の爲に自然に大道路か生するといふ、元來當地は吉林を發し德惠縣に至る道路及缸窰を發し吉長街道馬家嶺に出る街道の交叉點て、鐵道によれは吉林へ二一粁五九、頭道溝へ五七粁五五てある。（缸窰へ一〇〇支里烏拉街へ五〇支里）

當地は吉長沿線中間の大街てはあるか輸出入貨物はあまり多くはない、唯冬季各地商人の入り込むものかあつてやゝ商業に活氣を呈するのみてある。油房の如きも當地にて消費されるたけてある。

第三　烏拉街（打牲烏拉）

吉林縣下にあり吉林を去る北七五支里、松花江の右岸、廢頽せる牆壁かあつて商家は西門外にある。城内には官衙及各旗の住宅かあるはかり他は耕地となつてゐる、戸數約五〇〇、人口約四、〇〇〇餘、巡警分局、兩等小學堂、郵便局、稅務分局等かある、廟宇も大なるもの多く、財神廟、藥王廟、娘々廟。

經濟と交通――當地は地方物資の小集散地て穀物、豆油、生魚、木炭等吉林へ販出してゐる

輸入品も吉林又は哈爾賓から來り年額四〇萬元位のものであるといふ、當舖七戸か金融を司り官帖か硬貨と共にその通貨となつてゐる、交通は松花江に臨んてゐるか船舶は寄港するものか少くむしろ陸路か利用されてゐる。

第四 缸窰

吉林縣下、烏拉街の北東にあり、古來有名なる素燒陶器の産地である、戸數約七〇〇、人口約五千餘人、又附近から石炭を出す。

第五 雙陽縣城(雙陽河)

吉林伊通間街道上にあり、伊通を去る東北八五支里、戸數約三〇〇餘、人口約二、〇〇〇人、縣公署、警察署の外廟宇三、天主堂一ある。

經濟——地方的小市場か穀物も大豆、蜀黍、小麥等約二萬石に過きない、その他は木炭の小量を出すのみ、麯房、油房、燒鍋等かあるか記すへき程のものてはない。

第六 伊通縣城

伊通河の左岸にあり戸數約二、〇〇〇、人口約一六、〇〇〇を有してゐる、城牆なく不規則な街巷で最盛の商區は東西街である、店舖の結構宏大である、當地か吉林の管下に屬したのは光

緒二十六年を以て始めとしてゐる、縣公署、警察署、徵稅局、兩等小學堂、初等小學堂、耶蘇施療院(英國聖公會)、天主堂、廟宇五ある。

經濟と交通――當市に來集する主要物產は穀物で、二五萬石に達し大部分公主嶺に運ばれ、木炭、木材等は長春に行くものがある、又特產物として砂金(二、五〇〇兩)各種獸毛がある。而輸入雜貨は營口を主とし一箇年約一五〇萬元內外、綿絲布がその七割を占むるといふ。

金融機關として當舖十一戶あり、各大商店は帖子を發行し小銀貨と共に通貨となつてゐる。

磨坊、油房、燒鍋等があるがその製造高は市內需要を越ねてゐない。

當地から關係市場への距離を見れは、公主嶺へ一〇〇支里、西安縣へ一三〇支里、長春へ一六〇支里、吉林へ二八〇支里開原へ三〇〇支里、盤石へ二〇〇支里である。

第七　盤石縣城(磨盤山)

伊通州の東南二〇〇支里、磨盤山の西南麓にある。光緒十七、八年頃始めて市街を形成し、同二十九年縣治に改められたものである。市街は方一支里の城壁に包まれ五門あり、戶數約五〇〇、人口約四、〇〇〇、縣公署、警察署の外菸酒木稅局、官運局あり、廟宇三、耶蘇敎施療

院、天主堂等がある。

經濟――附近村落の物資小集散場で穀物約五萬石、就中大豆は二萬石を出し多量の油分を含むといふ、輸入貨物は大てい開原から送られ、主として奉天省なる朝陽鎭の關係密接である。

當地――當地の油房業は比較的盛で豆油は長春方面にて販出されるといふ。

通貨は銀貨と吉林官帖とである。開原へ四五〇支里、朝陽鎭七〇支里。

第八　黑石鎭

當地も光緒初年の開墾に係り現在は、盤石縣の管下で輝發河に沿ひ戸數五〇〇、人口約四、五〇〇に達してゐる巡警局、稅局、耶蘇敎堂、天主堂等がある。

經濟――當地に集散する穀物は年額四萬石、その他藍靛、葉煙草、麻等がある。

輸入雜貨は奉天及吉林から來り通貨は官帖を主とし木材、石炭が附近から出る。

交通――官街へ六〇支里、濛江へ二〇〇支里(車馬を通せす)磨盤山へ九〇支里、朝陽鎭へ一一〇支里。

第九　樺甸縣城(樺樹林子)

吉林の南方二〇〇支里、松花江の東岸にある。當地は松花江舟行の終點で且つ縣公署の所在

地である。

第十　官街

樺甸縣下、松花江の支流輝發河の上流吉林朝陽鎮間道路の中央に位置してゐる。當地は光緒九年頃から市街を形成し、宣統二年までは樺甸縣公署所在地であつた、市街は輝發河の右岸長さ約一支里、戸數五〇〇、人口約六、〇〇〇ある。巡防營二營の外師範學堂、高等初等小學堂、天主堂、耶蘇堂等がある。

經濟――集散する穀物は約年額二萬石に過ぎない、その半ははは蜀黍である。輸入品は雜貨、布類、砂糖で約五〇萬吊(約一二萬圓)、輸出入共吉林を主とし朝陽鎭からて來る、そして輸出品としては主に葉烟草及麻で燒酒、石炭、木材等もある。

交通――吉林まで二百六十支里、朝陽鎭まで一八〇支里。

第十一　濛江縣城(濛江大甸子)

光緒三十四年の創設に係り市街の周圍は悉く沼澤で地勢は高原である。當地は縣公署があるはかりて、交通も不便であるから物價が非常に高い、朝陽鎭(二一〇支里)樣子哨(一五〇支里)等と交通してゐる、長白山がその南に巍々と續いてゐる。

第十二　長春

當地に長春廳を置かれたのは道光五年で光緒八年に府に陞せ民國二年縣に改められた、そして明治三十八年の北京條約により開放されて互市場となり、翌々四十年よりは滿鐵會社か附屬地の經營に著手し、遂に現在の發展を見るに至つた。

現長春城は伊道河の左岸に瀕し、東經一二五度二九分北緯四三度四八分（北海道旭川と同緯度）城の周圍約十五支里、不規則なる長方形で南門から北門まで約十八町、東門から西門まで約三〇町ある。街路は南北を通ずる大街を中心として之を東西に貫く四條の大街かあり、就中繁盛なるは南北大街と西三四道街で道路比較的井然且つ寛廣しある。而北門外は滿鐵附屬地市街で面積九三六、三六九坪之を宅地六五五、六四五坪（貸付宅地四二六、二六〇坪）道路一八〇、八六〇坪公園四、八六二坪、停車場用地四二八、〇〇〇、墓地火葬場五、二七六坪、屠畜場四四〇坪とし、四十年以來大正九年三月まで市街經營に消費せる金額實に一、七八九、六四六圓に達してゐる、而北門と停車場を聯結する道路は幅一五間乃至二〇間とし、商業地區は六間乃至十間住宅區は四間乃至六間とし路面はすへてマカダム式砂利道路で、別に支那馬車專用道路を設けてある、此延長一八、〇〇〇餘間である。

此附屬地と城内との間なる面積一三、五〇〇餘畝なる商埠地は、當地支那紳董の合資會社により經營せられてゐる、又北門外なる吉長鐵路停車場附近も熱鬧の市場となつた。

官公衙――(支那側)吉長鎭守使署、長春交涉分局、吉黑榷運局、長春地方審判廳、長春地方檢察廳、長春警察廳、吉長道尹行署、長春縣公署、暫編奉天第一師步兵第二旅司令部、統稅局、財務處、開埠局、(日本側)領事館、領事館警察署、長春警務署、憲兵隊、守備隊、滿鐵地方事務所。

行政――鐵道附屬地を除く長春は道尹の管轄にあり、長春警察署之か警察行政に當る、附屬地は滿鐵之か行政權を有し警察は關東廳警務署か行つてゐる。

人口――支那行政區劃に就てはその確數を知らないか、戸數一、七〇〇餘戸、人口一〇、〇〇〇、〇〇〇に達すと稱せられる、附屬地の人家は逐年增加しその勢數驚くへきものかある。即ち

年度	戸數				人口								
	日本人	支那人	外國人	計	日本人 男	日本人 女	支那人 男	支那人 女	外國人 男	外國人 女	合計 男	合計 女	合計 計
大正四年	一、一三三	一、一三八	五五	二、三二五	一、九五一	一、六四三	九、四三五	八三五	一〇〇	七三	一一、四八六	二、五五一	一四、〇三七
大正五年	一、一八四	一、三三九	四〇	二、五五一	二、一五三	一、八二一	一〇、三四四	一、〇五九	九五	七四	一二、五九二	二、九五四	一五、五四六
大正六年	一、二三二	一、五五〇	五四	二、八六六	二、四八二	二、〇七〇	一一、八五八	一、四五〇	一五八	九二	一四、四九八	三、六一二	一八、一〇九
大正七年	一、四〇〇	一、七一七	五三	三、二六九	二、九一六	二、四四〇	一三、七八〇	二、〇九〇	一三三	七六	一六、八二九	四、六〇六	二一、四三五

衞生――支那側の衞生に就いては見るへきものかなく、唯商務總會か毎年七〇〇〇吊つゝを支出して警察署の共同便所掃除、道路掃除等を補助するたけてある。鐵道附屬地に就いては滿鐵病院を始めに私立病院三あり、衞生警察事務は關東都督府に屬し、滿鐵と共に藝酌婦の健康診斷等を行つてゐる、道路掃除、汚物、糞尿等の掃除も滿鐵に於て行つてゐる。

教育及宗教――(支那側)中學堂、附屬師範學堂、女學堂、附屬小學、模範小學堂、淸眞小學堂、商業學堂、工業學堂、小學堂六、天主教經營小學堂、耶蘇教經營の小學堂及女學堂、耶蘇教女醫院内の女學堂、(日本側)長春尋常高等小學校、長春幼兒運動場、長春公學堂、長春實業補習學校、長春實科女學校、又滿鐵にては長春簡易圖書館を設け一般の閲覽に供してゐる。長春商業時報は日本人商家の機關雜誌てある。

支那側諸廟宇及寺院――佛教廟宇八、回教一、儒教一、天主堂、耶蘇教堂一。

日本附屬地――神道教會一、佛教布教所四。

電話――支那電話は官營てあるか一向振はす、日本側は關東廳の管理て現在加入者八一六、機數九一五、自働電話三ある。

電氣及水道――支那側は電燈局、日本側は、滿鐵電燈營業所にて經營し日本側にては製材用

及製粉用にて供給してゐる、水道は支那側にはなく日本側は滿鐵の經營で水栓數九七九、需要戸數八四〇に及んでゐる、大正七年度の給水量四二五、三九八立方米た。

交通――當地は南滿、東支、吉長三線の接續點で且つ吉林黑龍江兩省に通する陸路の中心點に位してゐる、吉林、伯都訥、哈爾賓の三地方には今日に於ても、馬車によりて交通するもの少くはない、吉長、東支兩線に就てはその營業狀態を知ることが出來ないが、長春以南の交通はすへて南滿線に依るものであるから、滿鐵營業の概略を擧けて見やう。

年度	乘客		貨物		手小荷物	收入					
	乘車人員	降車人員	發送	到著	物發送	乘車賃	貨車賃	座席料	手小荷物郵便物賃	其他	合計
	人	人	噸	噸	斤	円	円	円	円	円	円
大正四年	二九八、三六八	三三七、三八三	四五九、六四二	五六七、一二三	九八五、九九四	一、〇六八、六八一	三、三六六、一九五	八、六九九	三九、四三五	一六九、三三六	四、六五二、三四四
大正五年	三二四、三六二	四三五、四七七	六〇三、三九八	六一〇、九一九	一、六二四、二五六	一、二四七、二〇七	四、五九四、七〇七	一〇、二一五	五一、三五三	三九一、〇三九	六、一九四、五二二
大正六年	四三〇、一八〇	五三五、四四一	八九九、六八九	六八九、二二〇	一、八五一、〇三四	一、七一二、四二九	六、四七六、一一三	一七、八六八	五七、一五九	三二四、五六二	八、六〇七、一二一
大正七年	五四九、一八三	六四五、五二四	一、一二八、三三五	七九七、五九九	三、一〇五、九六四	三、七一九、七七八	八、三二六、六〇九	二六、六八六	七三、二五二	五一七、〇四四	一二、一六五、三五九

貿易――當地輸出重要貨物は大豆を第一として小麥、高粱、葉煙草、木材等である。卽ち

年度	大豆	豆粕	高粱	小麥	麥粉	豆油	木材	小豆	葉煙草
大正四年	二九〇、一〇〇	三、七四七	四一、四七〇	一四、二四七	一七、七四四	四〇六	三三、五三二	八、一四七	五、七六〇

大正五年	三五三、二一八	九、四四五	四三、一〇七	二六四、四〇九	四一、八二二	五九	四一、五六八	九、八五六	一四、七六八
大正六年	四七四、三五九	三五、六〇六	九一、〇〇六	一八、九五一	五七、四四一	一五九、四〇六	六一、〇一一	九、六六五	一〇、〇〇八
大正七年	七〇六、〇一一	五二、六〇五	七七、三五九	四四、七七八	一九、四四一	二、六八一	七九、四四五	二、八九一	八、六六五

以上は滿鐵の發送に係るものであるか參考の爲、東支線により長春に到着したものを見れは

年度	大豆	豆粕	高粱	小麦	麦粉	木材
大正四年	二、三二七	—	一、三二七	二〇、三五六	六、三二五	七、八八〇
大正五年	三五、九六八	三五	一、三五五	三一、九二七	一〇、七九六	一〇、三二一
大正六年	一、〇〇七	一八六	七、五五五	二、三八〇	二、七五四	四、〇〇〇
大正七年	七三、七九〇	一、四四七	四、一七六	四、〇〇一	四、九四四	二、四四四

次に輸入品は

年度	石炭及コークス	米	鹽	砂糖	野菜果物	綿織物	石油	金物類	麻袋
大正四年	二九、八九六	二、〇七〇	四一、三七〇	七、八六六	一九、四〇	一九、三八〇	一三、一五五	八〇三	一四、一六六
大正五年	一〇、八二四	一四、六二六	四、四〇二	一三、二六八	二一、四五七	二一、二四六	六、〇四一	九、〇六九	一六、九〇〇
大正六年	一五、〇六〇	一三、八〇三	九一、五五四	一五、八四四	一七、〇〇〇	四、六六六	一九、〇〇七	一四、三八〇	一九、〇一七
大正七年	一八、九二四	八、六六九	五五、七五九	四二、一〇	一〇、八二四	三三、一二三	一二、六九六	一二、六八一	二二、〇四一

以上も滿鐵線到著のもので、右の外尚煙草類、紙、セメント、石灰、陶磁器、安平類等も多額により就中卷煙草の如きは、大正七年度に於て六、〇〇〇噸に達せんとしてゐる。

商業と金融

城內の各種商店の概數は恰ほ次の如く、

糕點舖	二〇	醫藥舖	二〇	小飯館	七〇	靴鞋舖	二〇
洋廣貨舖	一五〇	鮮藥局	二〇	理髮舖	一二〇	[illegible]舖	二〇
粗雜貨舖	一〇〇	大飯館	五	磁器舖	二〇	客棧火房	八〇
茶葉莊	一〇	京飯館	三〇	小首舖	三〇	車站宿舍	六〇
大藥舖	二〇	喝拉飯館	五〇	鞍吉舖	二〇	估衣舖	二〇

その最大なるものは六、七〇萬吊(吉林)である、そして附屬地の於けるものは糧棧、粮棧、運送店、客棧等多く概して大商店である。日本側は藥屋、雜貨屋を最多とし、その他日用品商等次第にその數を增して行く。そして會社は東華煙公司、長春魚菜株式會社、運輸會社、滿洲木材會社、松茂洋行、東亞興產會社、用達會社、日清製油出張所、三井物產出張所、山口運輸公司支店、吉林燐寸會社出張所、鈴木出張所、東省實業出張所、南滿鑛業長春炭坑、大倉組出張所等て、その他五六の特產物商かある。今長春取引所に於ける、取引高を見れは(大正五年四

月開始）

年度	現物賣買高 數量	現物賣買高 價額	糧豆先物取引所 數量	糧豆先物取引所 價額
大正五年	一 車	一 円	六〇,五七 車	二四,九一〇,五一二 円
大正六年	一	一	九,四九二	一九六,九四六,八四八
大正七年	八,一〇四	一〇,七四〇,一八七	三,三二六	三七〇,三一五,三二九

市場――長春魚業株式會社市場（大正七年度賣上金高一一〇千圓）、馬市一、支那市場一〇

商業機關――商務會（支那）、附屬地諸組合、長春理髪業組合、料理店營業組合、宿屋組合、飲食店組合、范家屯特産物商組合、附屬地藥業組合、長春棧商組合、貸屋業組合、古物行商組合

娯樂機關――城内に於ける料理店、藝娼妓等に就てはその確數を知ることが出來ない、新市街では長春座を始めとし料理店飲食店等一八五戸を算し、藝妓一二八人、酌婦一一三八人等を數ねる。

金融機關、朝鮮銀行支店、横濱正金長春出張所、正隆銀行支店、長春銀行、長春實業銀行、范家屯銀行、長春取引所信託株式會社、長春錢鈔株式會社、長春信託株式會社（以上新市街）、

錢舖二五家、銀爐四家、當舖六家、票莊六家、吉林官銀號分號(支那市街)

今長春取引所先物取引高を見れは(吉林官帖建)

年次	官帖 取引高	官帖 價額	鈔票 取引員	鈔票 價額	總價額
大正五年	三四三、〇九〇、〇〇〇両	三、九九五、七三二、〇三二吊	二七五、九〇〇〇円	三三四三、四八四七八吊	六、三三八、三七八、九九円
大正六年	一〇八、七三三、〇〇〇	三、三九四、八三〇、五三四	一八〇、一一五、〇〇〇	三〇三六八、三四四	五五三一、四九三、九八
大正七年	一九、八一八、〇〇〇	六四、五六〇、一六四	七四九、〇〇〇	一五四〇一、三三〇	七九、八八〇、三四一

又城内にも銀市かあつて毎日銀錢相場の決定、錋銀爲替の賣買をしてゐる、之か仲買をするものを錢經紀又は跑夥と云ふてゐる。

參考の爲、新市街に於ける本邦銀行及質屋の預金及貸出金を見れは、

銀行預金及貸付金

年度	預金高 受入	預金高 拂出	預金高 現在	貸出高 貸付	貸出高 戻入	貸出高 現在
大正四年	二四二、四三二、三六	三三、九九七、二一九	六〇四、一〇七	[illegible]三〇六四、一六六	三〇、五二四、四六	二、五四〇、六六五
大正五年	五七、五二三、六五	五六、四〇一、六五一	一、二一一、六四	四六、八七七、五二一	三八、五七五、三七一	四、〇八〇、一八〇

大正六年	一九四、六一八、七七七	一八六、二〇九、五七八	八、四〇九、一九九	七七、六〇九、一三	七一、五六〇、七二二	六〇九八、二〇三
大正七年	一七一、五〇五、二六六	一六七、六四、〇九三	三、八八二、一七四	一八七、六九九、〇九八	一六九、八〇、九三	一七、一八八、一七五

貸金業者の貸付金

年度		營業戸數	前年より越 口數	前年より越 金額	本年貸出 口數	本年貸出 金額	本年戻入 口數	本年戻入 金額	損失 口數	損失 金額	本年末現在 口數	本年末現在 金額
大正四年	日	四	一三九	一四、三三八	一、七三二	五〇七、〇三八	一、六九九	四九九、〇五八	—	—	九一	九九、二二
	支	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正五年	日	九	九一	九九、三三七	三、四五八	七五四、〇七	一、九九四	六八九、四九四	—	—	一七五	一六三、八〇〇
	支	一	—	—	三三	一、三〇〇	三一	八〇〇	—	—	二	四五〇
大正六年	日	一三	四三	一五八、三六〇	三、九三一	四三三、三七三	一、九九八	三四一、四九〇	—	—	一、三三九	四〇〇、三四三
	支	一	—	—	三四三	一八、八八二	三三八	一三、〇六五	—	—	一四	五、八一七
大正七年	日	一三	一、三三九	四〇〇、二四三	三、一四一	三六七、六一〇	三、四八八	四九九、六二三	九三	三、四	九七三	一六五、八四三
	支	一	一四	五、八一七	—	—	一四	五、八一七	—	—	—	—

質屋の貸付金

年度		營業戸數	前年より越 口數	前年より越 金額	本年貸出 口數	本年貸出 金額	本年受戻 口數	本年受戻 金額	本年流 口數	本年流 金額	年末現在 口數	年末現在 金額
大正四年	日	一九	四、三六九	一六、八八〇	一七、七七二	六七、三五四	一六、五三三	五五、七一六	一、一九八	五、〇九九	四、五三三	一三、一七四
	支	三〇	一五、七一三	一九、七七〇	五三、三九〇	八三、一三九	四三、四一四	七九、九九一	八、六〇五	一三、〇六三	一七、九八四	二二、〇四三

大正五年	日	二五	三、九三〇	一九、三八九	一九、五四七	八四、五九三	一七、九八〇	八、八一四	一、六九三	四、五五〇	四、一九三	一七、六一七
	支	三三	一四、〇四三	一六、三三七	八七、四五四	二二四、五〇八	六四、七六八	一五四、四一六	一三、三八一	二四、五五七	二六、三五八	五一、七六三
大正六年	日	二六	四、一九四	一七、六一八	一三、三三四	八八、七七三	一〇、〇三六	六七、一四五	一、三七七	一〇、九三	四、三五五	二六、三五四
	支	三四	二四、三五八	四七、二四九	二一、七七六	五八八、六〇二	八八、三六五	三〇七、九〇四	一七、五五二	三九、三二四	三三、一九七	八八、七三三
大正七年	日	二六	四、三二五	三六、三五三	一九、五一六	一八二、八一七	一一、五六四	五一、三九三	一、三九五	一六、一七六	二〇、九一一	一三六、七〇一
	支	六六	一二、一九七	八八、七三三	二六〇、五六九	九一五、九〇三	一〇三、六七二	四五三、〇〇九	二三、九一五	九一、三一六	一六八、一一〇	四六六、五九九

工業――油房は大部舊市街にあつて二十四五家、范家屯にあるものは蒸汽機罐を用ゐてゐる(資本金十萬圓)、燒鍋は主として新市街にあり、八家年額約二三〇萬斤、磨房は舊市街に約四〇家新市街に二家(中一家は日本)、共に電力を用ゐてゐる、製皮業九家、煉瓦製造業は主なるもの六家、外に邦人の製材工場四、東華煙公司工場、日清燐寸會社工場一。

第十三　德惠縣城(大房身)附張家灣

東支線の一驛張家灣の東四〇支里、縣公署があるはかりて戸數も二百に充たない、唯附近なる張家灣は一驛站として雜穀の集散があり、特に大豆の輸送地として重要視されてゐる、人口約八、〇〇〇。

第十四　農　安(隆安)

長春の北西一四五支里、松花江の支流伊通河の西岸東方七支里の丘陵上にあり、遼時の黄龍

府の故跡である、城壁は周圍六支里、西門外にある古塔は遼の聖宗の建立せる隆安塔である。街の長さ東西約一支里、南北約一支里半、雨季は道路が泥濘を極める、戸數約二、〇〇〇、人口約一二、〇〇〇。

官衙寺廟及學校――縣公署、警察署、陸軍一團、稅捐局、郵便電信及電話局、官鹽權運分所、租子櫃(南郭爾羅旗)廟宇七、福音堂、天主堂、耶蘇教堂、男子師範學堂、女子師範學堂、高等小學堂、女子高等小學堂、農業初等小學堂、女子初等小學堂、男子初等小學堂、農安工藝學堂、商業學堂、天主堂小學堂、教育品陳列所。

交通と經濟――當地は四周に廣濶なる沃野を控へ長春へ一四五支里、南郭爾羅斯王府經由伯都訥へ二・五支里、伏龍泉經由長領子へ二〇〇支里、この間人口も割合に稠密なので穀物の散集が多いのであるが、四鄭鐵路の開通は大いにその商範圍を縮少し、蒙古貿易の如きは殆んど鄭家屯、洮南に奪はれてしまつた、集散する穀物は大豆、高粱、小麥を主とし約二〇萬石に達し、その三分の一は長春に販出される、輸入品も長春を主とし綿布、砂糖、石油、マッチ等で吉林の葉煙草、木材等も入つて來る、その外工業品として燒酒約二〇萬斤(一斤)は伯都訥へ、豆油約三〇萬斤は長春へ、小麥粉豆素麵は蒙古部落へ出される。

金融機關は當舖一戸であるが雜貨舖、粮棧等も之にあつかつてなる、通貨は吉林官帖を標準とし硬貨も使用される。

第十五　伏龍泉

農安縣下の一市場て隆安の西方九〇支里、市街は東西南北各一條の大街を通し、商況仲々繁てある、戸數約四〇〇餘、人口約二五、〇〇〇、吉林第四混成旅司令部の所在地てある。

經濟――當市に來集する農產物は割合に多く高粱、大豆、包米を主として年額約六萬石、中一萬石は長春に販出される、燒酒(燒鍋三戸)豆油(油房三戸)豆素麵、麥粉等も蒙古人に供給してゐる就中燒酒は有名である、輸入も主として長春から葉煙草は吉林から來る、當市から各地への交通路を見れは長春へ一八〇支里、懷德へ一三〇支里、農安へ九〇支里、伯都訥へ二二〇支里。

第十六　長嶺縣城(長嶺子)

長春の西北二八〇支里、鄭家屯の北二六〇支里、東西約三支里半南北約三支里の土壁を繞らし外壕を設けてある、街衢は宣統二年以後の建設て道巾も廣く且つ並樹を植ゑてある、戸數約三〇〇餘、人口約二五、〇〇〇。

官衙及學校——扶農鎮守使署、縣公署、警察署、郵便局、兩等小學堂

經濟——當市の集散穀物はあまり多くはない約三萬石位である、しかし輸入はその割に多く公主嶺。長春、懷德から販入され、金融は當舖一戸があつて之を取扱つてゐる、通貨は吉林官帖奉票二一吊は二五銅子兒である。

當地からの交通路は懷德へ一九〇支里、伏龍泉へ一一〇支里、伯都訥へ一四〇支里、鄭家屯二六〇支里。

第十七　舒蘭縣城（舒蘭站）

吉林の北方一二〇支里、南方の舒蘭河を控へてゐる、一小驛站である、戸數僅に五〇、唯附近に石炭坑が三つもあるので知られてゐる、缸窰へ三〇支里、長春へ二六〇支里。

第二章　濱江道管內

第一　哈爾賓

北緯四十六度、東經一二七度、松花江を遡る我約二〇〇里、吉林省の西北隅に位置し、四方は茫々たる大平原である、市街は松花江に沿ひて建設され、通常、租界と支那街とに大別され租界は更に新市街（秦家崗一帶）埠頭區、及舊哈爾賓となり、支那街は、傅家甸、新市街、及ひ江沿となる、埠頭區及ひ傅家甸か繁盛なる商區である。

當市は、明治二十九年（一八九六）清國政府と露清銀行との間に締結された鐵道敷設條約、實施以前に於て、渺たる一小村落に過きなかつたものたか、翌年より鐵路の起工か始まり、爾來四千萬留の建設費を投して、純然たる歐洲式市街を形成し、南滿洲に至る分岐點として重要なる市街となつたのである、然るに日露戰役により、南滿一帶は日本の占據する所となり、露國の計畫は漸次縮少され、經濟的にも、少なからぬ打擊を見たことてはあるか、哈市の地たる北滿の寶庫、嫩江平野の中心に在り且つ交通の至便を加へて、再び著々たる發達を來し、今次露國の內亂に遇ふて建設者たる主人公を失つたけれとも經濟上の發展は毫も停止する所を見な

い。新主人公たる支那人の努力は、大なる地の利と相待つて益々繁盛に趣いてゐる。支那街傅家甸は、全く自然的に發達したものであつて、濱江縣の置かれたのは、宣統二年が始めてである。附屬地の面積約七千餘町歩、現に市街を形成する部分約五百町歩、主要道路は車道人道を區別し、車道は小石材を以て塡修してあるが、傅家甸は道路不完全で雨期には泥濘を極める。

哈市在住主要各國人口表（日本領事館調）

區分	日本人			朝鮮人			露國人			支那人			米國人			英國人			摘要
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
員數	一、五五四	一、二三四	二、七八八	一九五	一四三	三三八	二四、三九〇	三五、六一〇	六〇、〇〇〇	七六、三四〇	一八、〇〇〇	九四、三四〇	二六	五	三一	—	—	—	大正七年十二月調
	三、七七五	一、六九四	五、四六九	—	—	—	—	—	七〇、〇〇〇	—	—	一〇〇、〇〇〇	—	—	—	四二	二一	六三	大正八年六月調

備考　一、露國人七〇、〇〇〇の内三〇、〇〇〇は露人にして四〇、〇〇〇は猶太人である。
一、伊國人は大正七年十二月の調にて男六、女二、計八の小數である。
一、支那人はすでに二十萬を超加してゐると云ふことである。
一、故に哈市の總人口は、すでに三十萬に垂んとしてゐると云ふことが出來る

市政

哈爾賓の行政は由來二部に分れ、一は東支鐵道廳民政部の統轄に歸し、他は濱江道尹の管轄

となつてゐた。前者は鐵道附屬地で後者は傅家甸一帶である。鐵道附屬地は又、新市街埠頭區の一部及び第八區線路に接近せる一部を以て自治區域と爲し、哈爾賓市役所を設けて、民政部の監督を受けたものであつた。然るに露國舊黨の沒落以來、之に代りて政權を握れる新黨は、東支鐵道の支那還付を斷行し、支那側も亦官民力を協せて利權の回收に鋭意したる結果遂に哈爾賓市の政權は支那側の掌握する所となり、濱江道尹は哈爾賓全市の監督機關として全權を振ふことになつたのである。而て自治區域も亦道尹の監督の下に置かれ、議員は過半支那人を以て占めらるるか如き狀態である。哈爾賓市會は、專ら市の財政、土木施設、教育、衞生の監督事務、及ひ公安に關する事務を掌り、而て市會の財源は、各商家に對する證明許可證の交付、運搬業者に對する鑑札交付等の料金を主たるものと爲してゐる。又市内に居住し一定の租稅を納むる者は國籍を問はす凡て議員の選擧、及ひ被選擧權を有し、市會又は市參事會の定むる諸規則は所管内に於ける凡ての住民に適用せられ、外人も定められたる各種の課稅に服する義務かある。課稅の強制手續は裁判の方法によらす警察官吏の幇助を得て、市の特別稅則により實行して居る。又司法機關は從來、鐵道廳と全く獨立したる國境裁判所に於て民刑事件を受理しつつあつたか、今年に入りて、支那又之を回收して、東省特別區域高等審檢廳を構成し、北京

政府司法部の直轄に移した。

今、哈爾賓に於ける、支那側行政機關を擧ぐれは次の如くである。

濱江道尹公署、哈爾賓警察廳、木石稅費總局、外交部特派哈爾賓交涉署、東省特別區域高等審判廳及檢察廳、濱江稅關、黑龍江鐵道交涉局、吉林鐵路交涉局、濱江縣公署、而て、縣知事は哈爾賓警察廳長を兼ね、道尹に隸屬し、今の道尹は又、外交部哈爾賓交涉員をも兼ねて、哈市の全權を提つてゐる。從つて鐵道廳の民政部は廢止された形である。

各國も亦此處に領事を差遣して交涉事務及、外國人保護の任に當らしめてゐる。その中總領事館は日本のみて、他の英、米、佛（伊國領事をも代辦す）瑞典等は領事館を、和蘭丁抹は各名譽領事を置いてある。又チエックスロバックも軍事委員會なる者を組織してその代表機關となしてゐる。日本ハルピン居留民會も亦外國官衙の一に加はるたらう。

以上の外政治的結社としては露國復興同盟、國民自由黨、王黨、社會革命黨、社會民主温和黨、社會民主黨過激派、猶太人民主勞働黨等あるけれとも、何れも露人の結社て、直接ハルピン市政とは關係なく、結社其者の勢も亦微々たる者のみである。そして、民族的團體としては猶太人會、ハルマン人會、波蘭人會、ウクライナ人會、クトフ人會、ラトウイシ人會、グルジン人

會、エストン人會等かあり、猶太人會は其會員の數に於て優勢を示すのみならす、經濟上、又政治上輕視すへからさる勢を有してゐる。但し波蘭人會は獨立國として準領事を有し在留波蘭人より成る軍隊をも編成してゐる。支那側に於ては山東會館を始め閩粤會館、三江會館、直隷會館等あり何れも經濟的自治機關てあることは支那各地に有るものと同樣て、又市政上にもその勢力を度外視することか出來ぬものかある。

警察制度　支那街なる傅家甸は縣知事管轄の下に濱江警察署に於て之を行ひ、五區に分ちて治安に便してゐる。そして哈爾賓警察廳は道尹に直屬し、縣知事之か署長となつて舊露國の警察體様を學ひ埠頭區及新市街の二大區に分ち、更に之を各二分署の管轄に分けて水上警察をも掌つてゐる。此外、各國の領事館警察署あり、各護衛兵を有してゐる。但し日本、露國、佛國を除くの外は此設けかない。チェックスロバック軍務館のみは若干の護衛兵を備てゐる。

左に各國の消防隊を擧ける。

一　日本義勇消防隊、二　露國義勇消防隊、三　支那警察消防隊、四　商務會消防隊、五　舊ハルビン消防隊。

各國の軍隊　支那の東支線回收以來、その守備兵は全然支那側の管轄となつてしまつた。そ

して附屬地に於ける露國人保護として、サモイロフ隷下の約一千人か殘つてゐるのみである。支那側では先つ中東鐵路軍總司令部かあつて吉林陸軍混成第十九旅長張煥相、參謀長として哈爾賓に駐在し、哈長護路軍司令を兼ねてゐる。此外混成第五旅步兵第二團本部かある。而て日本、佛國、伊太利、チエツク等の軍事委員か駐在し、チエツク軍隊は步兵一箇中隊である。

宗教と敎育　露國正敎會寺院六箇所、日本寺院二箇所、天主敎寺院一箇所、新敎々會堂一箇所、猶太敎會一箇所、回々敎禮拜堂一箇所。鐵道商業學校（男女）鐵道中學校（男女）商業徒弟學校、小學校二、後黑龍州區將校子弟收容所附屬學校、露支育兒院附屬學校、私立アントレス中學校、私立ロフアスト中學校、私立オクサテフスカヤ女子中學校、私立ゲネロゾーア女子中學校、私立フオンアルノルト齒科中學校、其他私立小學校三、幼稚園一、ユダヤ人共立學校、ホーランド人學校（以上露國）哈爾賓中學校、縣立小學校、縣立國民學校六箇所、縣立女子高等小學校一、縣立夜學校三、私立旅哈高等小學校、國民小學校、私立東華中學校、省立甲種商業學校（以上支那）哈爾賓尋常高等小學校、本願寺幼稚園、日露協會學校（以上日本）。

衞生　衞生設備はその施設者に從つて之を三つに分けるを便利とする、露、支、日卽ち之れである。元來露國の施設は哈爾賓衞生の基本を爲すもので東支線を支那か回收して以來は、鐵

道病院の如き露人經營と云ふ事は出來ないけれども、その從事員は大てい露人なるを以て以下之にならつて排列して見やう。先づ鐵道中央病院の完全なる設備ある者を始めとし、外來診療所、驅黴院等すべて鐵道局に附屬し、哈爾賓市會の經營になる市立病院及び其分院等があり、露人の個人經營に成る病院も十五名の多數に上つてゐるが正式の開業醫免狀を有するは五名に過ぎないと云ふことだ。三人の藥劑師も亦市内で營業してゐる。之等を取締る爲に市役所には醫事衛生課の設けがある。又以前の露國鐵道守備隊軍醫部の陸軍病院は中央病院と比肩すべき大病院にして分院をも有し今尙露國陸軍の經營である、そして哈爾賓露國赤十字病院も亦從來の經營者を失ひ目下は日本人の個人經營に移つてしまつた、次で支那側の設備は例に依つて貧弱にして醫師取締規則もなく、自稱醫師が多い、今其主なる者を擧ぐれば次の如くである。

1 東三省防疫事務總處及附屬病院（濱江病院）は濱江縣警察署防疫檢所と共に哈爾賓の衛生業務を取るもので防疫檢所には衛生隊の組織がある。

2 上海中國紅十字會及其附屬病院。

3 陸軍衛生機關は殆んど有名にして無實である。

4 私立病院としては宏仁醫院あり、奉天中國紅十字會分院及び濱江貧民救療所の事務を兼

掌してゐる。その他濟安醫院の外開業醫十一名を算してゐる。

而日本側に於ては總領事館警察署の管理の下に居留民會に於て取扱ひ、先つ共立病院の設立を見、私立として病院二、開業醫八名を數へてゐる。そして埠頭區料理店組合病室は組合の事業として日本藝酌婦の檢黴を行ひ、傅家甸には同仁病院分院かあつて藝酌婦の檢黴に當つてゐる、又日本軍隊に於ても施療所を設けて露人、日本人、朝鮮人に施療してゐる。

由來哈爾賓は傳染病の蔓延烈しくコレラ、發疹チブス等の大流行を見しことが少くない、依て各國は聯合して防疫事務を掌握することになつてゐる。

給水と排水　當市に於ける給水狀態は頗る不完全にして、水質の不良なるに加へて水量も亦富豐ではないのである、故に給水系統として述ふへきは殆んとなく單に一二の小規模なる水道あるのみてある（後表參照）其他の一般民屋は各家又は數家に一の掘拔井戶を設けてあるか、新市街なとは夏季に於て所要量を得ないことかある。埠頭區及傅家甸は比較的水量か豐富てあるか水質か甚た不良である、又排水設備の如きは絕無と云ふも可てあつて、水はすへて地下に散逸するにまかせてある、唯風呂屋のみは個人にて排水溝を設け松花江に放流してゐる。

小數の人民は松花の河水を使用する者かあり、傅家甸の如きは良井から買ひ求めて使用して

ゐる者が多い、そして水道は殆んど全部井水を以て水源とし、之をタンクに貯へ鐵管を以て導水するのである、左に水質檢査成績を掲げやう。

水質／水種	反應	色	臭	味	固形分	酸素消費量	アンモニア	亞硝酸	硝酸	クロール
士官兵營井水	弱アルカリ性	ナシ	ナシ	淡	一、四六・一	三・四	痕跡	ナシ	ナシ	三九・九〇
ミルレル兵營井水	中性	ナシ	ナシ	同	一三・一	三・六	著明	ナシ	ナシ	七・一〇
露國鐵道旅團跡井水	弱アルカリ性	ナシ	ナシ	同	四三・二	三・四	痕跡	ナシ	ナシ	一〇・五〇
病院街兵營井水	中性	ナシ	ナシ	同	五三・〇	三・三	痕跡	ナシ	ナシ	七・一

娯樂機關　公園、大劇場の如きはすべて露國の市街計畫の中に含まれ、哈爾賓市の建設と共に歐洲風の公園は新市街に二箇所經營され、埠頭區にも市公園の計畫さるるあつて活動寫眞館其他の演藝を興業し市民の享樂に備へたものである。此外劇場は二箇所あり、常設活動寫眞館五箇所あつて世紀末的活劇を演してゐる、尚附屬地には二十以上の浴場と六〇餘の料理店とあり、多數の飲食店と共に市民の娯樂機關となつてゐるが、支那街に於ても亦料理店、飲食店等甚だ多く、その數殆んど三百を超え、劇場娯樂場も亦二十戸以上を算してゐる。此間に出入する公娼、密娼の類又數知れず日、露、支、三國人の美形嬋娟ウヨウヨとして耽溺者流の宛然たる

極樂境である。

電燈、電話及市內交通　電燈、電話等は皆露人の經營に係り、前者は加入者約一千餘人、後者は小なる三發電所より電力を供給され從つて加入者も少く、傅家甸に於ては耀濱電燈公司と稱する半官半民の會社が營業してゐる。

市內交通に至つては機關甚だ備らす、その主要交通機關として辻馬車約八百臺を數ふるに過ぎない(自働車二百臺、自家用も含む)故を以て電車の布設は水道設備の必要と共に當面の二大問題として市民により高唱されてゐる次第である。

市場及新聞　市場即ち「バーザル」は哈市に三箇所あり(埠頭區一、新市街二)埠頭區のもの最も大にして露支人の組合組織に成り主として食料品、家具を販賣してゐる、新市街にある者は個人經營で一は支那人一は露人である、そして販賣品は日常食糧品である。

新聞に就いては日、露、米、支の三國のものあり以下その名稱を掲く。

(支那側)　1遠東報(東支鐵道機關紙)2東陸商報(商務會機關紙)3大北日報(濱江實業團)

(日本側)　1西比利亞新聞(日本官機關紙)2哈爾賓新聞3北滿洲。

(露國側)　1ヰェストニックマン、ヂニーリ2ノーヴォス、ヂスニ(猶太人機關紙)3スヮエ

ートー(元のセミヨノフ機關紙)

(米國側)ロシアンデリニツス。

交　通

當市は東支鐵道の中心點を爲し、西は滿洲里を經て西比利亞鐵道に直通し、東は浦鹽に聯結し南は又南支線により南滿鐵道と聯絡してゐることは何人も知つてゐることである。此外に松花江の偉大なる水運を控へてゐることを忘れてはいけない、松花江本流は上流吉林より下流三姓に至るまで小蒸汽を通し得へく、支流呼蘭河は呼蘭との連鎖となり、嫩江は又齊々哈爾の下流三十露里の地點まで至ることか出來るのた、卽ち黑龍江、吉林兩省の交通は全く哈爾賓に集中してゐると云ふことか出來る、しかも偉大なる運送力を有する支那民船は之等河川の距るか上流まで航するを見るに於ては哈爾賓市場の運命を單に之のみを以てトすることか出來る。此水路の汽船及碼頭事務は吉黑郵船局にて取扱ひ、郵船局は又汽船四隻を備へて自ら航行してゐる、今當市に本店を有する汽船會社及ひ個人商店を見れは次の如くである。

1　極東運輸組合(日本人經營)　汽船五隻、曳船三隻、總積載量十八萬六千布度。

2　北滿運輸(日本人經營)　汽船三隻、荷物船二隻、總積載量二十五萬布度。

3　露國黑龍江汽船會社　汽船十二隻、曳船三隻、荷物船十七隻、臺船九隻、總積載量百六十四萬九千布度

4　東亞貿易（露人經營）　汽船二隻、曳船三隻、總積載量五萬布度。

5　戊通公司（支那人經營）　汽船三十八隻、曳船十八隻（張作霖、曹汝霖の合辦である）

以上の外單に一隻のみを有する會社又は個人の者を合すれば約十二隻の汽船があり「バルジー」は本江を航行する者約三十隻あると云ふ

然し冬期に於ては每年十一月初旬より三月末日まで結氷し、航行不能となるを以て此間に於ける支那馬車の陸路輸送も亦輕々にしてはならぬ者がある。而て哈爾賓に集中する各地よりの馬車道が北滿到處を蒙羅してゐるのを見て、吾人は再び刮目を休める事が出來ぬ。

今參考の爲め河川に依る出入旅客を見やう、唯鐵道旅客の出入が統計されてゐないのを遺憾とする者だ。

海關報告	支那人	其他	計
大正四年 入港	九九、〇八七	二、三六〇	一〇一、四四七
大正五年 入港	九九、五八八	一、八五四	一〇一、四四二
大正六年 入港	九七、二〇三	二、九六三	九九、一六六
大正七年 入港	一二九、三六八	二、〇五五	一三一、四二三
大正八年 入港	七三、四七一	一、〇七七	七四、五四八

出港	八五、四九五	三、一三一	八七、六〇六	九九、九五七	一、四六七	一〇、四四四	九六、四五一	三、六八〇	九六、二五五	一〇七、七一一	三、八五九	一〇一、〇七〇	八、三一八	一、四九九	八六、八四

以上を以て見るも河川に依る旅客は殆んと支那人なるを知り、しかも例年差したる増加なきを見、哈爾賓市の急激なる人口増加は、一に鐵道によりて來集するものなることを知るのである。

經濟狀態

哈市は地方物資集散の集點とも云ふへく、輸入物資も亦此地に向つて集中し、更に各地に發送されるのである。先つ地方物資の集散に就いて見れは。

一 鐵道によるもの　哈市以西主として哈市、安達間及ひ哈市、寬城子間の各驛より積出され、哈市以東の諸驛に集中するものは主として浦鹽に輸出される。但し木材薪材の如きは哈市に向つて集中するものか多い、そして西線及南線より外國に輸出さるへき大豆其他少量の雜穀は哈爾賓に卸下することなく、直接浦鹽に積出されるのも少くはない。

二 水路によるもの　松花江本流及呼蘭河か其輸送道を爲し、上流は伯都訥方面より、下流は巴彥、賓縣附近迄、又は三姓方面より穀類の積出し多く、下流よりは木材薪材の輸送も少く

はない、そして呼蘭河は呼蘭、哈爾賓間に定期汽船もあり、水路輸送か盛てある、但しその上流は主として支那民船により綏化方面よりも穀類の大量輸送を見る。

之等諸物資は冬期結氷間河水に接する重要地に集積し、解氷を待つて送り出す者てある。

3　陸路によるもの　陸路によりて直接哈市に輸送さる範圍は頗る廣地域に亙り、先つ綏化平野を第一として呼蘭、望奎、巴彥、慶城、海林の各地方及ひ吉林省の賓、五常、楡樹、阿城の各縣てあつて鐵路水路と相交錯してゐる有樣た。

今大正七年一月に於ける三井物產會社の調査に據れは次の數量を得。

品目	出廻高	輸出高	備考
小麥	一七〇,〇〇〇噸	一五〇,〇〇〇噸	多くは小麥粉として輸送さる
大豆	一二〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一部は豆糟として輸出さる
高粱	四,六四〇	一,九二〇	
粟	二,〇一〇	六四〇	
小豆	六四〇	四八〇	
蕎麥	三,二〇〇	二,五六〇	
麻種	六,〇〇〇	五,八二〇	
稷	七,二〇〇噸	七,二〇〇噸	
向日葵	三,四〇〇	二,〇八〇	
玉蜀黍	八〇〇	—	
芝麻	一,四〇〇	四八〇	
大麥	四,〇〇〇	—	
緑豆	六四〇	一,二八〇	
蠶豆	六四〇	四八〇	

出廻高總計　三二二三、九四〇噸　輸出高總計　二七一、六二〇噸

憾むらくは東支鐵路の最近營業報告を得す、止むなく參考として一九一五年度の状況を見ることにする。

	鐵路	水路	陸路	計
來集量	四五〇、〇〇〇	一、二二〇、〇〇〇	九二〇、〇〇〇	二、五九〇、〇〇〇
輸出量	一、六〇〇、〇〇〇	四三〇、〇〇〇	—	二、〇三〇、〇〇〇

次に輸入物資の移動狀況を見ればその大部分は綿絲布であつて紙類、石油、砂糧、雜貨之に次く狀態である、之等は主として南滿線經由にて來集し浦鹽經由のものは少ない、之れ復雜なる露國稅關を經るを要するからである。而て南滿線よりするものは大連を第一とし營口及安東等之に次き、長春より鐵路聯絡によりて哈市に來集するものであるか冬季は馬車輸送の返り荷として輸送する向きも少くはない。

今參考の爲一九一五年度の東支線による主要移入品を見れは次の如くてある。

品目	到著數量	發送數量	品目	到著數量	發送數量	品目	到著數量	發送數量
砂糖	一、五三一、六〇〇貫	三三八、〇〇〇貫	石油	三、一五四、〇〇〇貫	一九八、八〇〇貫	綿糸布類	三、二四〇、〇〇〇貫	三二八、〇〇〇貫
鹽	六、二三六、〇〇〇	一、二三八、〇〇〇	麻袋	三、三八三、〇〇〇	三、二八七、九〇〇			

此の外水路及陸路によるものかあるけれども統計の依るへき者かない、但し肉類、卵は主として水路によると云ふ。

以上物資の集散時期は輸入品の如く、鐵路によるものは、多きものは週年平等に來集するも哈市より各地に向つて輸送する物資中汽車輸送以外のものは季節により大なる變動かある、例は水路により移動する物資は解氷直後及結氷直前を集散の盛なる時季とし、出廻り物産及び奧地に向ふ輸入雜貨は結氷後陸路交通の容易なる時期を待つて移動し、就中舊暦正月前後は最も殷賑を極むる時季である。

支那海關統計　哈爾賓輸出入貨物數量

年次	輸移入額（海關兩）	輸移出額（海關兩）	再輸移出額（海關兩）	合計（海關兩）
大正四年	四、〇九〇、三六七	三、六四八、六二九	四、九五八、六〇一	一二、六九七、八〇〇
大正五年	三、四九〇、六九六	二、七三九、九一三	四、八〇八、九三三	一一、〇九九、五三三
大正六年	三、八五二、四八三	三、四三二、四七八	七、二四五、七一〇	一四、五三〇、六七一
大正七年	九、二五〇、八九八	一、九六九、〇二七	五、六〇七、二二三	一六、八二七、一四八
大正八年	八、六二三、七五六	八、六九五、九八四	五、九一六、五七二	二三、四三五、二三一

右の内輸出は農産物其大部分を占め露國からは水産物煙草石炭金屬類を輸入する。

工業

當地の工業は製粉、製油の二大工業であつて、何れも盛であるか其他に至つては建築關係事業の外微々たるものである、製粉業はその進歩甚た急速にして現在は大工場二〇を算し、一晝夜の製造能力三萬餘袋(一袋六貫匁)に達してゐる。油房業は其數約三〇(機械油房)支那人の經營に屬し一晝夜の豆粕製造能力は三十萬枚餘を數ふることか出來る、その他建築材料の製造、煉瓦製造、製革業、製鐵業、造船業、製糖業、製材業等相當見るへき體裁を備へてゐる。

金融

正金、朝鮮、松花の各支店(日本)龍口銀行支店(日支合辦)中國、交通、殖邊、東三省官銀號黑龍江官銀號の各支店及ひ濱江儲蓄銀行、濱江農商銀行、濱江貯蓄銀行、哈爾賓商業銀行、哈爾賓補商銀行、濱江工商銀行、裕商銀行、濱江三信銀行、濱江實業銀行の各本店(以上支那)露亞銀行、香港上海銀行、莫斯科國民銀行、西比利商業銀行(以上外國)。

右の如く哈爾賓の金融機關は實に多く今後も續々增加の勢ありて宛然たる銀行戰を現出してゐる、しかも各行皆紙幣を發行し之に對する取締りも嚴格ならす、加ふるに之等銀行の中樞たるものなく各行相比肩して業務を營みつつある狀態である。

此外支那舊式銀行たる錢莊、當舖、票莊、銀莊等も亦多數あり、票莊は齊々哈爾廣信公司獨占の狀態である、而て哈市に於ける通貨に至ては其種類甚た多く日本、露國、支那の硬貨は勿論各行の發行する金兌換券、銀兌換券、官帖、留紙幣その他類似品の流通をも見る、近來日本及支那の紙幣か流通の主要物となつてゐると云ふ。

第二　雙城縣城(雙城堡)

哈爾賓の南方約一〇〇支里東支驛を去る四支里、土城を繞らした市街である、周圍約二〇支里中に十字形の大街を中心として多數の道路かあるか極めて不整頓である、當市は全く東支線開通以後の發達て宣統元年始めて縣公署を置かれたのた、戸數八、〇〇〇人口四三、〇〇〇(實數七萬あるといふ)。

官衙と學校　縣公署、警察署、地方審判廳、地方檢察廳、初級審判廳、初級檢察廳、守備隊(歩兵五營騎兵一連)稅捐分局、鹽務局、電報局、師範學堂、中學堂、男子高等小學二、女子模範學堂一、簡易小學堂八。

交通　東支線驛とは輕便鐵道を以て聯絡してゐる、道路は阿什河へ一二〇支里、五常へ二四〇支里、伯都訥へ二六〇支里。

經濟　當市は雙城縣の政治的中心てあるのみならす、經濟的にもその中心を爲してゐる、集散する穀物は大豆の約百萬石を最として小麥、蜀麥、粟、馬鈴薯、白菜等相當の額に上つてゐて約半數を輸出してゐる、その中大豆、小麥の南滿に來る者を除き他は悉く哈爾賓方面に販出される、そして輸入は營口を主とし附近大都市から販入され一五〇萬圓位あるたらうとの事てある、酒造業八戸(一日の製造高一萬斤以上)搾油業五〇戸、製粉業二〇戸等も哈爾賓地方へ其製品を送つてゐる。

金融機關は殖邊銀行、官銀號、地方貯蓄銀行、農業銀行、商業借款銀行、久農銀行等の外に當舖五戸、兩替店七戸を算し吉林官帖及硬貨かその通貨てある。

第三　拉林（拉林倉）

雙城堡の東一一〇支里雙城縣下てある、市街は東西各二支里土城を繞らし戸數約五〇〇人口約四、五〇〇に達してゐる、當地はすてに乾隆年間から開かれたのてある、警察分局、陸軍二排、兩等學堂、外蒙學堂等がある。

經濟　當地は西と北に雙城堡及阿什河を控へてゐるので穀物の集散は見るに足らない、輸入品もこの二都市から販入せられ當舖三戸、燒鍋三戸、油房十戸等は特記すへきものてあらう、拉

林からの交通路は五常府へ一〇〇支里、阿什河へ八〇支里、楡樹廳へ一三〇支里等がある。

第四　楡樹縣城（孤楡樹）

吉林の北二七〇支里市街は平坦なる底地にある、周圍約一二支里城壁には楡樹を植ゐ中に不規則なる十字形の街衢があり、中央の廣場では糧市、菜市が開かれる、戸數約八百、人口約一〇、〇〇〇當地は光緒八年の交一時伯都訥廳の所在地であつたが同三十一年から分離して現今に及んでゐる。

官衙及學校　縣公署、警察署、自治籌辦所、電報局、稅捐局、中學堂、小學堂、廟宇五、教會堂一。

經濟　輸出品は農產物及農產製造品で主として長春へ販出され大麥、豚は哈爾賓に藍靛は吉林に葉煙草は營口に行く、その額は大約大豆、小麥の五十萬石以上を始めとし葉煙草、藍靛も五萬斤以上に上る、豆油も亦多く殆んど一五〇萬圓に達し豆粕の七萬俵と共に長春に販出される、輸入品も綿布雜貨は長春から石材その他の器物は北滿及哈爾賓から來る。

金融機關としては當舗七戶、兩替舖三戶及官錢局がある、通貨は硬貨の外官帖が用ゐられてゐる。

當地からの交通路を見れは五常へ一二〇支里、雙城堡へ一六〇支里、新城へ三六〇支里。

第五　五棵樹

楡樹縣下第二松花江に至る五支里の地點にあり孤楡樹からは南七五支里て達することか出來る戶數約五百、人口約三、八〇〇、警察分局、稅捐分局、小學堂等かある。

燒鍋三戶、當舖一戶、陶賴昭（四五支里）との交通は水陸兩路共に行はれてゐる。

第六　新城縣城（伯都訥）

松花江の屈流點にあり陶賴昭からは二一〇支里て達することか出來る、市街は土城を以て城の內外に分れ東北西の三門外は皆市街を形成し南門外は卽ち松花江てある、城內は東西五支里南北三支里、南北大街か繁盛の區てある、戶數約三、〇〇〇人口約四〇、〇〇〇。

官衙及學校　縣公署、警察署、稅捐局、郵便電信局、鹽務局、師範學堂、男子高等小學、男子尋常小學二、女子尋常高等小學一、廟宇四、敎會堂一。

交通　水路は松花江及嫩江により各地に達することか出來るか輸送機關は大部分戎克てある（一九一四年出港戎克五、九三三隻）そして陸路はその經濟的價値は水路の三分の一てあるか冬季は全然陸路に依るし且つ近來長春の交通か頻繁を極めてゐる、長春齊々哈爾間の著名なる交

通路は卽ち當市を通過してゐるのてある、今各地への陸路距離を示せは長春へ三六〇支里、齊々哈爾へ五五〇支里、雙城堡へ二六〇支里、哈爾賓へ陸路三六〇支里、洮南へ四〇〇支里、長春嶺へ一二〇支里。

經濟　農産物の集散は粟、高粱、小麥、大豆を主とし約三十萬石その中約五萬石を長春及哈爾賓へ販出する、そして輸入品は長春、哈爾賓、吉林より運はれ、その年額百萬兩に達するといふ、これは對蒙貿易の異常に盛なことを示してゐる、吉林の經濟關係は松花江により聯結され木材の販出か盛てある、對蒙貿易は毛皮、皮革の販入をうなかし年額約十萬枚に及ひ大部分長春へ一部を哈爾賓へ出される。

金融機關としては近時中國、交通兩行の出張所か出來發錢公司(資本二〇萬吊)や當舗一六戶と共に活動してゐる。

第七　長春嶺(長嶺)

伯都訥と哈爾賓間の街道上にあり、松花江の右岸十支里の處に市街を形成してゐる、その市街は東西二支里餘の一條街て周圍には土壁かある、當地は淸朝嘉慶年間の開放に係り現在は戶數三五〇人口約二、二〇〇ある、警察分局、稅捐分局、廟宇二、敎會堂一。

經濟　此地方は松花江に沿ゐる肥沃なる土地てあるから農産物の集散も多く、大豆、小麥、粟を大宗品として二萬石以上に及ひ、長春に輸出されるものは大豆のみて他は哈爾賓へ販出される、哈爾賓には牛か年約八千頭位送られる。

輸入は綿布、石油その他雜貨は長春より（年額二〇〇萬吊）木材は伯都訥から葉煙草は吉林から來る。

工業として擧くへきは燒鍋二、油房五、磨坊七等てあらう。

金融は二戸の當舖之を司り、錢票を發行してゐる、四九〇箇子兒か一吊てある。

當地から關係地への距離を見れは哈爾賓へ二四〇支里、雙城堡へ一六〇支里、伯都訥へ一二〇支里、農安へ二四〇支里。

第八　陶賴昭（小城子）

東支線に沿ゐる新城縣下の一驛て第二松花江の北岸にある、市街は驛の西方に沿ゐる一條街て人口約二、〇〇〇を算し保衞團之か治安に任してゐる。

經濟　輸出入共に長春を主としその額は共に多くない、油房一、磨房七、その經濟區域は附近四、五〇支里を出ない、當地から楡樹縣まて一〇五支里てある。

第九　五常縣城（五常堡）

拉林河の東岸約七支里の處にあり拉林の南方一〇〇支里である、市街は東西約二支里、南北約一支里で戸數約七百　人口約五、〇〇〇を算してゐる、當地は光緒七年始めて開放せられたので規模も大きくはない、縣公署、警察署　自治宣講所、税捐局、小學堂等がある。

經濟　當地は交通割合に不便な爲農産物の集散するもの少く、阿什河（一八〇支里）雙城堡、（一二〇支里）寛城子（四八〇支里）等へ多少販出するものがあるはかり、輸入は長春、吉林を主とし年約六、七百萬吊、六戸の當舖、四戸の燒鍋、四戸の油房があつてその中燒酒は葉煙草と共に吉林地方へ販出されてゐる。

第十　山河屯

五常堡の南五〇支里、東西二支里、南北半支里の小都會であるが商業地としては五常堡よりもはるかに盛である、戸數約五〇〇人口約四、〇〇〇。

經濟　地方物資集散場として商賈の數比較的多く、集散する穀類は年約五萬石に達し煙草、麻、人參、鹿茸、蜂蜜等は大部分長春、吉林へ輸出される、輸入品も長春、吉林よりと間々哈爾賓から來る者がある。

當舖三、油房二か金融機關及製造業者てある。

當地から關係市場への距離を示せは吉林へ三四〇支里、舒蘭に一三〇支里、楡樹へ一二〇支里、五常へ五〇支里。

第十一 阿城縣城(阿什河、阿勒楚喀)

吉林三姓間の交通路上にあり東支線阿什河驛を去る五支里、阿什河が街を南より北に貫流してゐる、當地は元と金朝會寧府の首都て清代には副都統か置かれたものた。城南五支里のころには金の建都の古跡かある、白城といふ、市街は東南に阜丘を控へ他は一面の平野に向つて東西約六町南北約十二、三町ある方形の土壁の外部に外濠を繞らし十字形の街衢は比較的宏壯てある、戸數三、五〇〇人口約三五、〇〇〇。

官衙と學校　寧阿蘭鎮守使署、吉黑榷運局阿城分局、阿城縣公署、縣警察署(城内を二區に分つ)學校六八、敎會堂二、廟宇六八。

交通と經濟　東支線の阿什河驛を有し　陸路は尙吉林から楡樹、拉林を經て依蘭に通する大道と雙城府、五常府、巴彥、哈爾賓に通するものかある、之等交通路により販運さるる貨物は輸出物に於て大豆、小麥、蜀黍、粟等(年集散額殆んと百萬石に達す)の農產物かあり集散高の

約四分の一を販出し、農産製造品たる麥粉、燒酒、豆磨油、煙草、元磨等の販出高を加算して年約一、九〇〇萬吊に達するといふ、そして輸入品は布疋か第一て雜貨を加へ年約七〇〇萬吊浦鹽、哈爾賓、長春、吉林かその取引先てある。

工業 製糖會社、製粉會社(露人經營、停車場附近)油房三五戶、磨房三〇餘戶(中機械製粉所一あり)木匠舖一七戶。

金融機關 殖邊銀行支店、兩替店四、當舖二、通貨は吉林、黑龍江兩省官帖か主て四九〇文か一吊である。

第十二 賓縣城

阿什河驛を去る東北一三〇支里郡丘四周の盆地の中にある、市街は光緒七年の建設に係り周圍約七支里の土壁を繞らし且つ外濠を有し市内小川か流れてゐる、街路廣濶平坦、東西街か繁盛區てある、戶數約一、五〇〇人口約一〇、〇〇〇。

縣公署、警察署、吉黑榷運局賓縣分局、地方審判廳、鹽務局、木石稅局、稅契局、常關、中學校一、高等女學校一、小學堂三、廟宇五、習藝所、農業試驗所等かある。

經濟 當地は吉林、依蘭間の交通路に當り驛站として著名てあるか、商業地としては其範圍

狹く從て農產物の集散等も多額に上らす、輸入も雜貨か阿什河、長春等から販入されるか年額三〇〇萬吊位てあるといふ、しかし金融機關は比較的多く私立銀行一（資本六〇〇、〇〇〇吊）當舖四、錢局一等かある、又燒酒、豆油等の工產物割合に豐富なことも特記すへき一つてあらう、市場四（馬市、穀物市、野菜市、燐料市）

第十三　夾板店

賓州の東六〇支里四周丘陵を背へる窪地にあり、戶數約三〇〇、人口約二、〇〇〇。

當地は地方的貨物の小集散地て且つ三姓、吉林間の國道上にある驛站として名かある。

當舖一、燒鍋二、油房一〇、磨房二〇餘家。

第十四　新　甸

賓縣下、松花江右岸に位する船舶の繫留所て哈爾賓に下流三五邦里、夾板店は南二五支里て達することか出來る、戶數約一五〇、人口約一、〇〇〇。

市街は半支里はかりの狹小なる一街て數家の穀物問屋を除き他は旅客を對手とする、小飮食店のみてある、出口江關　航運局、電報局、防備兵若干かあり、主として夾板店に集る小麥を輸出してゐる。

第十五　同賓縣城(瑪珽河)

瑪珽河の谷地にあり東支線一面坡驛から北一二〇支里で達する、市街は光緒二六年の設立に係り周圍四支里の土壁を繞らし、街路廣濶、家屋の宏壯見るべきものである、戸數約三五〇人口約三、二〇〇。

官衙と學校　縣公署、警察署、稅局、巡防營、教會堂二、小學堂六。

經濟　當地は瑪珽河流域の中心市場で且つ地方の地味も肥沃であるから小麥、大豆の類は最も豐穰である、且つ酒造業、製粉業等も次第に大を加へ、移民と共に次第に發展に向ひつつある。

通貨は吉、黑兩省官帖を主としてゐる。

郵便物は東支線の一驛なる烏吉密に運はれる。

第十六　一面坡

瑪珽河の上流谷地にある、東支線の一驛で横道河子、穆稜と共に重要視されてゐる。

當地は一九〇一年東支線の開通と共に形成されたもので今日では西南一四〇支里にして五常縣あり、北方一二〇餘支里にして同賓あり、陸路及水路を以て交通することか出來る。

市街は四周に高地を周らし螞蟻川その北を流れ、同賓に通してゐる。建築物は槪して高壯美麗にして東支線中の別莊地として夏期露國人の來る者が多い、人口約一萬人と稱するも季節によりて差あり、冬期交通の便利となれは增加して三萬以上にも達することがあると云ふ。

官衙　地所事務所(露國市街自治機關)商務總會分會(半官半民)鹽務分局。

露人小學校　支那人小學校一、鐵道病院、第四區鐵道守備隊司令部(露國)吉林第三混成旅司令部(哈綏司令部)

經濟　附近土地豐饒にして農產物の集散し、哈爾賓と直接取引を行つてゐるので金融は支那當舖二、三あるのみである、吉林官帖通用す。工業としては露人と麥酒釀造所、硝子製造會社及支那の高粱酒釀造所等て油房は手工業に過ぎない。

第三章　依蘭道管內

第一　依蘭縣城（三姓、依蘭哈拉）

松花江、牡丹江の會流點口の右岸にあり、哈爾賓の下流八五邦里、四周遙に山岳を繞して庫魯、窩肯の二河も亦此に會流してゐる、當地は古くから産金を以て名あり、その市街を形勢したのは康熙年間て、最近まて副都統の所在地てあつた、府に改められたのは光緒三十年て、明治三十八年（光緒三十一年）日清條約により開放せられた市場の一てある。

市街は城の內外に亙り、城內は官衙及住宅多く商區は西門外なる大街に集つてゐる、城壁はすてに破壞せられて今は其形骸を示してゐるに過きない、大街は幅六、七間兩側に溝を設けて排水に供し比較的整頓してゐる、戶數二、三〇〇、人口約一五、〇〇〇。

官衙と學校——依蘭道尹公署、縣公署、警察署、吉黑榷運局、蘭江分局、國稅局、鹽務局、電信郵便局、支那江關巡防隊、廟宇七、中學校、女學校、高等小學。

交通——西門外に於て牡丹江碼頭に瀕し、西二支里にして松花江の碼頭かある、稅關か置いてある、牡丹江は南寧古塔に通し、松花江は吉林まて通してゐる、今此航路による旅客を見れは

年度		支那人	其他	計
大正四年	入港	二〇、八六四	一〇〇	二〇、九六四
	出港	二一、〇〇〇	七二	二一、〇七二
大正五年	入港	一七、一〇四	一三一	一七、二三五
	出港	一六、六三九	一三四	一六、五〇四
大正六年	入港	九、八〇五	六四	九、八六九
	出港	三、二〇九	五九	三、二六八
大正七年	入港	一四、二四八	二六三	一四、五一一
	出港	九、七六二	一五〇	九、九一二
大正八年	入港	一一、三二五	四五	一一、三七〇
	出港	八、五九六	九六	八、六九二

陸路は臨江、寧古塔、方正等へ通するものかあるか道路か險惡て交通するものか少い、冬季は河上を馬車を以て通行する。

經濟――當市の物産は獸皮を大宗とし年額約百萬吊に達し、其他鹿角、魚類、木材、眞珠、砂金も哈爾賓、阿什河、ハバロフスク方面に運はれる、穀類は僅少て輸出とまてには至らない輸入品は哈爾賓、ハバロフスク、ブスゴベチエンスク及哈爾賓より夏季水運により販入され、冬季は阿什河及吉林からやつて來る。(燒酒は巴彥から來る)

三姓關の統計を見れは、

年次	輸移入額	輸移出額	再輸移出額	合計
大正四年	海關兩 六〇七、〇八〇	海關兩 二、一三一、二八五	海關兩 四〇、二二九	海關兩 二、七七八、五九四
大正五年	五一四、六六九	五二七、八一六	七二、九三六	一、一一五、四二一
大正六年	六五一、六三六	一、四五三、五五一	六七、七二五	二、一七二、九一二
大正七年	六八一、六七五	八四五、五九三	四二、五七八	一、五六九、八四六
大正八年	三七四、一五三	一、八五二、〇九五	一四、一八五	二、二四〇、四三三

金融機關としては當舖六家あるのみてあるか（内日本人二家）二〇餘の商家か帖子を發行して之を助けてゐる、吉黑兩省官帖か依然通貨となつてゐる。

工業――油房大小十六戶（年約八萬斤）、瓶瓦舖一、磨房三〇餘、燒鍋二戶。

第二　方正縣城（方正泡）

賓州を東に去る二六〇支里、松花江の右岸に近く附近なる方正泡（湖）より流出する小川か市街を横斷してゐる、當地は宣統元年始めて縣公署を置かれた土地て人家三五〇、人口約二、〇〇〇を有する小市街てある。

その商業範圍もあまり多くはない穀物の集散か近來追々多くなつて行く輸入品は專ら水運によりて哈爾賓から販入され、燒鍋、油房等も次第に盛になつて行く。

第三　樺川縣城（悅來鎭）

三姓を去る東北二八〇支里、松花江の右岸に近き一小邑て、近時佳木斯から縣公署の移轉かあつた爲に知られて來たのてある、戶數約百五十。

第四　佳木斯

樺川縣內の繁昌なる市街て、三姓の東北二〇〇支里、樺川には八〇支里て達することか出來る、戶數約二〇〇、人口約一、三〇〇、當地は附近物產の小集散地て輸入品は三姓から運はれる。

第五　勃利縣城

窩肯河の上流にあり、縣公署、巡防隊あるのみ。

第六　富錦縣城（富克錦）

樺川の東二四〇支里、方三支里はかりの小丘地にあり、戶數約五〇〇、縣公署と若干の巡防兵あるはかりてあるか地味肥沃なるに由り移民の增加著しく商況殷賑を極め哈爾賓以東最も進步したる一市街てある。

第七　同江縣城（臨江府、喇哈蘇々）

黑龍、松花二江の合流點、松花江の右岸約一支里半のところにある、當地も縣公署あるのみて戸數は僅か五〇くらゐ、人口一五〇はかりてある、吉林官帖を通貨としてゐる。

第八 綏遠縣城(依力嘎)

烏蘇里江と黑龍江との合流點にあり居留民比較的多く、且つ邊界の要衝て通江をへたてゝ露領三角島に相對してゐる、人家二〇に充たす。

第九 饒河縣城(撓力口)

撓力河か烏蘇里河に入る口にある村落て縣廳の所在地てある。

第十 寶清縣城

撓力河の上流密山の北方二四〇支里にあり縣廳の所在地て小村落てある。

第十一 虎林縣城(呢嗎口)

密山の東北三七〇支里、烏蘇里江を距て、ウスリノ鐵道のイマン驛と相對してゐる、汽船の航行かあるので交通か便利て、工業か仲々盛てあるといふ。

第十二 密山縣城(蜂蜜山子)

穆稜河の左岸、茫々たる平野の中に位置してゐる、人口約五、〇〇〇に過ぎないか地味か肥沃

て且つ邊防の要地て製造工業か相當多い。

第十三　穆稜縣城（穆稜河）

東支線九站驛の東方約二〇支里、南に穆稜河を控へ北方に山を背ふてゐる、戶數約一二〇、人口約六〇〇、縣公署の所在地て且つ吉林東路剿匪司令部かあり、密山街道を警備してゐる。當地は小麥、大豆、野菜等の地方的小市場て雜貨は寧古塔（二五〇支里）から運はれ、九站驛と共に亞片の栽培か盛てある。而して九站驛は露人約四〇〇、支那人約一千を有し、支那人は亞片の栽培及密賣を爲す者か多い、故に其收獲期には各地より多數入り込むとの事てある。

第四章　延吉道管內

第一　延吉縣城(延吉府、局子街)

圖們江の支流布爾哈通河に沿ひ、東北は煙集崗によつて圍繞せられた東西の一街である、その長さ約二支里半、街路は廣く下水設備稍整ひ、商家の結構も宏莊である。街の西に公園ありそこか商埠地てある、局子街の起源は光緒十二年南崗招墾局の設立に始まるけれとも、其市街を形成したのは、明治四十一年間島境界問題の發生により支那か此地に邊務公署を設け、軍隊を増派し諸般の設備に著手してからてある、起ゐて四十三年日本領事館分館の設立と東南道臺の琿春から移駐するなとあつて次第に都會の形式を備ゐて來たのてある、現在人口三五、〇〇〇餘、戶數六、〇〇〇餘に達してゐる(日本人一六〇八、朝鮮人五七〇一)

官衙と學校 —— 延吉道尹公署、地方審判廳、地方檢察廳、陸軍步兵聯隊、延吉縣署、縣警察署、商埠局、稅捐局、權運局、郵便電報局、中學堂、師範學堂、兩等小學堂(以上支那)日本總領事分館、郵便局、鮮人普通學校(以上日本)。

經濟 —— 當地は布爾哈、通河の流域にあり且つ東方に嘎呀河平野を控ゐてゐるので物資の集

散か比較的多い、しかし穀物は大てい市中て消費されるから北朝鮮へ輸出する部分は僅少てある、毛皮、木材等か吉林、琿春へ販出されてゐるか多くはない、即ち商勢は大部分輸入品に依て保たれてゐる形てある、輸入品は之を清津系、琿春系、吉林系の三系統に分つことか出來、その主なる物品は綿絲布、煙草、石油、砂糖、紙類及雜貨てある。

徑路	種別	大正五年	大正六年
清津系	輸入	三一三、四〇三円	三四九、三二〇円
	輸出	六七、六六一	四三四、四五〇
	計	三八一、〇六四	七八三、七七〇
琿春系	輸入	四八、八〇〇	九七、六八八
	輸出	一一二、四八〇	一七四、九五九
	計	一六一、二八〇	二七二、六四七
吉林系	輸入	一二二、〇五三	一八一、〇〇九
	輸出	三五、四八二	九三、七四〇
	計	一五七、五三五	二七四、七四九
總計	輸入	四八四、二五六	六二八、〇一七
	輸出	二一五、六二三	七〇三、一四八
	計	六九九、八七九	一、三三一、一六六

金融機關としては中國銀行分行、當舖一、殖邊銀行支店、官銀號分行、錢舖二あり、此の外延吉積金會社(支那)、共益貯金組合(朝鮮)がある。

通貨は日貨、露貨、各種官帖及銀元である。

工業としては油房五戸、磨房五戸を數ふるのみ。

第二　龍井村(六道溝)

局子街の南四〇支里、六道溝河の右岸に沿ふて建てられた市街で海蘭河岸にまで及んでゐる長さ約六支里、商埠豫定地は東方の丘麓で總面積約四三七、二〇〇坪である。

當地は全く商埠地として開放以後の發展である。

大正七年末に於ける人口統計は、

內地人	朝鮮人	支那人	合計
四七〇	四、一七七	一、二〇〇	一五、八四七

官衙と學校——支那海關署、審判廳分庭、稅捐局、郵便局、高等小學堂(以上支那)、總領事館、朝鮮銀行出張所、日本人居留民會、朝鮮人居留民會、尋常小學校、朝鮮人普通學校、間島農學校、耶蘇教會堂、天主教會堂、寺院三(以上日本)〇印は日本にあらず。

經濟——當地の貿易は常に輸入超加の片手貿易てあるか、近年農產物の輸出次第に盛になつて大豆、粟、高粱等輸出品の中に數へられ且つ附近なる天寶山銀銅鑛の新製品か加つて來た、輸入品は近來朝鮮よりする日本品か大部分を占め、從來の吉林及琿春よりするものは壓制された形てある、今大正三年以來の輸出入統計を見れは、

類別	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年
輸入額	七六、八六六兩	三五一、五三三兩	五三二、〇五八兩	八二一、一七九兩	一、五八二、四三五兩
輸出額	五八、六三二	九一、五三三	一一三、五七七	四六九、九六六	一、一八七、六九〇
輸出入總額	一三五、四九八	四四三、〇六六	六四五、六三五	一、二九一、一一五	二、七七〇、一二五

金融機關としては朝鮮銀行支店、龍井村救濟會、共同貯金組合、金融會、郵便局（以上日本及朝鮮）、主として日本貨か流通してゐる。

當地から朝鮮の會寧までは一二〇支里てある。

第三　頭道溝

龍井村の西四五支里、海狼河上流域の中心點て、西間島方面に通ずる要衝てある、商埠豫定地の面積は約一二〇七〇〇坪て人口は、

支那人		朝鮮人		日本人		合計	
戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口
六	一、五九四	三二	一〇二三	一四	四五	五二	二、六六二

官衙と學校――商埠分局、附屬巡警局、初級審判廳（以上支那）、總領事分館、鮮人普通學校

經濟――當地方は比較的農産物に富んてゐて、吉林及龍井村に出してゐるか今は恰んと龍井村の商範圍と云ふて宜い、輸入品も然りてある。

今當地に於ける主なる營業を擧くれは燒鍋二、雜貨商三〇餘、木材商二等て邦人は一の雜貨商あるのみてある。

第四　和龍縣城（大拉子、大磖子）

龍井村の南四〇支里、龍井村會寧間交通の宿驛て交通か頻繁てある、しかし人口約四〇〇に充たない、小都會て縣公署ある外大部分は農家てある。

第五　汪清縣城（百草溝）

局子街の北一二〇支里、嘎呀河流域の中心點てある、縣署、縣警察署、税捐局、郵便局、小

學堂及日本總領事館分館があるけれども殆んど市街の體裁を爲さない、現住者は戸數僅に八三戸、人口四〇〇である(日本人一八名)、そのうち鮮人が約二〇〇人居るが大てい農家である。

第六　琿春

圖們江の支流紅旗河の右岸、圖們江の左岸約一五支里の處にある、市街は東西約二支里、南北は僅に一支里に充たない、土城は周圍約七支里、商區は南門外一區である。(大正七年末)

日本人	朝鮮人	支那人	合計
一三〇	二六五	一五、〇〇〇	一五、六〇〇

當地は明治四十三年通商地として開放せられたけれどもまた商埠地の設定がない。

官衙と學校――縣署、縣警察署、琿春關、地方檢察分廳、稅捐局、郵便電信局、日本總領事分館、日本郵便局、日本人民留民會。

經濟と交通、琿春は局子街には二四〇支里にして達し、寧古塔に六〇〇支里、露領ポシエット九〇支里(道路良好)、朝鮮の雄基へ一五〇支里にして達することが出來る、その貿易徑路も亦浦鹽系(ポシエット經由)、淸津系(雄基經由)及吉林系(局子街經由)の三線に區分せられる浦鹽系は今從來の勢なく唯海産物を輸入するに止まるが淸津系は、その道路の險惡なのにも

拘らす輸入品か次第に増加して行く、しかし輸出品（豆油、豆粕、蔬菜類）は依然ポシエットに至るものか多い、而吉林系は運賃か最も高率てあるか支那製雑貨か舊日の如く販入されてゐる今海關統計を見れは、

年次	輸移入 露國より	輸移入 朝鮮より	輸移入 支那各地主として吉林局子街より	輸移出 露國より	輸移出 朝鮮より	輸移出 支那各地主として局子街へ	計	再輸出
大正四年	九九,五三二	二九,七二二	二二七,八五一	一八二,七三〇	一九,二四六	一五,八六三	六三五,二四〇	七六,五五五
大正五年	三三,六〇二	三四〇,〇〇七	一五六,八四九	一九三,三八四	七七,三四四	—	六六九,三五五	九三,八七〇
大正六年	六三,九七八	三六四,三八五	二三三,四一五	二六三,〇三八	一五八,一九九	—	八九一,〇二	二四,六七七
大正七年	七七,二五五	四九三,九二〇	—	一九九,二一〇	三〇九,七四九	—	—	—

而琿春に於ける主なる商店は、油房一三戸、燒鍋二戸、雑貨商五〇餘戸、藥屋三戸、飯館子三戸、鐵匠舗二戸、馬具屋二戸、家具屋四戸、糧店六戸、馬車宿四戸、旅人宿二戸等て金融機關としては吉林官銀號分號、銀局一に過きないか雑貨店か一部、金融事務を取扱つてゐる、尚日本慶源郵便局分室かあり金融事務の一部を取扱つてゐる、又附近は有數なる砂金地て琿春市場に現はるもの年額約一〇貫匁に達し經濟界に尠なからぬ關係を保つてゐる。

第七　東寧縣城（三岔口）

綏芬河の上流、露領東站とは僅に二支里を距てゝゐる、市街は北方に綏芬河を控へ附近はすへて丘陵を繞してゐる東西約一支里半、南北は短い、戸數約一八〇、人口約九〇〇、縣署、稅捐局、官鹽分局、巡防營、蒙養學堂等かある、住民は土著のもの少く秋季から翌年春までは遊民か集つて賭博を事とし、市場繁盛を極むるといふ、從て此時期に於ては人口三、〇〇〇を數ゐる。

經濟――當地に集散する物資は小麥、大豆等を主とし、露領に輸出してゐる、その年額は平均四〇萬元に及ふと云ふ、そして輸入は露領烏蘇里よりするもの年六〇萬元)と、哈爾賓から綏芬河を經由して來るもの(約年一〇〇萬吊)との二つに分つことか出來る、由來當地は對露貿易場として商勢頗る活氣を呈してゐたか、東支、烏蘇里兩線の開通以來非常に衰退してしまつたのてある、尙當市には燒鍋三戸、油房七戸、その他石灰、煉瓦、紙等の製造をするものかあるそして通貨は吉林官帖、小銀貨及露貨てある。

參考の爲、東站に於ける露國稅關統計を見れは(一九一四年)

旅客		輸出		輸入	
出境	入境	數量	價額	數量	價額
八、三四七人	八、二〇九人	一八、〇〇〇布度	三七、八三二留	二〇六、〇〇〇布度	一四二、四四九留

密輸出入の行はれることに注意せねばならぬ。

交通――綏芬河へは一四〇支里で達するが道路が險惡で寧古塔道路（四〇〇支里）は舊時の盛況を見る由もない。

第八　綏芬河（ポクラニチヤナ）

東支線の露支國境にある一都邑で、東北西三方に山を控ひ市街は鐵路の北に約一方邦里の附屬地と、その北約一支里を距てたる山間にある支那街と二つに分れる、人口は附屬地に於て約三、〇〇〇に達し中露人二、〇〇〇人以上あり、日本人も三十名ばかりゐる（飲食店）、支那街は人口約三、五〇〇、附近亞片の栽培が盛んで密輸入が多く行はれる、從つて商家の宏莊の者が建並んでゐる、但し冬期には減して二千人足らずになると云ふ、そして行政警察は支那商務會に於て行つてゐる、尙、東支鐵路哈綏護路軍副司令部、鐵路交涉局、權運局、緝私局等がある。

當地には露支兩國の稅關があるからその貿易統計を左に示そう。（支那海關）

年次	輸移入額	輸移出額	再輸移出額	計
大正四年	六、三九五、四七四兩	一六、二四三、〇七七兩	六七八、四六八兩	二三、三〇七、九四九兩
大正五年	一六、四八八、八〇三	一四、五七八、八二二	六四三、七〇五	三一、七一一、三一九

大正六年	五、八一四、九一九	一七、九八二、五五〇	二、一六五、一八五	二五、九六二、六五四
大正七年	四、七三八、一九三	七、四四七、四九七	一、七二八、三九七	一三、九一四、〇八七
大正八年	一一、三九一、五二七	六、四九二、三五八	六七四、八一五	一八、五五八、七〇〇

第九　寧安縣城(寧古塔)

吉林の東北八〇〇支里、東支線の一驛海林を去る南六〇支里、海拔一、三九〇呎の高所にあり、牡丹江を東にして市街は城の内外に亙つてゐる、內城は周圍約二、〇〇〇米、三門を設け一般市民は城外に住んてある、城外も亦土壁を以て圍まれ牡丹江に沿ふて長方形を爲してゐる、今は內城外壁共に廢跡と同樣てある、最も繁華の街は城北なる東西の一街て西關南關之に次いて雜沓してゐる、道路の幅は大街に於て五、六間あり兩側に排水溝を備へ、小路と雖も二間はある、又城內の道路には木材か敷いてある、戶數四、〇〇〇、人口約二八、〇〇〇(內日本人約四〇)

由來寧古塔は吉林省に於ける中心地として、渤海、金時代からその主都となつてゐた古い歷史のある土地てある、淸朝に於ても康熙十五年までは、寧古塔將軍の駐紮地として吉林省行政の中心てあつたのてある、その後も常に副都統の駐するあつて、依然重要視せれら民國二年始めて縣治に改められた。

官衙及學校——縣署、縣警察所、寧古塔協領公署、吉林混成第四旅歩兵第一團本部、權運局、中學堂、兩等學堂、旗務學堂、自治會、官鹽分局、電報局、郵便局、清眞學堂、耶蘇教堂、天主教堂、清眞寺其他廟宇十八箇所。

交通と經濟——當地と吉林間は古くから著名の交通路て、その他三岔口、局子街、三姓(四六○支里)に至るものも、重要交通路てあつたのた、そして海林驛とは僅に六○支里の陸路で聯結され、且つ水路(夏季のみ)を以て牡丹江驛や三姓にも通してゐる。

而當市に集散する物資は小麥、燕麥、蜀黍等の農産物か主て、露領に輸出するもの多額に上り、大豆の運送も亦少くない(集散穀物年約一○○萬石)其他人蔘、鹿茸、毛皮、葉煙草等も吉林、露領及哈爾賓に販出される、就中穀類と煙草は品質か宜いので評判てある、輸入品はすへて鐵道により浦鹽又は哈爾賓から販入され價額約八○萬吊に達してゐる、又燒鍋一○戸、油房四○餘戸、磨房六○戸あつて、その製品の露領に販出されるもの僅少てないといふ。

金融機關としては官錢局、中國、殖邊、交通、農工の各分行及寧古塔借款公司(日本人株式組織資本六○萬吊)銀莊二、票莊五、質屋六戸(銀莊兼營)等あり、官帖及硬貨か流通してゐる。

第十 東京城

寧古塔の西南六〇支里、牡丹江岸に位してゐる、當地は古昔、肅愼の古都として著名てある城廓は周圍約十二支里、人口約八〇〇、附近村落の物質集散場てある。

第十一　海林(黑林)

東支線の一驛て寧古塔の北方六〇支里、北方を海林河か流れてゐる、市街は停車場附近に建設され人口約二、〇〇〇(日本人一五〇)を有してゐる、哈爾賓交渉局の分局かあり交渉事務の外木石税局を兼ねて警察分局、鹽務分局と共に重要官衙てある。

當地は南に寧古塔の市場を控へてゐるので穀類の集散多く木材も日支合辦にて海林河を利用し、大いに搬出されつゝあり輸入品の當驛を通過する者か少くない、それに工業か盛て露支兩國人の經營に係る酒精釀造所三、製粉所三を始め油房四戸あつて、特に油房は漸次盛になつて行く、亞片も亦綏紛河に次いて盛に栽培され密輸入か盛てある。

第十二　横道河子

東支線の哈爾賓、浦鹽間の中央に位置し寧安縣下てある、四周山に包まれ市街は支那街及附屬地の二に分たれ、人口約一、五〇〇今は往時の繁榮を馬賊出沒の爲に減しられてゐるけれとも依然穀類、木材の積込地として知られてゐる、支那及露國の各一箇中隊駐屯し警備に任してゐる。

第十三　額穆縣城(額穆索)

吉林の東三〇〇支里、馬塵河の左岸にある、吉林寧古塔間の驛站である、市街の延長約三町東西に通する一街である、人口僅かに四〇〇人、縣公署、警察署、稅務局、電信局、基督敎會、高等國民學校等かある。當地の經濟はすへて吉林の範圍て、大豆、小麥を主とする農產物の輸出から各種雜貨の輸入まてすへて吉林てある。

又市街の東端には、牲畜市場、柴草市場、人工市場等かある。今當地から各地への距離を見れは局子街へ三五〇支里、敦化へ一〇〇支里、寧古塔へ二八五支里。

第十四　敦化縣城(鄂多里城又は阿克敦城)

吉林の東南五〇〇支里、牡丹江の左岸廣濶なる平野の中央にある、周圍約一〇支里の土城かあり東街南街及東門外か繁榮の區である、當地は清祖發祥の地と云はれ、光緒八年縣治を置かれ今日に及んてゐる、戶數約一、〇〇〇人口約六、〇〇〇、縣署、警察署、官鹽分局、榷運局、小學校、巡防隊等かある。

物產は農產物、野獸、木材等てあるか少量て輸入貨物も附近村落に供給するたけて吉林から販入されてゐる、倘燒鍋三戶、油房七戶、磨房四四戶ある。

第三編　黑龍江省管下

第一章　綏蘭道管內

第一　呼蘭縣城

哈爾賓の北六十支里綏化の南百八十支里にあり呼蘭縣署の所在地てある、松花江の支流呼蘭河か城の西南を流れてゐる、城内の市區は東西南北大街の四區に別れ、南北兩大街か就中熱鬧てある、戶數三千二百餘、人口約一萬九千、北滿有數の大都市てある、居留外人としては墺國人一名、露國人二名の商業を營むもの〻外英佛の宣敎師かゐる。

當地に廳政の設けられたのは最近淸朝に始まり、副都統を置いてその開拓に當らしめてゐたそして呼蘭府城の治所となつたのは光緒三十一年てある（一九〇五年）民國二年縣治に改めて現時に至つてゐる。

官衙及學堂

縣知事公署、縣警察署（警察は城內に二分局を置いて法治に任す）、國立收稅局、電信、郵便

局、鹽務局、兩等小學堂一、乙種農業學校一、佛人宣敎師經營小學校一、廣育中學（英人宣敎師經營）女子國民學校（英人宣敎師經營）

交通　東支鐵路の對靑山驛より東四十支里にして當地に達する大道ある外、哈爾賓（南六十支里）綏化（北百八十支里）巴彥蘇々等に達する坦々たる大道がある、夏季には哈爾賓との間一日一回汽船の往復もあるし、先づ交通の要衝である、この水路一〇五支里。

その經濟狀態　從來北方穀產地方から來集した穀類は直接安達、滿溝、對靑山等に搬出せられる傾向があるので商業地としての價値は底下しつゝある。

而輸入品は大部分哈爾賓より來り附近一帶に消費せらるゝもの綿糸綿布を其大宗品として砂糖、紙、マッチ等をも含む。

金融機關としては官銀號、中國、交通、殖邊、齊々哈爾銀行、廣信公司等の支店又は出張所及儲蓄銀行（資本小洋票十萬元）がある、此外當舖錢舖十數戶あつて相當の信用を維持してゐる。

呼蘭錢糧信托公司は大洋八萬元の資本を以て（四分の一拂込）民國七年五月より營業してゐるト魁官帖（廣信當の發行に係る）は此地方の標準通貨として流通額最も多し、商業機關として商務會あることは各地に異らない。

電氣事業　電燈會社は永業廣記火磨會社の兼營て民國六年の開業に係り六百の電燈を供給してゐるか光力微弱てある、而電話公司は官商合辦て資本小洋票八千元、電話總數一五〇口、一箇月の料金小洋六元てある、尙當地郵便局と哈爾賓郵便局との間に公衆電話の取扱をする。

工業　磨坊と燒鍋とかその主なるものてある、前者は永業廣記火磨會社(資本一五〇萬留)を最大なるものとして城內に約一〇〇戶ある、後者は僅に四戶て資本も亦少ない。

第二　巴彥蘇々(巴彥)

哈爾賓を去る北二〇〇支里北方に遠く北山々脈を望み四圍は廣濶な沃野てある、烏裒河を南にして城は正方形の土壁を繞し七門ある、周圍二〇支里、城內の大街は縱橫各二あつてその中東西に通する太平街は最も繁盛てある、戶數二、八〇〇餘人口一六、五〇〇に達す、外人として は佛人布敎師一。

巴彥州は前淸同治元年の開拓に係り光緒元年呼蘭廳理事廳衞門を設け三十一年改めて州治となつて獨立したものてある。

官衞及學堂　巴彥縣知事公署、縣警察署(城內を二分局となす)、高等小學一、男女國民學校各一、此外習藝所なるものあり囚人を收容して裁縫、木工等を敎へてゐる。

交通　東六十支里にして木蘭縣に達し、西一四〇支里にして呼蘭に通する大道かある、由來當地は呼蘭、三姓間の國道上に位置し、近く滴達嘴子(三〇支里)及石頭河子(三五支里)の二碼頭を控へ交通の樞要地てある。

その經濟　東北西三面の沃野よりする穀物の集散少くはない、小麥、大豆等は十萬石にも達するたらうとの事、此地の問屋に依らす直ちに碼頭から吐出せらるゝものを計上すると倍額以上にも達するたらう、輸入品は依然綿布を大宗品として砂糖、マッチ等てある。

金融機關は官銀號分號か紙幣の發行を爲す外巴彥地方儲蓄銀行(資本江省帖子一百萬吊)かあつて商家の金融を取扱つてゐる、當舖及錢舖はその主要なるもの合計十一戶、中二戶の當舖は官商合辦てある、廣信公司支店か毀損帖子の引換と糧錢の業務を行ふことは呼蘭と同樣てある市中流通通貨の九割はこの帖子て官銀號、商務會、縣署地方經徵處等も帖子を發行してゐる。

巴彥電話公司　民國六年六月の開業て資本露貨九、七五〇留、電話口數七七、長距離電話は當地と南方三十支里の滴達咀子の間に通してゐる。

工業　燒鍋二三家を數得るのみ

第三　木蘭縣城(索羅章口)

木蘭河の東に瀕し巴彥の東一二〇支里、光緒三十年より呼蘭府の管轄となり、治所は西八〇支里なる石頭河子にあつたが光緒三十四年當地に移轉したのである、戶數一、〇〇〇餘、人口八千に達せんとしてゐる、六、七年以前までは戶數一〇〇に充たなかつたさうた、唯縣廳の移轉と松花江の水運とが當地の繁榮を誘起し附近開墾の業も着々進涉してゐる。

第四　蘭西縣城（雙廟子）

光緒二十三年蘭西縣の設置と共に都市を形成したもので呼蘭を西に去る一〇〇支里、東北南の三面に大平野を控へ西方に一小丘を負ふてゐる、戶數八百餘戶、人口三千三百餘人、西南六〇支里にして對靑山驛及宋驛と通し東一〇餘支里にして呼蘭河舟楫の便がある、農產物の集散額も二三萬石に過ぎす、地方的小集散地である。

市街は南北大街一道を數ふ得るのみで知事公署の外警察署及巡防馬隊一營あり、尙巡警敎練所の設けがある、學堂は高等、初等の二で外に支那人布敎の天主會堂がある、廣信公司帖及官帖號帖が當地の通貨である。

第五　綏化縣城（北團林子）

呼蘭の北一八〇支里にあり光緒十一年始めて綏化廳を設けた、同三十一年陞せて府治とした

か民國二年縣署に改められた、市街は十字街及二道街を重な街路とし就中東西大街は繁華の區である、戸數三千人口一萬六千餘。

官衙及學堂　綏蘭道尹公署、綏化縣署、縣警察署（一分局）兩等小學堂一、乙種農學校一。

交通　南呼蘭に至る一八〇支里、北二〇〇支里にして海倫に達する道路の外東二〇〇支里にして餘慶に至り、西は安達站及青岡縣、南は蘭西及呼蘭の諸地方から北行する者並に北方望奎、海倫、綏稜諸縣から南行する者は皆當地を通過するから交通は頗る繁く、又近く呼蘭河水運の便を控へ且つ濱黒鐵道の豫定經由地である。

その經濟　集散品は大豆、小麥か大宗で年額約三十萬石に達する、冬季は馬車で哈爾賓に南下し對青山、安達にも出て行く、夏季は水運を利用し、大部分洪家船口（西北三五支里）に出るか孫家船口、趙家船口にも出て行く。

輸入品は綿絲布及雜貨で陸路哈爾賓から運はれる、水路によるものは關税を取られるので至ゝない、而運送業者は六戸あり、何れも哈爾賓との聯絡を缺かない。

金融機關としては廣信公司、錢糧信託公司（資本大洋三萬元）中國、交通兩行の出張所、官銀分號、江省農業銀行（現在資本五萬元に減少す）（資本大洋二十萬元拂込十八萬元）濱江農産銀行

支店（休業）誠信貸莊（資本十萬留）當舗三、錢舖大小共三十餘戶、票號二戶。

工業及電氣　綏化電話公司は大洋一萬一千元の資本を以て商辦とし口數一〇〇個、油坊は雜貨燒鍋、糧棧等を兼業するもの多く、其數大小二十五戶、生産高一箇年豆油三百萬斤であると云ふ。

第六　望奎縣城（五井子）

民國六年始めて望奎設治局設置せられて移民を召致し翌年縣治に改められた、戶數一千二三百人口約八千餘、新興の土地である綏化、海倫間の要地に當り南方四十五支里には通江埠の碼頭があつて穀物の輸出が盛である、望奎錢糧信託公司（資本四十萬吊拂込小洋二萬元）は官銀分號と共に活動してゐる、當地は將來の都市である。

第七　慶城縣城（餘慶街）

北關林子を去る東一一〇支里上集廠を南に去る七支里東は一一〇支里で鐵山包に達す、本街は同治年間の開拓に係り現在戶數約一千人口約六千あり開墾事業の一段落を告けたる今は林業を以て生命とするあるのみ、唯縣城の西北十八支里に毛山碼頭あつて吳家船口と共に當地と哈爾賓とを聯絡して農産物の搬出に當つてゐる。

第八　鐵山包(鎮邊營)

餘慶の東一一〇支里呼蘭河の右岸にある、民國四年設治局を置かれてから稍市街の體裁を備へたけれども今尚戸數八〇戸に滿たない、唯林業の中心地としてその命脈を保つてゐる、即ち鐵驪森林公司は資本大洋二百萬元を擁して鐵驪全縣下の森林材採の獨占權を有し、哈爾賓に本社を置いて活動してゐる、本公司は官商合辦である。

第九　上集廠(綏楞縣城)

北團林子の東北一四〇支里民國四年綏化縣上集廠縣佐を改めて設治局とし、六年縣治に改めた者で戸數五〇〇人口三、五〇〇、周圍に土壁を廻らし南北に通ずる大街あるのみ、附近の地味肥沃であるが水質頗る惡く殆んど飲むに堪へない、縣公署の外巡防隊があつて警備に任してゐる、初等學堂二。

第十　海倫縣城(通肯)

北團林子の北方二〇〇支里東上集廠を距る九〇支里、此地方は光緒二十三年始めて開放せられたもので十二三年前までは戸數二、三十戸に過ぎなかつたのに今では二千八百餘の戸數と一萬七千〇八口とを有する大部會になつた、東荒地方最北部の大市場である、市街は東西南北各

十二三町に亙る十字街で並樹及街燈等もあつて道路が仲々整つてゐる。

官衙及學堂　縣公署、男女高等小學及國民學校あり。

その經濟　當地輸入雜貨は營口七分哈爾賓三分で哈爾賓からは冬季は七日、夏季は十日で當地に達することが出來る。そして輸出貨物たる農產物は大豆、小麥、豆油、燒酒を主としその年額大豆十五萬石、小麥十五萬石、豆油三百萬斤、燒酒二十萬斤內外である、右の中燒酒は齊々哈爾及黑河に向ふものが少くない。

金融機關としては儲蓄銀行(資本二百萬吊拂込四分の一民國八年開業)、官銀號分號、廣信公司、中國銀行出張所等の外票號一、錢舖大小二十三を數ふ、そして錢糧交易信托公所は官辦にて業務を行つてゐる、魁帖及官銀號帖が此地の主要通貨である。

工業及電氣　工業として擧け得るのは燒鍋及油坊で前者は八戶一箇年生產額約一〇〇萬斤、後者は約二〇戶なり、一箇年生產額三百萬斤以上に及ふ、而電話公司は大洋一二、〇〇〇元の資本を有する商辦公司で加入口數七〇。

第十一　通化縣城(頭甲八井子)

火磨(機械製粉所)も亦一箇年麥粉五十萬斤を生產す、その名が德裕昌である。

綏蘭道の北隅にあり海拔も相當高い、戸數約三十、人口約二百に過ぎず、唯當地も林産の地て森林多い、その採材權は全部通原林業公司（廣信公司出資、江省小洋票一二〇萬元、本店哈爾賓、支店海倫）の所有てある。

第十二　龍鎭縣城（龍門）

明國元年龍門設治局を置いてから市街を形成し、六年縣治に改めた、戸數六九人口二六〇に過ぎない。

第十三　通河縣城（大通）

木蘭縣を東に去る一五三支里、以前三姓街道の一站てあつたか光緒三十二年大通縣を此地に設け民國三年通河縣に改めて今日に及んてゐる、戸數三五七、人口三、三七八。

第十四　湯源縣城（湯旺河）

光緒三十一年縣公署を當地に置かれ、現在は戸數四九〇戸、人口二、八〇〇に達してゐる。三姓を距る北一二〇支里、松花の支流湯旺河口に位し汽船又は民船によつて哈爾賓地方と交通をしてゐる、その汽船碇泊地は市街から約一〇支里を距つてゐる。

第二章　龍江道管內

第一　齊々哈爾(卜魁)

哈爾賓を去る西北七〇〇支里、東支鐵道齊々哈爾驛を去る北四五支里、黑龍江行政の中心で市街は二重の城壁を以て圍繞せられてゐる、外城は土城と稱し南北約三十町、東西十八町、大、小西門及東南北の五門がある、內城の周圍約二十四町、方形で四門ある、俗に磚城と云ふてゐる、而內城は官衙の所在地で商業區域は外城である、就中南門大街及南門外がその優なるものだ、人口約四萬、中日本人百六十五人(男五二、女一一三)督軍公署、省長公署、高等審判廳、地方審判廳、地方檢察廳、龍江縣公署、道尹公署、警察廳、警察所、財政廳、政務廳、交涉署實業廳、森林局等の諸官衙と中學校、男子師範學校、女子師範學校、蒙旗中學校、職業學校、商業學校、農業學校、法政學校、工業學校、女子教養院、官醫院等の諸學堂とがあり、先農壇關帝廟、萬壽寺、龍王廟、大悲寺、鬼王廟、娘々廟、藥王廟、昭忠祠、普恩寺、鎭江閣、城隍廟、馬神廟、文昌廟、江神廟等を廟祠として數ふることが出來る。

當地は康熙二十八年副都統を設けたるに始り、三十八年將軍を黑爾根から此處に移してから

は黒龍江省の中心として連續し、民國二年現在の諸官衙か駐在することになつたのてある。

交通　先つ當地黒河間の大道(八八一支里)を主要路として西海拉爾へ八四〇支里、東呼蘭へ六〇〇餘支里(七五邦里)南伯都訥へ五四五支里、共に驛路てあるか、現在は呼蘭及黒河への道路を頻繁な交通路とする外他は振はない、之れすへて東支鐵道にその必要を奪はれたのてある、而此東支鐵道齊々哈爾驛から省城の南門外まては齊昂輕便鐵路の布設かあり、元と資本三二萬兩を有する官商合辦事業てあつたか今は龍江縣の經營に移つてゐる、南門外は開放商埠地なのてある、夏季に於ける水路も亦齊々哈爾に取つて重要なるものてある、卽ち當地と墨爾根間の民船航行は途中二十五箇所の淺所かあるけれとも運搬する穀類雜貨の數少くない、一時小汽船い曳船を開始したことかあるか間もなく廢せられた。

その經濟狀態　當地附近は土地磽确て物資の集散も多くはなく、元來商業都市てはないのた、唯西南蒙古に對する交通路として蒙古貿易の關門を爲してゐた關係上蓄類の取引か可成多い、輸入も當地及その附近にて小賣せらるゝもののみてあるか、それても日本品のみて二百六十萬元その他に留貨て八百七十萬元にも達してゐる、そして資本一萬元以上の商舖は雜貨商一〇戶糧業五戶、木業一戶ある、市場は南門外、東門外及北門外の三箇所て南門外は燃料及野菜を東

門外は燃料及曹達を北門外は魚類を賣買してゐる、そして曹達の賣買に對してのみ徴税してゐる。

商務總會は之等一般商務の機關として活動してゐる。

金融機關としては江省官銀號（資本四十萬兩）江省廣信公司（資本五十萬兩官商合辦）中國銀行分行、交通銀行分行、殖邊銀行分行、錢莊九（資本最高一〇萬元最小五千元）當舖六（資本最高二〇萬元最小一萬元）あり、通貨の主なるものは官帖及小洋票である、又齊々哈爾驛には朝鮮銀行の出張所がある。

第二　大賚縣城（莫勒紅崗子）

齊々哈爾を去る西南三〇〇餘支里札賚特旗領に屬してゐる、嫩江かその東八支里餘のところを流れてゐる、市街は東西南北の二大街から成り東西約二支里半、南北三支里、周圍に土壁と外壕とを繞してゐる、商家は東西大街にあり戸數は一三〇〇人口約九五〇〇と稱してゐる。

當地は光緒三〇年始めて縣治を設けられたものでそれ以來漸次發展して來たのだ。

官衙及學校　縣公署、警察所、徴收分局、勸學所、煙酒公賣分局、權運分局、通俗教育社、郵政局、電報局、商務會、陸軍騎兵一連、高等小學一、女子高等小學一、第二國民學校一。

交通とその經濟　當市の重要關係市場たる伯都訥には一四〇支里にして達し長春には農安經由四七〇支里、洮南には安廣經由二七〇支里である、而齊々哈爾には哈爾賓を經由するものと站道を行くものとがあり、前者は五二〇支里後者は四七〇支里、此等交通路によりて集散する物資は輸出に於て大豆、包米、小豆、粟、高粱、麻子、糜子等を數ね、大豆は約五萬石を長春へ約二萬石を哈爾賓へ、粟約五萬石を伯都訥へ、糜子は全部蒙地に販出してゐる、尚漁獲も年額一〇〇〇萬支斤に達しその半は鮮魚として長春方面に輸送せられてゐる。

輸入品は綿絲布雜貨で長春吉林、伯都訥等からやつて來る、その價三〇萬元を越してゐる。

金融機關としては一の當舖さらなく、通貨は江帖か大部分を占めてゐる。

工業　燒鍋三家、油房餘家、磨房四〇餘家ある。

第三　泰來縣城（泰來溪）

齊々哈爾を距る西南二五〇支里、大賚の西北二五〇支里、ホケリと稱する蒙古部落所在の丘陵の麓にあり、泰來溪蝲泡に臨んで南北に通する一條の大街より成りその長さ五支里、附廓の蒙古人を合し一四七〇〇の人口を有してゐる、當地に設治局を設けられたのは宣統元年で縣公署を置いたのは民國六年である。

官衙及學校　縣公署、縣警察署、徵收局、勸學所、中和地局、商務會、教育講演所、電報局三等郵政局、榷運局、煙酒公賣分局、高等小學、女子小學堂、外に邊防隊二營あり。

交通及その經濟　當市の商關係は齊々哈爾を主とし管內より來集する穀類は多く同地に販出し又同地から雜貨類を販入する、時に伯都訥經由長春から販入することもある、そして商務會あつて商舖大小一四〇餘家燒鍋二家、雜貨舖三〇家、油房一、旅店大小一〇家を代表してゐる、各地との里程は齊々哈爾二四〇支里、洮南三〇〇支里、大賚三〇〇支里、塔子城七五支里。

第四　肇州縣城(二臺站)

哈爾賓の西方二八五支里、松花江の左岸八支里郭爾羅斯後旗に屬してゐて光緒三十二年當地に肇州縣を置かれて以來今日に及んでゐる、市街は約二支里四方の土城に包まれ人口約二五〇〇。

官衙及學校　縣公署、警察派出所、徵收分局、商務分會、電報局、郵便局、高等小學一、女子國民學校一、外に黑龍江騎兵第四旅の三連駐在す。

交通とその經濟　伯都訥へ九五支里、滿溝站(東支線の一驛)へ一九五支里、大賚へ一五〇支里又南八支里なる松花江岸には肇州輪船碼頭あり民船は伯都訥又は陶賴昭に到り、汽船は哈爾賓

伯都訥間航行のもの十日に一回寄港する、但し夏季氾濫を蒙る爲め商勢振はす、物資は附近なる豐樂鎭及老城基に集る、當地よりするものは長春及張家灣に至り哈爾賓には鷄卵を輸出してゐる、輸入品も亦長春、伯都訥から來るものが多い、通貨は官帖である

第五　肇東縣城（昌武城）

北郭爾羅斯に屬し肇東の東北一六〇支里。安達驛の南九〇支里にある、民國二年肇東縣公署が當地に置かれたのである、市街は東西南北各二支里半、商家は東北大街に連接してゐる、人口五五〇〇戸數八八〇を算す。

官衙及學校　縣公署、警察所、徵收局、榷運局、代辦郵政局、高等小學一、國民學校一。

交通及其經濟　東支線の滿溝站（甜草崗又は宋驛と稱す）に至る六〇支里、豐樂鎭に至る六〇支里、哈爾賓に至る二三〇支里であつて輸入雜貨は哈爾賓から滿溝站を經由するもの大部分であるが冬季は長春から直接來るものがある、而輸出穀物は主に冬季陸路直接に哈爾賓、張家灣長春等へ販出してゐる、官帖がその通貨である。

第六　豐樂鎭（小城子）

肇州縣管下の一鎭店で縣城を去る北東九〇支里、市街は東西南北の十字形に構成せられ戸數

四〇〇、人口四〇〇〇を算してゐる、市況の活潑なること遠く縣城をしのぎ商務會、徵收局、権運分局等は皆此地にある、尙縣警察所、騎兵一營か此地に駐屯し高等初等小學堂もある。

交通と其經濟　滿溝站へ九〇支里、安達站へ一三〇支里、農產物市場として可成重要の位置を占め例年二〇萬石以上の穀物來集しその過半溝滿站及張家灣、長春方面に販出する、輸入も亦長春よりするもの多く、蒙古人に再輸出するものもある。

工業として數ふ得へきは燒鍋二戸、油房八戸、磨房三〇餘戸にて中には蒸汽機關を使用するものかある。

第七　安達縣城

齊々哈爾の東南二七〇支里安達驛の西方六〇支里、光緒三十二年の奏設に係り民國二年縣公署を設置された、市街は土壁と外濠を繞し戸數四五〇人口約三〇〇〇ある、その長さ東西南北各二支里に亙つてゐる。

官衙及學校　縣公署、監獄所、勸學所、警察所、商務會、代辦郵政局、男子高等小學、女子國民學校。

當市は安達驛にその繁を取られ農產物の來集の如きも大豆の二萬五千石を最大とし、白豆小

麥等の小量あるのみ。

第八　安達驛

安達縣城を去る南六〇支里東支線の一驛である、戸數一、五〇〇人口八、〇〇〇（中露人三、〇〇〇、日人一五人）商舗多く活氣がある、取扱商品は綿布を主とし其他雜貨を合せて一箇年八〇〇萬吊の賣上ありと云ふ、而北方諸縣から來集する穀物は大豆の四〇萬石、小麥一五八、〇〇〇石、粟、高粱の二萬石等を主とす、東支鐵道の貨車配給不足の爲、陸路長春に至るものが多い、東支沿線の浦鹽、哈爾賓、知多等にも小麥を輸出してゐる、そして金融は江省官銀分號と錢糧公司とが機關となり、流通貨幣は江帖、洋錢票、羌帖の三種である。

第九　青岡縣城（柞樹岡）

安達の東北九〇支里、蘭西の北にある、市街は十字街て東西二支里、南北三支里ある、戸數六八〇、四千の人口を有つてゐる、當地は光緒三十一年の置縣以來の發達である。

官衙及學校　縣公署、警察所、徵收局、電報局、代辦郵政局、陸軍騎兵一連、高等小學一、女子高等小學一、乙種農學校一。

經濟　輸入の綿布雜貨類はその七割を哈爾賓て仕入れ、他は長春地方から來る、之等はすへ

て對青山驛から馬車て運はれる、そして輸出穀物は年十萬石内外てある、それ等は槪して安達驛に運はれる、油房五家、燒鍋四家、省城齊々哈爾を販路としてゐる、通貨は依然官帖か多數てある。

第十　興化鎭（六屯）

青岡縣城を距る北八〇支里綏化、齊々哈爾間の舊官道上にあつて、戶數四五〇、人口三千、市街は一條の街路てあるか商業は仲々活氣かあり、警察分所、電報局、徵收局、高等小學、女子國民學校かある、油房、燒鍋等も一箇年各十萬斤の所產かある、

第十一　拜泉縣城（大泡子）

胡裕爾河の南雙陽河の北岸海倫の西一六〇支里にある、市街は三支里四方、土壁を繞らしてゐる、當地は光緖三十三年以來縣公署の所在地てある、戶數二、三〇〇、人口一七、〇〇〇。

官衙及學校　縣公署、警察所、徵收局、官鹽局、蒙旗租賦局、電報局、郵政局、男子師範傳習所、女子師範傳習所、男子高等小學、女子高等小學、男子國民學校四、女子國民學校三。

交通及其經濟　輸入品の六割は營口より來り他は長春、哈爾賓からする。

工業としては磨坊一〇〇戶内外（製粉總額七五萬斤、價格二六〇〇〇元）油房二〇餘家（一箇

年製油高豆油三六萬斤、麻油二〇萬斤、蘇油十五萬斤）燒鍋四戸（一箇年六十萬元）共に黒河及齊々哈爾へ移出してゐる。

金融機關としては江省官銀號分號、錢舗五戸あり、通貨は江帖を多しとする。

第十二　克山縣城

烏裕爾河流域訥河の東南一八〇支里、光緒三十一年から縣公署の所在地となつてゐる、人口六五〇〇戸數五〇〇、縣公署等の外騎兵四連か駐在してゐる、學校は高等小學と國民學校の二つ商業も農民對手のもので哈爾賓及齊々哈爾拜泉等から商品を仕入れる、油房六（二〇萬斤）燒鍋五（三六萬斤）共にその製造高の半は黒河及齊々哈爾に輸送してゐる、江帖かその通貨となつてゐる。

第十三　訥河縣城（博爾多）

嫩江の支流訥謨爾河の北岸を去る五支里の平原中にある、嫩江本流までは西數十支里である市街は新舊の二市から成り新市街は光緒三十三年の建設で十字街に劃成せられ、寂寞たるものてあるか、舊市街は新市街を去る二支里の地にあつて唯一條の不規則な街路てはあるかやゝ繁華である、戸數合計五〇〇、人口合計約二五〇〇ある、當所の開かれたのは可成に早く康熙三十

年である、始めは副都統衙總官一員を置いて索倫、達呼爾兩總管を總轄せしめてゐたが後宣統二年に至り漸く撫民同知の任命を見、民國二年縣公署が置かれたのである。

官衙及學校　縣公署、黑龍江學田局、警察所、税捐局、郵政局、榷運分局、高等小學、中等小學、女子小學。

交通及その經濟　齊々哈爾には西南二七〇支里で達し、布西には江西六〇支里、嫩江には北一五五支里ある、而輸入雜貨は齊々哈爾から來り年額十萬元に及ぶと云ふてゐる、輸出は小麥を主とし粟、燕麥、大豆等でこの外工業品として製粉十五萬斤、造酒七八、〇〇〇斤等ある。

第十四　嫩江縣城(墨爾根)

嫩江本流を去る一支里程の左岸にあり、齊々哈爾、黑河街道の中央に位置してゐる、康熙二十九年以來、同三十八年に齊々哈爾に移されるまでは黑龍江將軍の駐在地であつた、それ以來副都統が駐在してゐたが光緒三十四年嫩江府に改められ民國二年縣公署を置かれて今日に及んでゐる、西北遙かに大興安嶺を望み東南に遠く沃野を控ねたる市街は東西二支里、南北二支里半二大街から劃成せられ、商家は大北大街にある、人口二、四〇〇、戸數三六〇、市狀振はず。

官衙及學校　縣公署、電報局、郵政局、陸軍第二混成旅騎兵第三團本部、第一高等小學、女

子國民學校、省立鄂倫春國民學校。

經濟　輸入は齊々哈爾よりし夏季は民船により冬季は馬車を以てする、その年額二六萬元、製造燒酒は約二萬斤を黒河に搬してゐる、尚黒龍江裕民墾植有限公司かあつて開墾事業に當つてゐるもの丶外見るへきものかない。

第十五　林甸縣城（大林家甸）

齊々哈爾の東一六〇支里、安達の西一八〇支里にあり、光緒二十四年稽墾局の設あり、民國六年縣公署を置かれた、市街は五支里四方の廣大な區域てあるか人家稠密てない、戸數三五〇人口二、五〇〇、縣公署の外徵收局、榷運分局、電報局、郵便分局、高等小學一、國民學校二女子國民學校一ある、當地の商品は多く長春て仕入られ、東支線の小河子驛まて汽車積とし、陸路九〇支里は馬車て運はれる、その年額一八萬元、穀物の集散及油房、燒鍋等かあるか輸出するには至らない、當舖一ありて金融を取扱ひ通貨は江帖てある。

第十六　景星鎮

元と龍江縣の管下てあつたか民國四年設治局を置かれた、札賚特旗領て景星鎮と改稱せられたのか光緒三十一年てある、市街は齊々哈爾の西南三〇〇餘支里、景星山麓にある、大北大街三

條と東西大街五條から成り各街共三支里の長さかある、此れは豫定道路でまた荒蕪の地か多い

戸數一七〇、人口一、〇〇〇、設治局、牧畜木植稅局かあり、雜貨は齊々哈爾から輸入してゐるか多くはない、通貨は江帖である。

第十七　布西（布西特）

嫩江の支流ノミンゴールに沿ひ訥河を去る西六〇支里、布西設治局の所在地である、當地は光緒三十二年の開放に係り巡防隊かあつて附近の警備に任してゐる。

第三章　呼倫貝爾管内

第一　海拉爾

海拉爾河、伊敏河會流點南方七支里、峪地の中にあり、呼倫貝爾の都城蒙古政廳の所在地てある、當市街は東支線附屬地市街と海拉爾城市街とに分れてゐる、前者は全面積六、五〇〇晌地（我約一、四〇〇萬坪）停車場その中央に位置し、鐵道線を以て南北に分れてゐる、北部には多く官設建築物あり、商家は主として南部にある、戸數一、〇五〇、人口八、〇〇〇に充たない、露國領事館、露亞銀行支店、借款銀行、守備隊（以上露國）鐵道交渉分局、郵便局、電信局、商務會（以上支那）等の諸官衙かあり、その行政は東支鐵道長官監督の下に村會之を行ふ、舊海拉爾城は鐵道附屬地の南方約二支里にあり、南北に通する街路一、東西に通する街路二より成る戸數約三五〇蒙古人約一、五〇〇餘支那人約三、〇〇〇ある、官衙として呼倫貝爾督辦兼交渉員公署、呼倫縣公署及蒙古政廳、黒龍江騎兵第二旅司令部あり、大小商舗一〇〇餘戸、對蒙貿易か仲々盛てある、但し飲料水不良にして五〇の井戸は用ゐられす僅に二箇の良好なるものを得て之を市民に賣りつゝあり、當地の重要なる營業としては先つ屠獸業を數ね附屬地村會設立の

屠獸場かあり、冬期を屠殺期としてその數三萬頭に達す、羊かその大部分てある、之等の肉は沿海州及黑龍州に運はれるか直接鐵道に依るものと陸路齊々哈爾に出てそれから各地に販出されるものとかある、次は皮革貿易業て之れは直接歐露に輸送される、しかし品質は劣等たと云ふ、羊毛洗滌業も仲々規模か宏大て急流伊敏河畔に五箇所ある、その輸出概數は羊毛二萬八千プード、小羊毛一、四〇〇プード駱駝毛三〇〇プードてある、その他麥酒釀造所二箇所火酒釀造所一箇所ある。

第二　滿洲里

後貝加爾線の終點東支線の起點て露支の國境にある、當地は光緒三十四年一度臚濱府を置かれたか獨立の爲一時蒙古政廳の管下となり民國四年獨立取消後再ひ縣公署を置いた、市街は四周山を以て圍繞せられ、東支線の附屬地面積六千晌(晌は我七段二畝餘)停車場その中央にあり南部は官設建物北部を商業區としてゐる、そして商業區は縱斷の街路五條橫斷のもの六條あり戶數二、五〇〇餘、人口外國人一〇、〇〇〇支那人約六、〇〇〇を算し中日本人約三百人居る、寺院學校二、鐵道病院、檢疫所、測候所、郵便電信局、村會(以上露國)鐵道交涉分局、稅關、商務會、縣公署、中東鐵路護路司令部、奉軍混成旅司令部(以上支那)等の諸官衙かある。

滿洲里輸移出入額累年比較

年度	輸移入額	輸移出額	再輸出額	合計
大正四年	六九二、六〇七	一、八〇四、四〇三	二、三〇七、五〇七	[illegible]
大正五年	七八九、[illegible]	[illegible]、九四[illegible]	四、[illegible]	六、[illegible]
大正六年	三、四四七、四七八	二、[illegible]七、六四八	九、一九四、三三七	一五、八九九、[illegible]
大正七年	[illegible]	[illegible]	一、四四[illegible]	四七〇、[illegible]
大正八年	一、九九八、四〇七	八、一九九、七四四	七九九、八四八	四九、四七[illegible]

第三　吉拉林

當地は西比利亞、後貝加爾州、ネルチンスクサウォルの對岸にあり、金鑛の發見以來發達し一時露國の手中にあつたが今は支那に回收された、當地は海拉爾の間に四八〇支里にして達する官道があり、又國境を流れる額爾古納河も暗礁、谿谷が多いが、小形民船は通ずることが出來る、最近支那は當地に縣治を布き室達縣と稱してゐる、國境守備隊も駐在してゐる。

第四章　黑道河管內

第一　璦琿

前淸康熙二十二年露國の南侵を防ぐ爲に將軍及副都統を置いたが後に一時之を裁撤し雍正八年再び副都統を置いた、後宣統元年直隷廳を設け、後黑河道の設けらるるに及び縣公署を置いた、市街は南北十町、東西八町餘あり、縱橫九條の道路から成つてゐる、人口約二、〇〇〇、開港場であつて露領との貿易が行はれ大商店四七あり、ブラゴウエチエンスクから數隻の小形民船があつて來往してゐる、海關の外高等女學校、裁縫學校等がある。

第二　黑河（黑河屯）

璦琿から黑龍江に沿ふて上る十餘支里のところにある、東北は黑龍江に臨み北方に岡を負ひ東南は平原に連つてゐる、人口約八、〇〇〇大商店三〇〇を數ふることが出來る、官公衙には黑河道尹公署、黑河警察廳、交涉局、稅務局、稅關等あり、そして當地繁榮の大分は釀造業にして齊々哈爾方面より來る燒酒を火酒として露領に輸出してゐる、又一九一四年より開業せる蒸氣製粉所があり、對岸なるブラゴウエチエンスクとの間に行はれる貿易も相當盛である、そ

して中國、交通兩銀行の支店か金融を司つてゐた、日本在住者約一四〇人大部分女てある。

黒河輸移出入額累年比較

年次	輸移入額	輸移出額	再輸出額	合計
	海關兩	海關兩	海關兩	海關兩
大正四年	三〇三、九三八	三四、二九九	一、七三三、六三〇	五、〇七八、八六七
大正五年	二、四九二、一五四	四八、三五四	一、三三六、二二七	四、三三六、六三五
大正六年	四、五一二、三九一	一九、一〇〇	一、六〇六、七一七	七、四〇〇、二〇八
大正七年	七、四四六、四三八	一二六、五〇一	三、八二二、九八七	一一、五〇四、九二六
大正八年	七、一五一、六八二	二二五、七〇七	三、一六四、八三五	一〇、五四一、二二四

第三　呼瑪（西爾根卞倫）

璦琿の上流黒龍江右岸にあり縣公署、税捐局の所在地て廣信公司の支店もある、附近に高麗艶子、娘々溝、興隆溝等の五大金鑛かあるので著れてゐる、人口約一、八〇〇、附近金坑の勞働者數は約九、〇〇〇に達すると云ふ。

第四　漠河

露人の所謂ザルツーガて著名なる大金鑛の所在地てある、漠河、神洞河、奇乾等之れてある

漠　縣公署かあり、人口約五〇〇、附近なる國境監視所の一、七〇〇、金坑の約五、〇〇〇を加ふれは優に七、〇〇〇を越ゆる、内日本人か約三十名あるか大部分か女てある。

第五　羅　北

本省の沿邊なる托羅山にある、小邑てあるか縣内に觀音山金鑛かあるので知られてゐる、縣公署、鹽務局等かあり、交通は黑龍江によるものの外甚た不便てある。

第四編　熱河特別行政區域

第一　熱河（承德）

北京の東北四二〇支里、古北口の東北一八五支里に位置してゐる、當地はすでに、遼、金、時代から、政治の一中心地となつてゐたか前淸に至り、康熙四十二年肇めて離宮を設け、雍正元年熱河廳を置き乾隆四十三年承德府に改め爾來、行政上の中心となつてゐた、承德縣に改めたのは民國二年である、市街の周圍は山岳を以て圍繞され、北は離宮の外牆と接し南は熱河の流れを距てゝ山嶺に對してゐる、東西約一支里餘、南北約一支里半、戶數約四二〇〇、人口約二、五〇〇〇餘を含有してゐる。

官衙學校及寺廟　熱河都統公署、熱河道尹公署、承德縣公署、財政廳、菸酒公賣總局、徵收總局、警察廳、郵便局、電報局、淸理熱河皇產所、毅軍第三路第十一營（步）及第十五營（騎）第十六營（步）。

熱河行宮、永佑寺、碧峯寺、廣元宮、溥仁寺、溥善寺、普寧寺、普佑寺、安遠廟、普樂寺、普陀宗乘廟、殊像寺、廣安寺、羅漢堂、須彌壽廟、天主敎堂、福音堂、回々寺院。

中學堂一、高等學堂二、初等學堂十餘、女學堂四、男子高等學堂一、女子教員講習所一、圖書館一。

交通　赤峯へ四八〇支里、圍場へ三〇〇支里、古北口一八〇支里、灤平　四〇支里、平泉へ一八〇支里、朝陽へ七二〇支里、而水路は灤州から上航七日乃至十日、下航三四日を要する、

その經濟狀態　當市は商業地てはないか、來集する農產物は高粱、粟、小麥、豆か主なる者て年約六萬石は水道によつて販出される、その他羊毛及豚鬃毛の十五六萬斤の天津に向ふ者と麻油（五萬斤）豆素麵（十五萬斤）の多倫に行くものとある、樹根を以て作つた家具玩具か當地の名物てある。

輸入品は綿絲布、石油、雜貨て、主に天津から水路によりて來る、各種綿布約五萬疋、石油一萬三千箱金融機關としては交通銀行分號、熱河興業銀行、錢舖六戸票莊一戸當舖四戸ある、通貨は、支那の硬貨と、熱河興業銀行の銀票竝に有力商舖發行の帖子等てある、流通高約二〇〇萬元內外て、其發行額及發行戸數は凡へて商務總會の決定によつてゐる。

第二　朝陽縣城（三座塔）

西土默土旗に屬し、錦州の西北一一〇支里、大凌河谷にあり、東は大凌河を隔てゝ、鳳凰山

を臨み西北及南は七八支里乃至二〇支里を隔てゝ山脈が連亙してゐる、當地は古から龍城又は黄龍城として名があり、今でも遼金代の古塔が城の西北にある、市街は東西約一支里、東北約二支里、長方形の城壁を繞し四門あり、商區は南北二大街である、戸數約二、七〇〇八口約三萬五千餘。

官衙寺廟及學堂　朝陽鎭守使署、縣公署、警察事務署（内城巡警局と外鄕全路巡警局とに分れ、前者が城内の警備に任してゐる）稅務局、郵便局、電信局、議事會、董事會、自治公所。喇嘛廟、祖師廟、竹林寺、關帝廟、囘々寺院、天主教堂、福音堂、初等男小學堂、初等女小學堂、私立初等小學堂、私立高等小學堂、朝陽縣立中學堂、舊師範學堂、官立隨營學堂（陸軍）

交通　錦州へ一一〇支里、義州へ九〇支里、凌源へ二四〇支里、小庫倫へ三〇〇支里、奈曼王府へ四二〇支里。

經濟　管内の土產物は皆當市に集散され、東部内蒙古貿易の中心市場である、農產物中、高粱、粟、蕎麥、豆類等約二萬五千石を錦州に販出し、羊毛七、八萬斤、羊皮一萬枚も天津商人に買收される、この外土產物にして蒙古部落及赤峰方面に運はれる者に葉煙草（約十萬斤）燒酒（約九十萬斤）石炭（約一千萬斤）等がある。

輸入品は、錦州又は營口を主としてゐる。

金融界は十二大行（有力なる商家十二）の掌握するところで盛に帖子か發行されてゐる、そして過賬（帳簿上の振替勘定）は錢舗三戶にて管掌してゐる、帖子の流通高一五〇萬吊。

第三　凌源縣城（塔子溝）

喀喇沁左翼中旗に屬し朝陽の西南二四〇支里、南に七管山を控へ、白狼河は西北から東南に繞つてゐる、市街は方五支里、東西三條、南北三條の大街から成つてゐる、戶數約三五〇〇、人口約一三、〇〇〇餘。

官衙寺廟及學校　縣公署、警察事務所、税務局、巡警隊、郵便局、電信局、老爺廟、財神廟城隍廟、龍王廟、天主教堂、回々寺院、兩等小學堂。

交通とその經濟　西熱河から東朝陽に、南錦州（二一〇支里）から北赤峯（三六〇支里）に通する街道上の交叉點に位置してゐる、從て商業も相當繁盛してゐる、しかし附近山嶽か多い爲に農産物は少ない、唯緬羊毛（約七萬斤天津へ）山羊毛（約一萬斤天津へ）羊皮（約一萬枚天津へ）牛皮（約二五〇〇枚天津へ）豚毛（約二萬五千斤天津へ）藥材（約十萬斤錦州營口へ）等の來集かある、輸入品は綿糸布、石油雜貨て年額二百萬兩、天津及錦州から來るといふ。

金融機關として當舖五戶ある、通貨は、糧棧、錢舖、貨店などの發行する帖子の外中國、交通兩銀行券が行はれてゐる、そして燒鍋八戶油房三戶機房一戶を工業として數へ得る、又管內の繭紬製出は古來有名である。

第四　灤平縣城（喀喇河屯）

元と熱河駐防地領に屬し、康熙十六年清朝の行宮が設けられたところで熱河の西四〇支里、東西に貫流せる灤河河畔に位置してゐる、市街は城壁なく、東西一支里半、南北一支里、東と北は灤河に臨み、西と南は山を以て圍繞され、河南に行宮、河北に灤陽別野がある、戶數約一、五〇〇、人口約五、〇〇〇餘。

官衙及學校　縣公署、第一區警察所、徵收分局、捐局、清理熱河皇產分局、巡防馬隊、菸煙公賣分局、印花稅局、高等小學堂一、初等小學堂一。

交通と經濟　當市は古北口經由、熱河に至る街道の要衝を占め、古北口に至る一四〇支里、黃姑屯に至る一六〇支里、豐寧へ一四〇支里、水路は上流黃姑屯及、郭家店にまで達し下航灤州に至るまでは八〇〇支里を算す、當市に集散する農產物は、附近小岳多き故に、多くない、特產たる藥材や、菓物、畜產（羊毛七八萬斤、羊皮二萬枚）も少ない、輸入雜貨は大半熱河か

ら供給されてゐる、金融も亦熱河の勢力範圍で、熱河毛票が最も多く通用されてゐる。

第五　隆化縣城（黄姑屯）

前清行宮のあるところで熱河の西北一二〇支里、張三營の南六〇支里、周圍に山岳を繞らし北に秦山聳ね、伊遜河は市の西北を流れ、東西約一支里、南北約二支里、十字の大街から成り商區は南街である、戸數約一、〇〇〇人口約一五、〇〇〇餘。

官衙及學校　縣公署、錢糧徵收所、第一區鄕警察所、巡防左營步隊、徵收分局、北家鹽支卡車捐總局、印花稅支局、菸酒公賣局、郵便局、縣立男女小學堂各一、私立小學堂一。

交通と經濟　當地は熱河街道の要衝に位置し、赤峯へ三六五支里、圍場一八五支里、錐子山へ一六〇支里、灤平へ一三〇支里、その位置上當市の物資集散範圍は相當廣い、その農產物約六萬石、藥材は圍場方面から來て、天津熱河へ販出され年額約十萬斤、その他牛羊も亦年約三四千頭に達してゐる、輸入品は北京熱河から京貨を、天津からは洋雜貨が來る、金融機關として隆商錢局があり帖子十萬文を發行してゐる。

第六　張三營（一百家子）

尙伊遜河は當市に至る舟揖の便がある。

隆化輿の治下にあり、錐子山の南方九〇支里熱河の北一九五支里に位し市街は伊遜河を挾み河西は延長約一支里、商舗は多く之れにある、隆化第二區鄕警察所、圍場徵收分局、國民學校等かある。

經濟　當市は錐子山、圍場、隆化、熱河を連結せる街道上に位置し、前淸康煕中木蘭秋獮東道の駐蹕地として張三營行宮を營まれてから有名になつたのた。

當市は附近に對する雜貨供給市場て集散する穀物も多くはない、唯燒酒のみは多倫熱河方面にまて輸出してゐる、(燒鍋三家)そして雜貨は專ら熱河から運はれる、金融機關は錢局一、當舖一、錢局は帖子を發行し、交通銀行兌換券、熱河興業銀行票等と共に通貨となつてゐる、一吊は銅子兒十個てある。

尙當地から道路は熱河へ一九五支里、錐子山へ一九〇支里、黃姑屯へ七〇支里、圍場へ一二五支里て伊遜河にも增水期に於ては舟揖の便かある。

第七　豐寧縣城(四旗廳)

舊熱河駐防地て、熱河の西二四〇支里、灤河の支流興州河の上流五〇支里の平野に位置し東西一支里、南北二支里の一條の街衢より成り戶數八〇〇餘、人口約八五〇〇。

官衙及學校　縣公署、地租、旗租徵收所、熱河中路巡防隊、第一區警察所、第一區警款糧捐徵收所、徵收局、清理熱河星產分局、印花稅及菸酒公賣局、蒙鹽豐寧分局、郵便局、高等小學堂、福音堂。

交通と經濟　京津乃至熱河方面から多倫に通ずる大道の要衝に當り、郭家屯へ一〇〇支里、灤平二〇〇支里、熱河蒙古方面に於ける盛な商業地である、そして來集する工產物は穀類を主とし、一箇年三萬石を上下し粟、高粱、大豆等がその主なるものである、藥材は天津に販出し年額十二三萬斤、そして多倫方面から來る馬羊は長城外に轉出され、蒙古鹽の當市に輸入さるるもの四〇〇萬斤內外を算す、輸入品は北京天津である。

金融機關として商務會合資設立の錢局があるが、金錢の賣買を行ふに過ぎない、そして有力なる大商舖は小洋錢の毛票を發行してゐる、通貨は熱河興業銀行票、交通銀行票等で一吊文は銅貨二〇箇である。

第八　圍場（粮甫府）

前清皇帝の狩獵場卽木蘭圍場領地に屬し、光緒十二年二道溝から當地に縣公署が倭された、當地は赤峰の西南一八〇支里、市街の西を什爾嘎河流れ、周圍に土壁を繞し東西南の三門ある

東西一支里、南北約三支里、二〇〇餘戸口と、二五〇〇餘の人口とを有してゐる。

官衙及學校　縣公署、警察署、稅務局、蒙鹽分局、獄官公所、監獄工廠、步兵第一團本部、郵便局、電報局、高等小學堂、初等小學堂。

經濟　記するに足るへきものなく、金融機關として官錢局及國益局あるのみ、通貨は大洋票及他縣商舖發行の帖子てある、今當市から各地に至る里程を示せは。

多倫三六〇支里、錐子山九〇支里、公爺府一一〇支里、大廟一四〇支里。

第九　錐子山（天寶山）

圍場縣の治下にあり、光緒三十二年圍場森林材採と同時に開墾を開始し、それ以來、此市場か出來上つたのてある、市街は西方に錐子山を控へ東は伊遜河に臨み南北約五支里、東西半支里、約一七〇〇餘の戸數と約二萬餘の人口を有してゐる。

官衙　木殖總局、巡警事務分所、騎兵一營、徵收總局、地方捐事務所、蒙鹽分局、郵便局、電報局。

交通と其經濟　圍場へ一一〇支里、張三營へ一〇〇支里、黃姑屯へ一八〇支里、多倫へ二八〇支里、熱河へ二八〇支里、赤峰へ二九〇支里。

當市を中心として附近一帶は西圍場と稱せられ、四周は往年の圍場森林であつた、從て土地肥沃農産集散地として名あるのは此爲てある、穀物には粟、小麥を主とし他市場に輸出するもの約八萬石内外、特種農産には綿羊最も多く、集散年額二〇〇萬斤に上る、此外藥材、豚毛、豚鬃、羊毛、羊豚、羊皮等あり、而輸入品は輸出品と同しく錦州、赤峯、熱河、天津、多倫、經棚等の各方面より來り、木炭、薪材等も亦輸出品中の主なるものである。

金融機關は、熱河興業銀行分行唯一つ、出張鏢局は現銀の輸送に從事してゐる、そして通貨は興業銀行の小洋票、北京交通銀行兌換券、商務會發行の銀票有力商舖發行の毛票等て大小洋錢や銅貨もある。

第十　平泉縣城（八溝）

熱河の東方一八〇支里、往時から平泉なる温泉場として名があつた、市街は南北中の三街より成り、中街の延長三支里、全戸數約二五〇〇、人口約二五〇〇〇。

官衙及學校　東路巡防統領衙門、縣公署、警察事務所、税務局、郵便局、電信局等、初等、高等小學堂各一。

交通と經濟　當地は喜峯口、赤峯街道の要衝に當り、喜峰口からは、遷安に出て、灤州に下

り又は、遵化を經由して天津と聯絡し、水路は下板城の碼頭から灤河に浮ふ、當地から赤峰までは三四〇支里ある。

管内の土産物は穀物を主とし、就中高粱大豆は年額十六、七萬石に達し、灤河の水運によつて販出され、その他薪炭（三道河子の西大山）酒（燒鍋八戶、一箇年一八〇萬斤）煙草、獸毛皮、藥材等がある、輸入品は、大部分天津又は北京から來る、而金融機關としては、熱河興業銀行分行、錢舖九家、當舖三家あり、通貨は各錢舖發行の帖子の外銀、銅貨等がある。

第十一　寬城

平泉縣下　喜峰口の北六〇支里にある、市街は瀑河の左岸にあり戶數約二〇〇餘、人口約二〇〇〇餘ある、官公署としては、巡警局、徵收分局、中路巡防中哨、農林會、初等小學堂、民立女學堂等がある。

經濟　當市は瀑河により平泉に聯絡し、喜峰口、赤峯間の都邑として重視されてゐる。

輸入品は北京天津から水陸兩路によつて來り、輸出品は穀物、獸毛皮であるが、その量は多くない、又特産として東方缸窖溝産出の水甕、茶器等があり且つ附近の石炭鑛からは一日約三四千斤の出炭があり、附近消費の外平泉に販出してゐる。

第十二　建平縣城(新邱)

南放漢旗領に屬し、曾て乾隆皇帝の巡幸に際し此地に關帝廟を奉祀したるを以て名がある、市街は四面丘陵を以て圍繞され、東に伯爾河を控へ東西約一支里、南北約二支里の土壁を繞らし南北二門あり、之に一條の大街を通してゐる、戸數約二〇〇、人口約一、五〇〇餘。

官衙及學校　縣公署、巡警局、緝捕游擊馬隊營、稅務局、電信局、郵便局、兩等小學堂。

交通と商業　當地は朝陽、凌源間、赤峯街道の中間に位し、三市場の距離各一八〇支里を算してゐる、しかし最も頻繁な朝陽赤峰間の貨物往來は當地の東方約一〇支里の地を經由する不利があり且つ管內は山岳多く、穀物の產出が僅少である、而輸入品は專ら朝陽から供給される。

第十三　綏東縣城(小庫倫)

當地は錫哷圖庫倫札薩克達喇嘛駐紮の處で、縣公署は光緖三十四年に置かれた、而市街は庫倫河の低地にあり東西約二支里、南北約一支里、庫倫河及その支流は市街の中央を貫流し、木橋七ある、戸數約一、五〇〇、人口約一五、〇〇〇。

官衙寺廟及學校　縣公署、稅務總局、第二十八師第二營、熱河巡防砲隊一營、郵便局、電信局、喇嘛廟、札薩克印務處(共に市街の東方一支里にある)回々寺院、兩等小學堂。

交通とその經濟　當市は交通上甚た不利の地點にある、鐵道に遠く、舟揖の便もなく僅に冬季を利用せさるへからさるは鄭家屯の爲に舊時の繁榮を奪はれた最大原因となる。

彰武へ一八〇支里、哈拉套街へ九〇支里、朝陽へ三〇〇支里、蒙古鎭へ一八〇支里。

前清時代の繁盛は次第に衰退しつゝあるけれとも尚、撥子（行商）の出發點として　歴史上の根據を有し、例年當市から出る撥子約二〇〇組に達してゐる、此撥子を出す、主たる商舖は十一戸ある、今當市に集散する農産額を見れは瓜子（三〇〇〇石）綠豆（七八百石）麻子（五六百石）吉豆（三、四百石）大豆（三、四百石）、等て專ら新民屯、奉天方面へ輸出し、畜産は馬（約一、五〇〇〇頭）牛（約二五、〇〇〇頭）羊（約二萬頭）豚（約二千頭）牛皮（約一萬枚）羊毛（約一五萬斤）て多く撥子によつて當市に來集し滿洲各地に販出してゐる、殊に當市には春秋二回の開市かあり、牛馬の來集は七八月か盛て馬販子（伯樂）かその賣買を斡旋してゐる、此外曹達の上市かあり、年額土城約四十五萬碗、面城四五十盒に上り、奉天新民屯へ販出される。

次に輸入品は布疋、雜貨は主として營口から、煙草類は奉天、新民屯、新立屯から、茶は主として錦州から來る各種綿布は約七萬疋に達す。

金融機關としては特別の者かないか各仲買問屋は金融に關する業務を行ひ、且つ條子（一覽

手形）を發行して支拂に充つ、通貨は主として元寶銀銅錢等て奉天票も流通してゐる

第十四　鄂爾圖板

奈曼旗に屬し綏東縣の治下にある、四周は遠近山を繞らし南に鄂爾圖河あり、市街は一支里の一條街て戸數約一〇〇餘、人口約一、〇〇〇餘、市街に燒鍋一所、商家大小二十餘、旅店六戸ある、當地は元と阜新縣治の所在地てあつたか（九年間）宣統三年新秋に移轉されてから遂年衰微し僅に同地方に於ける小市場として存在してゐるのみてある。

第十五　阜新縣城（新秋）

東土默特旗に屬し新民屯の西方七〇支里に位置し、四周平坦、東南五、六支里を離れて阜新河か流れてゐる、市街は方二支里の城壁を繞らし十字街より成り四門ある、當地に縣公署を置かれたのは、宣統三年か始めてある、戸數約二〇〇、人口約二、〇〇〇。

官衙學校　縣公署、巡警局、稅務局、巡防馬隊、福音堂、國民學校、半日學校。

經濟　當地の四周は地味か肥沃て且つ、新邱の炭坑も近いので發展の勢かある、その農產物中高粱（約一萬石）吉豆及小豆（約五百石）の大部は新立屯、錦州に出してゐる、輸入品は主として營口から來る、金融機關としては當舖三戸あるのみて通貨は帖子の外奉票硬貨等てある、

今當地から關係市場に至る里程を示せは、新立屯へ七〇支里、蒙古鎭へ四〇支里、清河門へ九五支里、小庫倫へ一八〇支里、哈拉套街へ一二〇支里てある。

第十六　鰲歡池

阜新縣下にあり新秋の東七〇支里、市街は三支里に及ふ一條て戶數約一〇〇、人口約一、〇〇〇餘あり、官公衙には巡警第四局、保衞團、小學校喇嘛廟かある。

當地は阜新、小倫倫、哈拉套街を連繫せる一小都邑て農產物の集散二萬石、畜皮も一萬枚程ある、雜貨は大てい阜新から供給されてゐる。

哈拉套街へ五〇支里、阜新（新秋）へ七〇支里、小庫倫へ九〇支里、新立屯へ九〇支里、彰民へ一二〇支里。

第十七　蒙古鎭

東土默特王府の所在地て阜新縣內にある、市街は旱龍潭山（哈特哈山）の南麓にあり西大堤河に瀕し、街衢は約一支里の一條街てある、漢蒙合計戶數一五〇戶、人口約一、五〇〇當地に來集する穀物は年額約七千石輸入品は多く清河門から來る。

交通　清河門へ七〇支里、阜新へ四〇支里、小庫倫へ一八〇支里、鄂爾圖板二一〇支里。

第十八 開魯

西札魯特旗領に屬し、縣治の所在地で白音太拉の西一八〇支里、老哈河の左岸平野の中にある、市街は光緒三十一年の放荒に係り周圍約五支里、方形の土壁を繞し東西を通する一條の街路は殷盛の區である、しかし民國元年西札魯特の亂に一時烏有に歸したことかあるので、城内にはまた多數の空地かある、戸數約三〇〇、人口約二、〇〇〇。

官衙と學校　縣公署、警察事務所、北路巡防隊營、税務局、熱河北路巡防隊、東西札魯特旗懇務總局、三旗土地局、郵便局、電信局、廟宇三、囘々寺院一、福音堂出張所一、私立開民小學堂一。

外に市内東南隅なる察哈爾林丹汗の建立に係る喇嘛堂は有名なものである。

經濟　當市は東白音他拉（一八〇支里）に西赤峯に（七二〇支里）南小庫倫に（三〇〇支里）北阿魯科爾沁に通する街道の要衝に當り、四周の開墾と共に將來に於ける殷盛なる都邑である現在に於ては、農産物の集散するもの、七萬石に達し（高粱三萬石粟二萬石）約二萬石を白音他拉小庫倫及蒙古内地へ販出し、大麻子の約六萬斤も他處へ運はれる、畜産物は牛馬各一千頭羊五千頭、羊毛約五萬斤羊皮約五千枚、馬皮約二千枚、牛皮約三千枚等で大部分は鄭家屯に行

く尚、漁業公司、濟生公司（經營者同一人）かあつて、前者は本旗のタマアンノールにて漁獲する年額十五六萬斤、後者は甘草の買收に當り年額十五、六萬斤。

曹達も約十萬斤を鄭家屯、小庫倫へ販出してゐるといふ。

次に輸入品は概して小庫倫の供給を受け鄭家屯よりするものの少くない。

金融機關としては商務會を數ふべく、商務會は銀票を發行して通貨に代ねてゐる。

第十九　赤峯（哈達、ウランハタ）

西翁牛特旗に屬し、赤峯縣治の所在地て市街の東方は幾多の砂丘連亙し、西北に英金河を控ねてゐる、此の川の右岸に赤赭色の巍峨たる一山か聳立してゐる、赤峯の名は之によつて起ると云ふ、市街は之を六區に分ち、東西約五支里、南北約四支里、西橫道街は殷盛の區てある、而西及西南は、一面の農耕地に連續してゐる、道幅は廣濶てあるか雨天には泥濘か甚たしい、

戸數　三、〇〇〇餘人口、三〇、〇〇〇餘。

官衙及寺廟學校　縣公署、稅務局、車捐局、権運局、警察事務所及監獄、步兵第二團本部、郵便局、電信局、電話局、西翁牛特旗地局、赤峯交涉分局、日本領事館、日本郵便局、關帝廟喇嘛廟、回々寺院、天主敎堂、福音堂、高等小學一、初等小學一〇、女子初等小學二、耶蘇敎

私立學校一、蒙文學堂一。

交通と經濟　當市は蒙古貿易市場として最も重要視せられ、東部內蒙古開發の根據地である蓋し、赤峯の地勢たる、北は烏丹城（一八〇支里）を經て直ちに內蒙古に入り然も新興の林西四五〇支里）を控へ、東北に開魯（六八〇支里）西方に多倫（六三〇支里）かあり、開場へ一八〇支里、建平へ一八〇支里、眞に四通八達の要衝てある。

先つ當市から輸出される、物資たる、畜類及獸毛皮に就ては、多倫及張家口に次く大集散地て年額馬五、〇〇〇頭、牛約六、五〇〇頭、羊約一萬頭、騾驢各一、〇〇〇頭、豚約二、五〇〇〇頭て牛は滿洲錦州方面へ、馬は奉天北京へ、羊は北京天津へ販出する（大正八年度輸出額六二一、〇〇〇元）而獸毛皮は、羊毛一七〇萬斤、駝毛五萬斤、豚鬃毛二萬斤、羊皮か五〇萬枚、牛皮九萬枚、馬皮七萬枚その他、狗皮、狼皮、山猫皮、狐狸皮、貛狢、猞猁猻皮等も少くない、之等は大體蒙古內地、及烏丹場、林西、經棚方面から來集し、毛類は大部分天津へ、牛皮の大部は奉天　錦州、天津へ販出される（大正八年度輸出額　一三三、一〇〇〇元）、天然特產物たる、藥村（甘草約二〇〇萬斤大正八年度輸出額　八五、〇〇〇元）姑蘑、鹽（約二〇〇〇斤）石炭、（西元寶山の錦元煤廠及柳條溝から來り年額五〇〇〇斤）を始めとし、小麥（約五〇萬石）

粟、(約二〇萬石)麻子(約一〇萬石)綿麻(約四〇萬斤)葉煙草(約七〇萬斤)落花生(約八萬斤)等がある、之等糧食の輸出入額大正八年度に於て四八〇萬元餘に達す。

工業生產物としての燒酒は燒鍋十八家により製出せられ年額約三〇〇萬斤で大ていは北方に販出し、麥粉は大小磨房一〇〇餘戸あつて年額約四五〇萬斤に達す、その他油戸七家(年額一二〇萬斤)紙局四家、製革所五〇餘家、毡毯局等あり、尙各種果實、水膠蓆子等も上市される、

輸入品は外國品、支那品相半し、錦州、天津、北京から來り、綿布を主として雜貨、食料品等年額約五〇〇萬元に達す、此等貨物の取引最盛時を七、八月の交とし、此の時期は又蒙古特產物の上市期である、その供給地は遠く興安嶺以西にまで及ぶと云ふてゐる。

當市に於ける金融機關を擧ぐれば交通、熱河興業兩行分號の二新式銀行を始めとし、滙兌銀錢貸借莊八家、錢舖八家、當舖七家等あり、現銀の輸送は鏢局が之を司る通貨としては交通銀行兌換券、熱河興業銀行、銀票及貸借店錢舖の帖子があり、各種の硬貨も流通してゐる、そして帖子は銅錢標準の吊文で、銅貨一箇が二十二文、四八〇個が一吊文に當る、尙當市には銀市が二處あり、每日三回開かれる。

第二十　烏丹城(ポロホトン)

赤峯縣下　東翁牛特旗領に屬し、赤峯の北一八〇支里にある、四周砂丘を繞し、周圍六支里の土壁がある、戸數約四〇〇、人口約三〇〇〇、官衙には烏丹城佐治局、稅捐局、口北蒙鹽分局、郵便局、電信局、駐屯兵營（步騎各一營）ある。

經濟　當地に昔時から赤峯の前衛地として名があり、開魯、林西の創設の爲、やゝその繁昌を失つたけれども尚、撥子の根據地として每年五、六百人を出してゐる、且つ開市日には多數の蒙古人蝟集し來り、畜類の貿易盛に行はれ、年額約五〇〇〇頭、牛皮約一萬枚に上ると云ふ尚當地附近の甘草は陰曆三月五月間、八月十月間の二期に採取せられ年額三〇萬斤に達す、當地は元と北京から齊々哈爾海拉爾方面に至る驛站であつたので北京、天津が主なる仕入地であつたが今は、赤峯と同樣錦州方面との關係が深い、そして氈子の製造は古來著名で、すべて蒙古包用として蒙人に供給してゐる。

金融機關には熱河興業銀行分號あるのみで、以前は有力商舖が帖子を發行してゐたが今は禁止されてゐる、しかし未回收のものがまだ仲々多い、通貨には熱河興業銀行銀票、交通銀行券帖子等がある、銅貨一錢が五四文、大洋銀一元が七吊八百文。

今當地から關係各地に至る里程を示せば。

大坂上　二四〇支里、東翁牛特貝子府二五支里、北敖漢王府一六〇支里。

廣德公（大燒鍋）八〇支里、赤峯一八〇支里。

第二十一　公爺府

當地は喀喇沁右翼旗閒散公の所在地として名があり、赤峯、熱河街道上に位置してゐる、市街は西方に山を負ひ、東に錫伯河を控へ、南北約三支里の一條街である、そして中央に喇嘛廟があつて、その北を北區、南を南區と云ふてゐる、戶數約一三〇、人口約一、〇〇〇。

公爺府（東北五支里）熱河東路巡防隊、右營、平泉西路第二區巡警所、初等學堂がある。

經濟　當市は赤峯の商熱範圍內で、四圍農村に雜貨を供給し、來市する少量の土產物を赤峯に販出するに止る、そして當舖一家あつて金融に當つてゐる、有力商家の帖子がその通貨となつてゐる。

當地から赤峯までは一〇五支里、喀喇沁右翼王府へ四七支里ある。

第二十二　林　西

大巴林右翼旗に屬し、烏丹城の西北二四〇支里噶爾他蘇（ナルクスタイ）臺河の平原にある、市街は方二支里餘の城壁を繞らしてゐる、戶數約七五〇餘、人口約七、〇〇〇餘。

官衙寺院及學校　林西鎭守使署、毅軍步隊第一、第二兩路、毅軍馬隊右營、縣公署、警察事務所、林西稅捐徵收總局、事捐局及牲畜捐局、熱河第二區林西菸酒公賣支局、蒙墟局、陸軍糧餉局、陸軍衞戍病院、稽察局、林西監獄署、懇務局、蒙古繙譯局、城隍廟、回々寺院、國民學堂（高等、初等）宣講堂。

交通と經濟　當地は商業地と云ふよりもむしろ政事及軍事上の重要地として知られてゐるかしかし地勢の優秀は次第にその繁榮を增しつゝある、卽ち東南烏丹城へ二八〇支里、赤峰へ四六〇支里、東大坂上へ一六〇支里、大巴林王府へ八〇支里、小巴林王府一七〇支里、て且つ開放蒙地の地味も肥饒てあるので農產物も將來は多額に上るたらう、畜類は現在ても羊皮二五、〇〇〇枚羊毛三〇萬斤以上に上つてゐる、その他甘草、蘑菇等かある、輸入品は、大部分當地消費用て（軍隊用）多額には上らない、金融機關も熱河興業銀行唯一つ、その銀票商務會の毛票交通銀行劵等か通貨となつてゐる。

第二十三　經棚（ビルホト）

克什克騰旗に屬し、康熙年間既に蒙古市場として著れ、道光の頃は仲々繁盛たつたか、光緒光華の頃から道教亂、馬賊外蒙軍の侵入及碧落河の犯濫等かあり市況頻る沈靜してしまつた、

市街は多倫の東北四〇〇支里、西喇木倫河の支流碧落河か東西南の三方を繞つてゐる、戸數約三五〇八口約 三、〇〇〇

官衙と學校　統領衙門（馬隊四營、歩隊三營）縣公署、警察事務所、毅軍馬隊左翼本部、同稽査所、稅捐局、多倫關經棚稅局、菸酒公賣所、糧餉局（駐屯軍付）郵便局、電信局、蒙墾分局、克什克騰旗務公署、關帝廟、克什克騰旗廟、國民學堂（高等、初等）旗民學堂。

經濟　林西の勃興は當地に大打擊を與へたけれとも尙蒙古貿易の前線にあつて年々多數の撥子を出し、農產物の集散も十萬石以上に達し畜產も亦少くはない、當地は熱河、察哈爾兩方に關係を有つてゐて輸出入共に、兩方に販出又販入される、その輸入額も比較的多額て綿布の約一二萬斤等はその最大なるものてある。

金融機關としては當舖一、錢舖五あり、通貨は各種硬貨の外糧店發行の帖子かある今關係市場との里程を擧けれは、赤峯へ四三五支里、林西へ一二〇支里多倫へ四〇〇支里てある。

第五編　察哈爾及綏遠其他外蒙地方

第一章　察哈爾特別區域管內

第一　多倫縣城（多倫諾兒、喇嘛廟、廟上）

張家口の東北五〇〇支里、市街は東西四支里、南北二支里、上都河の支流は市街の東南西三方を繞り、南方に砂丘北方の丘に二大喇嘛廟がある、東西に延長せる三條の街衢を中心として横道數條あり、路幅は狹い、戸數約三、〇〇〇餘、人口約一六、〇〇〇。

官衙寺廟――察東鎭守使署、多倫縣公署、警察署、察哈爾陸軍騎兵團、直隸巡防一營（喇嘛廟）滙軍五路二〇營、口北蒙鹽局、多倫稅務監督署、郵便局、電信局、彙宗寺、善因寺（庫倫、五臺山、北京のものと共に有名なる喇嘛廟である）城隍廟、靈佑寺、興隆寺、三官廟、關帝廟山神廟、碧霞宮、回々寺院三。

交通と經濟――當地は外蒙各地に對する大貿易場で、且つ達喇嘛の駐在地であるから蒙古人の來集するものが非常に多い、毎年三月と七月の二大法會には市開かれ、商況頗る殷盛を極め

る又撥子の出發點として名あり、その商店三〇戸ある。

輸入品は大體張家口にて仕入れられ、以前の如く古北口又は獨石口經由の京貨も少くなつた只赤峯、經棚方面から煙草、麥粉などを輸入し、圍場からは木炭、木材等か運はれる。

以上輸入品の中蒙古內地に販出されるものは茶（漢口產、一箇年八、九萬兩）綿絲布（八、九萬疋）砂糖一〇萬斤、麥粉、雜貨等てある。

當市は畜產の大市場てあるので輸出品は大部分それてある、今その一箇年の概額を見れは、牛約三萬頭、馬約三萬頭、羊皮約四萬枚、羊毛七〇萬斤乃至一〇〇萬斤て主として京津地方に運はれ、馬、牛皮等は直隸及滿洲に出て行く、尙工業として擧くへきものも少くはない、即ち毡子、防寒帽の製作、皮靴、皮襖（共に附近滿漢人に供給す）の製作等仲々少くはない。

金融機關としては交通、中國兩行分號、察哈爾興業銀行分號、滙克莊七家、錢舖五家、當舖數戸あり通貨は、中國銀號銀券、興業銀行券、帖子、硬貨等てある、銅錢七八〇個か一吊文てある。

第二　二號（大二號）

多倫の西南一三〇支里、緩なる丘の中腹に位置し東及北は約二〇支里を距てゝ丘陵に相對してゐる、戸數約三〇〇、人口約一、五〇〇、多倫縣警察分署かあつてその政治に任してゐる、當

地は由來獨石口から多倫に至る街道上の大宿驛として知られてゐたか、今は張家口からの電線路か小河子から當地の北方を通過して行くので、荷馬車等の通行か非常に少くなり、以前の樣な繁華は見られない、しかし四方農産物の産出比較的多く且つ牧畜も盛であるので、尙舊體を存してゐる、農産物の大宗は燕麥で、莞豆、小麥等も出る、尙當地には關帝廟、娘々廟、回々寺院等かある。

第三　沽源縣城（小河子）

獨石口の北七〇支里、四方は一四、五支里の平原を距てて緩かな丘陵か續いてゐる、戸數僅に三〇戸、縣署及警察署も大正七年に獨石口から移駐したもので、また市街の體裁は備はてゐない、街は張家口多倫間の寂寞たる小宿である。

第四　寶昌設治局所在地

小河子の西北九〇支里、緩かな丘陵に圍まれた狹長なる平野の一角に位置してゐる、しかし大正七年始めて縣署の建築かあつたはかり、部落さいも爲してゐない。

第五　張北縣城（興和城）

張家口の北九〇支里、大平原の眞中に二支里四方の土壁を繞らした、舊興和城の跡で戸數約

一五〇に充たない、縣署、警察署、巡防隊、郵便代辦所等がある。

當地は張家口から庫倫に行く自働車の最初の宿驛で附近は農耕及牧畜地となつてゐるが經濟的には張家口の範圍に屬して自身何等の價値もない。

第六　什巴爾臺

興和城の東一五支里、戸數約一〇〇、察哈爾騎兵隊の約一營が駐屯してゐる、當地と興和城及張家口との間には電話が開通してゐる。

第七　商都縣城（七臺）

舊庫倫街道の七臺で西と北に山を控ゑ、南は平原と數多の鹽湖をへだてゝ遙に山に面し、東は一望萬里の平原である、周圍約五支里ばかりの方形の土城を繞らして中に縣署、巡防隊があり一五、六の農家が散在してゐる。

第八　興和縣城（二道河子）

京綏線天鎭驛の北方邊外一二〇支里、四方山を以て圍れ、西洋河上流の會流點にあり、市街は小高き丘に雜然と集り、南北の一條街を繁區として南方に廣がつてゐる、東方河を距てゝ大青山が聳えてゐる、戸數五〇〇、人口三、〇〇〇餘、官衙としては縣公署、警察署、察哈爾巡防隊

乙種農學校、小學堂、國民學校二、外に廟二つある、郵便局、電報局。

經濟——當地は東西に張家口、豐鎭の大市場を有するか故に、その商範圍は興和縣及商都縣の一部に過きない、從て輸入品は小賣程度のものはかり、大部分萬全縣を通して張家口から運はれる、しかし輸出穀物(少量)は豐鎭又は天鎭に直接行くものか多い。東方八支里なる土木路の石炭か當地方の燃料として供給されてゐる。

金融は張家口の範圍に屬し、銅錢二四を以て一吊文とし、錢舖五家當舖三家あり共に帖子を發行してゐる、通貨としては察哈爾興業銀行券、帖子硬貨等てある。

附——當地の東北六〇支里に南壕塹あり、人戸一、〇〇〇はかり、佛人經營の大天主教堂あり中學校を經營してゐる、西南一〇〇支里なる隆盛莊も盛なる商業地てある。

第九　豐鎭縣城(豐鎭)

京綏線の終點て得勝口を出てゝより二〇支里、北及東に三〇支里を距てて山を見西及南は平原てある、市街は東西三支里、南北二支里餘、人口三七、〇〇〇を有する大都會てある。

官衙及學校——察西鎭守使署、縣公署、警察署、殺虎口稅務監督局、高等小學堂、國民學校、耶蘇教會堂。

經濟——京綏線の終點として對蒙貿易仲々盛てゝ且綏遠を通して甘肅方面との交通か陝西の動亂以來此の一路に依るを以て西北に對する一大關門である、しかし商品の取引はあまり行はれず、唯張家口と綏遠間の貨物の取次運送を爲すものか多い、察哈爾興業銀行分號と數家の錢舖とかその金融に當つてゐる、當地より歸化城まて三八〇支里にて達し陶林縣に三〇〇支里ある。

第十　涼城縣城（甯遠）

豐鎭の西一八〇支里、朔平府の北一五〇支里にある、四方山を以て繞らされたる盆地の中央にあり、歸化城には一四〇支里にして達することか出來る、官衙としては唯縣公署あるのみて高等小學校、國民學校各一つ戶數二〇〇餘、人口一、〇〇〇に滿たず、現在ても朔平から歸化城及豐鎭から歸化城に至る駱駝隊の一宿驛としてその命脈を保つに過ぎない、當舖一つあつてすべての金融に當つてゐる。

第十一　陶林縣城（科布爾）

豐鎭の北三〇〇支里にあり純然たる蒙古地帶てある、以前から附近蒙古人の來集地として穀物、毛皮、集り且つ少量の雜貨を彼等に供給してゐる、縣治は民國七年に布かれたので市街も唯一條の（一支里）の街路から成り、人口五、六百あるのみである。

第二章　綏遠特別區域管內

第一　歸化城及綏遠城

歸化城は豐鎭の西三八〇支里、北に大青山を脊ひ東南西三方に沃野を控ひ、圖爾根河市中を流れてゐる、市街は南北六支里東西四支里、中に一支里四方の城壁を有してゐる、東西南の三大街を繁區として無數の小衢雜然と入り亂れてゐる、人口一〇餘萬、當地は漢時より知られ遼の時の豐州天德軍て、今の城は明代の築造に係るといふ。

官衙と學校——綏遠道尹公署、土默特旗總管府、塞北稅務監督署、警察廳、歸綏縣公署、陸軍衞戍病院、中學堂　初級師範學堂、高小學堂の外蒙人小學堂あり、商務總會經營の商業學校もある。

寺廟及新聞——舍力、土召、大召、新召、小召、大平召、(喇嘛廟)、回々寺院、福音堂、三官廟、文廟、關帝廟、西北實業新報、歸綏商業日報。

經濟と交通——當地は政事上商業上西北支那の大都會て、東三八〇支里を距てて京綏線の豐鎭驛を控へ、西包頭に向つては一日二回自働車の運轉あり、內外商品の大集散地てある、その

貿易範圍も亦頗る廣く、北は烏里耶蘇臺、庫倫、科布圖から西は新疆及甘肅に及び北支那に於ける北京天津、地位を二つなから有してゐる、而外蒙に向ふ輸出品は茶を以て大宗とし、綿絲布、砂糖、雜貨て新疆、甘肅貿易は包頭と共に西路と稱せられ茶、洋貨、京廣雜貨、海產物等を主たるものとなす、之等貨物の年額總計殆んと二〇〇萬兩に達してゐる。

而之等地方から來集する貨物も巨額に上り、羊毛、牛皮その他畜產を主たるものとし乾菓物藥材、染料、狐皮等年額三五萬兩に達す。

金融機關としては、中國交通兩行の分號を始め多數の錢舖あり、通貨は硬貨を主としてゐる

(附)綏遠城は乾隆四年の建築に係り、高さ二丈、周圍二支里四方、人口二千を有するも、唯諸官衙及軍隊の駐在地てある、その官衙は綏遠都統署を始めに陸軍第一師審判廳、歸綏財政廳、全區警務處等かあり、歸化城との間に官用電話かある。

第二　薩拉齊

歸化城の西二三〇支里、乾隆二五年の創設に係り、不等五角形の城壁あり、縣公署、高等小學堂及小學堂かあるか唯包頭歸化城間の宿驛として命脈あるに過きない、西包頭には當地から一日行程て歸化には三日行程てある、尚基教會堂かあつて學校を經營してゐる、戶數約二、〇〇

〇、人口一萬に達すと稱せられてゐる。

第三　包頭鎮(西包頭)

茂安明旗に屬し歸化城の西三二〇支里、南三〇支里にして黄河に臨んてゐる、城は周七支里餘て五門ある、東門は歸化城に至る街道て南門は黄河に至る本道てある、而北部一帶は陰山山脈か連亘し、南半は平野てある、人口三萬餘。

經濟と交通――當地は歸化城から自動車の運轉かある外黄河の水運によつて甘肅の寧夏に達することか出來るので甘肅貿易か最も盛てある、又駱駝隊商による貿易は新疆西北蒙古に及ひ羊毛等各種、畜産、煙草、藥材及米等、その數量少くはない。

殊に羊毛の散集は有名てある(一、五〇〇萬斤)、駱駝(七、八千頭)馬(二萬頭)羊(一〇萬頭)牛(一萬頭)の生蓄も多い、以上輸出品の年額は六〇萬兩に達すと云ふ、輸入品は茶、器具、洋貨等て甘肅から來る、穀類は大てい外蒙地方に販出せられると云ふ、此の年額三五〇萬兩に上る、交通銀行分號、票莊八、錢舖十二、銀號五、當舖三。

今當地より各關係地に至る道程を見れは、庫倫へ二、八〇〇支里、寧夏へ一、三〇〇支里てある。

第四　清水河縣城

歸化城の南二六〇支里、周圍山を繞らした狹隘な土地である、市街は不規則な一條の街路で路面には石を敷き、路幅も割合に廣い、人口約三、〇〇〇。

縣署、塞北分徵所、高等小學堂、國民學堂等がある。

當地はその商關係の最も深いのが大同であるが輸入雜貨は僅少である、尚大同までは三六〇支里で大車を通ずる。

第五　和林格爾縣城（二十家子）

歸化城の南一二〇支里、四面丘陵を以て圍まれた一條の街路で延長約二支里、人口約四、〇〇〇であるが、市況沈滯して見るべきものがない。

第六　托克托縣城、附河口

歸化城の西南一六〇支里、東方は丘陵を以て包まれ、西方は黑河に臨んでゐる市街は縣城と河口に分れ、縣城は俗に托城と稱し城壁を繞らしてゐる、人口約八千、縣署、警察所、塞北分關、陸軍第一師の二營が駐在してゐる、河口は縣城を約五支里距てた黃河の碼頭で延長約三支里の不規則な一條の街路より成り、人口約八千塞北分關、煙酒公賣所等がある。

當地は夏季藥草の集散地として知られ、歸化城及包頭との間は往來の絶ゆることはない。

第七　五原縣城

包頭の西北三五〇支里、市街は新舊の二市に分れ、舊市は土壁を繞らし周圍約五支里、城內は市街の體裁を爲してゐない、新市街はもと隆興長と稱し、不規則なる一條の街衢より成り、人口約一千、塞北高原の一寒村である。

第八　武川縣城

歸化城の北九〇支里、高原の凹所に群る部落で、人口約五〇〇、綏遠騎兵の一連か駐在してゐる。陸軍第一師步兵第四團本部、淸源局、塞北稅務支關、電報局、郵政局、官鹽分局等かある。

第九　東勝縣城

一河口の對岸にある古くから知られてゐるか今は一寒村に過ぎない、縣署も包頭にある樣な始末である

第三章　外蒙地方管內

第一　烏里雅蘇臺

當地は清朝の外蒙招撫の中心地で、烏里雅蘇臺軍臺の置かれたところである、周圍に土壁を繞らし、人口約三、五〇〇、市街は二つに分れ、一は官衙軍隊のあるところで他は商家であるそして丁度二河流の合流地點にあつて、單に政事上の都合たるに過ぎない、庫倫から二、六〇〇支里、中國銀行分號がある。

第二　科布多

伊克阿拉勒湖の西岸、海拔四、三〇〇呎の高所にある、當地も前清雍正年間の創設で、官衙區及商區の二に分れ、蒙古人との貿易が盛である、貨物は羊及獸皮で露人商人も居る。

當地は光緒七年の伊犁條約により露國に對する貿易場として開かれ、露國領事館の設けがある、人口三千餘、道路は頗る淸潔である。

第三　恰克圖（買賣城）

蒙古と西比利亞の境界にあり庫倫を距る六〇〇支里、木柵を以て露領と區別してゐる、人口

約四、〇〇、市街は恰克圖河に傾ける小坂にあり、貿易は茶を以て其主たるものとし其他雜貨、穀物等かある、小麥の露領から販入されるもの多額てあるといふ。

第四　庫倫（ウルガ）

外蒙第一の都會て、海拔四二〇〇呎の高地にあり四周は山を繞らし、南に土喇河か流れてゐる、それか五、六條の小河となつて市中を流れてゐる、市街は大體三區に分れ、東營子、露國領事館附近及庫倫之れてある、東營子は商區て茶商多く、西庫倫にも商舖かある。人口は蒙、漢、露人等約三萬、內二萬は蒙古人てある。

官衙――西北籌邊使衙門、駐藏辦事長官衙門、印務處、蒙古印房、章京衙門、各部落衙門、高卓特巴衙門、釐捐局、巡警營、宣化宮、露國總領事館、露國鑛務局。

經濟と交通――當地から張家口及買賣城に自動車の運轉かあり、且つ地は外蒙の中心地てあるので商勢豫想外に活潑てある、輸入品は茶を大宗として綿布、雜貨等て器具も亦多い。輸出品は木材、蘑菇の外畜類及毛皮て、毛皮の總額例年八〇〇萬兩に達してゐる。金融は以前露國の支配するところてあつたか今や支那側に於て之を占領し中國銀行分號かある。

索引

滿蒙全書索引

（アラビア數字は卷ローマ數字は頁數を示す）

A

B

C

六

八

九

D

二三

E

F

一五

G

H

二一

I

J

K

三一

三六

L

M

四四

四五

四九

N

五二

O

P

五七

R

S

七二

七八

T

U

W

Y

Z

人名の部

A

B

C

D

E

I

九七

J

K

N

O

P

R

S

T

U

V

W

Y

Z

地名の部

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

L

一一九

M

N

O

一二一

P

R

S

T

一二七

V

W

Y

Z

― 完 ―

大正十二年十二月十五日印刷
大正十二年十二月十七日發行

滿蒙全書第七卷

著者　南滿洲鐵道株式會社
　　　庶務部調査課

大連市東公園町二十一番地
印刷者　安井源吉

大連市東公園町二十一番地
印刷所　滿洲日日新聞社

大連市紀伊町
發行所　滿蒙文化協會